
turnip rhapsody (カブ狂詩曲)

南瓜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

turnip rhapsody (カブ狂詩曲)

【Nコード】

N4218N

【作者名】

南瓜姫

【あらすじ】

牧場物語 ルーンファクトリーフロンティアの二次創作小説です。

僕が記憶を無くして今日を生きるのにも絶望しかけたとき、手を差し伸べてくれたのは君だった。君と出会って、僕は新しい人生をつかむことが出来た。しかし、君は姿を消した。僕は君を探しにカルディアを出た。

1・追いかけてトランルピア（前書き）

このお話は、RFFを題材としておりますが、RFのキャラも時々お話に出ています。RFの主人公もラグナで、その他花嫁候補も何人かRFFに出しております。その関係で、私の妄想を織り交ぜていきますのでよろしくお願いします。

1・追いかけてトランルピア

僕が記憶を無くして今日を生きるのにも絶望しかけたとき、手を差し伸べてくれたのは君だった。

君と出会って、僕は新しい人生をつかむことが出来た。

しかし、君は姿を消した。僕は君を探しにカルディアを出た。

【1】追いかけてトランルピア

アドネア大陸の東端にある町カルディアに住む少年ラグナは、とある村にたどり着いた。その村は人通りも少なく、宿を探そうにもどこを探してもいいかわからない。何より慌てていて、着のみ着のままで出てきてしまったのだ。要するに無一文である。別に、ラグナはホームレスではない。カルディアでは大きな牧場を経営している。そんな彼が慌ててカルディアを飛び出してきたのにはわけがあった。

*

ラグナはカルディアの町中を走り回っていた。春の柔らかな風が彼の茶髪を撫でる。まだあどけない顔立ちで、農夫の割には細い。そんな彼は心配そうな表情を浮かべていた。

「ミストさん、どこに行っただろう」

ラグナは、ここ最近見かけなくなったミストという少女を探している。誰に尋ねても見ていないという。ダンジョンも探したが、澄んだ青い瞳に少女の姿は映らなかった。

ミストはカルディアで暮らしている少女だ。歳はラグナとあまり変わらないだろう。きゃしゃな身体に、色素の抜けた白っぽい髪を

赤いリボンで束ねている。ラグナと同じ青い瞳は、いつも何か面白いことを探しているネコのようなものである。とてもものんびりとしたしゃべり方をして、突拍子のないことを言ったり実際にしたりする。

そんな天然なミストを、親切なラグナが放っておけるはずもない。ましてや記憶喪失のラグナを助けてくれた恩人である。

*

こうして、カルディアを出たラグナはこの村にたどり着いた。トランルピアというこの村は未開のフロンティアだった。カルディアは町の外へ出ると緑が豊かだが、ここは村全体が自然に溢れている。

次第に空は赤黒く染まり、日が暮れそうだった。ミストを探すのは明日にしよう。ラグナは今晚の寝床を確保するため、目の前にあった教会に飛び込んだ。

中にいたのは、小柄でふくよかな中年のシスターだった。

「おや、旅の人かい」

「ラグナと申します。すみません、どこでもいいので、一晩の宿をお借りしたいのですが」

シスターはステラと名乗った。豪快に笑うと、ラグナに食事を振舞ってくれた。そして親切に毛布を持ってきてくれたのだ。ラグナは、ステラから毛布を受け取ると、心遣いに感謝しながら礼拝堂の片隅で休んだ。

*

ステンドグラスに朝日が差し込み、礼拝堂はとても美しい様を見せている。ラグナはステラに礼を述べているところだった。ステラは、何しにこの村へ寄ったのかと訊ねた。なぜなら、彼女はこの町

の長のようなものだからだ。ラグナは、知り合いの少女を探していることを告げた。ステラは、きつと見つかるよとラグナを励ましてくれた。

そのとき、礼拝堂の扉がさつと開いた。朝日と共に入ってきたのは、捜し求めていたミストだった。

「あら、どこかでお会いしたような方がいらっしやいます」

涼しい顔をしたミストはしゃなりしゃなりと髪を揺らしながら、ラグナたちの方へ歩いてきた。

「忘れちゃったんですか」

ミストが怪訝そうな顔をしてラグナを見上げた。

ラグナはというと、あまりにもあっさり探し人が見つかって呆然としていた。

するとミストが手を合わせてつぶやいた。

「あ、そうか。記憶喪失でしたね」

ラグナはわなわなと手を震わすと、感情をあらわにした。

「違います！ いったい今までどこに行っていたんです？ みんな心配しているんですよ！」

ミストは、ラグナの言うことが意に介さないようである。そこへステラが話しに割り込んできた。

「あんたたち、知り合いだったのかい？」

「ええ、まあ……」

声を荒げたことに、ちよつと大人気なかったなと反省しながら、ラグナは言葉を濁した。ステラはまたもや豪快に笑うと、ラグナの背をバシバシと叩いた。

「ちよつと良かったじゃないか。ミスト、あんたを探しに来たんだってさ。積もる話もあるだろうから、私は席を外すよ」

そう告げると、ステラは奥に引っ込んでしまった。残されたラグナとミストは黙って見つめ合った。

ラグナには言いたい事がたくさんあった。なぜ、黙って姿を消したのか。どうして連絡をしなかったのか。そんなラグナの気持ちに気付いたのか気付かないのか、ミストは小首を傾げて不思議そうな表情を見せるだけだった。

それを見て、いつもどおりのミストだと、ラグナは別の意味で安心した。

ミストが軽く頭を下げた。

「ご心配をおかけしました。皆さんに、私は無事だとお伝え下さい」

「カルディアに帰らないんですか」

「ええ」

「どうして？」

「どうしてって言われても……どうしてでしょう。忘れちゃいました」

てへつと笑みを浮かべるミストにお手上げた。

「とにかく帰りましょう。リネット少佐も待っていますよ」

「いいえ、帰りません。ラグナさんお一人でどうぞ」

「なにをわけのわからないことを言っているんですか」

なぜここに残ろうとするのか訳も話さない。頑として帰らないと主張するミストにラグナはイラついた。そんな彼の様子を見て、ミストの目尻は下がり、口に手を当てて笑った。

「ラグナさん、そんなに私と一緒にいたいんですか」

「違います！ 何でそうなるんですか」

ミストは面白くなさそうに、じとつとラグナを見上げた。

「ちょっと待っていてください」

ミストは礼拝堂の奥に消えた。

何をしているんだらうとラグナがヤキモキしながら待っていると、ミストが出てきて告げた。「とりあえず行きましょうか」とミストが歩き出したので、ラグナは後を追った。

うつそうと草木が茂る小道を、ミストに先導されてラグナは歩く。小川のせせらぎ、水車の回る音、小鳥のさえずり。なんとも平和な田舎の風景である。

着いた先は、目の前に荒地の広がる一軒家の前だった。家自体はこぢんまりとしている。しかし、手入れがされていないようで蜘蛛の巣が張っていた。しかし家の軒下には花壇が造られており、ピンクや黄色の季節の花を咲かせている。家の左手には赤いポストがちょこんと立っていた。

「ミストさんが住んでいる所ですか？」

「いやだわ、今日からラグナさんがここに住むんですよ」

にこにこしているミストに、ラグナは悪夢を思い出した。まさか、またここでカブを作れと言うんじゃないだろうか。

そんな嫌な予感ほど当たるもので、ミストの手にはジョウロとクワがあった。一体どこに隠し持っていたのだろう。

「引越祝いです。なんと、カブの種のおまけつきです」

相変わらずにこにこの笑顔を振りきながら、ミストは手の中のもの差し出した。ラグナは呆れてしばらくものが言えなかった。

「ミストさん、本当にカルディアに帰らないんですか？」

そう詰め寄っても、ミストは相変わらずのらりくらりとかわすだけである。彼女に逆らって勝ったためしはない。なんだかんだと上手いこと言いくるめられるのである。

結局ジョウロとクワを手渡されたラグナは諦めて家に入ると、カルディアのミストの同居人のリネット少佐に手紙を書いた。

トランルピア村でカブを作ることになりました。事情は察してください。ラグナ

2・カブの行方

ミストからもらったカブの種が立派に育った。水場でカブの泥を落としていたラグナは、その出来のよさに顔をほころばした。真っ白で丸いカブ。頭のとっぺんからによつきりと伸びた緑の葉もみずみずしくておいしそうだ。

そこへミストが遊びに来た。当然ラグナはカブをおすそ分けをした。

「まあ、おいしそうなカブ！」

ミストは、カブを高くかかげて嬉しそうだ。

「ミストさんは、カブをどうやって食べているんですか？」

「あたしはですね、スープやサラダ、カブの浅漬けなんかしめます。スープなんて最高ですよ。スープのうまみを吸っていて、口に入れるととろけるんです」

うつとりと宙を見上げて話すミストにラグナは驚いた。ミストが料理できる……青天の霹靂だった。

ミストは、はっと我に返ると、空いた拳をぎゅっと握り締めた。

「でも、酢漬けだけはしません」

きっぱりと断言するミストにラグナは少々引いた。

「酢漬けもおいしいですけど？」

「だめです！ せっかくのカブの甘さが、酢のすっぱさで台無しになっちゃうじゃないですか！」

「そんなもんですかね……」

あまりの迫力にラグナは後ずさる。ミストのカブに対する思いはハンパではないようだ。

残りのカブはどうしようか。冷蔵庫はまだない。ラグナが思案していると、ミストが畑の隅を指差した。

「あの出荷箱に入れておけば、雑貨屋さんが回収しに来てくれますよ」

「そうですか」

ラグナはつかつかと出荷箱のあるところまでやってきた。残りのカブを出荷箱に放り込もうとすると、背中に鋭い視線を感じ振り向いた。

「ラグナさん……」

いつのまにか真後ろに来ていたミストだった。物欲しそうな目でカブをじっと見ている。

「しょうがないなあ。あと一つだけで勘弁してくださいよ」

ぶつぶつ言いながら、ラグナはミストにカブを一つ渡し、残りをさっさと出荷箱に放り込んだ。

そのときだった。

「あら！ ラグナじゃない。こんなところで何しているの？」

振り向くと、カルディアの雑貨屋の娘のロゼッタだった。肩まで伸びた金髪のサイドをトライアングルの髪留めで留めている。装飾もあまり施されていないシンプルな白のブラウスに、ベージュのミニスカートだ。利発そうな茶色の瞳は、彼女の性格を現している。

「ロゼッタさんこそ、どうしてここに？」

「仕事よ。このご時勢だから、手広く商いしているのよ」

「もしかして回収？」

「そうよ。ラグナこそ、ここに出荷したの？ カルディアの牧場はどうしたのよ？」

ラグナはロゼッタに耳打ちする。ここでカブを作ることになったいきさつを手短に話した。ロゼッタはミストをチラリと見てから、気の毒そうな顔をしてラグナを見た。

「まあ、頑張つて」

ロゼッタは、カブを大事に抱えて帰って行った。

*

それから数日後、ラグナが畑の草取りをしていたときのことだった。

「ラグナ！」

出荷物を回収しに来たロゼッタが隣にしゃがみこんだ。

「わっ！ ロゼッタさん、脅かさないでくださいよ」

「ごめん、ごめん」

ロゼッタは舌をペロツと出すと、両手を顔の前で合わせて謝った。
「何か用ですか？」

「うん。私ね、この町で雑貨屋を開店する事にしたの」

「えっ、カルディアのお店は？」

「パパがいるからいいの」

「ジェフさんが寂しがらんじゃないですか？」

「いいの！ パパったら、私がいないと何にも出来ないんだもの。
少しは苦労すればいいのよ」

「そ、そうですね」

ロゼッタの父ジェフは勝気な娘に頭が上がらない。それだけ目の中に入れても痛くないほど可愛いのだろう。お人好しなジェフよりも、商才は押しの強いロゼッタの方がありそうである。

「リユードさんはどうしてます？」

「あんな女つたらしは放っておけばいいのよ」

ロゼッタはリユードの名前を聞いた途端不機嫌になった。

リユードといえば、魔法使いのような格好をした吟遊詩人である。見た目が幼く整った顔立ちをしているせいか、女性にちやほやされる。本人もそれを生きがいとしている。各地を放浪していたらしいが、勝気で自分になびかないロゼッタに惹かれてカルディアにとど

まっている。ラグナから見ればストーカーのようだった。

ロゼッタはというと、ろくに働かないで絵空事を抜かしているリユードは好きではなかった。しかし、自分の信じるホワイトストーン伝説になぞらえて、ホワイトストーンを持ってプロポーズに来たリユードに心を動かされて付き合い始めた。

「リユードさんと喧嘩でもしたんですか」

「私の運命の人じゃなかったことがわかっただけよ」

ロゼッタは口走ると、ラグナを睨んだ。ラグナはロゼッタから立ち上る殺気にぎくりとする。

「ホワイトストーンを取ってきたのはラグナだったんでしょ？」

「……はい、頼まれたので」

ロゼッタは、はあつとため息をついた。ラグナはホワイトストーン
の伝説を知っているはずである。ホワイトストーンはダンジョン
にある。それを取りに行くという事は危険を伴うのだ。だからこそ
伝説に意味がある。それなのに、ホワイトストーンをラグナに取っ
てくるよう頼んだリユードはふざけているとしか言いようがない。
ラグナもラグナだ。ロゼッタは働き者のラグナを気に入っていたの
に……。

「とにかく、雑貨屋マテリアルをごひいきにね！」

それだけ伝えると、ロゼッタは足取り軽く帰って行った。

2・カブの行方（後書き）

ミストの幼馴染のロゼッタ登場です。気の強いロゼッタですが、本当は優しい娘ですよ。

3・時計塔の芽

ラグナは教会へ向かっていた。シスターステラに用事を頼まれていたのを思い出したからだ。教会の手前の建物にステラがいた。

ラグナを見つけると、ステラは手を振ってきた。

「ステラさん、こんにちは」

「こんにちは」

「この建物は？」

「ああ、時計塔と言ってね。昔は動いていたらしいけど、私は見た事はないね」

「そうなんですか」

時計塔と呼ばれた建物は古めかしい二階建てだ。二階部分に大きな時計が設置されているが、先ほどから針が動く様子はない。

「もうすぐ、ここに学者様が引っ越してくるから掃除をしていたのさ」

「学者様ですか」

「ああ、王都の偉いじいさんさ」

「じいさん？」

「ああ、ちょっとした知り合いさ。来たら仲良くしてやっておくれ」
「はい」

ラグナは頭をかきかき空を見上げた。すると、空には雲じゃないものが浮かんでいる。大きな石のかたまりだった。なんであんなものが空に浮かんでいるのだろう。

「ステラさん！ あれ見てくださいよ」

ラグナが空を指差すと、ステラは豪快に笑った。

「ああ、あれはくじら島というのさ」

「くじら島？」

「私がここへ来たときには浮いていたよ」

不思議なことはあるものだ。島が空に浮かんでいるなんて聞いたことがない。

ぼうつとくじら島を見ていたラグナの背中をステラがバシバシと叩いて、時計塔の周りの草取りをするように頼んだ。

二人でせつせと作業をしていると、ステラが声をあげた。

「ラグナ、これを見ておくれ」

ラグナは作業の手を止めてステラに近寄る。ステラの指差した先に妙な草が生えていた。

「見た事ありませんね」

「でも、雑草にしては何かこう品格を感じないかい？」

雑草に品格も何も無いが、確かにむしるのをためらわせる何かがある。ラグナはおもむろにジョーロを取り出すとその草に水を撒いた。するとどうだろう。草はみるみる巨大化し、雲まで届くほど大きくなったのだ。

「こりゃたまげたね！」

ステラが大声を上げた。

「まるでジャックと豆の木だな」

好奇心に駆られて、ラグナはその太い幹に飛びついた。

ステラが気をつけるんだよと声をかけると、ラグナは後ろ向きのまま手を振った。

どんどん登ること三十分、ついたところは島だった。遺跡のあとのようなところで、草が生い茂っている。

「こんなところに着いちゃった」

ラグナの冒険心がむくむくと頭をもたげる。すると、何者かがラグナに語りかけてきた。

「見慣れない顔だな。冒険者か。我はおまえの足下にいる。いや頭上というべきか」

「誰なんですか？ どこにいるんですか？」

ラグナは辺りをきょろきょろと見回したが誰もいない。声は楽しそうに話しかけてくる。

「恐がらせてすまない。我はそなたが今立っているくじら島、その精神だ」

「くじら島？ この島ですか？」

ラグナは自分の足元を見た。

「そうだ。元は岩のかたまりだった我だが、数多くのルーンの影響を受けて、精神を授かり大空を泳ぐに至った」

「ルーンの？」

「ルーンとは精霊の集まり。大地の恵みを受けて集まるルーンが、逆に大地に影響を及ぼすこともある。冒険者、名はなんと云う？」

「ラグナです」

「ラグナ、そなたに頼みがある。我はルーンの力でこの精神と体を保っているが、近頃我の体をめぐるルーンが減っているように感じる。もしも我の体をめぐるルーンがなくなれば、我は意識をうしなってしまう。それはつまり足元で暮らすそなたたちの危機なのだ」

「わかりました。くじらさんの体からルーンが減っている原因を必ず突き止めます」

「感謝する。礼というわけではないが、ひとつ教えよう。あの石碑に触れてみるがいい」

ラグナは少し先に黒い大きな石碑を見つけた。

「我が心を持つ前から、あの石碑は存在するようだ。あそこから強い魔法の力を感じる。何かの役に立つかも知れぬ」

「わかりました」

「それと、もう一つ。この先にはモンスターが住んでいる。モンスターもこの地で暮らしているが、彼らには戻るべき世界がある。ラグナ、そなたの武器にはタミタヤの魔法がかかっている。タミタヤのかけられた武器でモンスターを倒せば、その魂は彼らの戻るべき場所『はじまりの森』へと送られるのだ。ラグナよ。この世界に迷い込んだモンスターたちを元の世界に戻してくれ。頼んだぞ」

「はい！」

くじら島は、ルーンが減ってきた理由を調べて欲しいと言った。そして自分の身体に迷い込んだモンスターを『はじまりの森』にか

えしてやって欲しいと。

ひょっとして、ゲートが存在しているのか？

ラグナはカルディアでの悪夢を思い出す。ゼークス帝国によって、ラグナは記憶を消され、神竜をよみがえらすための駒に使われたのだ。

必ずくじら島の異変を食い止めて、モンスターたちを解放する。ラグナはそう決心した。

奥に足を進めて、黒い大きな石碑の前に立った。

ラグナは石碑に手を当て、古代文字を見た。つらつらと内容が頭に入ってくる。見た事もない文字をどうして読めるのか。

疑問に思いながらもラグナは刻んである言葉を口にした。

信頼の旋律は十二の乙女の心に育つ

石碑に刻まれた言葉を読み上げると、石碑から光の玉が幾つも飛び出してきた。あつけにとられて見ていると、それは石碑の上をグルグルと回りだした。加速がついてきたかと思うと、光たちは四方八方へ飛び散った。

いったい、あの光は何だったのか。石碑に刻まれた言葉の意味は何だったのか。

呆然としていたラグナだったが、我に返るとくじら島の深層に進んだ。

くじら島のダンジョンの中を進んでいく。途中、オークやサソリ様のモンスターが現れた。ラグナは慣れた様子で、モンスターを力

マでなぎ払ってゆく。カルディアのダンジョンを制しているので、これぐらいは難なく倒すことが出来た。

「鍛冶屋で剣を調達しなきゃ」

ラグナは独り言をつぶやくと、手の中のカマを見つめた。

しばらく進むと、暗がりの中に人影が見えた。今日つるが伸びて入れるようになったダンジョンに人がいるのだろうか。

目を凝らして見ると、魔女のようないでたちである。大きな赤い帽子を深くかぶり、これまた足首まである赤くて大きなローブを羽織っている。

「メ、メロディさん!？」

「あら、ラグナじゃない」

メロディはニコニコしながらラグナに近寄ってくる。

メロディはカルディアでお風呂屋さんを経営している女の子だ。魔女に憧れて、魔女のような身なりを好んでする。

「どうしてこんなところに？ モンスターがいるから危ないですよ」

ラグナの質問には答えずに、メロディはへらへらと笑うと、ハンマーを取り出してラグナに突き出した。

「何です？」

「温泉ハンターのメロディ様の勘だと、この大岩の向こうが源泉だと思うのよ」

「それで？」

「ね、ラグナ。一発やっちゃってよ」

メロディにウルウルとした瞳で見つめられて、ラグナはため息をついた。この少女は温泉があるとわかると、どんな危険なところでも出向いてしまう。

「わかりました」

ラグナはハンマーを受け取ると、大岩に近づいた。自分の背丈よりもかなり大きい。岩を手で触ってみて、打点を決めた。

「メロディさん、下がっててください」

メロディが安全な所まで下がったのを確認すると、ラグナはハンマーを振りかぶった。一球入魂、ラグナはジャンプしながら大岩をヒットした。

メロディが固唾を飲んで見守っていると、大岩には、ラグナがヒットした地点を中心にひびが入った。そして轟音と共に岩は崩れ落ち、湯気を立てた温泉が湧き出してきた。

「やった！ 温泉だわ」

メロディは小躍りして喜んでいる。ラグナはハンマーをメロディに返しながら促がした。

「さあ、メロディさん、ここから出ましょう」

「うん。お風呂屋さんをやるからね。楽しみにしてて」

ニコニコしながら話すメロディにラグナは呆れてものが言えない。すると、メロディがジトツとした目で睨んできた。ただならぬものを感じたラグナは後ずさりながら訊ねた。

「どうしました？」

「ラグナのバカ！　せっかくお風呂屋さんをやってあげるのに、感謝の言葉も無いわけ？」

「あ、ありがとうございます。いやあ、楽しみだなあ、温泉」

しらじらしいラグナの態度にメロディは相変わらず睨んでいたが、頬を赤く染めたかと思うとささやいた。

「まあいいわ。ちゃんと毎日来るのよ。私、不潔な人は嫌いなんだから」

「は、はい」

メロディはにつこり微笑むと、スタスタと歩き出す。

ラグナは慌ててその後を追った。メロディとは本当に不思議な人である。

3・時計塔の芽（後書き）

ラゲナとくじら島のやりとりは、ゲーム中の言葉を引用しました。

4・ミストの弁当

朝、ラグナは外に出た。すがすがしい青い空だ。大きく深呼吸すると、酸素が体の隅々まで行き渡る気がする。

ポストの前にモコモコというモンスターに絡まれた小さな女の子がいた。大きな赤い帽子に、まるでバッグが立っているようだった。その女の子はラグナを見ると、一通の手紙を差し出した。

「引越してきたら、届けを出してくださいね」

「はい、すみません。あ、あの、この手紙をカルディアのリネット大佐に届けて欲しいのですが」

「お安い御用よ。自己紹介がまだだったわね。私はアネット、ご覧のとおり郵便配達人よ」

「僕はラグナです」

「よろしくラグナ」

アネットは帽子の隙間から、三つ編みに編んだ赤い髪を揺らした。

「アネットさん、モンスターと仲がいいんですね」

「仲がいいように見える？　なぜか私にだけ寄って来るのよ。嫌になっちゃうわ」

アネットは口をつんととがらせた。そして、じゃあね、と言うとモコモコを振り切るように疾風のごとく走り抜けていった。

残されたラグナはその姿を呆然と見送った。ふと、握られた手紙を見る。自分宛だった。誰だろうと差出人を見ると、さっきのア

ネットだった。

これからよろしくね。 アネット

ラグナは、アネットの心遣いに心があたたかくなるのを感じた。

手紙をポケットにしまいこむと、ラグナは目の前に広がる荒地に目をやった。まずは草取りかと荒地にしゃがみこみ、ぶちぶちと雑草を抜き始める。

「なんで僕ってこうもミストさんに弱いんだろう。結局またカブを作ることになったし」

ぶつぶつと文句を言いながら、作業を進めていると、背後から声をかけられた。

「ラグナさん」

「ミ、ミストさん!？」

彼女は、薄ら笑いを浮かべながら立っていた。目は怪しく輝いている。

ラグナは草取りの手を止めて、後ずさりをした。今の小言を聞かれたのだろうかと不安になる。しかし彼女の口から出た言葉は予想外のものだった。

「お弁当を持ってきたんですよ。一緒に食べませんか？」

「べ、弁当ですか？ 僕、お腹空いてないんで、ミストさんどうぞ」

ラグナは、カルディアにいた頃、ミストに一度だけ弁当をもらったことがある。農作業を終えて弁当箱を開けると、中に入っていた

のは小麦粉だった。どれだけ力が抜けたことか。空の弁当箱を返しに行ったときのことだ。

「ミストさん、嫌がらせですか？」

「いいえ。小麦粉って、うどんでもパンでも何でもできるからすごいと思いませんか？」

涼しい顔をして、弁当だと言い張るミストに、ラグナは絶対にミストとは結婚しないぞと固く心に決めたことがある。

差し出された弁当箱を手にしたとき、はつとした。重い。恐る恐る蓋を開けると、入っていたのはやはり小麦粉の袋だった。

ラグナは蓋を静かに戻すと、ミストに弁当箱を押し付けた。

「お返しします」

「そんな遠慮なさらずに」

「だから、小麦粉は弁当じゃないって言ったでしょう！」

「ラグナさんにうどんを作ってもらおうと思っていたのに」

ラグナに昼食を作らせようという魂胆だったらしい。しかし、恨めしそうに自分を見つめるミストに、ラグナは自棄になって弁当箱ごと小麦粉をひったくった。

「わかりました。ミストさん家のキッチンをお借りしますよ」

「ラグナさんも、うどんが食べたいんですね！」

身体を左右にくねらせながらミストは微笑んだ。それを見てラグナは脱力した。

ミストの家のキッチンに立ったラグナはエプロンをつけた。ピンクのフリルたっぷりのエプロンである。

「まあ！ ラグナさん、お似合いですよ」

ミストが両手を顔の横に持ってきて誉めそやした。
一方のラグナは苦虫を噛み潰したような表情である。

「他にないんですか？」

「ええ、私ったらフリルたっぷりが好きなんです」

そんな服を着ていたことはないじゃないかとラグナは内心ぼやいていた。絶対にこれは嫌がらせだ。別のものを出してくれる様子もないので、諦めて料理に取り掛かる。

弁当箱から小麦粉を取り出し、大きな銅製のボールに入れた。そして塩水をチョロチョロと流し込む。両手で小麦粉をこすり合わせていると、ボロボロとしてきた。それをまとめる。塩水を吸った小麦粉は大きな団子になった。それに濡れぶきんをかけて寝かす。ラグナは額の汗を拭いた。すると、小麦粉が額について白くなってしまった。

それに気付いたミストがラグナに顔をぐつと寄せてきた。

「な、何ですか？」

ラグナが後ずさりすると、ミストはラグナの額を指差した。

「粉がついて真っ白ですよ」

ラグナは、はっとして自分の手を見た。真っ白だ。この手で触っ

たら白くなるはずだ。

「ありがとうございます。顔を洗ってきます」

「あ、待ってください」

ミストは持っていた濡れタオルをラグナに向けた。

「拭いてあげます。座ってください」

ラグナはミストにされるがままである。いつもは見下ろしているのに、今日はラグナが見上げている格好だ。目の前にはミストのピンク色のツヤツヤとした唇がある。思わず視線を落とすと、今度は胸が目の前だ。けっして大きくはないがやはり女の子だからふくらみはある。うわあ、とラグナは目をつぶった。ここで慌てたら、スケベですねとミストに言われかねない。ただじっと我慢するラグナだった。

「はい、終わりです」

その声を聞いて、ラグナは目を開けた。今度はミストの顔がまんなにある。

「うわあ！」

今度は大きな声を出して仰け反ってしまった。

「ラグナさん、ひどいです」

ミストはぶくつと頬を膨らました。

「さ、さあ、うどんをこねようつと」

ラグナはしららしく立ちあがると、調理台へ向かった。そして大鍋に大量に水を入れ、湯を沸かす。小鍋につゆ用の水を張り、これも火にかける。棚から鰹節を取り出した。そしてテーブルの上に敷物を敷いた。

「ミストさん、鰹節を削りますから離れていてください」

「はい」

ミストは慣れたもので、部屋の隅の壁に張り付いた。ラグナは右手で包丁を持ち、左手で鰹節を持つ。

「はあっ！」

鰹節を宙に放り投げると、ラグナは包丁を目にも留まらぬ速さで振り回した。敷物の上には荒削りの鰹節がばらばらと落ちてきた。

「相変わらず、お見事ですな」

ミストが拍手をしながらテーブルに寄ってきた。ラグナは、誰のせいだと思っているんだ、と考えながらも作り笑いを浮かべた。

沸騰した小鍋のお湯に削った鰹節をパラパラと入れる。鰹節は小鍋の中で踊り狂っている。ラグナは小鍋を火から下ろすと、うどんをこね始める。テーブルの上で小麦粉団子をたたきつけた。

くそっ、ミストさんってば僕のことをからかって喜んでいる

ミストはラグナの向かいの椅子に座った。ラグナは手を止めてチラリとミストを見た。相変わらずにこにことラグナを見ている。ラ

グナはため息を一つつくと、再びこね始めた。

こね終わった生地を麺棒で伸ばしていく。器用にうどんを伸ばしていくラグナにミストが話しかけた。

「まだですか」

「もうちょっとです」

こめかみをピクピクとさせながら、ラグナが答える。我慢だ、ここで挑発に乗ってはいけない。

自分を制しながら生地をたたみ、包丁を当てた。トントンとリズムカルに包丁が踊る。みるみるうどんが出来あがった。大鍋には、ぐつぐつと湯が沸いている。ラグナは切り終わったうどんを鍋に放り込んだ。うどんはその細い身体をくねらせながら湯の中でもだえ苦しんでいる。

ミストが横に来た。

「熱そうですね」

「ええ、火の前に立っていますから」

「いえ、うどんが」

ミストはうどんの心配をしているのだ。ラグナは脱力しながらも、箸で鍋の中をかき回した。

「うどんは茹でないと食べられませんから。ここは我慢してもらわないと」

「はい」

どうやらわかってもらえたらしい。ラグナはミストに離れてもらうと、大鍋をシンクに持って行き、ザルにうどんをぶちまけた。もうもつと湯気が立つ中、ザルのうどんを水につけてもみ洗いする。

だんだんうどんのぬめりが取れてきた。

またミストが横に来てつぶやいた。

「ラグナさんの手つき、いやらしい」

ラグナは、その言葉の意味を理解できなかったが、いやらしいと言われて思わず食ってかかった。

「ミストさん、うどんを食べたくないんですか！」

ミストは舌をペロツと出すと、テーブルに戻っていった。

ラグナはそれを横目で見ながら、うどんの水を切り、煮えたぎる小鍋に入れた。その間に小ネギや蒲鉾を切った。うどんにつゆが染みてきたようなので、丼に盛り、小ネギや蒲鉾を添える。

「さあ、出来ました」

ミストの前に丼を置いて、自分も席に着いた。鰹節と醤油のいい香りが漂う。

「いただきます」

ミストがうどんをする。小さな可愛い口にくく細いうどんが吸い込まれていく。咀嚼した後、ミストはにっこりと笑った。

「やっぱりラグナさんのうどんはおいしいです」

おいしそうにうどんをするミストを見ながら、一仕事終えた気がしてほっとする。そしてラグナもうどんをするのだった。

5・伝染る

春にしては肌寒い日が続いている。ステラに薬草を採ってくるように頼まれていたラグナは教会へ届けに行く。

教会ではステラが待ち構えていた。

「ありがとうよ。この村には医者がいなくてね。ちょっとした病気は自分たちで治すしかないんだよ」

「そうなんですか」

「ラグナも体には気をつけるんだよ」

「はい。ありがとうございます」

ステラは薬草をすり鉢ですりながらラグナに注意を促がした。母親がいたらこんなものなのだろうかと思った。ラグナは記憶喪失だ。自分の名前しか知らない。

ステラは慣れた手つきで、すり鉢の中身をポットに詰めると、ラグナに差し出した。

「悪いけど、この薬をミストに届けてやっておくれ。体調を崩して寝込んでいるんだよ」

「わかりました」

ラグナはステラから薬を受け取ると、ミストの家へ急いだ。

*

「お邪魔します」

ラグナは、ミスト宅の戸を静かに開けた。玄関からすぐの居間には見当たらない。寢室の戸をノックすると、小さな声で返事があった。

戸を開けると、ミストはベッドで横になっていた。高い熱を出しているのか、瞳は潤み、顔は紅色に上気していた。

「大丈夫ですか、ミストさん」

「ええ、ただの風邪ですから」

「薬をもらってきました。今、飲みますか」

「はい」

ラグナはミストがベッドで起き上がるのを手助けした。ミストのパジャマ姿が嫌でも目に入る。ピンクのフリルが惱ましい。それになんともいえない良い香りがする。

ああ、目の毒だと頭を振りつつ、薬を渡し、水差しの水をコップに注いだ。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

ミストはやりわり微笑むと、薬を飲み干した。コップをラグナに返しながら、ぼそっとつぶやいた。

「ラグナさん、キスしませんか」

「ええっ!?!」

とんでもないことを口走るミストに、ラグナは仰け反った。風邪で頭がおかしくなっている。そうだ、そうに違いない。

「風邪は誰かにうつすと治るって言いますよね」

「ミストさん、そんな物騒なことを考えていないで、おとなしく寝ていてください！」

「ラグナさんって、冗談の通じない人ですね」

ミストは、ぷくつと頬を膨らませた。

*

翌日、ラグナは、畑で水やりをしていた。しかし、なぜか目が回る。

「あれ、どうしたんだろう」

昨日は、ちゃんと食事もとったし、早く寝たのに。とうとう気分が悪くなり倒れてしまった。

「大丈夫ですか！」

近くを通りかかった女性がラグナを見つけて駆け寄った。

*

ラグナはベッドの上に寝かされている。どうやらミストの風邪がうつったようだ。彼の名誉のために記しておくが、ミストとキスはしていない。

寝息を立てるラグナの横で、シスターステラと若いシスターが話をしていた。

「ラピスはラグナを知っているのかい？」

ラピスと呼ばれたシスターは、静かに眠るラグナの横顔を見ながらうなずいた。

「はい。私の郷里にこの間まで住んでおられたのです。最近、姿を見かけなかったので心配しておりました」

「ラピスの好きな人なのかい？」

ラピスは胸の前で手を組んだまま、恥ずかしそうに首を横に振った。

「いいえ。ラグナさんはいつも無理ばかりするので放っておけないのです」

ステラは、ふんふんとうなずいた。「後は任せたよ」と口にする
と、医務室を出て行った。

ラピスはラグナを看ながら微笑んでいた。どこへ行っただかと心配
していた。こんなところで再会するとは思わなかった。

そつと額にかかる髪を掻き分けてやる。少し汗をかいていたので、
タオルで拭いてやった。

すると、ラグナが、うめき声を上げて目を開けた。

「気分はいかがですか？」

「はい……ラピスさん？」

「こんにちは、ラグナさん」

ラピスはいささかと微笑む。

反対に、ラグナはしまったと思った。

ラピスは、健康管理が悪いラグナをよく叱るのだ。ラピスはカルディアの町ではアイドル的な存在なのだが、ラグナはとても苦手だった。その叱責が愛情のせいだとは気付いていない。

ラグナは話をはぐらかす事にした。

「いつからここに？」

「今朝、教会の所用で来ました。そうしたら、畑で人が倒れていて、顔を見てまたびっくりでした。また無茶をしましたね」

「すみません」

ラグナは掛け布団を鼻の上までかぶった。あれだけ忠告されたのに、また倒れてしまつて返す言葉もない。

しかし、ラピスの反応は意外だった。

「たいしたことがなくて良かった」

そうつぶやくと、ラピスは立ち上がった。そして洗面器を持つと、「水を替えてきますね」と病室を出て行った。

残されたラグナはびっくりだ。絶対に小言が一時間は続くと思つていたのに。

病室を出たラピスはそのままシスターステラの元へ行く。そして、トランルピアに看護婦がいないことを確認すると、自分がここに残ると告げたのだ。

*

教会にミストがやって来た。ラグナが倒れたと聞いて飛んできた

のだ。

教会の礼拝堂ではステラとラピスが話しているところだった。

「あら、ラピスさん？」

「まあ、ミストさん！　こんなところにいらしたのですか？」

ラピスとミストは手を取り合って再会を喜んだ。

「事情があつてここに住んでいます。カルディアの皆さんはお元気ですか」

「ええ、皆元気よ。ザッハがあなたの事をすごく心配していたわ」

「ザッハが？　なぜなんでしよう」

不思議そうにしているミストを見て、ラピスが告げた。

「だって、ザッハはあなたにお熱じゃありませんか。ラグナさんも姿を見せなくなったので、彼、見る影もないですよ」

「そうですか」

ミストは面白くなさそうだ。ザッハはミストに惚れているが、ミストはそう思っていない。

「ああ、ラグナさんのお見舞いに来たんです。私が風邪をうつしちやったみたいなんです」

ミストの「風邪をうつしちゃった」という言葉に、ラピスの眉がピクリと動いた。笑顔を引きつらせながらも、ラピスは平静を装う。

「も、もう大丈夫ですよ。医務室で横になっていきますから、どうぞ」

「ありがとうございます」

礼拝堂を後にしようとしたミストにラピスが声をかけた。

「この村には医療関係者がいないようなので、この村に住む事にしました。調子の悪い時はいらしてくださいね」

「まあ、それは心強いです。ラグナさんたら、無茶ばかりしますから」

「そうですね、本当に世話の焼ける」

ミストは最後まで話を聞かずに礼拝堂を後にした。ラピスはラグナがいるからこの村に留まることにしたのだらうと思った。

*

ミストは医務室の前で深呼吸をする。覚悟を決めて戸を勢いよく開けた。

「ラグナさん」

「ミストさん？」

「お見舞いに来ちゃいました」

ミストはベッドの横にちょこんと腰掛けた。起き上がろうとしたラグナを制した。

「うつっちゃいましたね。ラグナさんがあんなことしたから」

「誤解されるようなこと言わないでくださいよ！」

起き上がって抗議しようとしたラグナをまた制して、ミストは言った。

「それだけ突っ込めるなら大丈夫ですね」

安堵したように微笑むミストに、ラグナの心がちょっと温かくなる。

「私にうつしちゃいますか」

そう言って顔を近づけてくるミストを、ラグナは手で遠ざける。

「もう、からかわないで下さい！　いつまでたっても風邪が治らないじゃないですか」

「そんなことないですよ。ラグナさんは強いから」

ミストはしゅんとして答えた。さすがにやりすぎたかと思ったのだろう。

そんなミストを目の当たりにしてラグナは拍子抜けした。どうやら本当に心配してくれたらしい。

「僕なら大丈夫ですから。ミストさん、もう風邪を引かないように気をつけてくださいね」

「風邪ひきさんに言われたくありません」

せつかくいい雰囲気だったのに、ミストがぶち壊した。

「気をつけますよ。おやすみなさい」

むっとしたラグナは布団を頭までかぶった。ミストはどうしてこつも自分からんでくるんだろうと頭にきていた。

むかむかしていたらいつのまにか眠ってしまった。

目を覚ますと、窓の外は赤く染まっていた。腕が重い。横を見ると、ミストが椅子に座り、うつぶせて眠っていたのだ。付き添ってくれていたらしい。

黙っていたら可愛いのに、と思うのだった。

6・訳あり女とイケてるメンズ

翌朝、ラグナはいつものように元気よく外へ飛び出した。雲ひとつない晴天である。大きく伸びをして脱力すると、目の前の地面にとんでもないものが転がっていた。

「だ、大丈夫ですか！」

若い女性が倒れていたのである。その女性はうめき声を上げた。

「み、水」

「水ですね」

ラグナは手元を見たが、ジョウロしか持っていない。ええい、仕方がない。ジョウロの水を女性にかけた。

「あんだね、ジョウロで水をまくってどうなのよ！」

女性は突っ込むだけ突っ込んでおいて意識を失った。
大変だ！

ラグナは慌ててその女性を抱えあげると、教会の医務室に急いだ。

ベッドで眠る女性の横で、シスターラピスとラグナが話していた。

「行き倒れなんて、まるでラグナさんみたいですね」

ああ、また説教が始まりそうだと思い、ラグナは眉をひそめた。そんなラグナの様子に気付きながらも知らぬ振りをして、ラピスは女性の顔を覗き込みながらつぶやいた。

「この村の人ではないですね」

言われてみれば、見た事はない。腰まである長い金髪はあちこちにはねている。肌の色は透けるように白かった。

その時、女性がうめいた。

目をつつすらと開けた女性に、ラピスが胸の前で両手を組みながら尋ねた。

「大丈夫ですか？ 自分の名前はわかりますか？」

「あ……うん。あたしはセルフィアス・ジョゼフィ……セルフィ。セルフィよ」

セルフィは頭を振りながら、たどたどしい様子で訊ねた。

「ここは……どこ？」

「ここはトランルピア村の医務室です。あなたは倒れているところを発見されて、担ぎ込まれてきたんですよ」

ラピスが丁寧に説明をすると、セルフィは霞がとけたかのように明るい表情をした。

「ああ、そうだった。あたし、逃げ……じゃなくって、旅をしていて、ずっと何にも食べていなかったな。一週間、何も食べずに歩いたらさすがに倒れるか。反省、反省」

「一週間!？」

「本当に、一週間何も食べなかったんですか？」

ラグナとラピスは信じられないというように問いただした。
セルフィは何でもないというようにあっけらかんと答えた。

「そうだよ。あたしつてさ、よくご飯食べ忘れるんだよね。でも一週間つてのは、さすがに初めてかな」

からからと笑い、まったく悪気のないセルフィに、ラピスのこめかみがピクピクとひきつった。

うわあつ、爆発するぞ。

ラグナはジリジリとラピスから離れた。

「笑い事じゃありません！ セルフィさん、あなたは今晚ここ入院です！ 明日からはしばらく、この村で静養してもらいますから、そのつもりでいてください」

「ええー、そんなの面倒くさ」

「いいですね？」

「はい……」

セルフィはラピスのひきつるような笑顔に状況を察したらしく、おとなしく返事をするのだった。健康のことに關しては、ラピスは非常に厳しい。普段の優しげなシスターとしての面影は吹っ飛んでしまっただけだ。

ラピスが医務室から出て行ったのを見計らって、ラグナはセルフィに声をかけた。

「セルフィさん」

「ええと、ラグナだったっけ？ 助けてくれてありがとう。いや、死ぬかとおもったよ。實際死にかけてたんだけどね」

呆れた。

からからと笑い、まったく反省の色は感じられない。

「でも、ラグナもひどいよね。水って言ったら、ジョウロで水をはけるんだもん。新手の意地悪かと思ったよ」

「す、すみません。手元にジョウロしかなかったもんで」

ラグナはしどろもどろで返答した。

「ところでセルフイさんはどこへ行くとこるなんですか？」

「ええと、特に決めてないのよね。ただ……ううん、なんでもない」

一瞬表情がくもり、セルフイは返事を言いよんだ。

「すみません、へんなことを聞いてしまって。僕はあなたが倒れていたところに住んでいますので、僕で力になれることがあったら言うて下さい」

ラグナは医務室を出ようとドアノブに手をかけた。すると、背後からセルフイに声をかけられた。

「ラグナ、ありがとね」

ラグナは振り返り、ニコツと笑みを见せて、どういたしましてと答えた。

教会を出たラグナはカブの種を買いに商業地区へ行くことにした。

商業地区には、村で唯一の雑貨屋があるという。

一軒の家が目に入る。看板もないけれど店だろうか？ あいさつ回りもしていないことだと、その家の戸を叩いた。

「こんにちは」

「ん、客？ 違うの？ 何か用？ 誰？」

立て続けにまくし立てて出迎えてくれたのは、短い金髪を無造作に散らした痩せ気味の若い男だった。茶色の瞳で少々つり目である。

「初めまして、ラグナといいます。引っ越してきました」

「ああ、引越しの挨拶ね。俺は雑貨屋の主人のダニーだ。まあ、よろしくな」

「よろしくお願いします。ダニーさん」

ダニーは目を見開いて身震いした。

「おいおい、そんな気持ちの悪い呼び方、よしてくれ。俺のことはダニーって呼び捨てにしていかな。それと、俺の店は村で唯一の雑貨屋だから、何か不満があっても文句言うなよ！」

「はあ……」

そう答えると、ダニーは椅子に座り込み手紙を読み始めた。客が来ているのに、この態度はどうだろう。

「あの」

「何だ？」

雑貨屋に来たら買い物に決まっているじゃないかと思ったが、ぐっとその言葉を飲み込んで訊ねた。

「商品を見せていただけますか」

すると、ダニーは自分の後ろにある陳列棚を、顎でくいつと指し示した。並んでいるのは、カブの種・油・安物の腕輪・ペンダントのみだった。

「あの、カブ以外の野菜の種は扱っていませんか？」

ダニーは眉をピクリと上げた。

「何だよ、他の種って？」

「イチゴとかキャベツですけど」

「見てのとおりだよ。さっき言ったよな？ 文句言っただよ。他のが欲しけりや、エリック農場へ行くんだな！」

ダニーはえらい剣幕で怒鳴ると、また手紙に目を戻した。

全く商売する気のないやつである。ラグナは、呆れながら店を後にした。

ダニーのいうエリック農場へやって来た。何のことはない。ラグナの家の隣だった。この村唯一の農場で、エリックという青年が経営しているらしい。扉を開けると、さわやかそうな青年が一人立っていた。背も高く、女受けのしそうな甘いマスクだ。

「よう、若者！ 俺はここで農場をやっているエリックだ。よろしくな！」

なんとも愛想のいい……。ダニーとはえらい違いだ。

「初めまして、ラグナです。隣に引っ越してきました」

「ああ、大きな畑のある家ね。畑で困っていることがあったら何でも聞いてくれ。な、何？ 彼女はいるのかって？ そりゃく教えられないな。あはは！」

一人でまぐし立て始めたエリックにラグナはひいた。

「……そんなこと、き、聞いてませんから」

「じゃあ、何を聞きに来たんだ！」

「聞きに来たんじゃないくて、種を買いに来たんです」

「おお、そうか。何にする？」

棚には季節の種が所狭ましと並んでいる。

「イチゴとカブとキャベツの種を分けてもらえますか？」

エリックは手早く種を袋に入れると、ラグナに渡してくれた。

「そうそう、俺の農場でとれた作物を分けて欲しいときは遠慮なく声をかけてくれよな。それから、畑で困っていることがあったら何でも聞いてくれ。な、何？ 彼女はいるのかって？」

「いや、それはもういいですから……」

エリックという男性はどうしても恋話がしたいらしい。

エリック農場を出たラグナは前方に家が一軒建っているのに気がついた。その家のポストの前に、背中を丸めた何とも影のありそうな男が立っている。長い黒髪に鋭い視線。声をかけようか迷ったが、住人にはあいさつをしなければならぬ。

男はラグナに気がついたようで、ラグナをじっと睨んでいる。やりにくいな、などと思いながらラグナは男に近寄っていった。

「ふっ、見ない顔だね」

「初めまして。引越してきたラグナです。えーと、あなたは？」

男はラグナの声をさえぎるように告げた。

「ボクの名は……覚えなくていいよ。村の人もボクの名前はすぐ忘れてしまうからね」

しかし、どういうわけかラグナが訊ねた。

「えーっと、クロスさん、かな？ よろしく願います」

男の顔色がさっと変わった。すさまじい殺気と共にラグナに詰め寄った。

「……っ！？ なぜ、知っている？」

ラグナはなぜクロスが殺気を放つかわからなかったが、大変な手練だという事に気がついた。しかし、何食わぬ顔でとぼけて見せた。

「え？ だって、そのポストに名前書いてありますし。クロスさんって可愛い字を書かれるんですね」

クロスはホツとしたように表情を緩めた。

「ああ、ボクの子ではないよ。きつと、郵便屋さんが気を利かせたんだろう。君も一度ポストをのぞいておくといい。家の前にあるはずだよ。ふつ、さて仕事に戻らせてもらうよ。ラグナ君だったね。男手が必要なときは言ってくれ。増築したいときはボクの家に来るといい」

クロスは足音も立てずに家へと入って行った。

なんだから、会話していると切ないBGMが流れてきそうなの、わけあり男性のようである。しかし、悪い人ではなさそうで、ラグナは安心した。

さあ、種も買ったし、牧場に帰って、早速種まきしよう。今日は朝からバタバタしていて仕事をしていないのだから。

牧場では、ミストが花壇の前でしゃがみこんでいた。足音に振り返り、ラグナを見つけると、立ち上がり近づいていった。

「ラグナさん、どこに行ってたんですか？」

「何を怒ってるんです？」

「何にも怒ってません」

明らかにむっとしているじゃないか。ラグナは怒られる理由が思い当たらず、ため息をついた。

「今朝、家の前に人が倒れていたんで、教会に連れて行ったり、種を買いに行ったりしてこの時間になってしまったんです」

「まあ、そうだったんですか。私はてつきり……」

「はい？」

「いいえ、何でもありませんよ」

聞いただすようなラグナの言葉をはぐらかすと、ミストはおもむろに包みを取り出した。

「お昼まだなんでしょう？ お弁当作っただんです。よかつたら食べてください」

ラグナは包みを見た。また小麦粉だろうか？

「ミストさんは、もう食べたんですか？」

「はい」

満面の笑みで答えるミストに、ラグナはいつそう不安を募らせる。いったい何が入っているのか……。ミストは立ち去る気配も無い。諦めて蓋を開けるか。

「ありがとうございます。じゃあ、遠慮なく」

ラグナは唾をぐくりと飲んで、弁当のクロスをほどいた。なんの変哲も無い木の弁当箱が現れる。目の前のミストに目を移す。瞳をキラキラさせて、弁当を開けるのを待っているようだ。ラグナは目をつぶり、えいっと蓋を開けた。予想に反して、なにやら香ばしいにおいがする。

「揚げ物？」

「ええ。私の大好物のコロッケです。いっぱい作っただからおすそ分けですよ」

ニコニコしているミストを、ラグナはただじっと見つめた。

「ミストさん。料理するんですね」

「当たり前じゃないですか」

じゃあ、今までの奇行はいつたい……。やっぱりからかわれていたのか。背中にドーンと大岩が乗っかっているようだ。

「どうかしました？」

何の悪気もなく、ミストが自分を見つめている。

ラグナは弁当箱からコロツケを一つつまんで口に入れた。うまい。

「おいしいですね」

ラグナは、ミストの指にいくつも貼ってあった絆創膏を見逃さなかった。

慣れない料理をしたのであろう。残りは後でじっくり味わおうと思うラグナだった。

6・訳あり女とイケてるメンズ（後書き）

お気に入りの クロス 登場です。

ゲーム中のセリフ引用です。懐かしんでいただければ幸いです。

7・時計塔の住人

時計塔に老人が住み始めた。ラグナはステラに頼まれて老人の様子を見に来たところだ。

「邪魔します」

何の返事もない。ラグナはそつと中に入った。一階をくまなく調べたが、誰もいない。階段が見えたので上ってみる。階段を上がつてすぐの部屋をノックすると、くぐもった声が聞こえた。戸を開けて中に入ると、小さな丸眼鏡をかけて白いひげをたくわえた小柄なおじいさんが、ラグナをチラリと見た。

「どなたかの？」

「ラグナです」

「おお、ステラ殿の言っておった若者じゃな。わしはカンロと申す」

カンロはあごひげをもてあそびながら挨拶をした。背中が丸くなっていて結構な歳のように見える。しかし、年寄りとはどうしてこゝうも凶々しいものか。

「会ったばかりですまぬが、食事を作ってくれんかの」

「僕がですか？」

「そうじゃ」

それだけ言うと、カンロは読書を再開した。

なんで、僕が初対面のおじいさんの食事の世話をしなきゃいけないんだ。

ラグナはぶつぶつ文句を言いながらも食事を作り始めた。しかし、元来親切な人間である。年寄りだから柔らかいものが多いだろうとミルクリゾットを作って持っていた。

「カンロさん、出来ましたよ」

「おお、すまぬ」

カンロは机の上の書物をどかすと、リゾットの乗ったお盆を置いた。静かに合掌すると、食べ始めようとした。

「カンロさん、食事の前には手を洗わないと」

「ラグナはうるさいの。まるでキャンディのようじゃ」

「キャンディ？」

「わしの孫じゃ。二人おつての、もう一人はドロップというのじゃが、もうすぐここに引っ越してくるのじゃ」

「それはにぎやかになっていいですね」

「すまぬが、それまで食事の世話を頼む」

「えー！？ 自分で作ってくださいよ」

「ラグナ、年寄りには大事にするものじゃ」

カンロはリゾットをスプーンですくって口にすると、にっこり微笑んだ。

「うむ、うまいのう。キャンディに負けず劣らずじゃ。ラグナよ、おまえをわしの弟子にしてやろう」

「弟子ですか？」

「そうじゃ、はえある千人目じゃ。光栄に思うがいい」

「いいですよ、そんなの」
「欲がないのう」

カンロは楽しそうに笑った。

それから三日間、ラグナはカンロの食事の世話をした。カンロは理屈っぽくて、都合が悪くなると持病がと言って逃げたり、耳の聞こえが悪くなる。それでも憎めない感じの老人ではあった。

ラグナがいつものように朝食を持っていくと、カンロに話しかけられた。

「ラグナはくじら島には行った事があるのか？」

「はい。まだ表層辺りですが」

「モンスターが出るようじゃが、どうしておるのじゃ？」

「とりあえず、クワで応戦していますが、鍛冶屋で剣を調達しようと思ってます」

「それは懸命じゃ。この辺りの鍛冶屋で作る農具や武器にはタミタヤの魔法がかかっておるからの。それでモンスターを倒せば、命を殺めることなくはじまりの森にかえせる」

「はい。僕も血は見たくありません」

「まあ、頑張るがよい。変わったことがあつたら教えるのじゃぞ」

カンロはおいしそうに朝食を食べ終わると、ラグナに告げた。

「ラグナ、孫娘たちが今日来るのじゃ。すまぬが迎えに行つてやつてはくれんかの」

「顔も知らないのに？」

「案ずることはない。わしに似て可愛いからの」

カン口の世迷言に、ラグナは抵抗する気も失せた。

時計塔の外に出たが、人影は見当たらない。すると、頭上から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃああああ！」

空を上げると、女の子たちが降ってくるのが見える。

「ええっ！？」

逃げる暇もなく、ラグナの上に落っこちてくる。骨が折れたかのような音とともに地面に倒れ込んだ。ラグナは、このときほど鍛錬していてよかったと思ったことはない。

「だ、大丈夫ですか」

ラグナの背中の上に腰を下ろしている少女がラグナを案じた。赤い衣を身にまとい、大きな帽子をかぶっている。紫色の瞳がなんとも可愛らしい子だ。

「大丈夫だよ」

ラグナが答えると、少女はラグナの上から降りた。もう一人はうまく着地していた。少女がもう一人の少女に向かって文句を言った。

「ああ、精霊たちが怒ってるよ。重いから着地に失敗したって。お姉ちゃん太ったんじゃない？」

お姉ちゃんと呼ばれた少女は、帽子をかぶり、髪を左右に結っていて眼鏡をかけている。眼鏡の奥の瞳はチェリーのように赤い。

「太ってない。キャンディが大きくなっただけ」

キャンディと呼ばれた少女は口をとがらせた。

「あの、もしかしてカンロさんのお孫さん？」

キャンディがラグナの方を向き、ペコリと頭を下げた。

「はい。私、キャンディです。こっちはお姉ちゃんです」

「……ドロップ、よろしく」

お姉ちゃんがドロップというらしい。ドロップは頬を赤く染めてボソリとしゃべった。

「僕はラグナです。よろしく」

「よろしく、ラグナお兄ちゃん」

キャンディが可愛らしくニコニコと笑った。

ラグナは先ほどキャンディが口走った言葉について訊ねてみた。

「あの、どうして空から降ってきたの？」

すると、ドロップが代わりに答えてくれた。

「キャンディは精霊歌の歌い手。歌で精霊と心を通わすことが出来る。約束の時間に遅れそうだったから、キャンディに頼んで、風に乗せてもらってきた」

「精霊？」

「普通の人間は精霊を見ることは出来ない。でも、数多く集まった精霊を見ることが出来る。あなたも見た事があるはず」

ドロップは意味ありげにラグナを見た。

「精霊ですか。見た事あるかな」

「精霊が集まって人が見えるようになったものをルーンやルーニーと呼ぶ」

「ルーニーって？」

「そこら辺にふわふわ飛んでいるやつ」

「へえ、あれがルーニーか。そのルーニーが精霊の集まりですか」

ドロップさんって、物知りなんですね」

「そんなことない。少しかじっただけ」

ドロップは恥ずかしそうに答えた。

なぜかラグナは時計台の厨房で、キャンディと並んで食事を作っている。

「お兄ちゃん、ごめんね」

「いや、キャンディも来たばかりなのに大変だね」

「おじいちゃんもおねえちゃんも家事は全くだめなの」

でも、幼いキャンディにやらせるのってどうなんだろう。

ラグナがそう考えながら、キャベツを洗っていると、背後から声がした。

「キャンディ、お魚食べたい」

「お姉ちゃん、冷蔵庫は空っぽなの。食べたかったら釣ってきて！」
「……わかった」

ドロップはおとなしくキッチンを出て行く。どっちが姉だか妹だかわかりやしない。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんを監視してくれる？」

「監視？」

「うん、何するかわからないの」

キャンディの言葉にラグナは驚いた。何するかわからないって、物騒である。ラグナは慌ててドロップの後を追いかけた。

キャンディの予想を反して、ドロップは牧場の北側の小川で釣り糸を垂れていた。その後ろ姿はなんだか退屈そうに見える。

ラグナは黙って横にならんだ。

「何？」

「釣りって楽しいですよね」

「するの？」

「釣りはするんですけど、竿がなくなってる」

「あれ、私が使ってたのだけど、よかったら使う？」

ドロップは、自分の横においてあったもう一本の竿に視線を送った。なるほど、使い古した竿がある。

「いいんですか？」

「どうせ使ってないし」

ドロップはそう言うと、ウキに目を戻す。

ラグナは竿を手に入れてウキウキだ。早速、ドロップの横で釣り糸を垂れた。久々の釣りに心もウキウキだ。そんなラグナの竿にヒツトがあつた。

「ド、ドロップさん、かかりました！」

「落ち着いて」

「はい！」

ラグナは慎重に竿を引いた。竿には鱗がキラキラとしたマスがかつていた。

「やった！釣れましたよ、ドロップさん」

大喜びのラグナにドロップは呆れ顔だ。

「よかったわね。それ、竿代としてもらっていい？」

「竿代ですか？」

「ついでに刺身にしてくれないかな。あんな事言ってたけど、キャンディは魚が嫌いで料理してくれないの」

「わ、わかりました」

ドロップは口の端を少し上げた。相当魚が好物らしい。初めて見る感情のこもった表情だった。

8・謎の声

「ラグナさん、お願いがあるんです」

ラグナが、畑の雑草を刈っていると、ミストがやってきてささやいた。

「何でしょう?」

「ついでに私の家の前の草刈をしてもらえませんか」

「ええっ!? ミストさん、自分でしてくださいよ。僕、こう見えても忙しいんですよ」

「でもすごい量で、私一人じゃ無理なんです」

服の裾を引っ張られ、上目遣いで頼まれると、嫌という訳にもいかない。

「ミストさんも手伝ってくださいよ」

「はい」

ミストが満面の笑みで答える。この笑顔に弱いんだよなと、ラグナは頭をかきかき、苦笑いをした。

一時間後。

「さすが、ラグナさんね」

ミストが、両手を合わせてラグナを褒めている。

「ミストさんも、手伝ってくださいよ！」

「えー、でも」と、ミストは身体を左右に揺らして拒否している。ラグナはため息を漏らした。全く自分でやる気がないじゃないか。期待した自分がバカだった。さっさと終わらせて帰ろうと、カマを握る手に力を込めた。

最後の一刈りを終わると、いつのまにか家に戻っていたミストが出てきた。

「もう終わったんですね。ありがとうございます」

「どういたしまして。じゃあ、僕は帰らせてもらいます」

「あれ、何かしら」

ミストが指差す方向には、地面にぱっくりと穴がある。二人で近づき見てみると、どうやら洞窟の入り口だった。下には階段が伸びている。遺跡のようだ。ミストがラグナの腕をチョンチョンとつついた。

「ダンジョンみたいですね。ラグナさん、わくわくするでしょう？」

「そ、そんなことはありませんよ」

「やだ、嘘ばかり」

ミストは白々しく笑う。

「カルディアと同じじゃないですか。あ、町に鍛冶屋がありますから。頑張ってくださいね」

「ミストさん、何か知っているんじゃないですか？」

「何も知りませんよ。……そういえばカルディアにいた時に夢を見たんです」

「夢？」

「ええ、誰かが私を呼んでいるんです。最近苦しそうだったので心配なんです」

「だからここまで探しに来たんですか？」

「はい」

にっこりと笑うミストに、ラグナは開いた口がふさがらなかった。

「そういう事は最初に言ってくださいよ！」

「言いませんでした？」

ニコニコ笑うミストにラグナはお手上げた。

「そうだ。今度、ラグナさんの夢にも来てもらおうようにお願いしておきますね」

「はあ、ありがとうございます」

ミストの妄想に呆れるラグナだった。

しかし、その夜夢を見たのだ。見たというより、聞こえたと言った方がいいだろう。

助けて、助けて。

どこからか大きな力が僕に流れてくる。

こんな力、僕には要らないのに。

助けて、助けて

目が覚めたラグナは、がばっと起き上がった。いったい今の声は

なんなのだろう。ミストが話していた誰か、なのだろうか。

9・トランルピア商業地区にて

ラグナは、町の鍛冶屋で剣を買うことにした。トランルピアの町の北東に鍛冶屋はある。教会地区を通り越し町に入ると、見慣れない建物があった。

「こんなところに建物なんてあったかな」

ぼーっと眺めていると、戸が開いて中から魔女のいでたちのメロディが出てきた。

「あら、ラグナじゃない」

「メロディさん！？　じゃあここって」

「そうよ。温泉アレックスの湯をごひいきにね」

「カルディアの銭湯はどうしたんです？」

「カミュに任せてきちゃった」

メロディは舌をペロツと出して肩をすくめる。ラグナは銭湯を押し付けられたであろうカミュを気の毒に思った。カミュはラグナと同じく農場を生業としている青年だ。

「もちろん、カミュは喜んで引き受けてくれたわよ」

それはそうだろう。何といってもカミュはメロディに惚れているのだから。

「カミュさんが可哀相ですよ」

「そう？　どうせぶらぶらしているんだからいいのよ」

バツサリと切って捨てるメロディにラグナの背筋は凍った。女は恐ろしい。

「じゃあ、また寄らせてもらいます」
「待ってるわね」

ラグナはメロディと別れて先を急ぐ。すると、また見慣れない建物が目に入った。

「あれ、こんなところに店なんかあったかな」

ダニーの雑貨屋の隣に、可愛い店が立っている。その店先で植木鉢に水をやっているロゼッタの姿があった。

「ロゼッタさん？」

「あら、ラグナじゃない。どう、私のお店は」

「もう建てちゃったんですか」

「ええ。この村のクロスって人をお願いしたらあつという間に出来ちゃった。すごいわね、彼。ラグナこそ、どこへ行くのよ」

「鍛冶屋です」

ロゼッタはラグナを見た。

「また冒険？ あんたも懲りないわね」

「仕方ないでしょう？ 性分なんですから」

「まあ、カルディアをすくった勇者だもんね」

「ロ、ロゼッタさん、そのことはここでは内緒にしてくださいよ」

「そうなの？」
「お願いしますよ」

ラグナはホツと胸を撫で下ろす。いろいろ持ち上げられるのは得意ではない。

「じゃあ、僕はこれで」
「今度は買い物して行つてね」

手を振るロゼッタに手を振り返しつつ、ラグナは鍛冶屋に向かう。

鍛冶屋の扉を開けると、中で作業をしていたのは尖った耳にピアスをはめた女性だった。

「おや、見ない顔だね」
「はい。引越してきたラグナといひます」
「私はガネーシャさ。不思議そうな顔をして、エルフの鍛冶屋は珍しいかい？」

「あ、はい。そうですね」
「はつきりいう子だね。気に入ったよ。エルフの鍛冶屋は珍しいけどね、うちの商品はどれも自信を持っておススメできるものだからね。特にこの盾は自信作でね。この、フチの部分のレリーフが」

ガネーシャの話は尽きそうにない。よほどの武器マニアなのだろう。ラグナは思わずさえぎってしまった。

「あの、剣を見せてください」
「ああ、ごめんよ。剣は初めてかい？」

「いえ」

ラグナの答えに、ガネーシャは棚から見繕った片手剣を取り出した。

「これなんかどうだい？ 予算的には、これがお勧めだけだね」

カウンターに置かれたお金を見てガネーシャが言った。

ラグナは片手剣を受け取った。刃はきちんと研がれている。ために髪の毛を一本刃先に当ててみると、すっと切れた。

「これ、いただきます」

「毎度あり」

ガネーシャは片手剣をさやに収めてラグナに渡した。

「休日に行商人が鍛冶セットを売ってくれるから、それを使って鍛えるといいよ」

「はい、そうします」

「わからないことがあればおいで。手取り足取り教えてあげるよ」

ガネーシャはカウンターに肘をつくと、上目遣いでラグナを見つめる。

色っぽく迫られてラグナは背筋が凍る。そのときだった。

「母ちゃん、またお客さんをからかっているのかよ」

「あら、マルコ。お帰り」

振り向くと、小さな男の子が立っていた。ガネーシャと同じ金髪をショートカットにしている。

「お子さんですか」

「ああ、一粒種さ。マルコ、挨拶は」

「よろしく、兄ちゃん」

「ラグナです。よろしく、マルコ」

ラグナが挨拶を返すと、マルコはニッと笑って二階への階段を駆けて行った。

「可愛い子ですね」

「ああ。あの子の父親は人間だね。先の戦争で死んじゃった」

あのノーラッドの戦争のことだろうか。ノーラッドの戦争のことを考えると、頭に鈍痛が走る。自分ほかの戦争に関わっていたのか。

「ありがとうございました」

ラグナはぺこりと頭を下げると、鍛冶屋を後にした。

鍛冶屋を出ると、右手に建物が見えた。そういえばまだ挨拶をしていなかったなと気付いた。

建物の入り口に看板が立っていた。「宿屋ひだまり」の扉を開けると、中から少女が飛び出してきて、ラグナにぶつかった。

「きゃあっ」

「大丈夫ですか」

自分にぶつかりしりもちをついた少女に手を差し伸べる。少女は

そつとその手を取ったので、ラグナは引き上げた。お、重い。少女はふくよかで、ラグナでも少々力を込めなければならなかった。

「ごめんなさい、重かったでしょ」

「いえ、そんなことはないですよ。あなたは」

「この宿屋の娘でユーニと言います」

「僕はラグナです。よろしく、ユーニさん」

ラグナが笑顔を見せると、ユーニは頬を染めてうつむいた。

「どうかしましたか」

「い、いえ、何でもありません」

ユーニはラグナの手をパツと離れた。ラグナは慌てた。

「す、すみません」

「いえ、慌てていた私が悪いのですから」

すると、二階からかっぶくのいいひげを生やした中年の男性と、綺麗でスタイルのよい女性が下りてきた。

「いらっしやい、泊まるかい？」

「いえ、こつちに引越してきたのでご挨拶に伺いました」

「そうかい。私はターナー、この主人だよ。ご覧のとおりここは宿屋でね、隣は酒場さ。こつちが妻のリタさ。その丸いのが娘のユーニだ。酒場は夜だけだがね」

「そうですか。でも、僕はまだ未青年なので」

「ああ、食事も提供しているからたまには寄っておくれ」

「ありがとうございます」

ターナーに礼を述べるとラグナは外に出た。

すると、見慣れぬ服装の少女がなぎなたを振るっている。よく見ると、カルディアのめいと雰囲気似ている。東方の国の人間だろうかと声をかけた。

「あの」

「今はなぎなたの鍛錬中じゃ。声をかけないでたもれ」

「お嬢様、そんな風ではいけません。きちんとご挨拶を」

「爺はうるさいのう」

周りを飛び回っている鎧兜を着た小さな小さなモンスター（？）に諭されて、少女はなぎなたを振る手を止めると、ラグナのほうを見た。

「なんじゃ」

「引越してきたラグナです」

「わらわはうづきと申す。良しなに頼むぞ」

「旅行ですか」

「まあな。実は兄を探しにきたのじゃ」

「行方不明なのですか」

「しばらく滞在するゆえ、よろしく頼むぞ。ラグナ殿」

やはり東方の国のようだ。可愛らしい声で、えらそうな口を利くめいと同じしゃべり方だ。小さいくせに態度が大きいところなどそっくりか。ラグナが失礼なことを考えていると、うづきが怪訝そうな表情を浮かべながら口をとがらせた。

「ラグナ殿は、何を生業としておるのじゃ？」

「農作ですね。ダンジョンで鉱石を採掘したり」

「なんと、ダンジョンへ参るのか！」

うづきは大きな目を更に丸くして驚いている。そしてモジモジしながらつぶやいた。

「実は、わらは虫が苦手でう。兄上を探しに行きたいのじゃが、恐くてな。もし、東方の国の者に会ったら教えてはくれまいか」

「いいですよ」

「恩に着るのう」

うづきはこぼれんばかりの満面の笑みで答えた。

10・ルーンアーカイブス

剣を調達したラグナは、早速くじら島へ行くため教会地区へ来た。すると、セルフィが教会から出てきた。

「セルフィさん、もう身体の具合は良いんですか」

「ええ、ラピスにいっぱいご馳走してもらったから大丈夫」

日傘をくるくると回しながらセルフィが笑った。たしかに、顔に赤みが差している。

「ところでこれからどうするんです？」

「ラピスがね、ステラさんに頼んでくれて、ルーンアーカイブスに住めることになったの」

「ルーンアーカイブス？」

ラグナが不思議そうな顔を見ると、セルフィは教会の右の方を指差した。

「あれよ。図書館なんですって」

見ると、古めかしい建物が建っている。セルフィがラグナの服の端をツンツンと引っ張った。

「ねえ、これから掃除するんだけど、手伝ってくれない？」

時間を見ると、もう昼を過ぎている。手伝ってやらないと、今晚の寢床に困るだろう。

「いいですよ。さつさと片付けてしましましょう」

「やった、ラグナ、恩に着るよ」

セルフィは、ラグナの腕をとる。

「ちょ、ちよっとセルフィさん！」

真っ赤な顔をしたラグナにセルフィは首をかしげた。

「どうかした？」

「あの、手を離してください」

「あっ」

セルフィはラグナの腕からぱっと飛びのいた。

「ごめんなさい。ラグナって男っぽくないからつい……。おかしいな、また大きくなっちゃったのかな」

セルフィの独り言を聞いて、ラグナはいっそう顔を赤くした。

「さ、先に行きます」

ラグナは走って行って、ルーンアーカИБスの扉を開ける。雨戸が閉まっているようで、室内は真っ暗だ。追いついてきたセルフィを振り返り告げた。

「セルフィさんはここで待っていてくださいね」

ラグナは暗がりの中を手探りで歩く。ようやく窓枠のようなもの

に手が触れた。鍵を探り当てて、窓を開け放つ。風が入ってきて埃が舞い上がった。少し明るくなったので、他の窓も開けた。図書館というだけあって天井までびっしりと本が埋まっている。隙間無く収められているのを見ると、ラグナは思案した。

中が明るくなったので、セルフィも入ってきた。

「何してるの？」

「これから風の魔法をかけて、部屋の埃を外へ追い出します」

「へえ、そんなことできるの」

「少しかじっていたものですから。すみませんが、外へ出てもらえますか」

セルフィは大人しく外へ出た。

モンスターと戦う魔法がこんなときに役立つとは思わなかったが、この埃をはたきで追い出すなんて何時間かかるかわからない。ラグナは風の魔法を応用することにした。

杖を取り出し、魔法を発動する。風が巻き起こり渦を巻いて、部屋を駆け巡る。ラグナはそれを杖で制御しながら、窓の外へ追いつた。部屋の埃はあらかた外へ出てしまった。

「すごいね、ラグナ」

「いや、それほどでも」

頭をかきつつ照れるラグナを、セルフィはしげしげと見つめた。

「ラグナって、魔法使いなの？」

「いえ、ただの農夫ですよ」

「そう……ノーラッドの辺境に、戦車をジョウロでやつつけた農夫がいるって報告があったんだけど、もしかしてその人？」

「違いますよ。それより、そんなことを知っているなんて、セルフ

「伊さんってお城で働いていたんですか」
「ま、まあね」

急にセルフィの様子がおかしくなる。セルフィはラグナの背中を押して、家の外へ追い出そうとする。

「まだ、終わってないですよ？」
「ううん、後は私がやるから。ありがとね」

ラグナを外に追い出すと、セルフィは戸を閉めてしまった。
変なセルフィさん。ラグナはそう思ったが、何か触れてはいけな
い話題でもあったかなと思いつ返す。しかし、自分の素性がばれそう
だっただけで、思い当たることはない。まあ、いいか。

さて、くじら島へ行こう。本来の予定を思い出し、時計塔へ向か
うラグナだった。

時計塔へ着くと、ドロップが出かけるところだった。

「ドロップさん、お出かけですか」
「ええ。ラグナは？」
「これからくじら島に行ってきます」
「そう、頑張つて」

型どおりの返事をする、興味なさそうに立ち去っていく。たしか
カカロの話では、ドロップは一族の中でもずば抜けて優秀なのだ
そう。何をやっても簡単にこなしてしまうので、彼女の興味を引
くものがなく、無気力になっているとのことだった。そんな孫を心
配してこの地へ招いたのだという。

何でも出来るという事が不幸だなんて、コツコツタイプのラグナには理解できない。ドロップは何だったら楽しめるのだろうか。そんなことを考えながら、ラグナは豆の木に飛びついた。

11・月明かりの下で

クジラ島は相変わらず静まり返っていた。ラグナは剣を抜いて表層部へと進む。ゴブリン、アントを蹴散らし、更に深層部へ下る。スライムやオークを一刀両断にすると、クジラ島のムナビレへ出た。そこは緑濃い遺跡だった。日の光を浴びてモンスターたちが群れていた。お馴染みのモコモコが互いに毛づくろいをし、バツファモーが草を食んでいる。

その横を通り過ぎながら、ラグナは塔を発見した。誰か住んでいるのだろうか。

「ごめん下さい。誰かいませんか」

声をかけるが、返事はない。そっと戸を押すと戸は開いた。無用心だなと思いつつも中を覗いてみた。家の中はちゃんと手入れされている。人が住んでいるようだ。

「お邪魔します」

ラグナは申し訳なさそうに小さな声でつぶやくと中へ入って行った。らせん状の階段を昇って二階にたどり着く。そこには絵をかくためのイーゼルが置かれており、たくさんの観葉植物が飾つてある。壁には何かよくわからない絵がかかっていた。奥を見ると、ダブルベッドがあり誰か眠っている。ラグナはそっと近寄り、眠っている人物を見た。

「女の子かな」

昼間から寝ているなんて、夕べ夜更かしでもしたのだろうか。声をかけたのだが、熟睡していて全く起きる様子はない。ラグナは諦めてその場を離れた。

塔を出ると、そばの空き地に目が行った。農夫の血が騒ぐのか。しゃがみこんで雑草を抜き始める。猫の額ほどの空き地はすぐにきれいになった。クワに持ち替え、耕し始める。

「僕、何しているんだろう……」

クワを杖代わりにしつつ、ラグナは額に手を当てた。そういえば、ロゼッタに栽培を頼まれていた花があった。月の光を浴びて育つムーンドロップ草だ。クジラ島は地上よりも月に近い。ここならすくすく育ちそうだ。ラグナはここに種をまくことにした。

陽はすっかり暮れて、夜の帳が下りている。そろそろ帰ろうかな、ラグナがそう思ったときだった。塔から女の子が出てきた。金色の髪は短いワンレングスで、きゃしゃな体つきでミニスカートにニーハイといういでたちだった。手にはジョウロを持っている。

「こんにちは」

ラグナが声をかけると、女の子は困惑したようだった。

「怪しい者じゃありません」

ラグナが弁明すると、女の子はクスクス笑い出した。

「そうですね。こんなところでジョウロで水をまいている人が怪しい訳ありませんね」

泥だらけでジョウ口を持っている自分が功を奏したようだ。

「初めまして、エリスといいます」

「初めまして、ラグナです」

エリスとは初対面だというのに会話がはずんだ。この塔には、元々片翼と住んでいたが行方不明になり、今は一人で住んでいるらしい。夕べ夜更かしたのかというラグナの質問に、エリスはこう答えた。自分は吸血族であり、日が暮れてからしか行動できないのだという事だった。ラグナがおびえた様子を見せると、エリスは「血は吸いませんから」とまたもクスクスと笑った。

「ここにムードドロップの種をまきました。毎日水やりに来ますから」

「まあ、じゃあぜひ家にもいらしてくださいね」

エリスに見送られながら、ラグナはクジラ島を後にした。

12・若草の遺跡

ラグナはミスト宅の前にある若草の遺跡の攻略を開始した。地面にはつくりと口を開けたそこは、地下深く迷路のように広がっている。遺跡を下りてすぐ、チロリという赤いリスのようなモンスターに出会う。木の実を口元に持ってきてぼりぼりと食べている。ラグナは剣をさやに収めると、膝を着いてチロリに手を差し伸べる。チロリは警戒してラグナを見ている。ラグナは首を少しかしげた。どうしたら仲良くなれるだろうか。ラグナの顔がぱつと明るくなる。リュックの中からイチゴを取り出して手のひらに乗せた。

「僕の農場で採れたんだ。おいしいよ」

チロリは鼻をヒクヒクさせて興味を見せている。まだ警戒されているようだ。ラグナはもうひとつイチゴを取り出して食べて見せた。イチゴの甘酸っぱい香りが辺りに広がる。我慢できなくなったのか、チロリはラグナの手からイチゴを取って食べ始める。ラグナはそっとチロリの背中を撫ぜた。チロリはおとなしくされるがままだ。チロリが食べ終わるのを見届けると、ラグナは立ち上がった。

奥へ進むと、カルディアにも生息しているモンスターたちに遭遇する。慣れた様子でモンスターたちを蹴散らしていく。まるで火花が爆ぜたようにモンスターたちは光になる。はじまりの森に帰るのだ。

「綺麗だ」

いつ見ても命の光とは美しい。ラグナはそう思う。ラグナのいるこの世界と始まりの森は決して交わることはない世界だ。いったい誰がこちらの世界に何の目的でゲートを作ったのか。先の戦いでその理由はわからなかった。そして不可解なのがミストの存在だ。どうして彼女はラグナをモンスターとの戦いの場所へ誘うのか。

最下層へ到達すると、開かずの扉がラグナを待っていた。草に覆われた扉は、長い年月の間、誰も足を踏み入れたことがないことを示している。

何人も入ることは叶わず

「そう言われてもね」とラグナはつぶやくと、扉に手をかざした。扉に備え付けられた鍵が大きな音を立てて解錠され、厳かに開く。中には鶏の怪物のような巨大なモンスターがラグナを睨みつけていた。

「君がここの主なのかい？」

モンスターはラグナの質問には答えない。その全長は、十メートルはあるだろうか。モンスターは大きく羽を広げて舞い降りてくる。

「倒すしか僕が生き残る道はなさそうだ。君には何の恨みもないけれど、はじまりの森に帰ってもらう」

ラグナは剣を抜いた。重量感のある大きな片手剣を後ろに流すように持つ。モンスターがその筋骨隆々の足でラグナを蹴り飛ばそうとする。ラグナは瞬時に後ろへ飛びのいた。肩透かしを食らったモンスターが転倒する。ラグナは槍で数度突いた。モンスターの叫びが響き渡る。不利と踏んだのか、卵を数個産んだ。卵はものの数秒で孵化し、小型の鶏のモンスターとなる。そいつらがいつせいにラグナめがけて歩いてくる。戦闘らしからぬのんびりとした歩みに勘違いしそうになるぐらいだ。しかし小型のモンスターはラグナの近くまでくると自爆した。驚いたラグナは体制を崩す。そこへ大型のモンスターが突進してきた。ラグナは避けきれない。大きな叫びとともに吹き飛ばされた。ラグナは急いで立ち上がり、モンスターと距離をとる。近寄っては突進を食らってしまう。突進のダメージは結構なもので、ラグナの体力は半分ほど奪われていた。とっさに

片手剣を捨て、杖を取り出す。杖の先には星がついている。星降る杖だ。ラグナはモンスターに向き直り、挑発をかける。

「来い！」

モンスターの視線がラグナを捉える。それを確かめてミーティアの魔法を発動した。無数の隕石が炎をまとい、ラグナに向かって降り注ぐ。モンスターをひきつけておいて、ラグナは突進を回避する。降り注ぐ隕石はモンスターを直撃した。

決着はついた。目の前には羽が無数に落ちている。しかし、今回の敵は強くて、体力を使い切ってしまった。その場に座り込んだラグナの足元に、チロリが近づいてきた。ラグナは肩で息をしながら、チロリを見た。

「やあ、こんなところまで来たのかい？　今なら君でも僕をやっつけられるよ」

ラグナの足元に、チロリはボトボトと木の実を落とした。

「くれるのかい？」

ラグナはチロリが落とした木の実を拾い上げると、服にこすり付けた。そして口に含み、ガリツと噛んだ。口に広がる渋味に、ラグナは顔をしかめた。でもラグナの口から出たのは感謝の言葉だった。

「ありがとう。元気が出てきた」

手を差し伸べると、チロリはラグナの手から肩に飛び乗る。

「一緒に来るかい？　お礼にイチゴをご馳走するよ」

ラグナは杖を頼りに立ち上がり、遺跡を後にした。

遺跡を出ると、目の前はミスト宅だ。花壇に水遣りをしていたミストがラグナの姿に気がついた。

「ラグナさん、大丈夫ですか！？」

満身創痍、着ているものはぼろぼろである。ラグナは自分の姿を見て自嘲気味に笑った。

「格好悪いところを見られちゃいましたね」

「何を言ってるんですか！ 手当てしますから家に入って」

ミストに強引に引っ張られていたラグナだったが、家に入った途端、「もう、だめ」と言って倒れてしまった。

目が覚めた。ラグナはベッドの上だ。部屋全体がピンク色である。自分の部屋ではないことは確かだった。周りをぐるりと見渡すと、心配そうにラグナを見ているミストが目に入る。

「ラグナさん」

「あ、ミストさん。ここは？」

「うちです。運ぶの、大変だったんですよ」

ぶくつと頬を膨らまして怒っているように見えるミストだったが、目は真っ赤だった。

「僕、どれぐらい眠っていましたか？」

「三日です」

「すみません。迷惑をかけてしまって」

「良いんですよ」

目の前でやんわりと微笑んでいるミストは、今まで見たことのない表情をしていた。こんな質問をしてもいいものかとためらったが、今しか聞く機会はないと思ったラグナはミストをまっすぐ見た。

「ミストさん、お聞きしたいことがあるんですけど」

「何でしょう？」

「どうしてミストさんは僕をダンジョンへ誘うのですか？ カルデアのときも、このトランルピアでも」

ミストはきょとんとしている。

「さあ、どうしてなんでしょう。以前にもお話しましたが、誰かがあたしを呼んでいたんです。だから来ました。ラグナさんがここへ来たのはご自分の意思でしょう？」

「それはそうですね」

「何かあるとすれば、あたしとラグナさんは目に見えない何かで繋

がっているんですよ」

ミストに言われて、ラグナは考え込んでしまった。確かに係わり合いになるうとしなければすむ話かもしれない。いったい、ミストとどんな繋がりがあるというのだろうか。

「そういえば、ラグナさんって大胆ですね」

「何がです？」

「昨日寝ぼけて、あんなことやこんなことしたじゃないですか。あたし、止めてって言ったのに」

「ええーっ!？」

ラグナにはまったく記憶がない。ミストの言う、あんなことやこんなことはいったい何なのだろうか。恐る恐る聞いてみる。

「あの、僕、何かしましたっけ？」

「やだわ、あたしの口からは恥ずかしくてとても言えません」

両手を頬に当てて、赤い顔をして恥ずかしそうに体を左右にくねらせているミストの姿を見て、ラグナの頭の中は真っ白になった。そんなラグナの様子をじっと伺っていたミストが「ぷくくっ」と笑った。

「何がおかしいんです？」

「だって、ラグナさんが勘違いしてるみたいだから」

「あんなことやこんなことをしちゃったんでしょう？　僕、責任を取らないと」

「どう責任を取るつもりなんですか？」

ミストがラグナに顔を近づける。どうするのかと迫られて、ラグナは気が動転した。そして、咄嗟に出た言葉がこれである。

「どうって、ミストさんと、け、けっ」

そのときミストがラグナの前から消えた。横に来て耳打ちしたのだ。すると、ラグナの顔が見る見るゆでだこのように赤くなる。次の瞬間、ラグナは悲鳴を上げて布団をかぶってしまった。

反対にミストは上機嫌で、「おかゆを作ったんですよ。食べてくださいね」と言うと、鼻歌を歌いながらキッチンへ向かった。

ミストの気配が消えたので、ラグナは布団から顔を出した。そして大きくため息をつく。切っても切れないくされ縁をどう断ち切るうか、真剣に考えるのだった。

12・若草の遺跡（後書き）

ラグナがした「あんなことやこんなこと」はご想像にお任せします。

13・災いのカブ座

チロリを連れて、いつものようにムナビレのエリスの家を訪れた。すると、塔から一人の男が出てきた。学者なのだろうか。きちんとした身なりをしていて、髪は左右に広がり眼鏡をかけている。男は肩を左右に揺らしながら更に上の開かずの門に向かって歩いていく。無性に気になったラグナは後を追った。男は難なく門を開けると中へ吸い込まれていった。慌ててラグナも門に手をかけたが、門はピクリともしなかった。そのはるか奥に大きな光の塊が見える。あんなに大きなルーンは初めて見た。

諦めたラグナはエリスの所へ戻った。

「エリスさん、こんばんは」

「まあ、ラグナさん。今日はお客さまが多い日ね」

エリスは嬉しそうに微笑んだ。ラグナの肩の上にちよこんと乗っているチロリを見て手を差し伸べる。チロリは警戒して体の毛を逆立てた。困ったような顔をして自分を見つめるエリスに、ラグナは助け舟を出した。

「チロリ、この人は僕の友達なんだ。心配しなくていいよ」

チロリはつぶらな瞳でじつとラグナを見つめていた。ラグナの言葉を耳にしてか、エリスのほうを向いた。エリスは再度手を差し伸べる。チロリはさっきのことが嘘のようにおとなしくなった。

「可愛い」

そう言いながら、エリスはチロリの頭を撫でている。その様子を見ていたラグナは、努めて穏やかに話しかけた。

「ここから出て来た男性は誰です？」

「あの人はジェルバインさんよ。とても親切なの」

親切そうな人間には見えなかったが、エリスが言うのだからそんな

のだろう。

「その人はどんな人なんですか？」

「どんなと言われても……片翼のお話はしたよね。寂しくてよく歌を歌って気を紛らわしていたんだけど、ジェルバインさんのお話がおもしろくて寂しくなくなっちゃった」

ラグナの心に嫉妬心が沸き起こる。自分たちと大して年の離れていない男のことをエリスが良く言うからだ。ラグナがつまらなそうな顔を見ると、エリスは慌てて否定した。

「もちろん、ラグナも来てくれるから寂しくないよ」

どうやらエリスに入らぬ気を遣わせてしまったらしい。それでも少しうれしくなったラグナだった。

「僕にもいつかエリスの歌を聞かせてくださいね。ところで、この塔より上のほうの門は開かないんですか？」

「さあ？ あそこには近づかないように言われてるの。シルバールフもいるでしょう？」

「そうですね。近づかないほうがいいかもしれません。あの上には何があるんですか？」

「あの上には、かつてもつとも精霊に近いと呼ばれた人々の城があるんですって」

「精霊に近い人々？」

「ええ。ジェルバインさんのお話だと、今はモンスターの巣になっているらしいけど」

「大きな光は？」

「ああ、しっぽの木ね。あれはルーンなの。あれのおかげでこのくじら島は空を泳いでいるんですって。ロマンチックよね」

うつとりとしながらエリスは手を合わせた。くじら島は、体をめぐるルーンが減少しているので困っていると言った。一度しっぽの木をじかに調べたほうがいいのかもしれない。それにはあの開かずの門を超えなければならぬ。ラグナはジェルバインの予定をエリスから聞きだした。近々来ると言うジェルバインの後をつけることに

した。

エリスと別れて、ラグナは地上に降りてきた。

「おやすみ、チロリ」

そう語りかけて、チロリをモンスター小屋に帰す。日は暮れて、辺りは真っ暗だ。

時計塔の玄関の灯りがぼんやりともっている。そのとき、時計塔の扉が開いてキャンディとドロップが出てきた。ランプを掲げたキャンディが、ラグナを確認すると、大きく手を振って駆けてきた。

「お兄ちゃん！」

「夜にお出かけ？」

「うん。お姉ちゃんと一緒に星を見に行くの」

「へえ」

すると、ゆっくり近づいてきたドロップが答えた。

「今の季節はカブ座が見られる」

「お兄ちゃんも一緒に行こう？」

ニコツと可愛い笑顔を見せるキャンディに逆らえるはずもない。キャンディに手を引っ張られたラグナはドロップを見た。嫌がつている様子もないので同行することにした。

キャンディはうれしそうにスキップを踏んで先を歩いている。ラグナはドロップと並んで歩いた。ドロップは会うと必ず星座の話をしてくれる。

「ドロップさんは星に詳しいんですね」

「星は見ていて飽きない」

ドロップは無表情で答える。ラグナは苦笑しながら会話を続けた。

「そうですね。あまりに星の数が多いので、僕にはさっぱり星座がわかりませんよ」

「教えてあげる」

「ありがとうございます。ところで今日はどこで釣ったんですか？」
彼女は村のあちこちで釣りをするのが日課なのだ。

「海」

「へえ。それで、釣りの成果はどうでしたか？」

「タイが大量……」

ドロップの口から寒いダジャレが出てきてラグナは絶句した。ここは笑ったほうがいいのだろうか。

「今のは聞かなかったことにして」

ドロップが恥ずかしそうにそっぽを向いた。ラグナは「わかりました」と気にしていないそぶりで答えた。ドロップという人は案外面白い人なのかもしれない。

三人はルピア山の展望台に到着した。あたり一面、ルーニーがふわふわと浮いており、まるで地上の星のようである。

見晴らしのいいところで三人は並んで座った。そして、ドロップが夜空を指差した。

「あの白い大きな星が左右に二つある。それを底辺とした逆三角の頂点が黄色い大きな星」

「うん、見つけた！」

キャンディは元気良く答える。ラグナもかろうじて見つけた。

「黄色い星の下に、ピンク色の星たちが丸を描いているのはわかる？」

「ええと、うん」

「それがカブ座」

へえ、あれがカブ座……ラグナが納得していると、キャンディが叫んだ。

「流れ星がいっぱい！」

空を見上げると、カブ座から数個の流星が弧を描いて落ちていく。それはだんだん大きくなる。やがて木々に邪魔されてここからは見えなくなった。一瞬の後それは落ちてしまったのか、ものすごい大きな衝突音が響き渡った。ドロップがふもとのほうを見てつぶやいた。

「あれってラグナの家のはうじゃ」

「ええっ！？ 僕、帰ります。おやすみなさい」

ラグナは目にも留まらぬ速さで展望台を後にした。ドロップの「気をつけて」と言う言葉も耳に入らなかった。

息を切らして牧場にたどり着いた。見たところ何も変わりがない。

自分のところに落ちたのではないのだろうか？ そう思いながら家の扉を開けて絶叫した。

「うわっ、なんだこれ！？」

「何か大きな音がしましたけど、大丈夫でしたか？」

ラグナが振り返ると、そこにいたのは心配して駆けつけてきたミストだった。

「僕は大丈夫です」

「そうですか。良かったです。それにしても」

ミストはラグナの向こう側の様子を見て驚いている。

「部屋中にカブを置くんなんて、ラグナさんもカブが大好きなんですね」

確かに部屋中にたくさんのカブが転がっている。うれしそうに話すミストに、ラグナはあわてた。

「いえ、これは」

「同じ趣味のお友達が増えて、あたしもうれしいです。じゃあ、おやすみなさい」

満足げに帰っていくミストの背中を見送りながら、ラグナはため息をついた。あの流星はカブの襲来だったのか？ 以前カブにまつわる昔話を、エリックから聞いたことがある。

季節をまたいだカブは、夜な夜なお化けになって畑を荒らす

そういえば、くじら島に行くのに忙しくて、季節が夏になるというのに牧場の前の畑のカブを収穫し損ねたのだった。ひょっとして、

それを根に持ったカブ座が怒ってカブを降らせたのだろうか。昔話どおりに、夜中に畑をあらされるかもしれない。ラグナは身震いをする、カブを拾い集めて、一つ残らず出荷箱に放り込んだ。

翌夕、出荷箱をのぞいていたロゼッタが今にも泣き出しそうな顔をしている。

「ロゼッタさん、どうかしましたか？」

「ラグナ、ひどいわ」

ラグナが出荷箱をのぞくと、カブはすべて枯れていた。

13 災いのカブ座（後書き）

ゲームのカブ座のエピソードとは違います。

14・つる草の遺跡

ルピア湖へ行く途中にルピア山がある。山道に遺跡の入り口のようなものがあるが、草木に覆われて中に入れそうにない。しかし、若草の遺跡を攻略した後に行ってみると、木の芽が少し大きくなっていた。若草の遺跡のボスを倒した頃には、その木の芽は成長し遺跡の入り口をふさいでいた石のかたまりを押し上げている。遺跡への入り口がぼつかりと口を開けていた。

ラグナは誘われるように遺跡に足を踏み込んだ。つる草の遺跡と呼ばれるそこは熱帯の気候だった。溶岩が流れる灼熱の地には無数のアントが生息している。蟻が巨大化したような姿だ。カチカチと顎を鳴らすアントたちは、ラグナが足を踏み入れるといっせいに襲い掛かってきた。ラグナはアクアソードを右手に持ち、左手に盾を携える。アントの吐く唾を盾で防ぐ。唾のついた部分がジュツという音を立てて溶けた。火傷はごめんだとラグナは背後に回り、不気味につや光りした赤い背にアクアソードを突き立てた。息つく暇もなく、カマを持った幽霊がしたたかに襲い掛かってくる。倒しても倒してもゲートから湧いてくるのだ。ラグナが壁伝いに後退していると扉が開いた。扉の奥には下へ続く階段がある。迷わず階段を下りた。

すると今度はチロリに似たモンスターが現れた。ラグナは適当にあしらい、先を急ぐ。どろどろと湧き上がる真つ赤な溶岩のそばではイグニスが待ち構えている。イグニスは火の玉のモンスターで、ラグナに向かって火炎を吐き出す。それを盾で防ぎながらウォーターロッドで応戦する。ラグナが放った水の魔法はレーザーのごとくイグニスを貫いた。ほっとする暇もなく、今度はゴーレムが重厚な響きを立ててラグナに照準を合わせている。過去の遺物であるロボット兵器は何を糧に動いているのか。ただ遺跡を守るためだけに侵入

者のラグナに戦いを挑むのか。

「今までお疲れ様でした。楽にしてあげます」

悲しい性にラグナは心を痛めつつも、すばやくゴーレムの懷に飛び込み、アクアソードで一太刀にする。ゴーレムは真二つとなり、その場に崩れ落ちた。ラグナはアクアソードを一払いして機械油を振り切り、ゴーレムの残骸を見つめた。遺跡にはいくつも火薬壺が設置されている。火薬壺は台座に乗っており、まるでシーソーのように片側にちょこんと乗っている。ラグナはこれを利用することにした。目の前にはゴーレム、角の生えた魔法使い、棍棒を振りかざしたトルルがこちらに向かってきている。台を回してモンスターたちに狙いを定める。射程距離に入ったところを、火薬壺の反対側を思いっきりハンマーで叩く。すると、火薬壺はモンスターたちめがけて飛んでいく。火薬壺とともにモンスターたちは爆発した。行く先々で火薬壺を使い、モンスターを一掃する。

さらに下へ進むと、人の背よりも大きな丸い岩が出口をふさいでいた。その下側には土が盛つてある。大岩をこの砂で停めているようだ。下を見渡すと、階段が連なっており、ところどころ瓦礫で出口がふさがれている。ラグナは考える。この大岩を転がせば、上手いこと瓦礫を破壊して一気に進めるかもしれない。ラグナはクワを取り出すと盛り土を取り除く。思惑は狙い通りで、大岩は坂を転がり始めた。瓦礫を破壊し、モンスターを蹴散らし、大岩は突き進む。ラグナもクワを担いで後をついていく。大岩に踏み潰されて、うめき声を上げるバッファモーやトルルを横目にラグナは走る。あつという間に次の階へ進むことが出来た。

下への階段が無いところから、どうやら最下層にたどり着いたようだ。ちよつと広めの空間の奥に扉がある。重厚に出来た扉はやはりびくともしない。しかし、扉に文字が浮かんできた。

汝、後悔することなかれ

「後悔なんて、いつもしてる」

ラグナはそうつぶやくと、扉のくぼみに手を当てる。扉は大きな唸り声を上げて動き出した。中を見渡すと、巨大なスライムが中央に鎮座している。ラグナが中へ進むと、背後で地響きが起こった。振り向くと、入り口がふさがれたのが見えた。勝たなければここから出られないのはいつものことかとラグナはため息をついた。顔をスライムに戻す。すると、スライムは忽然と姿を消しており、代わりに蜂のようなクイーンビーが現れた。黒と黄色の縞々模様の体を震わせてラグナの周りをせわしなく飛び回る。その尻の先には針が飛び出ており、ラグナを狙っていた。ラグナは針を交わしながらクイーンビーをおびき寄せる。ラグナを刺し殺そうと近づいてきたとき、カンロから譲り受けたヘルブランチで自らの体を炎で包んだ。哀れ、クイーンビーは炎に包まれ息絶えた。倒したかと思うと、今度は赤い豹のようなモンスターが現れた。シャドウパンサーは残像を残しながらラグナの周りをうろついている。身構えていると、いつの間にか背後に回っていたシャドウパンサーに鋭い爪で背中を引っかかれた。うめくラグナをあざ笑うようにシャドウパンサーは執拗に攻撃をする。ラグナはウィンドロッドに持ち変えると、ルフトメッサーを発動する。シャドウパンサーたちは竜巻に吸い上げられ空高く舞い上がったかと思うと、地面に叩きつけられた。その体は小スライムとなる。力をなくした小スライムが寄り集まり、巨大な体を形成していく。

「まだ終わじゃないか」

肩で息をしながらラグナはつぶやく。かなり体力を消耗していた。モンスターは形成中である。その間に回復ドリンクを飲み干した。こきこきと首をならし中央を見る。最初に見た巨大スライムが姿を完成させた。スライムは巨体をうねうねと揺らしながらラグナを見ている。すると、突然ラグナの足元が爆発した。突然の爆発に、避けることも出来ずラグナは吹き飛んだ。何とか起き上がると、今度は火柱が飛んでくる。ラグナは間一髪でよけると、ファイアーロツ

ドを取り出した。

「『目には目を』ってね」

ラグナは走りながら魔法を発動する。ファイアロードから出た火球はスライムに命中した。もだえ苦しむスライムに追い討ちをかける。続けて火球を連発する。それはマシンガンのような。スライムは原型をとどめなくなっている。体の一部が欠けてきた。ヘルブランチに持ち替えて、欠けた部分にインフェルノの魔法をかける。溶岩をも溶かす業火にスライムは包まれた。焦げ臭いにおいが辺りに充満する。ラグナは服の袖で鼻を覆い隠す。まるで火の玉のようになったスライムが燃え尽きた。

ラグナはその場であぐらをかいて座り込んだ。うつむいて肩で息をする。リュックから回復薬を取り出し、一気に飲み干した。「やっぱりラピスさん特製の回復薬は効くな」と、独り言をもらす。

ヘルブランチを杖代わりに立ち上がる。スライムの燃えた跡に石版が落ちていた。どうやら遺跡の欠片のようだ。インフェルノの炎で真っ赤になった遺跡の欠片はかなりの熱を持っていてつかむことが出来ない。急冷すれば割れてしまうだろう。仕方がないので自然に冷めるのを待つことにした。何もかも終わってみると、今まで気にならなかったことが気になるものだ。ラグナは自分が雨に打たれたように汗をかいているのに気がついた。無理もない。スライムも自分も火の魔法を使い続けたのだから。

ラグナは一度家に寄り、荷物を置くと、汗を流すためにアレックスの湯へと向かった。

「いらつしゃいませ!」

メロディの元気のいい声が聞こえる。メロディは時計をチラッと見て言った。

「あら、こんなに遅くまでごくろうさま。入って行く?」

「はい」

「料金は十ゴールドよ」

料金を渡すと、「ごゆつくり」と送り出された。

今日はもうくたくただ。ラグナは服を脱いで浴室へ入る。中は湯気でもうもつとしていた。手早く身体を洗い終わると、湯船に入る。今日の入浴剤は青い草のようで湯が青い。誰もいないので貸し切り状態だ。手足を伸ばして、肩までゆつくりと浸かった。いい湯加減である。体から力が抜けてふわふわしているようだ。ラグナがのんびりしていると、女湯の方から声が聞こえてきた。

「ラグナ、湯加減はどう？」

メロディの声だ。営業時間が終わったのだろう。ラグナは大きな声で答えた。

「ばつちりです。メロディさんもお仕事終わりですか？」

「ええ。大サービスで背中流してあげる。そっちに行くね」

「ええっ!？」

メロディがとんでもないことを言い出した。サービス精神が旺盛なのは有り難いが、こんな深夜に、水着姿とはいえ全裸に近い格好で男と女が風呂にいるなんて絶対にまずい。ラグナは慌てて拒否の意思を示す。

「い、いいですよ。メロディさんもお疲れでしょう？」

「いいのよ。いつも利用してもらっているんだから」

だんだん声が近くなる。男湯と女湯の仕切りには鍵のついた扉がついている。メロディが掃除のときに利用しているものだ。その鍵がガチャガチャと開けられる音が聞こえてくる。メロディが男湯に入ってくるのは時間の問題だ。

「うわあああっ!」

ラグナは慌てて湯船を飛び出し、脱衣所へ逃げた。

「ラグナのばかー! いけず!」

浴室にメロディの罵声が響いていた。

15・モンスターが欲しい！

ここのところ、ラグナは牧場の仕事を終えると、足しげくクジラ島に通っている。そんなラグナの様子を面白くなさそうに眺めている女性がいた。ミストである。

ラグナが牧場の畑の水やりをしていると、いつもは午後からしか遊びにこないミストがやってきた。畑ではチロリがちょこまかと動き回り、キノコや色付き草を収穫している。

「ミストさん、こんにちは」

「こんにちは、ラグナさん。精が出ますね」

ニコニコと微笑みながらミストが挨拶を返す。今日は機嫌が良いんだなとラグナは思った。でもミストはそれっきり口を開かず、ラグナの作業をただ見ているだけだ。いつものようにかう素振りもない。ラグナは気持ち悪くなって、思わず訊ねてしまった。

「何か御用ですか」

「いえ、お構いなく」

それだけ答えて、まただんまりである。明日は雨かな。それはそれで水やりをしなくていいから楽だ、などとラグナは考えた。

水やりを終えたラグナは草取りをし、家畜の世話をした。手を洗いに水汲み場へ戻ると、まだミストがいた。ラグナは手を洗いながらミストに訊ねた。

「僕、昼ごはんを食べたらクジラ島に行くんですけど」

「そうなんですか」

「本当に用はないんですか？ あつたら聞きますよ」

「じゃあ、あのモンスターを下さい」

「えっ？　ところでモンスター小屋は建てたんですか？」

「いいえ」

「じゃあ、だめですね。諦めてください」

「何とかしてください。ラグナさん」

体を左右にくねらせて聞き分けのないことを口走るミストに、ラグナは頭を抱えた。ミストという人は、どうしてこう無理難題を押し付けるのだろう。

「考えておきますけど、期待しないで下さいよ」

「いいえ、期待して待ってます」

本当に期待のこもったような瞳で見つめてくるミストに、ラグナはため息をついた。

それから数日後、ミスト宅の前を通りかかったラグナは横にある池を見て驚いた。遺跡にいたダックが気持ち良さそうに泳いでいるのだ。黄色くて丸い体をプリプリと動かして水面に浮かんでいる。人間の住む所にモンスターを野放しにして大丈夫なんだろうか。遺跡ではラグナの姿を認めた途端、突進してくるやつだ。用心しながら、そつと近づいてみるがダックは知らん顔をして泳いでいるだけだった。

ミストが家から出てきた。ラグナを見つけて嬉しそうに近づいていく。

「ラグナさん、こんにちは」

「こんにちは、ミストさん。あのモンスターは？」

池のダックを指差すと、ミストが嬉しそうに話し始める。

「ええ、最近いつも遊びに来るんです。カモさん」

「カモさん？」

「ええ、カモさんですよ」

カモ？ カモといえばカモだが……。

そこへキャンディとマルコが仲良く歩いてきた。二人はこの池のほとりでよく遊んでいる。ラグナとミストを見かけると、ニコニコして挨拶した。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、こんにちは」

「こんにちは、今日もデートかい？」

ラグナがそう冷やかすと、マルコは顔を赤くして頭をかいている。キャンディはというと、口をきゅつととがらせると、ラグナの腕にしがみついた。そんなキャンディを見て、マルコは一転落胆の表情を浮かべている。そんなマルコにはお構いなしに、キャンディはラグナの腕を左右に振って話しかける。

「お兄ちゃん、カモさん見た？」

「ああ、見たよ」

「マルコがね、名前をつけたの。ね？」

キャンディに話を振られたマルコの顔がパツと明るくなり、元氣よく答えた。

「グリモアってつけたんだ。グリモアはそのうち巨大なモンスターになって俺達を襲ってくるんだ。だから俺がキャンディを守るんだ！」

「マルコ！ カモさんはそんな悪い事しないもん」

キャンディはラグナの腕をぎゅつとつかんでマルコに反論する。間に挟まれたラグナはオロオロするばかりである。かわいそうに、マルコはキャンディの心象を悪くしたようだ。常日頃からダンジョンへ近寄るなどガネーシャにきつく言われているマルコにとって、池のダックは格好の獲物なのだろう。しかし、精霊と心を通わせるキャンディにとって、モンスターは決して敵ではない。

ラグナはこの空気を何とかするにはどうしたら良いかなと思案した。そういえばタベ作ったキャラメルを持ってきたのを思い出す。甘いキャラメルで気持ちも少しは変えられるかも。ポケットからキャラメルを取り出し、二人に渡した。さっきまでの険悪な雰囲気はどこへやら、キャラメルをほおばると二人はニコニコの笑顔になって、手をつないで海岸の方へ駆けていった。そんな二人を見てミストがつばやいた。

「可愛いですね」

「そうですね。ミストさんもうぞ」

ラグナがキャラメルを一つ渡した。ミストはそれを受け取ると、包み紙をむいてキャラメルを口に入れた。ラグナもキャラメルを口にする。ミルクのまろやかさと甘さが口に広がって、なんとも幸せな気分になる。

「甘いです」

嬉しそうに口の中でキャラメルを転がすミストに、ラグナが告げた。「モンスターはもういいですよね？」

「ええ。ご迷惑おかけしました。マルコはずいぶん勇壮な名前をつけてましたけど、あのカモの本当の名前はトルテっていうんですよ。覚えてくださいね」

「トルテですか？」

トルテと言えば、カルディアのザッハの妹のトルテを思い出した。図書館の虫で眼鏡をかけており、華奢な体系の少女だ。物語にあるようにいつか白馬に乗った王子様が迎えに来てくれる、と夢見ている。ラグナもよく妄想ごっこに付き合わされたものだ。そんなことを考えていると、ミストがラグナの顔を覗き込んだ。

「トルテのことを思い出しているんですか？」

面白くなさそうに聞くミストにラグナは慌てた。

「ミストさんがそういう話題を振ったんでしょう？ あの二人元気にしているでしょうか」

「してるみたいですよ。ラピスが言っていました」

まだミストが睨んでいるので、ラグナは横を向いた。最近のミストは他の女性の話が絡むと、あからさまに不快感を表すのだ。向いた先に植木鉢が置いてある。まだ土がふかふかしていて何かを植えたばかりだと思った。

「ミストさん、何か育てているんですか？」

「ええ。変な種を拾ったんですよ」

「変な種？」

「ロゼッタに見せたんですけど、見た事がないって」
「どんな？」

するとミストは舌をペロツと出した。

「ええと、なんて言ったらいいか。ごめんなさい。丸いです」

「見たかったな」

ラグナがつぶやくと、ミストは頬をぶくつと膨らませた。

「だってラグナさんは、最近いつも忙しそうじゃないですか。見せる暇がありません」

「すみません」

面白くなさそうに訴えるミストにラグナは困ってしまう。確かに最近はいくじら島に通い詰めていてミストと話していない。しかし、ミストはいたずらっぽくラグナの顔を覗き込んだ。

「ひよつとしたら、人食い植物かもしれないね」

「何でそうなるんですか！」

ミストはクスクスと笑いながら、「花が咲いたら教えますね」と言った。

16・月に照らされたムーンドロップ

日が暮れてから、くじら島に行くのがラグナの日課である。昼間に行っても差し支えないのだが、行っても吸血族のエリスは眠っているからである。

エリス宅の前の花壇を見ると、ムーンドロップがつぼみをつけていた。水を優しくかけてやってから、エリスの住む塔へ足を向ける。慣れた手つきで扉を開けて、螺旋の階段を昇っていく。「エリス」と声をかけると、イーゼルの前で絵を描いていたエリスが振り返った。

「ラグナ、こんばんは」

満面の笑みで挨拶をくれるエリスに、ラグナの胸は高鳴る。

「こんばんは。今日は何を描いているんですか？」

「見てわからない？ 花瓶のお花よ」

エリスの視線の先には、ヒマワリの花が生けられた花瓶がある。エリスの絵は、どう見てもライオンだ。ラグナは少し困った表情をした。

「エリスは……芸術家肌ですね」

「そう？」

エリスは褒められたと思ったのか、うふふと笑った。そして筆とパレットを置くと、ラグナの肩に乗っているチロリに手を差し伸べる。チロリはその手を伝ってエリスの肩に乗った。くすぐったそうに首をすくめるエリスを見たラグナは、リュックを下ろすと水筒を取り出してテーブルに置いた。ラグナの畑で採れたトマトで作ったジュースである。それを見たエリスはチロリをラグナに渡すと、水筒のふたを開けて鼻を近づける。くんくんと匂いをかいで中身を確認すると目を輝かした。

「トマトジュースね。ありがとう。一緒に飲むでしょ？」

ラグナがうなずくと、エリスは食器棚へ行き、グラスを二つ出す。テーブルに置かれたピカピカに磨き上げられたグラスに、とろりとしたトマトジュースがグラスの縁いっぱいまで注がれた。エリスはラグナに席を勧め、自分は向かい側に座る。小さなテーブルなので、二人の距離はすごく近い。

「いただきます」

エリスが、白くて細い手でグラスを持ち、コクコクと飲み始める。小さな口に注ぎ込まれていく赤い液体はラグナをゾクゾクさせた。ラグナの視線に気がついたエリスが、首をかしげてニコツと微笑んだ。ラグナはあわてて自分のグラスのトマトジュースを飲み干す。そんなことはお構いなしに、エリスは嬉々として声を上げた。

「おいしい！ ラグナの作るトマトジュースは最高ね」

ラグナは自分の考えていることに気がつかないエリスにホツとするとともに、そういうことが頭をよぎる自分を恥ずかしく思う。それを悟られぬように何気なく聞いた。

「ありがとう。ねえ、エリス。あの男、今日もここへ来たんですか？」

ラグナは自分と同じようにここを訪れる男に嫉妬心を感じているのだ。

「ジェルバインさん？ ええ、今日もお茶したわ」

「どんな話をしたんですか？」

「そうねえ……犬が反抗するとか？ 飼い犬が懐かないみたい」

「犬を飼っているんですか」

「そうみたい。ねえ、それより外に出ない？ もうすぐ月が真上に来るわ。花が咲いているかもしれない」

エリスにせがまれて外に出た。月はまん丸で頭上に昇っている。エリスが花壇を指差して顔をほころばせた。花壇にはムーンドロップが可憐な黄色い花を咲かせている。ラグナはエリスに花壇のそばまで引っ張られていった。ニコニコと花を眺めているエリスの手はラグナの腕に絡み付いている。そんなエリスを見つめるラグナが口を

開いた。

「エリス」

呼びかけながら、ラグナはエリスの手を静かにはずした。そしてその手を大事そうに両手で包み込んだ。

「一人で寂しくないですか？」

ラグナは、モンスターがウヨウヨしているこんな場所にエリスを一人で置いておきたくないのだ。

「寂しいときもあるけど、こうしてラグナが会いに来てくれるから寂しくないよ」

そう答えてエリスがラグナを見上げる。その屈託のない笑顔を見て、ラグナは胸が苦しくなる。

「村の人はみんな親切で、同じ年頃の女の子もたくさんいます」

エリスは首をかしげる。ラグナが何を言いたいのかわからないのだ。ラグナはエリスの右手の甲にそつと唇を寄せた。ビクツと体を震わせたエリスを見て、ラグナは困った顔をした。脅かすつもりはない。エリスを思う自分の気持ちを伝えたいだけ。あふれ出しそうな思いを抑えて、努めて穏やかに微笑んだ。

「地上に降りませんか？」

ラグナの誘いの言葉に一瞬エリスの瞳が悦びにむせる。でも宝石のような輝きは、見る見る暗闇に吸い込まれていくかのように失われた。

「エリス？」

エリスは、怪訝そうなラグナの手を外して両手をぎゅっと握り締めると、うつむいて首を横に振った。

「出来ない」

「僕が嫌い？」

ラグナは動じることなく、エリスを問いただす。

「ううん。ラグナ……」

エリスはラグナを見つめた。エリスのオッドアイの瞳が揺れている。ラグナは綺麗だと思った。その緑と赤の宝石のような瞳から涙が溢

れ出した。

「だめなの。二度と来ないで」

エリスはうつむくと、塔に向かって走っていった。残されたラグナは呆然とした。

翌日、ラグナは日暮れの少し前にくじら島に来た。そしてエリスの住む塔を岩陰から見張っていた。エリスの話だと、もうすぐジェルバインという男が現れる時間だ。

固唾を呑んで見張っていると、日暮れとともにジェルバインが現れて塔へ入っていった。いつまでたっても、ジェルバインはいつこうに出てこない。やきもきしながらラグナは待った。

一時間ほどすると、ジェルバインが一人で出てきた。開かずの門に向かつて歩いていく。ラグナは塔に視線を戻し、じっと見つめた。塔の中のエリスを思う。やるせない気持ちを抑えてジェルバインの後を追った。

ジェルバインは堂々と獣道を歩いていく。どうしたわけか、縄張りの主のシルバーウルフたちは影を潜めている。ジェルバインは開かずの門の前に立つと、手を扉の模様に向かってかざした。扉が音もなくスーッと開くと、ジェルバインは中に吸い込まれるように入っていた。ラグナはあわてて門に向かって走った。間に合わない。そう思ったとき、手は背中に装着してあるランスに伸びていた。そして門に向かつてランスを投げる。ランスは目にも留まらぬ速さで、門の扉が閉まるのを邪魔するように地面に突き刺さった。ラグナは一息ついて額の汗をぬぐった。門まで走って行き、扉を手で押さえると、反対の手でランスを抜いた。背中に収めると、門の中へ入る。あたり一面霧がかかっておりよく見えない。ジェルバインの姿は見当たらなかった。ラグナは慎重に歩を進める。しばらく進むと、はるか彼方にしつぽの木のルーンが見えた。しかし、以前より小さく見えるのは気のせいだろうか。

それからのラグナはルーンアーカイブスに通いつめた。くじら島についてと次のダンジョンへの手がかりを求めて書物を読み漁っている。

そこへミストが現れた。彼女は週に一回の割合でルーンアーカイブスへやってくるのだ。そこで、ラグナが普段は寄り付きもしない図書館に来ていたのを見た。ミストは受付で読書をしているセルフイに訊ねた。

「ラグナさん、どうしちゃったんですか？」

「なんかね、くじら島について調べているみたい。ここのところ、お昼も食べないですと本を読んでるわ」

セルフイは首をすくめた。自分のことは棚に上げての発言に、ミストは笑いをこらえた。時計は十時を指している。「また後で来ます」と言い残してミストはきびずを返して出て行った。

そして正午、ミストがバスケットを持ってルーンアーカイブスに現れた。セルフイは出かけているようで姿が見えない。部屋の片隅で本を一心不乱に読んでいるラグナが目に入った。ミストは小さなため息をつく、ラグナに近寄った。そしてラグナの背後から叫んだ。
「ラグナさん！」

ラグナはびっくりしてしりもちをつく。そしてあっけに取られて声の主を見上げた。

「ミ、ミストさん。脅かさないでくださいよ！」

「お昼、一緒に食べましょう」

ミストはニコツと笑うとバスケットをラグナの目の前に掲げた。

ラグナはミストに手を引っ張られ、ルーンアーカイブスの脇の庭園へ連れて行かれた。そこには石碑が多数並んでいる。ミストは木陰にシートを敷くと、座るようにラグナを促した。ラグナは黙ってミストの言うとおりにした。ミストはラグナの横に座ると、バスケット

トからサンドイッチを取り出し、ラグナに手渡した。

「ラグナさん、いただいちゃってくださいね」

「ありがとうございます。いただきます」

ラグナはサンドイッチをつかんだ。口元を持ってきてクンクンと匂いを嗅ぐも、怪しいところはない。それを見ていたミストが口をつんと尖らせる。ラグナは、冷や汗をかきつつ、黙って口にした。それはお世辞にもおいしいとは言えなかったが、ミストの指に幾つもの絆創膏が張つてあるのが見えた。自分のために作ってくれたのかと思うと、ラグナの心に温かいものが広がった。そして見る見るうちに目に輝きが戻ってきた。

「おいしいですね」

「よかった」

ミストは手を合わせてうれしそうに微笑んだ。

「ラグナさん、何かあったんですか？」

ミストに顔を覗き込まれ、ラグナは困ってしまう。エリスのことを話していいものやら。最近のミストは女の子の話をすると過敏に反応する。でもミストを見ていると、どういうわけだか無性に話したくなった。話して胸のつかえを取りたかったのかもしれない。ラグナはエリスのことをかいつまんで話した。ミストは黙って聞いていた。

「きつと何か理由があるんですよ。信じてあげてください」

そう慰めてくれたミストの表情は強張った。何かを我慢して辛そうな感じだろうか。長い付き合いだがミストのこんな表情は見たことがない。ラグナは慌てた。

「ミストさん、どうかしましたか？ 気分が悪いんですか？」

心配そうに自分を伺うラグナに、ミストは「いいえ」と小さく首を横に振る。そして辺りをぐるっと見回した。

「ところで、ここって何なんでしょう？ 石碑がいっぱいあるけど」

「さあ？ 今度ステラさんに聞きましょうか」

ラグナが答えると、ミストは立ち上がり石碑を一つ一つ見て回る。

そしてある石碑の前で立ち止まると、石碑に刻まれた文字を読み出した。

「雪草に触れば扉は開かれる？ 雪草なんて今の季節にはありませんよね」

ミストはラグナを見て問いかける。ラグナはふと思い立ち、ミストのところへ歩いていく。そして石碑を観察した。石碑には文字の他、絵も彫られている。その中に雪草が彫られていた。その部分だけが四角くへこんでいる。ラグナは思い当たることがあった。その雪草のレリーフのへこみに、つる草の遺跡で手に入れた遺跡の欠片をはめ込んだ。それは寸分たがわずぴたりと収まった。すると、石碑の地上部が大きな音を立てて左に動き、地面がぱっくりと口を開けた。ミストはラグナの腕をとって叫んだ。

「ラグナさん、これって」

「はい。ミストさんのおかげで次の遺跡が見つかりました」

次の目標が決まった。ラグナは残りの弁当を急いで食べると合掌した。

「ごちそうさまでした。いってきます」

「はい。頑張ってくださいね」

笑顔のミストに見送られながら、ラグナは雪草の遺跡に入っていた。

雪草の遺跡に入ったラグナは異様な光景に目を奪われた。

「あれは？」

部屋の隅に黒いルーンが渦巻いている。見たことのない色だった。そしてこの遺跡は凍てついていた。そここに氷の山が出来ており、ラグナの行く手を阻んでいる。最初の冰山を叩き割ろうとすると、五月蝍いハエのように羽音を立ててハチ様のモンスターがまとわりつく。その尻の先の針はラグナを捉えている。

「うっとうしいな」

ラグナはフォースエレメントをぶんぶん振り回しモンスターを撃

破する。そのまま氷山に切り込み破壊を試みる。フォースエレメントは全ての属性を持つ両手剣である。氷であろうが粉碎できるのだ。その勢いに乗ったまま次の間へなだれ込む。そこには機械装置が設置されていた。それは霜がついている。これが冷却装置かも知れない。近づこうとすると、体に痺れが走る。感電したのだ。ラグナはぐつとこらえるとフォースエレメントで装置を叩き壊す。それは衝撃で爆発を起こした。間一髪飛び退いて爆破の余波を免れる。冷や汗が額を流れた。それを袖でぬぐう。装置が破壊されたせいか、スモークは晴れて視界が良好となる。先を急いだ。

氷で出来た火の玉様のモンスターのツンドラに、シャドウパンサーが襲い掛かってくる。数の多さにラグナは強行突破を試みた。次は下への階段が待ち構えている。扉が開くと、そこにはサソリ様のデスストーカーや象のようなマンモがいた。デスストーカーはしつぽの先の針をラグナに向けて隙をうかがっている。両者がにらみ合っている、マンモが長い鼻から凍てついた空気をラグナに向かって噴射する。間一髪のところで交わすと、その冷気はデスストーカーを直撃した。哀れデスストーカーは氷漬けになった。それを目の当たりにして、ラグナは肝を冷やす。動きの鈍いマンモの背後に回り、フォースエレメントでなぎ払う。マンモは悲痛な声を上げて倒れた。

先を急ぐと槍を持った悪魔　デーモンが待ち構えていた。黒く骨と皮だけの体はそれだけで不気味である。瞬間移動してはラグナの前に姿を現す。ラグナは後ろへ飛びのきながらフォースエレメントを頭上から振り下ろした。デーモンはたて真つ二つに切り裂かれた。

三階を奥へと進む。ある扉の前で歩みを止めた。開かないのだ。どこか鍵のような場所を攻略していないと開かないのかもと思い、三階のモンスターを全て蹴散らした。戻ってきてみるが扉はびくともしなかった。先へ進むことがかなわなくなり、今日のところは家に帰ることにした。

その夜、ラグナの夢の中に、誰かの記憶が流れ込んできた。

だめです。基礎実験棟の数値が低下

低音環境棟の数値は危険領域に入っています

バックアップに回していたルーンを開放しろ

やっています。数値は依然低下。このままだと

そんな顔で見るな。何も心配いらない

おまえはいつものように無邪気に振舞ってくれ。でないと……

それにしてもなぜルーンが意味もなく減っていくのだ？

このままだと土地は死に、この地に人が生きられなくなる

いや、この現象が拡大していけば、世界からルーンがなくなってしまう

そこに待ち受けるのは……

番外編 ラピスと樹

ラピスという人は非常に結構管理に厳しい。体を大事にしない人には容赦ない説教が飛ぶ。

今日もラグナはダンジョンで大ケガを負って医務室に飛び込んだ。彼の手当てをしているラピスのこめかみがヒクヒクと痙攣を起こしている。

「ラグナさん、あなたって人は！ 私の忠告を子守唄か何かとお間違えになっていませんか！」

「すみません……」

包帯を巻いてもらいながらラグナは頭をうなだれる。確かにカルデアイアにいる頃から散々言われ続けていることで、非常に肩身が狭いときばきと処置をするラピスをそつと盗み見る。とても美人でおしとやかであるラピスは若い男たちに人気がある。怒らなければ申し分ない女性なのだが……。

処置が終わわり、治療道具を片付け終わったラピスが小さなため息をついた。それに気づいたラグナが声をかけた。

「ラピスさん、どうかしましたか？」

「あ、いいえ。ごめんなさい。実は最近よく夢を見て、眠れないんです」

「夢ですか？」

ラピスは疲れた表情を浮かべた。

「はい。それが困ったことに正夢になるんです」

「どうして困るんですか？」

「良いことばかりじゃないんです。このまえはシスターステラが転んだんです」

ラグナは先日のことを思い出した。礼拝堂を訪れたとき、ステラがしりもちをついていたのを助け起こしたのだ。

「ああ、僕、その場にいましたよ」

「私のせいでシスターステラが……」

「そんなことあるわけじゃないですか！　偶然ですよ」

落ち込むラピスを、ラグナは慌てて弁護した。ラピスという人は根がまじめなので、自分のせいではないのに責任を感じるところがあるのだ。

ラピスは弱弱しく笑みを浮かべる。

「そうだといいいのですけれど。今朝は、ターナーさんが飲みすぎて薬を取りにみえる夢を見たんです」

そんな話をしていると、医務室の扉が開いた。顔を見せたのはなんとターナーだ。恰幅のよい体をゆさゆさと揺らして、まるで大ダヌキである。

「シスター、こんにちは」

「こんにちは、ターナーさん。どうしましたか？」

ターナーは人懐こい笑顔を浮かべた。

ラピスは夢のことが気になるのか、そわそわと落ち着かない様子である。

「昨日飲みすぎちゃってね。薬をもらえるかな」

「は、はい」

ラピスはうろたえながら、ターナーに薬を処方した。嬉しそうに帰っていったターナーとは反対に、ラピスは手を胸の前で組んで、かなりおびえている。

「ラピスさん？」

「だ、大丈夫です」

ラグナは気丈に振舞うラピスを気の毒に思う。夢を見るということとは、眠りが浅いからだろう。どうにかしてぐっすり眠れる方法はなにかものかと思案した。

心配になったラグナは、あくる日も医務室に寄った。案の定、ラピスは青い顔をして座っていた。

「ラピスさん、大丈夫ですか？」

ラピスは、ふるふると首を横に振った。

「心配かけてごめんなさい。タベもよく眠れなくて」

「何か見たんですか？」

「はい」

ラピスは言いにくそうにしていたが、ラグナが「口に出せば気が楽になりますよ」と促したので重い口を開いた。

「……ラグナさんが象に襲われる夢です」

「僕ですか？」

「はい」

自分がモンスターに襲われることは日常茶飯事のことと、どういふことはないが、涙目で自分を見つめるラピスが気の毒に思えた。

ラグナは優しく声をかけた。

「大丈夫ですよ。今日はダンジョンには行きませんから」

「ほんとに？　お願いしますね」

ラピスは安堵の表情を浮かべ、何度も何度もラグナにダンジョンへ行かないように頼んだ。

ラグナは医務室を出ると、アレックスの湯に向かう。今日の汗を流すためだ。番台に近づくと、いつものように元気なメロディの挨拶が響く。

「いらっしゃいませ！」

「こんにちは。一人お願いします」

「料金は二十ゴールドよ」

ラグナは代金を払いながら、ふとメロディが薬草に詳しいことを思い出した。彼女は独学で、色付き草を調合して入浴剤を作ったりしている。

「メロディさん。よく眠れる薬ってありませんか？」

「あるわよ。レシピ教えてあげようか？」

「お願いします」

「風呂を出るときに声をかけて。メモしておくから」

「お願いします」

軽く頭を下げると、ラグナは脱衣所へ向かう。顔見知りと挨拶を交わし、浴室へ移動した。

湯船には先客があつた。エリック農場のエリックだ。エリックはラグナの姿を認めると、いつものように声をかけてきた。

「よう、若者！」

「こんにちは。今日は早いですね」

「ああ、教会に寄つたんだ。そのついでさ」

エリックはそう答えると、湯船に入ってきたラグナの首根っこをつかんだ。そして自分のほうに引き寄せた。ラグナは慌てた。

「エ、エリックさん！？」

狼狽するラグナを見て、エリックは大笑いするとラグナの肩をゆすつた。

「落ち着け、若者。俺だってそんな趣味はない。聞きたいことがあるのだ」

ラグナはエリックの顔をまじまじと見た。優しい面差しに落ち着いた物腰のエリックはアネットなどに人気がある。ラグナよりも背が高く、体も鍛え抜かれている。美男子とはまさにエリックのことだろう。ただ、見た目よりもお茶目な人だが。

「ラピスさんと若者は知り合いだったな？」

「はい」

「今日、ラピスさん、様子がおかしくなかったか？」

「ええ。彼女、最近眠れないそうです。それで元気がないんですよ」

「何！？　そうか。心配だな……」

エリックはラピスが気になるらしい。けっこう女好きのくせに消極的である。ダニーやルートとはよく食事をするらしい。本人曰く、女友達が居ないからではないそうだ。しかし、アネットには朝食をご馳走するらしい。アネットを女性として見ていないのか。確かに

呼び方にも違いがある。「ラピスさん」と「アネットちゃん」なのだ。しかし、妙齢のエリックに春が訪れるようにと願い、ラグナが切り出した。

「何かぐっすり眠れる方法ってありませんか？」

「いくつか知っているぞ」

「じゃあ、教えてあげてくださいよ」

「そうだな。ありがとう、若者！」

エリックはラグナの背中をバシバシと叩くと、上機嫌で浴室を出て行った。

エリックは臆病な性質で、ダンジョンへ畑を作りたがらない。無茶をしないエリックなら、ラピスは気をもむこともないだろう。案外お似合いなのかもしれない。

風呂を済ませて番台まで来ると、メロディがメモをくれた。メロディとあれこれ世間話をしていると、ドロップが風呂に入りにつてきた。ラグナを見つけると、そそくさと近寄っていく。

「ラグナ、こんにちは」

「こんにちは、ドロップさん。何かご用ですか？」

「魔力の結晶がすぐ欲しいの。持ってない？」

ラグナは困った顔をした。まだ濡れている髪をかきながら答えた。

「ちようど切らしてて……。急ぐんですよね？　今から採りに行つてきますよ」

「ほんと？　お願いね」

今日はダンジョンへは行かないとラピスと約束していたがラグナだったが、お人好しが災いして魔力の結晶を採りに行くことになった。

しかし、結果はラピスの夢のとおりになってしまった。

ツンドラを倒して魔力の結晶を手に入れようとしていたラグナは、もう残りの体力が底をつきそうだった。数個の魔力の結晶を手に入れて、帰ろうとしたとき、背後から襲われた。象様のモンスター、

マンモーである。突進を食らわされ、転んだラグナの背にマンモーがのしかかる。鼻を高々と上げて雄叫びを上げた。そしてラグナに向かつて冷気を吐き出す。腰から短剣を抜き、マンモーの太くて固い足に何度も切りつける。マンモーは痛さに悲鳴をあげ、足を浮かせた。マンモーがひるんだ隙に、すばやく転がってマンモーから逃れる。もう戦う気力も体力も残されていない。気絶する前に帰らなければ。必死の思いでリターンの魔法を使い、ダンジョンを抜け出した。

傷ついた体を引きずりながら歩く。切り傷だけではない。体中がきしむようだ。しかし、ラピスが心配するので診せるわけにもいかない。

牧場まで戻つてくると、遊びに来ていたミストがラグナを見て悲鳴をあげた。無理もない。頭から血を流し、足を引きずり、腕を押さえているのだ。

「ラグナさん、大丈夫ですか！？ 早く医務室へ行きましょう！」

「大丈夫です。骨は折れていませんから」

「でも」

「ミストさん、だめなんです」

「何言ってるんですか！？」

取り乱すミストの手を押さえてラグナがラピスのことを説明した。ミストが反論したが、ラグナは頑として譲らない。諦めたミストはラグナの左側から体を支え、家に運び込んだ。そしてラグナをベッドに寝かせて、救急箱を取りに行く。毎日のように遊びに来るミストにとって、ラグナの家に何がどこにあるかは一目同然である。キッチンへ向かい、タオルをぬらして戻つてくると、ラグナの顔や体を拭いた。救急箱を開けて、薬のビンを取り出すと、ピンセットで綿をつまみ、薬を浸した。そして怪我の手当てをし始める。

「いてっ！」

「しみますよね。ラピス特製の万能薬ですよ。我慢してくださいね」

ミストはまるで自分がしめているみたいに顔をしかめた。
てきぱきと傷の手当をしてくれるミストに感謝しながら、ラグナは礼を述べる。

「ミストさん、ありがとうございます」

「どういたしまして。ラグナさんにはよくいろんなものをいただいていますから」

「それはもしかして遠まわしにもっと欲しいと？」

「あら、気づきました？」

ミストは小さく笑った。

「ラピスの話ですが、彼女って、視える人でしたっけ？」

「さあ？ 最近らしいですよ」

ラグナはラピスと交わした話を思い出しながら答えた。

「それにしても、聞いていたのに、どうしてダンジョンへ行っただんです？」

顔を覗き込まれたラグナは恥ずかしそうに答えた。

「ドロップさんが、急ぎで魔力の結晶が欲しいって……」

「お人好しですね」

ミストは面白くなさそうに、つんと口を尖らせた。

数日もすると、傷はすっかり治った。ラグナは回復薬の買いに医務室に寄った。扉の向こうには変わり果てたラピスの姿があった。

「こんにちは……ラピスさん、どうしたんですか！？」

「ラグナさん」

ラピスの顔は青白く、目の下にはくっきりとクマが出来ている。すがるような目でラグナを見た。

「眠れないんです。あれから毎日夢を見ました。それがことごとく当たるんです」

ラピスはハンカチを目元に当てて、しくしくと泣き出した。どうやらエリックからの安眠法はうまくいかなかったらしい。ラピスの泣いている姿を目のあたりにして、ラグナはオロオロした。リュック

から包みを取り出すと、ラピスに差し出した。

「ああ、ラピスさん。メロディさんに教わって、よく眠れるお茶を作ってきました。今日はこれを飲んでみてください」

「ほんとですか？　ありがとうございます。今夜飲んでみます」

ラピスの顔に安堵の表情が浮かんだ。

空はすっかり闇に覆われ、丸い月がぼつかりと浮かんでいる。辺りには白い霧がかかっており、そんな中、ラグナはぼつんと立っていた。

「ここは？」

目を凝らしてみると、ここは教会の裏の大樹のある広場だった。その広場の入り口にラピスが立っている。

「ラピスさん？」

ラグナが声をかけると、ラピスは振り向いた。困惑した表情でラグナに問いかける。

「ラグナさん、ここはどこでしょう？　私はどうしてここに？」

「わかりません。僕も気づいたらここにいたんです」

「何でしょうね。不気味です」

そう答えると、ラピスは小さな声を上げた。

「あら！？」

「どうしました？」

ラグナが訊ねると、ラピスは耳に手を添えた。

「何か聞こえませんか？」

ラグナもじつと耳を澄ませてみたが、何も聞こえない。

「いえ、聞こえないですけど」

ラグナはそう答えた。ラピスは辺りを見回した。そして大樹のほうを見て告げた。

「聞こえます。こっちです」

ラピスは大樹に向かって歩き始めた。ラグナも後を追った。目の前には樹齡がかなり高そうな立派な樹が大きく枝を広げている。いつ

たいいつからこの場でトランルピアを見ていたのだろう。

ラピスは両手を胸の前で組んだまま、樹の前に立つ。

「あなたが私を呼んだのですか？」

ラピスはラグナではなく、大樹に向かって話しかけた。

はい、あなたに助けてもらいたくて呼んでいたのです。

「私がおかしな夢を見ていたのもあなたの仕業なのですね」

そうです、夢の世界に順応してもらうため、あのような夢を見
てもらいました。ご迷惑をおかけしたことをおわびします。

「夢の世界？　ここは夢の世界なんですか？」

はい。私のように長い時を生きた樹であつても、人と話をする
ことができるのは夢の中と限られています。実はあなたにお願いが
あつてここまで来てもらいました。

「お願い？」

はい。あなたに私の子を預かってもらいたいのです。私たちは
自分の意思で動くことはできません。しかし、ごらんのようにこの
森は既に木々でいっぱい、新しい苗が育つ場所など残されていな
いのです。どうか、あなたの手で私の子を育て、成長したら植え替
えて欲しいのです。どこか遠い場所に。

「わかりました。あなたの気持ち確かに受け取りました。お子さん
は私が責任を持ってお預かりしましょう」

ありがとうございます。ああ、あなたに頼んで本当によかった。

ありがとう。ありがとう……

朝、ラグナは目を覚ますと、ベッドの上で体を起こした。どうやら夢を見ていたようだ。それもかなり鮮明であった。

ラグナは開業時間に合わせて医務室を訪れた。

「ラピスさん、おかしい夢を見たんですよ。気がついたら森の中にいて、大きな樹がラピスさんに――」

「子供を預かってってくれて言っただんですか？」

「はい！ え？」

言い当てられて驚いているラグナをよそに、ラピスは楽しそうに笑うと立ち上がった。

「ちよつと来てください」

通されたのはラピスの部屋だった。その部屋の窓辺に鉢植えが置かれている。そこには小さな双葉が芽を出していた。

「あの人のお子さんは大切に育てますよ。いつか大きくなってここに植え替えられるその日まで……」

ラピスはいとおしげに苗を見つめた。そして振り替えると、ラグナを見てにっこり微笑んだ。

「不思議な夢でしたね」

「はい」

「思えば、これまでの不思議な夢は、全部あの人の助けを求める声だったのかも知れません」

「そうですね」

ラグナは、ラピスが心の綺麗な持ち主だから樹に選ばれたのだと思った。厳しさの中に本当の優しさがある。普段の小言もそう思えば気にならなくなるのではないか。でも、気にしないと怒られるのだが。

ラピスはそんなラグナを見て、ふふつと笑う。ラピスにしては、目じりを下げてとても嬉しそうだ。ラグナは気になって訊ねた。

「何がおかしいんですか？」

「いえ。どうして私とラグナさんが一緒に夢に呼ばれたのかと思って」

「さあ？ どうしてでしょう」

鈍感なラグナの反応に、ラピスは少し寂しそうな顔をした。どうやらラピスの心の内はラグナに伝わっていないらしい。

番外編 ラピスと樹（後書き）

ラピスの結婚イベントのお話をいじってみました。

17・ 精霊と心を通わす者

ラグナは、あれ以来エリスに会っていない。ミストに言われたように、彼女には何か事情があるのだろう。会って話をすれば分かり合えるかもしれない。そう思い彼女を訪ねることにした。

くじら島はいつもと変わらず、のんびりとした時間が流れている。雲の上なので、常に太陽に照らされているせいかわかい。エリスが地上に降りたがらないのはそのせいなのかもしれない。

今は日が暮れて当たりは真っ暗だ。たいまつをかざし、足元を照らしながら進む。途中、モコモコやバツファモーがそれぞれ寄り添いながら眠りにについているのが見えた。邪魔をしないよう足音を忍ばせて先を急ぐ。

むなびれまで来たとき、かすかに歌が聞こえてきた。その歌声はエリスの住む塔の方からだ。その歌声は物悲しく聴いている者の心を暗くさせる。それでも耳を澄ませて聞いていると、突然途切れてしまった。その数分後、むなびれに悲鳴が響き渡った。

「エリス!？」

その声はエリスのものだった。ラグナはエリス宅へ急いだ。螺旋階段を急いで駆け上がる。

目に飛び込んできた光景は悲惨なものだった。イーゼルは倒れ、観葉植物はなぎ倒されている。いつもはテーブルの上にあるティーセツトも床で砕け散っていた。

ラグナはエリスを探したが、どこにも居ない。額に手を当て、ため息をつく。ふと足元を見ると紙切れが一枚落ちているのが目に入る。拾い上げて見てみる。神経質そうな小さな文字だった。

「ラグナ、エリスを帰して欲しければ雪草の遺跡へ来い」

ラグナ宛の書置きだった。ラグナがここに来ることを見越していたのか。一体誰が……。エリスの身の上を案じ、紙切れをぎゅっと握りつぶした。

翌朝、ラグナはルーンアーカイブスへ向かう。雪草の遺跡の入り口でキャンディとミストが立って騒いでいた。珍しい組み合わせである。

「キャンディ、どうしたんですか？」

声をかけると、キャンディがラグナのそばに寄って来て訴えた。

「お兄ちゃん、くじら島の精霊がこの下にいるみたいなの」

「この下に？ ミストさんはどうして？」

ミストは真剣な表情でラグナを見つめた。

「助けを呼ぶ声が聞こえます」

「二人ともこの奥に用があるんですか」

「はい。ラグナさん、連れて行ってください」

「でも、ここはモンスターがいるから危ないですよ」

すると、ミストとキャンディがラグナの左右の腕をとった。

「ラグナさんがいるから大丈夫ですよ」

頼りにしてくれるのは嬉しいのだが、今はそれに付き合っている余裕がない。ラグナは苦笑いを見ると、静かに二人の手をはずした。

「すみません。知り合いがさらわれて、これから助けに向かいます。だから二人はここで待っていてください」

ミストとキャンディは顔を見合わせた。いつになく真剣なラグナの様子に、それ以上のことが言えなくなった。

雪草の遺跡を、邪魔をするモンスターたちを交わしながら先へ進む。いちいち相手をしていては体力が持たないからだ。一体どこにエリスはいるのか。三階の開かない扉の前までラグナは来た。すると、どこからか男の声がした。

「よく来たな」

「エリスは？」

男はラグナの問いには答えない。代わりに扉が開いた。中へ歩を進める。凍てついたそこは円形になっており、部屋の四方に機械装置が設置されている。そして驚いたことに巨大な黒いエネルギー体。部屋の中で渦巻いていた。その下には、黒い服を着たエリスが胸の前で手を組んで立っていた。そしてみんなの広場で耳にするあの歌を歌っていた。

「エリス！」

ラグナがエリスに呼びかける。しかし、エリスはうつろにラグナを見た。そして彼女の口から出たのは意外な言葉だった。

「あなたは誰？」

「えっ？ ラグナです」

「知らない」

ラグナの頭の中は真っ白になった。エリスが自分を知らないというのだ。あんなに仲良くしてきたのに、知らない振りをするほど嫌われてしまったのか。

「何を言っているんですか。くじら島でたくさん話したじゃないですか。忘れたんですか」

「さびしい。歌わなきゃ」

エリスは聞く耳を持たず、独り言を言うだけだ。ラグナは釈然としなくて食い下がった。

「もう、さびしくないって言っていたでしょう？ 僕に歌を聞かせてくれるって言ったじゃないか。こんな哀しい歌はエリスには似合わない」

エリスはラグナをぼんやりと見た。

「私の歌が哀しい？ でも私にはこれしかないから。私には何もないから」

「エリス！」

ラグナが駆け寄ろうとしたとき、部屋の左側の壁が開き、男が出て

きてエリスの横に立った。その男は開かずの門に入っていた男だった。

「初めまして、ラグナ。私はジェルバイン」

「エリスに何をした！」

ジェルバインは怪訝そうな顔をしていたが、合点がいった様子でとうとうと話し始めた。

「そうか。きさまはそこで歌う黒と浮島にいる白の区別がつかないのだな」

そう言うのと、ジェルバインは自分の後ろから人を引きずり出した。

ラグナはその人物を見て、驚きの声を上げた。

「エリス！　じゃあ、その人はエリスの探していた」

「そうだ。そこで歌う黒と浮島にいるこの白は別人だ。いや、正確には今は別人と言ったほうがいいかな」

「な、何を言って」

「貴様が浮島で会ったエリス、正確にはエリスではない。かつてここに住んでいた一人の少女が話し相手を求め、二人に分かれた」

「それがエリス？　一人が二人に別れた？」

「そうだ。最も精霊に近い人たち、そう呼ばれる吸血種族の最後の生き残りであるエリスは一族に伝わる秘術　歌を使い精霊を自在に操ることが出来る。私はそれに着目した。二人のエリスは浮島と地下室で歌を歌い続けていた。その力は等しい。元は同じ人間だからな。精霊は二人のエリスの間をめぐり、この地のルーンは安定した。そこで私は一計を案じ、地下のエリスに歌を歌わせ、浮島のエリスにやめさせた。そうなれば歌い続ける地下のこの場所に集まってくる」

そしていらだたしげにラグナを睨みつけ、吐き捨てた。

「それをおまえが中途半端に白を放置するから、さびしがった白がまた歌いだしたではないか」

「さびしがった？」

ラグナは怪訝な顔をした。ジェルバインの言っている意味がわから

ない。しかし、ジェルバインの嫉妬の炎はおさまらない。

「さぞかしい気分だろう。エリスの気持ちをもてあそんで。まあ、それはいい。見よ、わが計画の成果がこの黒の巨大ルーンだ」

ジェルバインは口の端をあげると、後ろで不気味に拡大していくルーンを指差した。

「やめてください！ そんなことをしたらくじら島のルーンがなくなつて島が落ちてしまう」

「知ったことか。私は私の才能に嫉妬し、私を否定した愚か者どもに復讐をするのだ」

「そんなことはさせない！」

ジェルバインは、息巻くラグナをせせら笑う。

「多少は剣の心得があるようだが、果たして天才である私に勝つことが出来るかな」

「そんなことやってみなければ」

「わからないか。ならば試してみよう。精神操作の実験体として有意義に使ってやる。ゆけ、エリス！ 私の邪魔をする愚か者を排除せよ」

黒エリスは歌うのをやめると、ラグナのほうへ体を向けた。そしてラグナに向かつてきた。まるで氷上をすべるように黒エリスは縦横無尽に移動し、ラグナに攻撃を加えていく。ラグナはというと、逃げ回るしかなかった。相手は人間だ。いくらタミタヤの魔法がかかっていたとしても、傷つけることは免れない。

どうすればいい？ このままではエリスを助けるどころか野たれ死にだ。

ラグナは逃げながら黒エリスを観察した。氷柱や雷や魔法弾を自分に向かつて放ってくる。当然ルーンポイントは底をつくはず。しかし、黒エリスは弱るところかますます勢いづいてくる。

そのとき、部屋の隅で幼子の声がした。

「何？ このルーンの色」

ラグナがそちらを見ると、立っていたのはミストとキャンディだった。

「ミストさん、キャンディ、来ちゃだめだ！」

ラグナが走りながら叫ぶと、キャンディが答えた。

「精霊たちが助けを呼んでいるの！」

精霊が？ ラグナは黒エリスを見た。真ん中にある黒の巨大なルーンから、黒エリスに向かってエネルギーが供給されている。これではルーンポイントが底をつくわけではない。そのときだった。

「ラグナ、装置を破壊して！」

白エリスが叫んだ。男は顔をしかめるとエリスを平手で打った。うなだれる白エリスを横目で見ながらラグナは歯ぎしりをした。

装置は全部で四台ある。飛んでくる魔法弾をよけながら、絶妙なタイミングで装置を叩き壊す。ラグナは装置の前で待ち構える。黒エリスが雷を放つ。すかさずラグナは移動し、雷は装置に落ちた。

「あと二台」

操られている黒エリスは自分で考えることが出来ないようだ。なおもラグナを追いかけては魔法を放ち続けた。とにかくこの戦いに負けるわけにはいかない。ラグナはあえて黒エリスの元に向かう。目と鼻の先まで近づくと、黒エリスの背後に回り、両手を後ろ手につかみ盾にした。ラグナを追尾していた魔法弾が黒のエリスに命中した。崩れる黒エリスを地面に寝かせると、ラグナは残りの二台の装置を魔法で破壊した。黒エリスはうつろにラグナを見ていたが、瞳を閉じると電池が切れたおもちゃのように動かなくなった。

「お姉ちゃん！」

キャンディの悲鳴にラグナが振り向く。そちらを見ると、キャンディが恐ろしいものを見ているように表情を強張らせている。その視線の先には、ジェルバインに羽交い絞めにされているミストの姿があった。

「ミストさんに何をする！」

「この娘はもらっていく」

「ラグナさん！」

ミストがラグナに向かって必死で手を伸ばしている。それをあざ笑うようにジェルバインはミストの髪をつかんで引っ張った。ミストの悲鳴が上がる。

「まさかこんなところにエリス以上の歌い手がいるとはさすがに予想できなかったぞ。まだ流れは私にある。いや、私の計画を磐石にする絶好の機会。ラグナ、感謝するぞ」

ジェルバインは勝ち誇ったように高笑いをした。

「望みどおり、白は解放してやろう。最高の素材を手に入れた私にはもう無用の存在なのでな」

「ミストさん！」

ラグナは空をつかむように手を伸ばした。ミストを取り戻さなければ。黒エリスとの戦いで、体力も使い切っていた。体が思うように動かない。ラグナは焦った。何もかも真っ白になった。その真っ白に吸い込まれて、ラグナはまた夢を見た。

再計測の結果が出ました。

ルーンの消失の原因は、やはりそうか。

生まれながらにルーンを無限に吸収し続ける体質。何が問題なんだろう。

人の手でルーンを核に新しい命を作り出すこと、そのことが罪なのか。

あの子には何の罪もないのに 罰せられるのは我々であるべきなのに。

このままでは世界中のルーンがあの子に吸い取られてしまう。その先に待っているのは、世界の滅亡。一刻も早く、何とかしなければ

ラグナは自宅のベッドで目を覚ました。ラピスが安堵した表情でラ

グナを見ている。他に、カンロ、白と黒エリス、キャンディがいる。
「ここは？」

「ラグナさんのお部屋ですよ、痛いところはありますか」

「はい、大丈夫です。それよりもボクは……そうだ、ミストさんが起き上がるうとするラグナを制止して、カンロが話し始めた。

「エリス嬢から話は聞いた。くじら島のエリス嬢と地下にいたエリス嬢が同時に精霊歌を歌っていた。だからルーンは安定してくじら島にとどまり、島は浮かぶことが出来た。しかしジェルバインの企みで、くじら島のエリス嬢は歌をやめ、地下のエリス嬢は歌い続けた。その結果、ルーンは地下に集まり、くじら島のルーンが減った。そうじゃな？」

「おそらくそうだと思います」

黒エリスが答えた。白エリスよりも幾分落ち着きのある声だ。ラグナは安堵して言葉を漏らす。

「なら、もうくじら島が落ちる危険はなくなったんですね。エリスさんはここにいて歌も歌っていないのですから」

そのときキャンディが割って入ってきた。

「それがだめなの」

「えっ？」

キャンディはベそをかきながら話を続けた。

「精霊たちは前よりも強い力で地下に集められているの。あたしの歌じゃ言うことを聞いてくれないみたい」

「どうして？ エリスさんはもう歌っていないのに」

カンロがあごひげをさすりながら答えた。

「おそらく別の何か強い力が精霊を引き寄せているのじゃ」

「強い力……」

「ミスト嬢が行方不明なことで、無関係ではあるまい」

そういえばジェルバインが、エリス以上の歌い手を見つけたと喜んでた。それがミストなのか。ミストはカルディアにいた頃から不思議な存在だった。ダンジョンを進むラグナの後についてきてはヒ

ントをくれていた。

「ミストさんの手がかりは？」

「何もない」

カンロの言葉を聞いてラグナは考え込んだ。ミストの手がかりを手に入れるために自分に来ることは……。

「あの部屋にいけば何かわかるかも」

「残念だが、その部屋は魔法で閉ざされて、今は入れないそうじゃ」「そんな……」

打つ手がない。ラグナは頭を抱え込んだ。

「すみません、全て私のせいです」

黒エリスが申し訳なさそうにうつむいた。ラグナはハッと我に返り、彼女に優しい言葉をかけた。

「いえ、エリスさんは操られていただけです。何も悪くありません」

「ラグナさん」

黒エリスが目には涙をためている。そんな彼女の肩を白エリスがそつと抱いた。

「私たちが二人で力を合わせれば、精霊をくじら島に戻せるかもしれない。ルーンがなければ魔法もつかえない。魔法で閉ざされているあの部屋にも入れるようになるはずよ」

すると、カンロが大きくうなずいた。

「そうじゃな、今はそれぞれが出来ることをするのがよい。わしはジェルバインのことを調べてみよう」

「ラグナさん、くれぐれも無茶はしないでくださいね」

そう言いながらラピスはラグナに掛け布団をそつとかけた。

皆、帰っていき、白エリスが一人残った。

「ラグナ、エリスを助けてくれてありがとう」

「いえ。くじら島に帰るんですね」

「ええ。今までありがとう。エリスがいるから、もうさびしくない」
目に涙をためたエリスはぎこちなく笑った。

「エリス、こんなときに不謹慎かも知れないけれど、僕は
「だめなの」

間髪いれずに、エリスはラグナの言葉をさえぎった。信じたくない
ラグナは食い下がる。

「でも、僕と離れてからさびしくて歌を歌ったって」
「だめなの！」

エリスは首を大きく横に振って声高に拒否した。そしてラグナを哀
しそうに見つめた。

「私とエリスは元々一人だったって聞いたわよね」

ラグナはこっくりとうなずいた。ジェルバインの口から出た信じら
れない真実。エリスは力なく微笑むと続きを話し出した。

「私たちのうちのどちらかが人と結ばれると……もう片方はこの世
から存在が消えてしまう」

「そんな……」

これを言えば、ラグナだって諦めてくれるだろう。きちんと終わり
にしなければいけない。そして、エリス自身が諦めた理由をラグナ
に伝えるのだ。そう自分に言い聞かせてラグナに告げた。

「それにあなたは自分の気持ちに気づいていない」

「気づいていない？」

怪訝な顔をしたラグナに、エリスは切なげに告げた。

「ミストさんが連れ去られたときのあなたの顔、見ていられなかつ
た」

「それは……彼女は命の恩人で」

エリスはラグナの言葉をさえぎった。

「だから、気づいていないって言ったのよ。この話はもうおしまい。
これからもお友達でいてね。ありがとう、ラグナ」

エリスは目に涙をいっぴいためたまま、作り笑いを浮かべた。ラグ
ナの首に手を回し、頬にキスを落とす。そして外に待たしておいた
黒エリスとくじら島へ帰っていった。

残されたラグナはエリスの残り香にまだ夢を見ているようだった。

ただはつきりしたことは、自分とエリスは結ばれることはかなわないということだけだった。

番外編 吸血鬼の見た夢

「エリス」

自分の名前を呼びながら、螺旋階段を登ってくる足音。それを耳にしながら、エリスは窓を背にして立っていた。

「ラグナさん、こんばんは」

ラグナを見ると、自然と顔がほころんでしまう。思わず笑みが漏れた。すると怪訝な顔をしたラグナが問い詰めてくる。

「僕の顔に何かついてます？」

エリスは慌てて首を横に振った。

「ごめんなさい。ラグナさんが訪ねてきてくれたので、嬉しくてつい……」

恥ずかしいけれど、誤解されるのはいやだ。うつむいて言い訳をする。そして顔を上げてラグナを見つめた。

「あの、ラグナって呼んでもいいですか？」

「ええ、かまいませんよ」

今日、ラグナが訪ねてきたら、これだけはお願しようと思っていた。何度も訪ねてきてくれるのに、いつこうに距離が縮まらない気がする。礼儀正しいラグナは決して自分の名前を呼び捨てにしてくれない。呼び方を変えれば少しは親近感も湧く。そう思い、自分から聞くことにしたのだ。

案の定ラグナはニツコリと笑って承諾した。

「ありがとうございます。ラグナさんも私のこと、『さん』付けはなしですよ」

エリスはラグナをテーブルに案内した。そして席に座らせると、奥まった部屋へ入っていった。死角になって、ラグナからはエリスの姿は見えないだろう。エリスは鼻歌を歌いながら、棚から茶缶を取り出してポットに茶葉を入れた。そこへ沸騰寸前のお湯をこぼこぼ

と注ぐ。芳しい茶葉の香りが鼻をくすぐった。幸せそうにふたをそっと閉め、昨日作ったクッキーを皿に並べる。アクセントに庭で咲いた花を一輪添えた。我ながら綺麗に盛り付けることが出来たと自画自賛する。お茶が蒸らし終わったので白いカップに注ぐと、淡い桃色が広がった。まるでエリスの心を表しているようだった。エリスは気をよくして、飲み物とお菓子を乗せたトレーを持っていた。

「クッキーを作ったんです。お口に合うといいんですけど」

そう言いながらエリスが皿をテーブルにコトリと置く。シンプルな白い皿にはクッキーが並べられていた。ラグナはクッキーを注意深く見る。すると赤や黄色が見え隠れしていた。これは何だろう。自分も料理をするのでひどく興味をそそられた。ラグナはクッキーを一つつまむと口に放り込む。

ラグナがさくさくと音を立てながら食べている姿を見て、エリスの表情は緩んだ。そして彼女の耳に嬉しい言葉が入る。

「おいしいです」

「ほんと？ お庭のお花を混ぜ込んでみたの」

エリスは嬉しすぎて、タメ口をきいてしまった。ジェルバインしか話し相手のいないエリスにとって、ラグナは特別な存在だった。でもラグナが啞然とした顔をしたので、ハッとして口を覆った。

「あ、ごめんなさい。失礼な口の聞き方をして」

「いえ、かまいませんよ。エリスさんが気を許してくれたのかと思うと嬉しいです」

「エリスって呼んでください」

ラグナが頭をかきながらニッコリ笑うと、エリスは安堵の表情を浮かべた。

「ジェルバインさんは、きちんとした話し方をしないと怒るの」

「そうなんですか」

「レディのたしなみなんですって」

そう答えながら、エリスもクッキーを一つつまむ。

「ダンジョンのお話、してくれる？」

「いいですよ」

ラグナはここへ来るまでのダンジョンの様子を話してくれた。楽しそうに聞いていたエリスがふと漏らした。

「ここに来るまでに結構強いモンスターもいるのに無傷だなんて、ラグナって強いよね。とってもそんな風に見えないのに」

「見えませんか？」

「ええ。ラグナは剣よりジヨウロのほうが似合うと思うわ」

ラグナの表情が曇った。自分が言った言葉のせいで気分を害したのだろうか。エリスはばかにした訳じゃない。ただラグナの優しい雰囲気のことを褒めたつもりだったのだ。また誤解されたくなくて、ラグナの目を見てささやいた。

「私、優しい人が好き」

その言葉を聞いたラグナの表情がパツと明るくなる。それを見たエリスはほっとした。

そのとき、零時を知らせる鐘になった。ラグナの帰る時間である。

農業を生業とする彼は朝が早いので遅くまではいられないのだ。

「そろそろ帰ります。ごちそうさま」

「そこまで送って行くわ」

そう言うと、エリスは席を立った。

外へ出た二人は、エリスの庭へ向かって歩く。そこは最近、ラグナがムーンドロップの種をまいたばかりだ。ラグナは膝をつくと芽が出たばかりの苗を覗き込んだ。

「元気そうですね」

「ええ。毎日ちゃんと水をあげてるもの」

得意げに答えるエリスを見上げながらラグナは微笑んだ。そして立ち上がった。

「おやすみなさい、エリス」

「ラグナ、また遊びに来てね」

エリスは名残惜しそうに、ラグナを見つめた。ラグナは額に右手を持ってきて、リターンの魔法をかけた。

ラグナの姿が塵気楼のように揺らめいて消える。エリスは両手をぎゅっと胸の前で握り締めた。

ラグナは毎日のようにエリスの元に通ってくる。一人ぼっちのエリスにとってラグナは心に舞い降りた蝶のようだった。くじら島しか知らないエリスにラグナはいろんなことを教えてくれる。人々との係わり、モンスターとの共同作業、季節の移り変わり、天候の変化。ラグナと過ごす時間はとても楽しくて時間はあっという間に過ぎる。そんなラグナが自分にとって何なのか分からなかった。でも、ラグナが来てくれることが嬉しく、自分の作ったものを嬉しそうに食べてくれたり、一緒に花を眺めることに喜びを感じる。ラグナが帰るときはさびしく、胸がきゅっと締め付けられた。

久しぶりにジェルバインがエリスを訪ねてきた。そして、いつもと様子の違うエリスに気づいた。取り立ててどこがどうと云えないが、エリス自身がかもし出す雰囲気が変わっている気がするのだ。ふと、花瓶に生けてある花に注意が行った。その花はくじら島にはない種類のものだ。

テーブルについて、エリスの煎れたお茶の入ったカップをゆっくりとゆらしながら、テーブルの上のクッキーを見た。

「白が作ったのか？」

「はい」

ジェルバインはそれを一つつまんだ。怪訝な顔をしながらクッキーをかざして見る。今までエリスがこんなものを作ってくれたことはない。最近くじら島でよく見かける青年がこの塔に出入りするのを見た。その青年のために作ったのだろうか。

ジェルバインは、目の前で体を硬くしているエリスに質問を投げか

けた。

「白、あの男は誰なのだ？」

「ラグナさんですか？ お友達になったんです。ダンジョンのことをいっぱいお話してくれるんです」

嬉しそうに語るエリスに、ジェルバインは面白くなさそうに顔をゆがめた。そして眼鏡のつるをくいと上げた。

「冒険者か。強いのか？」

「ええ。弱そうだけど、バッファモーとか倒しちゃうみたいです」

「ほう……」

「どうかしました？」

「いや、なんでもない。白、仲良くするのはいいが、恋愛感情を持つな」

「恋愛感情？」

他人と係わることなく、ここで一人暮らししているエリスに恋愛感情ということとはわからないのだろう。その青年の存在はジェルバインにとって厄介なものだった。

「その冒険者を特別に思うことだ」

すると珍しくエリスが食って掛かってきた。

「どうしてだめなんですか？」

「恋愛など人生の無駄だ」

「でも……」

エリスが納得いかないようで食い下がってくる。今までエリスが逆らってくることはなかった。ジェルバインは言いようのない怒りを覚えながらエリスを見た。

「まだわからんようだな。いいだろう、はっきり教えてやる。元々、白と黒は一人だ。もし仮に、白が冒険者と結ばれば、黒はこの世から消える」

「消える！？」

「そうだ。そのことを肝に銘じておけ」

そう言い放つと、ジェルバインは休息の塔を後にした。王立魔法研

究所を追われてから、唯一自分の話を聞いてくれるのはエリスだけだった。打算の上のコミュニケーションだったが、それはジェルバインにとっての心の拠り所でもあった。そのエリスが別の誰かを見ているのだ。エリスが自分から離れていく。それは彼にとって面白くないことだった。だから残酷な事実を告げたのだ。エリスが青年を諦めて、自分のほうを向いてくれることを願って。

一方残されたエリスは愕然とした。ジェルバインに言われて、自分がラグナに抱いていた感情が何なのか。そして、その気持ちを押し殺さなければ、片翼が消えてしまうことも知ってしまった。

「ラグナ……」

エリスは窓の外にぼっかりと浮かぶ月を眺め、愛しい男性の名前をつぶやいた。

その後、ラグナが訪ねてきてもエリスは以前と変わらないように接した。ただそばにいたかった。自分の気持ちを隠していれば大丈夫なのだと言いつけて。

しかし、そうはいかなかった。ラグナも同じようにエリスに思いを寄せていたのだ。

ある日、ラグナがエリスに「地上へ下りませんか」と誘った。その言葉はエリスが待ち望んだものだった。でも、うなずくわけにはいかなかった。ラグナを受け入れれば片翼が消滅するのだ。エリスはラグナの誘いを断った。もう、平気な顔でいられない。別れを告げた。

それからのエリスはまた精霊歌を歌い始めた。

歌を歌うエリスをジェルバインは激しく叱責した。

「やめろ！ やめるんだ！」

「ジェルバインさん」

エリスがジェルバインを見上げた。エリスの瞳には絶望が映ってい

る。ジェルバインは今にも泣き出しそうなエリスの肩を揺さぶった。
「なぜ泣く？」

答えるかわりに涙を流し始めたエリスを見て、ジェルバインは悟った。

「あの冒険者のせいかな」

エリスはそれに答えずに、懇願した。

「私を……エリスの元へ連れて行ってください」

ジェルバインはエリスの肩に置いた手を外すと、両手をぎゅっと握り締める。

「私ではだめだというのか」

エリスはハッとしてジェルバインを見た。いつもは穏やかなジェルバインの目が哀しみをたたえている。信じられなかった。

するとジェルバインはおもむろにエリスの体を抱きしめた。エリスはびっくりして離れようと手でジェルバインの体を押した。しかし、びくともしない。

「離してください！」

エリスがキッと睨むと、ジェルバインは「エリス」とささやいた。

そしてエリスの顎を持ち上げると、顔を近づけてくる。「いやっ！」

とエリスは力いっぱいジェルバインを叩いて抵抗した。ジェルバインはエリスを凝視する。愛情が嫉妬に変わる。平手でエリスの頬を打ちつけた。

「きゃあっ！」

エリスは床に倒れこんだ。ジェルバインがエリスを追い詰める。エリスは必死にはって逃げたが、ジェルバインはエリスの腕をむんずとつかみ、魔法を使って移動した。

着いたのは暗い遺跡の中だった。冷気がスーッと体を通り抜けるようだ。

「ここは？」

「地上だ」

ジェルバインはそう答えると、エリスの前にマントを放り投げた。エリスはそれをためらいながら手に取った。

「ついて来い。黒に会わせてやる」

ジェルバインが先にたつて歩き出す。エリスは黙って後をついていった。大きな広間の真ん中に巨大な黒いルーンが形成されていた。その下でエリスと瓜二つの女性が歌を歌っている。エリスはその女性に駆け寄った。

「エリス!？」

黒い服を着た女性はエリスをぼんやり眺めて言った。

「あなたは誰？」

「私よ！ 忘れたの？」

「知らない。歌わなくっちゃ」

「エリス！」

エリスは黒を揺さぶった。黒は朦朧としていたが、エリスをじっと見た。すると、目の色が変わってきた。頭を抑え苦しみだす。

「あああああっ！」

「エリス！」

そのとき、ジェルバインがエリスの腕をつかみ、黒から引き離れた。そして黒に命令した。

「誰がやめていいといった？ 歌え、黒！」

黒はこくりとうなずくと、両手を胸の前で組んで歌い始めた。物悲しい歌声だった。

ジェルバインはエリスを広間の隣にある部屋へ引きずっていった。そして部屋の隅に放り投げる。エリスはジェルバインをにらみつけた。

「エリスに何をしたんですか!？」

「精神操作をしたままだ。せつかく黒が地上にルーンを集めているのに、白に歌われては迷惑なのだ」

「それで、私が歌わないように監視していたのね？」

ジェルバインはエリスに向かって歩いてくる。エリスは後ずさりし

たが、壁に阻まれてしまう。ひざまずいたジェルバインは、おびえるエリスの頬に手を添えた。

「そうだ。最初はおまえが寂しがって歌わないようにといろんな話をした。おまえは私の話を楽しそうに聞いてくれた。そのひときはいつしか喜びに変わっていった。……全てが終わったら、おまえとともに生きようと思っていたのに」

ジェルバインは切なげに顔をゆがめた。そしてエリスから手を離すと立ち上がり、エリスを見下ろした。

「休息の塔に置手紙をしてきた。じきに冒険者がやってくるだろう」「ラグナが!？」

「そうだ。おまえを助けにやってくる」

ジェルバインはそばにあつたいすを蹴飛ばした。空を睨みながらこぶしをぎゅっと握り締める。

「あいつを殺してやる。白、おまえの目の前でな。ここから逃げようと思うな。黒がどうなっても保証はしない」

恐ろしい言葉にエリスは震え上がった。

ジェルバインのいうとおり、ラグナが遺跡へやってきた。ラグナは黒とエリスを間違えているようだった。ラグナが黒に近寄ろうとしたとき、ジェルバインが動いた。

エリスはジェルバインにひきずられながらも、久しぶりに見るラグナの姿に胸がときめいた。隙を見て逃げようと思い、ジェルバインを伺う。ジェルバインは後から入ってきた幼女と若い女性をじっと見ていた。

ラグナは強かった。あつという間に黒をひざまずかせた。よかったと安堵していると、ジェルバインに引きずられていく。どうやら、幼女と若い女性の元へ向かっているようだった。エリスは突き飛ばされ、幼女の悲鳴が上がった。何が起こったのかとジェルバインを見る。ジェルバインは若い女性を羽交い絞めにしていた。そして冷酷な目でエリスをにらみつけた。

「エリス、もうおまえに用はない。俺を捨てたのだからそれ相応の報いを受けてもらうぞ」

「ジェルバインさん」

「おまえとラグナは結ばれない。結ばれれば黒は死ぬ。覚えておけ！　まあ、そんな心配もないか。そいつらとともに滅びるのだから」

ジェルバインが高笑いをしながら言い放つ。そのとき、こちらに気がついたラグナが叫んだ。

「ミストさんを離せ！」

「この娘はもらっていく」

「ラグナさん！」

ジェルバインに捕らわれている女性がラグナの名を呼んだ。それを見つめるラグナの熱情のこもった瞳。それはエリスに向けられたことがないものだった。それで全てを悟った。ラグナが本当に好きなのはこの女性だ。

ジェルバインはマントを翻し、この場から消えた。残されたラグナは力尽きて崩れ落ちた。

「ラグナ！」

エリスはラグナに駆け寄り、抱き起こす。彼の口から漏れるのは、エリスではなくミストという名前だった。

番外編 吸血鬼の見た夢（後書き）

エリスの結婚イベントで、「どちらを残すかを選択する」という攻略をどこかで見て、考えてみました。

18・もう一つの入り口

ラグナは天井をぼんやりと見ながら考えた。真っ暗な視界の中に浮かんでくるのはエリスの作り笑いだった。エリスを苦しめる残酷な運命はどうすることも出来ないだろう。そのエリスが、ラグナが本当に好きなのはミストだと言った。自分にはまったく自覚はない。ミストは、いつもラグナを厄介ごとに巻き込んだり、からかつては玩具にする。なので、どちらかというと係わりたくないと思っていた。でも命の恩人だった。いつでも自分を信頼し、何かあった時はそばにいてくれた。

いろんなことがありすぎて、頭はオーバーヒート気味だ。ラグナは静かに目を閉じる。暗闇が深い眠りを誘った。

助けて、早く、もう押さえきれない

ラグナは夢の中で助けを呼ぶ声を聞いた。またあの声だった。眠っていたというのに、とても苦しく、胸がむかむかする。体の中に嫌なものが入り込んでくる感覚にのたうちまわった。助けを呼ぶ声の感覚をラグナは共有しているようだ。これもアースマイトだからなのだろうか。

翌日、まんじりともせず朝を迎えた。ラグナは何もすることがなく、久しぶりにくじら島へ出かけた。すると、くじら島の弦きが聞こえてきた。

精霊歌か、久しぶりに聞いた

「くじらさん、エリスたちが精霊歌で精霊を呼び寄せています。こ

れで安心ですね」

残念だが、それは難しいようだ

地下の精霊を呼ぶ力が強すぎるのだ このままではやがて……

精霊を呼び寄せる元を断たねば、おそらく私の落下は止まらない

ラグナよ、精霊が地下に集まる原因をしらべてくれ

頼んだぞ

事態はラグナが考えているよりも深刻さを帯びてきたようだ。暗い気持ちになりながらくじら島から降りた。

情報が欲しいラグナはカンロのもとへ向かう。ラグナの顔を見たカンロが色めきたって話し始めた。

「ジェルバインについていくつかわかったことがある」

「本当ですか？」

「うむ。やつはノーラッド王国の王立魔法研究所で働いていたようじゃ」

「王立魔法って、カンロさんやドロップさんがいたところとは違うんですか」

「違う。王立魔法アカデミーじゃ」

どうやらカンロはエリート意識が高いらしい。ラグナからしてみればどちらも同じなのだが。

「そこでは効率の良いルーンの活用方法を研究しておってな。そこでのジェルバインは評判こそ最悪だが、実力は折り紙つきだったそうじゃ。もっともわしやドロップほどではないがな」

カンロはニヤツと笑った。

「そんなジェルバインは次第に一つの研究に没頭していくようになった。ルーンの軍事転用、早い話がルーンを争いに使う悪魔の研究じゃ」

「そんな……ノーラッド王国ではルーンを争いに使うことは禁じられているんでしょう？」

「もちろんそうじゃ。だから王国は 王立研究所はやつから研究を取り上げ、さらに研究所からも追放した。そのジェルバインが今、このトランルピアにいる」

「ルーンを争いに使う研究を続けているんでしょうか」

「それなら良いのじゃが、おそらく違うな。研究所の職員の話によれば、やつは自分を追放した研究所、そしてノーラッド王国を恨んでいるらしい。ルーンを争いに使う研究を手段にしてノーラッド王国に復讐するつもりじゃな」

「そんな、すぐに止めないと！」

「ミスト嬢のこともある。あまり時間はないかもしれん。急ぐのじや、ラグナ」

カンロに強く言われたものの、今のラグナにはなすすべがない。ミストの居場所の手がかりはなく、あの部屋は魔法で閉ざされたままである。どうしたものか。

家に向かってとぼと歩きかけると、教会の墓地に一人たたずんでいるキャンディを見かけた。心なしかそわそわしているようである。

「どうしたの？」

「ラグナお兄ちゃん。マルコが中に入っっていつちゃったの」

「中？」

キャンディの視線の先の地面にはぽっかりと穴が開いていた。一人は容易に入れそうである。

「うん。あたしが精霊の後を追っていたら、大きな穴が見つかったの。びっくりしてお姉ちゃんにもらった人形を穴に落としちゃったの。そうしたらマルコ、『俺が取ってきてやる』って中に入ったきり出てこないの。お願い、お兄ちゃん、マルコを探して」

キャンディは目に涙をいっぱいためている。相当心細かったのだろう。ラグナはキャンディの頭に手をそつと置いた。

「わかったよ、僕がマルコを助けに行ってくるから、キャンディは

お家で待っていて」

「うん、ありがとう、お兄ちゃん」

キャンディを見送った後、ラグナは墓地に開いた穴に下りていった。中は遺跡のようだった。初めて見る場所だ。こんなところにも遺跡があったのかと驚かされる。奥に進むと、大きな氷塊が通路の入り口をふさいでいた。どうやら天井から崩れたものらしい。ラグナは氷塊の向こうに向かって大きな声で呼びかけた。

「マルコ！ 居たら返事をして」

すると、氷塊の向こうから声がした。

「兄ちゃん！」

「今、助けるからね。危ないから少し後ろに下がっていて」

「うん」

ラグナはハンマーを取りだすと、大きく振りかぶる。渾身の力を込めて氷塊に叩きつけた。氷塊は粉々に砕け散り、マルコがうれしそうに走ってきた。

「ありがとう、兄ちゃん！」

「どういたしまして。寒かっただろう？」

マルコが鼻をすすっているのを見て、ラグナは背中をさすってやる。マルコはにこにこ笑って鼻を手でこすった。

「平気だよ」

やせ我慢をするマルコは、やはり男の子だなと思う。

「人形は見つかった？」

「うん。このとおり」

マルコは自信たっぷりに人形をラグナに見せた。

「あ、そうだ。このことは母ちゃんにはくれぐれも内緒な」

そう捨て台詞を残してマルコは地上へ戻っていった。

マルコの居たところから更に奥があるようだ。ラグナは剣を構えろと、歩き出した。

着いた先は、ミストが連れ去られた場所だった。黒のルーンは以前

よりも大きくなっている。すると、どこからともなくジェルバインが現れた。

「ジェルバイン！」

ラグナは剣を握る手に力を込めた。ジェルバインは手を大きく広げてニヤリと笑った。

「『ようこそ』と言ってやろう。貴様の存在は気に入らんが、世紀の一瞬を迎えるに観衆無しではいささか寂しいのでな」

「やめるんだ。このままだと島は落ちる」

「だからどうした」

顔色一つ変えずにいるジェルバインに、ラグナの表情は強張った。

「何だつて？」

「村の一つや二つ、どうなろうと私の知ったことではない。いや、計画の礎となるのだ。むしろ感謝してもらわねばな。見よ、この大きく、そしてまがましいルーンの塊を」

ラグナは再びルーンに目をやった。すると、黒いルーンの下で横になっているミストが目に入った。

「あれは……ミストさん！」

ジェルバインは醜悪に顔をゆがめて愉快そうに話し出した。その目は常軌を逸している。狂人のそれだった。

「彼女ほど、精霊と深く心を通わせる人間を私は見たことがない。その能力は、もっとも精霊に近い人々と呼ばれたエリスと比較しても比べものにならないほどだ。今、彼女は声にならない声で精霊に助けを求めている。その声に呼応して精霊は集まり、ルーンは巨大化する。そのエネルギーは膨大だ。世界を滅ぼす存在を操るほどによく見ると、ミストの顔はゆがみ、手を強く握り締めている。かすかに聞こえる自分を呼ぶ声に胸が張り裂けそうだった。ラグナはジェルバインをにらみつけた。

「ミストさんに何をした!？」

「何、たいしたことではない。精霊に無意識下で助けを求めるよう、苦痛を与えているだけだ。耐えることのない苦痛をな」

「なんてこと……許さない！」

ラグナは剣を振り上げて、ジェルバインに切りかかった。しかし目に見えない何かに吹き飛ばされる。

「ぐっ」

かろうじて踏ん張ったラグナをジェルバインがあざ笑う。

「残念ながら遅かったようだ。計画は全て順調。彼女とこれだけのルーン、そして魔法生物さえいれば、世界を滅ぼすことが出来る。私を否定した世界をな！」

ジェルバインはさも愉快そうに高笑いをする、マントを翻した。
「ま、待て！」

ラグナの制止も空しく、ミストは黒いルーンに吸い込まれる。そしてジェルバインとともに消えた。

「ミストさん……何も、何も出来なかった」

ラグナはがつくりと膝を着いた。ミストを目の前にして、助けることが出来なかったのだ。いったいどこへ消えたのだ。

「くそっ！」

ラグナは慟哭した。そして自分のふがいなさに、地面を殴る。こぶしから血がにじむのもかまわず、殴り続ける。この痛みはミストが受けている苦痛の比ではないだろう。そう思うと、自分自身に怒りが込み上げてくる。

こんなところで嘆いていても始まらない。そう気づいたラグナは立ち上がり、黒いルーンのあった場所に歩いていく。そこには何の痕跡もない。しかし本が一冊落ちていた。

「これは、本？」

手にとって表紙をめくる。ラグナは目を見張った。

「文字が浮かんでくるぞ」

『風を感じて空に祈る』

光の先へ詩を贈るの

記憶の中で捜し求めてく

ただあなた 行く当てもなくし
たどり着いたの

心の中にはいつもあなたがいるよ』

「どういう意味だろう。後ろのほうは読めないな。カンロさんなら読めるかな」

ラグナは急いで時計塔へ向かった。

顔を合わせた途端、カンロはいぶかしげにラグナをうかがった。

「どうした？ 顔が青ざめているぞ」

「ジェルバインが」

「あの部屋に入ったのか？」

ラグナはこくりとうなずいた。

「止められませんでした」

「ミスト嬢はいたのか？」

「はい」

「僕の目の前で……消えました」

「仕方ない、不可抗力じゃ。相手は狡猾な魔法使いなのだからな」
カンロは大きく息を吐くと、ラグナの肩に手を置いた。ラグナは体を強張らせている。目の前の青年の悔しさが伝わってくるようだった。

「ジェルバインが消えた後にこれが落ちていました」

ラグナは先ほど拾った本をカンロに差し出した。カンロはそれを受け取ると、本をひっくり返したり、掲げたりして眺めた。

「ふむ、ずいぶん古いの。『時のグリモワール』か」

「何が書いてあるんでしょう？」

「これは古代の呪術言語で書かれておる。解説にしばらくかかりそうじゃ。ラグナよ。しばらくわしにこれを預けてくれんかの」

「わかりました。お願いします」

本をカンロに託し、ラグナは家に帰る。何もできないことには変わらない。ただ、遺跡で見た苦しそうなミストの表情だけが脳裏に浮かんでは消える。ジェルバインにどんな目にあわされているのかと思うと、頭がおかしくなりそうだった。能気なミストでも、精霊に助けを求めているのだ。その苦痛は計り知れない。その夜、また夢を見た。ミストの言う『助けを呼ぶ声』の記憶だろうか。

本当はこんなことしたくないんだ

君を異世界に隔離しないと、いずれ世界からルーンがなくなり全ての生き物が生きられなくなってしまう

君が言い出したこととはいえ、全ての責任を君に押し付けるすまない、僕たちは科学者、いや父親失格だ

待つていてくれ、何年、いや何十年かかるかと必ず君を迎えにいく

それまで

う、うとう

一人はいや

でもぼくが我慢しないとみんな死んでしまう

それはもつといやだから、我慢しないと

ぼく一人が我慢すれば、みんな幸せなんだ

ぼく一人が……

19・希望の花

その翌日から、ラグナはダンジョンに入り浸った。ミストを助け出すために、もっと強くならなければ。その思いだけで焦る心を抑えていた。農業は飼っているモンスターに手伝え、自分は鍛錬に集中した。持てるだけの食料と回復薬をリュックに詰め込み、今の實力よりも高いモンスター相手に朝早くから夜が更けるまで戦い続けた。とにかく体を動かしていないと、気がおかしくなりそうなのだ。ミストの辛そうな表情が頭から離れない。

しかし、そんな無理は続かない。今日も倒れて、医務室でラピスの手当てを受けていた。

「ラグナさん、お気持ちはお察ししますが、これではあなたのほうが参ってしまいます」

「放っておいてください。僕はもっと強くならなくちゃいけないんです」

暖簾に腕押しである。ラピスは小さくため息をついた。

「あなたは御自分のことばかりで、周りの人たちの気持ちを考えないのですね」

「どういう意味ですか？」

ラグナは怪訝な顔をしてラピスを見た。ラピスはそれにかまわず、ラグナの腕の包帯を巻きながら続けた。

「こんなに自分を痛めつけて。この怪我を診る私の気持ちを考えたことがありますか？ 毎日、今日は無事だろうかと心配ばかりです」

「すみません。でも」

ラピスは包帯を巻く手を止めると、なおも反論しようとするラグナを制した。

「いいえ、言わせていただきます。ミストさんを助けられるのはラグナさんだけなんです。もし、あなたが動けなくなったらどうするのですか？」

そして包帯をきゅつと結ぶと、ぎこちない笑顔を浮かべた。

「無理はいけませんよ」

「はい」

「よろしい」

久しぶりにラピスのお説教を食らったラグナは少々びっくりした。いつものヒステリックな説教ではなかったからだ。ラピスの言うとおりなのかもしれない。医務室を出ると、ラグナは向かいの時計塔に足を運んだ。

時計塔のカンロの部屋へ行くと、カンロが大きな声を上げた。

「おお、ラグナ。お主を探しておったのじゃ」

「どうしたんですか、もしかして」

「うむ、本の解読が終わった。これは大事になっておる、思った以上にな。よいか、よく聞け。この本は、『今とは繋がらない時代』と呼ばれる異世界について書かれた本じゃ」

「異世界？」

「うむ、わしらが住んでいるこの世界と同時に存在しながら決して交わることはない世界。それが『今とは繋がらない時代』なのじゃ。この本があそこに落ちているということ、つまりミスト嬢はそこに捕らえられているということだ」

「そこにいく方法はあるんですか」

「そう、焦るでない」

カンロはラグナをたしなめると、懷から小さな布袋を取り出してラグナに手渡した。

「これは何ですか？」

「結晶花の種じゃ。その花が『今とは繋がらない時代』へと導いてくれる。ただし、この花を育てられるのは乙女のみと決まっておる。タネは十二粒ある。村の十二人の乙女に手伝ってもらうのじゃ」

「十二人の女性ですね。わかりました。ありがとうございます」

ラグナは早速村の若い女性に結晶花を育ててもらうように頼んだ。

そしてくじら島のエリスたちのもとへ向かった。

塔へ近づくと、エリスたちの歌声が聞こえてきた。あれ以来エリスとは会っていない。ラグナが訪れると、二人は歌をやめて迎えてくれた。

ラグナは二人に結晶花を育ててくれるように頼んだ。すると、白エリスは窓際へ移動した。残された黒エリスはラグナに告げた。

「『今とは繋がらない時代』には、ルーンを無限に吸い込む魔法生物が封印されています」

「ルーンを無限に吸い込む？」

「そうです。どうしてそうなったのかは私にはわかりませんが、ジェルバインがそう言っていました」

黒エリスは目を伏せた。哀しげな黒エリスの心中を察したラグナは訊ねた。

「ジェルバインを倒しても良いんですか？」

黒エリスはラグナを見上げて、力なく微笑んだ。

「私の世界にはあの人しか居ませんでした。でも、あの人の心はもう一人のエリスのもの。私はただの道具ではない。因縁だったんですよ、きっと。こんな悪い因縁は断ち切るのが一番なんです」

黒エリスはそう告げると、部屋を出て行った。

ラグナは窓辺にたたずむ白エリスに近寄った。彼女は振り向くと、何のわだかまりもない笑顔をラグナに向けた。

「久しぶりね。元気……じゃないみたいね」

白エリスはラグナの包帯だらけの腕を見て言った。ラグナは頭をかいて弁明した。

「じつとしていらなくて」

「私の言った意味、わかったみたいね」

ラグナは無言でうなずいた。白エリスはにっこり微笑むと、窓の外の暗闇に目をやりながら決意を語った。

「私たちの祖先は、魔法生物により失われたルーンを再びこの地に呼び戻すために集められた」

ラグナは白エリスの線の細い白い顔を見つめた。月光に浮かび上がる彼女の姿は神秘的だった。

「私のやろうつとしていることは、私がここにいる理由と矛盾しているのかもしれない。それでもミストさんを助けたい」

「ありがとうございます」

ラグナはくじら島を後にする。白エリスのことと自分の中で整理がついた気がした。その夜、また助けを求める声を聞いた。

助けて、助けて、どこからか大きな力がぼくに流れてくる
いつまでこの力を押さえられるのか、ぼくには自信がない
この力が暴走してしまったら、もう止められない
助けて、助けて

朝、目を覚ましたラグナは、事態が急を告げていることを感じた。

一週間後、花を回収した。皆の想いの詰まった花だった。

最後にラグナは教会に向かう。花を受け取るついでに、昨日受けた傷をラピスに診てもらったためだ。

「うっ」

「痛いですね。少し我慢してください」

傷口に薬を塗ってもらっている。ラピスは包帯を巻きながら伝える。

「ラグナさん、心置きなく戦ってきてください」

「ラピスさん」

「怪我をしたって、私が全力で治して差し上げますから」

「ありがとうございます」

ラピスのすすり泣く声が医務室に響く。ラグナはポケットからハンカチを取り出してラピスに渡した。ラピスはハンカチを受け取ると、

涙をぬぐう。異世界へ行こうとするラグナ。今度の戦いは命の保障はないかも知れないからだ。ミストのために命をかけるラグナに、ラピスは心配よりも辛い思いを味わった。しかし、精一杯微笑んでみせた。

「無事の帰りを待っています」

「ありがとうございます」

医務室を後にしたラグナは時計塔に向かった。

受け取った花はそれぞれの乙女の星座を宿した花だった。その花を時計台の台座に供える。しかし、何も起こらなかった。

「ラグナ、十二人の乙女に育ててもらったのだな」

「はい」

「しかし、台座には十一種類しか捧げられておらん。本当に十二人の乙女に託したのだな？」

「はい」

「おかしいの。十二人から得られたのが十一種類とは……ラグナよ、回収した結晶の中で同じ色形のものはなかったかの？」

ラグナは思い出してみた。

「そういえば、エリスたちの花が同じだったような」

ラグナの言葉を聞いたカンロは、何かを思いついたようで目を見開いた。

「そうか！ あの二人は元々一人だったな。なんということだ！

わしとしたことが」

頭を抱え込むカンロをラグナは慰めた。

「カンロさん、原因がわかったんだから、誰か他の人に花を育ててもらえればいいんじゃない？」

「だめじゃ。種はもう無い。これから探すとしても、どれだけの時間がかかるかわからぬ」

カンロはがっくりと肩を落とした。道は閉ざされてしまったのだ。しかしラグナは諦めてはいなかった。

「きっと何か方法はあるはずです」

ラグナはそう言い切ると、時計塔を飛び出していった。

「ラグナ」

カンロは気の毒そうにラグナを見送った。ミストを助け出すための異世界へのパスポートとなる花の種はきつとも見つからない。それを思うと絶望が胸を渦巻く。あのジェルバインに滅ぼされるのを待つしかないのだ。

ラグナはふらふらと歩いている。ミストの連れ去られている異世界へ行く方法が絶たれてしまったのだ。カンロはもう無理だといっている。きつと方法はあると豪語したものの、何も思いつくことはない。どうしたらいい、このままではミストがああ男の復讐の犠牲にされてしまう。

そんな中、足は自然とミストの家へ向かっていた。

「ミストさん」

ラグナはミストの姿を思い浮かべる。今にも声を掛けてきそうなほど現実感が無かった。くされ縁だと思ったときもあった。どうにかして縁を切りたいと思ったときもあった。でも、今は違った。大事なものはなくしたときにその価値に気づくと言うが、まさにそのとおりだった。

家の前にたどり着いたとき、ふと思い出した。そういえば、ミストは変なタネを大事に育てていた。あの苗はどうなったのだろうか。そう思い、花の植えてある鉢を見に行った。するとどうだろう。花が咲いているではないか。他の乙女からゆだねられたものとは違う色の結晶花だった。ラグナはその花をそっと摘んだ。

ラグナは時計塔へ舞い戻ると、ミストの結晶花を供えた。すると一瞬の静寂の後、音楽が流れ出した。しかし、それ以上何も起こらない。音楽を聴きつけたカンロがやって来た。

「結晶花があつたのだな」

「はい。でも、音楽が流れるだけで何も起こらないのです」
「はて」

二人で首をかしげているところへキャンディが入ってきた。キャンディはカンロの腕にすがり訊ねた。

「おじいちゃん、何かあったの？ 精霊たちが騒いでいるの」

「おお、キャンディ。いいところへ来たの。結晶花を供えたのだが、音楽が流れるだけで何も起こらないのじゃ」

キャンディはその音楽に耳を傾けていたかと思うと、カンロに訊ねた。

「これ、精霊歌みたい。おじいちゃん、あの本を貸して」

カンロが、『時のグリモワール』を差し出した。キャンディはそれを受け取ると、読み始めた。そしてあるページを指差した。

「これ、精霊歌だわ」

「精霊歌？ 歌詞があるというのか」

「ええ」

風を感じて空に祈る 光の先へ詩を贈るの

記憶の中で探し求めてく ただあなた行く当てもなくし

たどり着いたの 心の中にはいつもあなたがいるよ

そうここには想いがある

愛を信じること ねえ変わらない あの笑顔 ずっとそばにいる

みつめてるよ そう やさしい瞳 包み込んで

心の中に芽生えた 温かいぬくもりを あなただけに今

キャンディは本を持ったまま音楽に合わせて歌い始めた。すると、台座の中心に光がともり出した。そして異次元空間が出現した。

「お兄ちゃん、ミストお姉ちゃんを助けてあげて。精霊たちもそれを望んでいるわ」

「そうじゃな。ラグナ、台座に触れるがいい。さすればミスト嬢のいる異世界へ行けるであろう」

「ありがとうございます。行ってきます」

ラグナは笑みを浮かべると、台座に手を置いた。そして光の向こうに消えた。

残されたカンロとキャンディはラグナの無事を祈った。

20・今とは繋がらない時代

着いた先は時計塔のベランダだった。周りの空間はゆらゆらと歪んでいる。周りを見回してみたが、ここには時計塔しかない。はしごを昇り、屋上へ出た。屋上には見た事も無いモンスターがいた。

近づかないで。もう限界なんだ。押さえきれない。逃げて

「君は夢の中の」

目の前にいるのは犬の化け物だった。体は青紫に変色し、鋭い鍵爪、耳まで裂けた口。ラグナはモンスターを哀れに思い、言葉をかける。踏みとどまらせなければいけない。このモンスターは利用されているだけなのだ。

「君の夢を見たよ。君が生まれたときからの幸せな思い出。君の親が君に語りかけていたね。君の誕生を心待ちにしていたこと、初めてのお手伝いを喜んでくれたこと」

ラグナが語りかけたことで、モンスターはわずかに自我を取り戻した。

そう。幸せだった。でもぼくはこんな姿になってしまっ

そのときだった。モンスターの前にあの男が現れた。

「ジェルバイン！」

「ようこそ、ラグナ。きっと来ると思っていたよ」

そして、傍らのモンスターを指差した。

「見る、この醜い姿を。コイツは無能な研究者が作り出した魔法生物だ。だが、その無能さゆえにルーンを無限に吸収するという欠陥を持ち、この世界に捨てられた。無能な彼らには、これしか方法が

無かったのだ。私はそこに目をつけた。最初はエリスを、次にミストを利用してこいつに負の感情を込めたルーンを長年にわたって与え続けた。けなげに飼い主を待つこいつが醜い化け物になっていくのは見ものだったぞ」

ジェルバインは、さも愉快そうに持論を展開した。それを聞いたラグナは唇を噛み締めた。一人の人間のせいで、復讐の道具にされたモンスターが目の前で苦しんでいる。必死でモンスターに語りかける。

「ジェルバインの言いなりになっちゃいけない！ 僕が君を助ける」
しかしもう遅かった。モンスターは白目を？いてうなっている。ラグナの声はもう届いていない。ジェルバインが不敵な笑みを浮かべながら再び話した。

「コイツはもう限界だ。もうすぐ自我が崩壊する。そうすると、無限にルーンを吸収し続ける破壊の化身の完成だ。これで私は私を認めなかったやつらを、世界を滅ぼしてやる」

「そんなことは絶対にさせない！」

「戯言はそいつを倒してから言うんだな」

ジェルバインはマントをひるがえし霞のように姿を消した。この場にいるのは、モンスターとラグナだけだ。そのモンスターは殺気を放っている。やるしかない。ラグナは剣を抜いた。

モンスターは咆哮を上げる。その咆哮は空震となり、ラグナの身体に鞭を振るう。ラグナは後ろへ飛びのいた。技を放出し隙の生まれたモンスターに切りかかる。モンスターは悲鳴をあげた。そしてギリギリと睨むと、近づいていたラグナに尻尾の針を突き刺した。「うっ」とうめくと、ラグナは片膝を着いた。しびれる身体を必死で動かしモンスターから離れると、回復薬を飲み干した。その間にもモンスターが近づいていた。気付くのが遅れて、体当たりをもらに喰らい吹っ飛んだ。

ラグナは口を服の袖でぬぐう。早く決着をつけないければ自分がもた

ない。剣をヘルブランチに持ち替えて、火の魔法を召喚する。モンスターは足元から炎が湧き上がりモンスターを包み込む。モンスターはどういうわけか呆気なく倒れた。

ラグナが勝利を確信したそのとき、再びジェルバインが現れた。魔法生物が倒れたというのに、まったく動揺しておらず、かえって余裕の笑みを浮かべている。

「何がおかしい！」

「嬉しい誤算なのだよ。化け物の自我が崩壊した。これで私と一つになる」

「何！？」

ラグナはヘルブランチを構えなおす。ジェルバインはそんなラグナを見てせせら笑った。

「私に逆らう魔法生物を完全に支配下に入れるため、やつの意識を奪う必要があった。きさまのおかげでその手間も省けた。感謝するぞ。私はこの手で世界を滅ぼせる。私を認めなかった連中を見返してやるのだ」

まばゆい光がジェルバインを包む。思わずラグナは目を覆った。光が収まり前方を見ると、先ほどとは違うモンスターが現れた。モンスターは自分の身体をしげしげと眺めながらつぶやいた。

『素晴らしい！ この世を破滅させるのにふさわしい』

「その声……おまえはジェルバイン！？」

『そうだ。化け物と融合したのだ』

先ほどの犬様のモンスターの背中から人間の上半身が生えている。

しかし、それは人間ではない。モンスターだ。ジェルバインは醜悪な姿のモンスターと化していた。

『見てみる』

ジェルバインの後ろに巨大な黒いルーンが浮かび上がる。その中心にミストがいた。

「ミストさん！」

ラグナの呼びかけに気がついたミストが球体に手を添えて体を乗り

出した。しかし球体はシャボン玉のようにミストを包み込んでいる。
「ラグナさん！」

ミストは必死で球体を叩いているがびくともしない。

ラグナは拳をぐつと握り締めた。いつもは温厚な彼が、髪を逆立て、目を吊り上げる。怒りが頂点に達していた。

『おっと、愛しい女の痛々しい姿に切れたか』

「ミストさんを離せ！」

『だめだ。彼女にはまだまだルーンを吸収してもらわねばならない』
ジェルバインは、くつくつと笑った。

『計画の最大の功労者として最初に滅びる栄誉を与えよう、ラグナ』
ラグナはその言葉を聴いて、人差し指をジェルバインに突きつけた。体が打ち震える。モンスターから発せられるオーラが異常なのだ。今まで戦ったどのモンスターよりも恐ろしい。ラグナの本能が危険を察知している。でも、ラグナは勇気を奮い立たせて宣言した。

「ジェルバイン、あなただけは許すわけにはいかない」

ラグナは剣を抜いた。

ジェルバインが風の刃を繰り出した。それは執拗にラグナを襲う。ラグナは剣でそれを振り払う。ジェルバインは次にカマキリを召喚した。四体のカマキリがラグナを襲う。カマキリに応戦している間にもジェルバインはラグナに向かって火球を放つ。

「うわあっ」

火球がラグナに命中した。急いで水の魔法をかけ、雨を降らす。少々火傷を負ってしまった。ラグナは剣を握りなおしジェルバインに向かっていく。しかし、攻撃してダメージを与えても、ジェルバインには巨大ルーンからエネルギーが常に補給されてしまう。

「強すぎる……」

最初に戦ったダメージも大きい。体力はわずかだ。肩で息をしながら考える。

どうしたらいいんだ、自分のルーンは限りがある。僕は負けてしま
うのか、ミストを助けることは出来ないのか。

ラグナの心が折れかけたときだった。

何か聞こえる

かすかに歌が聞こえてくる。どこからだろう。ラグナがあたりを見
回すと、キャンデイが両手を胸の前で組んで空中に浮かんでいた。

「キャンデイ、どうしてここに？」

キャンデイはにつこりと笑った。

「精霊にお願いして連れてきてもらったの。少しでも歌がルーンに
届けばミストお姉ちゃんを解放してくれるかもしれない。私だけじ
やないよ」

「ラグナ、そのルーンを解放してやらないとジェルバインの力は衰
えない。私たちが歌ってなんとかする」

ドロップだった。彼女は王立魔法アカデミーで魔法の研究をしてい
た。彼女が言うのなら間違いはないのだろう。他にも花の種を託し
た乙女たちが現れた。乙女たちはそれぞれラグナにエールを送る。
そんな中、金切り声が上がった。

「ミスト、あんたはいつまでそこにいるのよ。皆心配しているでし
よ。早く帰ってきなさい！」

ロゼッタだった。目にいっぱい涙をためて怒っている。ロゼッタと
ミストは幼馴染だ。ライバル視してもやはり好きなのだ。

ロゼッタの声に反応したミストが立ち上がる。皆の会話を聞いている
のだ。

「皆さん、ありがとう。精霊さんから話は聞きました。ラグナさん、
あたしはもう大丈夫です。あたしのことは気にせず戦ってください」
「わかりました。すぐ助けます。待っててください」

乙女たちの歌声が今と繋がらない時代に響き渡る。そのおかげで黒

のルーンは負の感情から解放された。白に浄化されたルーンはラグナに集まってくる。戦えどもルーンは尽きることなく満たされていく。

「おまえごときにルーンは必要ない。この身体さえあれば」

ジェルバインの言葉を耳にしながら、ラグナは魔法を発動し続けた。クリムゾンステッキを手にジェルバインに魔法をかける。業火はジェルバインに襲い掛かる。ジェルバインは徐々に体力を消耗していった。

「姑息な……」

ジェルバインは最後の足掻きをする。その場は地獄絵図と化した。火柱が上がり、魔法弾がラグナを執拗に追いつけ、落雷が落ち、竜巻が巻き起こる。ラグナも魔法を発動する。次から次へと攻撃するも、ルーンを無限に吸収し続けるラグナにジェルバインはなすすべがない。

とうとう最後の瞬間が来た。モンスターは力尽き、ジェルバインと犬様のモンスターは分離した。

「くっ、この私がおまえらごときに負けるとは……」

ジェルバインは息も絶え絶えに地面にへばりついた。ラグナはそんなジェルバインにクリムゾンステッキを突きつけながら言い放つ。

「あなたは周りの人みんなを憎んで復讐しようと考えた。僕は周りの人みんなの力を借りて戦った。あなたは他人を信じる事が出来なかった」

ジェルバインは作り笑いを浮かべた。

「そんなものに、そんなものに私は負けたというのか！」

ジェルバインはそう叫ぶと、そのまま気を失った。

ミストを囲っていたルーンは砕け散った。色とりどりのルーンたちちがミストをやさしく包んで地面に下る。ラグナはミストに駆け寄った。

「怪我はありませんか？」

「ありません。ラグナさんこそ傷だらけじゃないですか」

そう言っと、ミストは目に涙を浮かべながらラグナの腕に手を添えた。ラグナはニッコリと微笑んだ。

「大丈夫ですよ」

そのとき、二人の心にモンスターが語りかけた。

ぼくのせいで皆さんにご迷惑をおかけしました、ごめんなさい

申し訳なさそうに謝るモンスターに、ラグナは優しく声をかけた。

「君は操られていただけです、何も悪いことはしていません」

ありがとうございます

ラグナはニッコリ笑うと、ミストを振り返った。

「さあ、ミストさん、帰りましょう」

「ちょっと待ってください」

ミストは犬様のモンスターの前へしゃがみこんで話しかけた。

「犬さん、一緒に行きませんか」

でも、ぼくが行ったら、あなた方の世界のルーンを吸収し続けてしまいます

「大丈夫です。精霊さんをお願いしておきますから」

ニコツと笑って見せるミストに、モンスターはためらいを見せながらつぶやいた。

お言葉ですが、ぼくはこちらに残ります。家族がいるんです

「そうか、君の事を待っている家族がいるんだね」

モンスターはこっくりとうなずいた。そのとき、鐘が鳴り響き、白いルーンが足元から空に昇っていく。その幻想的な情景にラグナた

ちはきよろきよると周りを見た。

「もう時間みたいです」

お二人ともお元気で。ありがとうございました

「君も元気で。さようなら」

ラグナとミストはモンスターに別れを告げて、皆の待つ世界へと帰って行った。

21 すれ違い

現実の世界に戻ると、村の人々が労ってくれた。ラグナはもみくちやにされながら、戦いが終わったんだと実感した。

エリスたちはくじら島を下りて、宿屋に住み込み、酒場で働くことになった。時折訪れる夜の酒場で、白と黒のエリスは楽しそうに働いている。

「いらつしゃいませ」

「こんばんは、エリス」

夜の酒場に食料を買いに来たラグナに、二人のエリスが駆け寄った。そしてラグナの腕を取り、カウンターでグラスを磨いているリタの元へ連れて行く。

「いらつしゃい、何にする？」

「はい、ワインとピザをお願いします」

「あいよ！ 用意するからそこに座って待ってておくれ」

リタはそういうと、ラグナに背を向けて調理し始める。もう、以前のように「子供が飲むものじゃないよ」とは言わない。ラグナを大人と認めてくれたようだ。記憶喪失のラグナは実際いくつなのかはわからないが、風貌や言動、働き具合から町の人に大人と認められたのだ。

ラグナがテーブルに着くと、白エリスがワインとグラスを持ってきて供すると、隣に座った。ラグナはエリスに近況を訊ねる。昼夜逆転しているエリスがうまくこの村の生活になじんでいるかと心配なのだ。

「新しい生活はどうですか？」

「大変だけど、けっこう楽しいわ」

エリスははにかむように笑った。

「ミストさんは？」

「今日で退院ですし、体力が落ちているみたいですけど、ラピスさんが診てくれているから心配ないと思います」

「ほんとに心配してないの？」

エリスの疑うようなまなざしに、ラグナはため息を漏らした。

「エリスにはかなわないですね。心配ですよ。ジェルバインが苦痛を与えていたと言っていましたからね。どんな仕打ちを受けていたかと思うと、それがミストさんの精神にどんな影響を与えているかと思うと……」

そこまで吐き出すと、ラグナはグラスのワインを一気にあおる。こちらに戻ってきてから、ワインを飲む量が増えた。心配で眠れないのだ。

そんなラグナを見てエリスは呆れた。

「そんなに心配なら、そばに居てあげればいいじゃない。ミストさんもそのほうが安心するんじゃない？」

「そうでしょうか」

「あたしだったら、好きな人がそばにいてくれたほうが心強いわ」
ラグナは苦笑いを浮かべると、「ありがとうございます。参考にします」と述べた。

黒エリスがピザを持ってくると、白エリスは席を立った。代わりに黒エリスが隣に座った。ラグナはさっき白エリスにしたように、黒エリスにも質問をした。

「エリスさん、新しい生活はどうですか？」

「はい、ここはとてもにぎやかで楽しいです。エリスも一緒ですし」「よかったです」

黒エリスは席を立つと、ラグナに耳打ちした。

「エリスのことは心配しないでください。私がついていきますから、」
にこつと笑みを浮かべて去っていく黒エリスに、ラグナはびっくりだ。吸血族とは人の心が読めるのだろうか。

ピザを平らげると、ラグナはワインの瓶を持って酒場を出た。時刻

は九時、ミストはどうしているだろうか。エリスに言われたせいか、自然に足はミストの家に向かっていた。

ラグナはミスト宅の扉の前に立っている。ノックしようと上げた手が止まる。もう遅いから迷惑だろうか。そう思い、手を下ろしてしまった。部屋から漏れる灯りは温かなオレンジ色だった。

諦めて帰ろうときびすを返す。すると、池のほとりに人が立っているのが目に入った。近寄ると、その人物が振り返った。カーディガンを羽織ったミストだった。ミストはラグナを認めると、にっこりと微笑んだ。

「ラグナさん、こんばんは」

「こんばんは。外に出てもいいんですか？」

ミストは、「ラグナさんは心配性ですね」と言うと、くすつと笑った。そして池を指差した。

「カモさんたちに赤ちゃんが生まれたんですよ。可愛いでしょう？」
見ると、月明かりに照らされて、大人のダックに小さなダックが寄り添っている。

「ほんとだ。いつの間に」

ラグナがダックに気を取られていると、手がふつと軽くなる。ハッとして見ると、ミストがワインの瓶を持っていた。

「ラグナさん、ワインを飲むんですか？」

「ええ。最近眠れなくて」

「飲みすぎないでくださいね」

「はい」

誰のせいで眠れないかと思っているんだと心の中で突っ込むものの、口に出す勇氣はない。

「ミストさん、具合はいかがですか？」

「ずいぶん良くなりました。ただ……」

「ただ、どうしたんです？」

言いよどむミストの言葉を待ちきれずに、ラグナは聞き返す。ミス

トは目を伏せたままこう答えた。

「やはり一人になると、囚われていたときのことが思い出されて怖くなります」

やはりジェルバインからの苦痛は忘れることが出来ないのだろう。

今こそ、エリスの助言どおり自分がそばにいてやれば、その思いがラグナを突き動かす。

「僕に何かできることはありますか？」

ラグナがそう言うと、ミストはラグナを見つめた。

「ラグナさんには助けてもらいましたし、これ以上迷惑をかけるわけには……」

ミストがしおらしいことを言うなんて意外だった。

石が転がる音がする。ミストはびくりと体を強張らせた。次に茂みがガサガサと揺れた。するとミストは飛び上がり、ラグナの腕にしがみついた。

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ご、ごめんなさい」

ミストはパツと手を離れた。ラグナは、よかったようなもったいなことをしたような複雑な気分だ。しかし、こんな物音でおびえて本当に大丈夫なのか心配になる。

「ミストさん、今夜から一人なんですよね？」

「はい」

「大丈夫ですか？」

ミストは目を丸くしてラグナを見た。そしてワインの瓶をぎゅっと抱きかかえると、目を伏せた。

「……大丈夫じゃなかったら、ラグナさんがどうにかしてくれるんですか？」

ミストに詰問されてラグナは返事に困ってしまった。どうにかしろといっても、ただの隣人でしかないラグナがミストの家に泊まるわけにもいかない。それに、今は理性を保てるかいささか自信もない。ミストはワインをラグナに渡すと、カーディガンの前をぎゅっとつ

かんだ。ラグナをじっと見つめていたが、「おやすみなさい」と家に戻っていった。

ラグナは、なんともいえないふがいなさに打ちのめされながら家に帰った。テーブルの上にワインの瓶をドンと置く。椅子を乱暴に引っ張り出してどかりと座った。「何かできることはありますか」と聞いておいて、何も出来ない自分に呆れた。

翌朝、気持ちが優れないラグナはくじら島に出かけた。雲の上から景色を眺めればモヤモヤした気持ちも吹き飛ぶかもしれない、そう思ったからだ。足を踏み込むと、早速くじら島が話しかけてきた。

ラグナよ、ありがとう。私の体をめぐるルーンが安定した

「クジラさん、よかったですね」

すまぬが、モンスターのことも頼む。給水塔に住み着くものが悪さをしていかんだ

「はい。わかりました」

頼むぞ

すっかり忘れていた。ジェルバインの一件が片付いたことだし、腰をすえてゆつくりやればいいだろう。それよりも今は自分のこの気持ちの整理をつけなければいけない。ラグナは島の端っこに立って景色を眺めた。果てしなく広がる雲海は素晴らしい。でも、ここが晴れるとまでは行かなかった。ふと、くじら島に湧く源泉のことを思い出した。あそこなら誰にも邪魔されずゆつくり心も体も休め

るのではないか。そんな淡い期待を抱いて奥へと進んだ。

すばやくモンスターたちを交わし、源泉までたどり着く。確かここにはゲートはなかったはずだ。すると、目の前に象のようなモンスターが現れた。可愛らしい葉っぱのような耳につぶらな瞳でラグナを見つめている。どうやらマンモーの子供のようである。ラグナは優しく話しかけた。

「ママのところにお帰り」

しかし、マンモーの子供は動かない。ただ、じっとラグナを見つめているだけである。危害を加える様子もないし、放っておけばそのうち飽きてどこかへ行ってしまうだろう。ラグナはマンモーの子供を無視すると、服を脱いで源泉に入った。源泉は少し熱めだったが、それが心地よさをもたらした。すると、マンモーの子供が入ってきて、鼻で湯をまき散らし始めた。それをぼんやり見つめながら、ラグナはミストのことを思い出していた。ミストの力になるためにはどうしたらいいのだろう。この押さえきれない気持ちはどうしたらいいのだろう。そんなことがグルグルと頭をめぐる。結局気持ちの整理がつくどころか、余計気になってしまった。

すっかりのぼせたラグナは源泉から出て、体を拭き始めた。すると、マンモーの子供がラグナに向かって湯を撒き散らす。

「わっ！ こら、やめろ！」

怒ったものの、マンモーの子供はやめる気配がない。ラグナは相手にするだけ無駄だと、服を抱えてその場を離れた。

翌日、動物小屋に入ると、あのマンモーの子供がいた。連れて来た覚えはない。

「おまえ、ついて来たのかい？」

マンモーの子供は長い鼻を高々と上げて、勢いよく鳴いた。

「弱ったな……」

そこへ、ピアンカとメイドのタバサがやってきた。カルディアにいた頃の知り合いで、トランルピアに別荘を建てて、夏の間だけ避暑

に来ている。

ビアンカは資産家のヴィヴィアージュ家の一人娘である。ヴィヴィアージュ家は美食家としても有名で、彼女の父はかなり太っている。一方ビアンカは大食漢の割にとってもスリムで可愛い。トレードマークの両サイドに高く結い上げた巻き毛が歩くたびに軽やかにはねる。しかし、かなりのわがままである。カルディアの町を丸ごと買つて欲しいと父親にねだったことがあるくらいだ。

そのビアンカに仕えているのがタバサである。ビアンカのメイドは入れ変わりが激しかった。ビアンカのわがままに耐えられないからだ。しかし、タバサは違った。どこか遠くから留学してきており、ビアンカのメイドとなったのだ。とても心優しい女性で、その愛はモンスターにも分け隔てなく注がれる。

そんなタバサの影響を受けてか、ビアンカもタバサと一緒にラグナのモンスターを見に来るのだ。

「ごきげんよう、ラグナさま」

「あ、こんにちは。タバサさん、ビアンカさん」

ビアンカはマンモーの子供を遠巻きに見た。

「ねえ、ラグナ。そのモンスターは？」

「くじら島からついてきちゃったみたいなんです」

ビアンカは物珍しそうにマンモーの子供を見ている。いつもどおり「可愛くないわね」と一蹴するのだろうか。ラグナは考えた。すると、ビアンカは予想を反してマンモーの子供を欲しがったのだ。

「ねえ、その子、ちょうだい。お金なら欲しいだけあげるわ」

「いいませんよ。そのかわり」

ラグナは苦笑いをしながら丁寧に断った。相変わらず、お金で何でも解決できると思っているようだ。

「大事に育てることを約束してください」

「わかったわ。他には？」

「モンスター小屋を用意してください」

ラグナが答えると、ビアンカは頬を上気させた。そしてタバサに命

じた。

「タバサ、すぐモンスター小屋を増築させて！」

タバサは困ったような顔をして、ビアンカに向き合った。

「お嬢さま、モンスターは生き物です。ちゃんと世話する覚悟はありですか？」

「あるに決まってるじゃない。タバサの手は借りないわ」

「そうですね……では、ラグナさま。小屋の用意が出来次第、このモンスターを引き取らせていただきます」

「わかりました。よろしくお願いします」

「じゃあ、私、先に帰るわ。あとはよろしくね、タバサ」

「はい、お嬢さま」

ビアンカは嬉々として帰っていく。てっきりタバサは嫌そうな顔をしているだろうと思っていたラグナは驚いた。彼女がとても嬉しそうにしているからである。

「タバサさん、嬉しそうですね」

「はい。お嬢さまが自分以外のものに気を使われるなんて、今までありませんでしたから。ところで、モンスター小屋はどなたにお願いすればよろしいですか？」

「ビアンカさんの家の隣のクロスさんです。」

「わかりました。では失礼いたします」

タバサは深々とお辞儀をすると、ラグナにくるりと背を向けて帰っていく。タバサという人も不思議な人だ。メイドにしては博学で上品な物腰で、気品が漂っている。綺麗なお姉さんという感じだろうか。

「いやいや、それどころじゃないか」

ラグナはモンスターたちの世話を始めた。小屋の中には、毛皮を得るためのモコモコ、ミルクを得るためのバツファモー、卵を得るためのコケッホッホー、騎乗用のシルバーウルフ、そしてペットも兼ねたチロリだ。それぞれに声をかけて丁寧ブラッシングしてやると、モンスターたちは、それは嬉しそうに鳴く。

「おいで、チロリ」

ラグナがそう呼びかけると、チロリはラグナの足から一気に肩まで登った。ラグナはチロリの顎を指で撫でてやり、小屋を後にした。

ラグナは、家の前の牧草地まで来ると、チロリを肩から下ろした。チロリはラグナから離れて近くの木に登って木の実を探している。それを見やりながら、ラグナは牧草地に寝転がった。青い空、白い雲、吹き渡る風は頬を撫でて心地いい。草の匂いに乗って、甘い香りが漂ってきた。

「ラグナさん」

声のするほうに顔を向けると、白くて細い足が見えた。そのまま視線をすつと上にずらす。バスケットを持ったミスだ。ラグナの胸がきゅんと縮こまる。そんな心の内を見せまいと、起き上がり挨拶をした。

「ミストさん、こんにちば。体の具合はもう良いんですか？」

「はい、ラピスト特製回復薬のおかげでこのとおりです」

ミストが微笑みながら答える。ラグナは、自分も飲んだことのあるラピスト特製の薬を思い出した。口の中に苦いものがよみがえる。

「確かにあれは良く効きますね。ところで何か御用ですか？」

「スイートポテトを作ったんです。おすそ分けですよ」

そう言ってバスケットをかかげた。

ミストはラグナの横に座ると、バスケットのふたを開けた。バスケットの中にはこんがりと焼き目のついたスイートポテトが入っている。ミストはそれを一つ紙ナフキンの上に乗せると、ラグナに手渡した。ラグナは軽く頭を下げると、「ありがとうございます」と言っ
て受け取った。黄金色でこんがりと色よく焼けたそれを見て変な
気持ちになる。ミストがちよくちよく料理を作って持ってきてくれ
る、カルディアに居た頃にはありえないことだった。

「ミストさん、頭を打ってないですよね？」

「どつという意味ですか？」

「いや、こう親切にしてもらうと、何か裏がありそうで」

「ひどいです、ラグナさん」

ミストはいつもどおり、ぷくつと頬を膨らませた。ラグナはスイートポテトを食べる。少々甘すぎるが食べられないことも無い。真っ黒い焦げがあるのもご愛嬌か。小麦粉弁当と比べたら格段の上達である。ひよつとして自分のために料理してくれているんだろうか。いや、ミストがそんなことをするはずはない。

それよりもミストがトランルピアに来た理由　助けを呼ぶ声の問題が解決した今、ミストはこれからどうするのだろう。また黙って消えられてはたまったものではない。

「あの……ミストさんはカルディアに帰るんですか？」

「さあ、どうでしょう。ラグナさんは？」

ミストの動向を探るつもりが、自分の動向を探られている。ミストはどういうつもりなのか。まさか、ラグナが示したことの逆を言うつもりなのだろうか。カルディアにはもう帰るところはない。疑心暗鬼のままラグナは答えた。

「僕はこちらに残ります。カルディアの牧場はリネット少佐が引き継いでくれますから」

「じゃあ、私も」

その言葉に、思わずラグナはミストを見た。やっぱり自分のことを好いてくれているから、こちらに残ると言ってくれたのだろうか。

「ラグナさんの作るカブはおいしいですから」

残念ながら思い通りにはならなかった。自分ではなくカブ目当てだった。ラグナは呆れたようにつぶやいた。

「ほんとにカブが好きなんですネ」

「はい」

うれしそうに笑うミストをチラッと見て、ラグナはあさつてを向いた。思い通りにはならなかったが、ここは一つ勇気を持って、この押さえきれない想いを伝えなければならぬ。ラグナは頭に血が上るのを感じながら話を続けた。

「ミストさんって放っておくと何するかわからないんですね」

「はい、いつもご心配おかけしてます」

「だから……僕、ずっとそばにいたいと思うんです。いかがですか？」

ラグナはミストの様子を伺った。けっこう自分では直球に言っただけだ。どういう態度に出るのだろうか。

「そうですね、いいアイディアです。でも、それってどういうことですか？」

「ですから……これからもよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ」

なんら変化のないというか、とぼけているというか、気づいていないミストにラグナはまたがっかりした。少しは僕の気持ちを汲んでほしい。そう願いながら再びスイートポテトにかぶりつく。甘すぎるスイートポテトは胸やけがしそうだった。この甘さが自分に向けてくれればいいのに……。

チロリがやってきて、ミストの前で座った。ミストはチロリを抱き上げると、膝の上に乗せる。そしてチロリの背中をなぜながら話した。

「私、ぜんぜん怖くなかったです」

「はい？」

ラグナは唐突に話し出したミストの言葉を理解できなかった。ミストはどうしてわからないのかと言いたげに口をつんと尖らせた。

「ジェルバインに囚われていたときです」

「ああ。でも、この間は思い出して怖かったって言ってましたよね？」

「あれは帰ってきてからです」

ミストはそう答えると、むっとして口を尖らせた。しまったと思いながらラグナは話を続けた。

「そうですね。それで、どうして怖くなかったんですか？」

「だって……きっとラグナさんが助けに来てくれるって信じてまし

たから」

ミストの頬が赤く染まり、その赤さがラグナにも伝染する。心臓がドクドクと激しく鼓動する。均衡を破ったのはチロリだ。雰囲気を感じたのかミストの膝を下りて木の上に登ってしまった。

ラグナはそれを見た後、ミストを見つめた。地面に置かれたミストの手に自分の手を重ねた。柔らかな手の感触に胸が震える。ミストの青い瞳は深い海のようなだった。その瞳に映る自分がだんだん大きくなる。抵抗しないミストの頬に空いている手を添えた。そしてゆっくりと顔を近づける。まるで青い瞳に吸い込まれていくようだった。もう少し……ラグナの緊張が絶頂に達したときだった。手は行き場を失い下に落ちた。ハッとして見ると、ミストの顔は真っ赤なリングのようだった。

「ラグナさんたら、冗談ばかり……」

「えっ!？」

「あ、そうだ! あたし、用事があつたんです。もう帰りますね」
立ち上がるとスカートについた草をパンパンと払った。そしてバスケットを持つと、そそくさと帰ってしまった。

残されたラグナは呆然とする。その足元にチロリがかけてきて、ラグナの肩に登る。まるで慰めるように首に擦り寄った。

21 すれ違い（後書き）

妄想全開と言った割に、ゲームの内容がうまくりです。申し訳ない。
こんなに遅くマンモーの子！？ という。
つじつまはあいませんが、お許しください。

22・交錯する

「今と繋がらない時代」からこちらの世界へ帰ってきた直後、ラグナとミストの二人はいい雰囲気になった。しかし、あることがきっかけでミストはどこかよそよそしくなった。いつものようにラグナをからかう素振りもなく、どちらかというと避けているようだった。

ラグナは、若草の遺跡にある畑の世話をしに行く途中、ミストの家に寄った。ミストは鼻歌を歌いながら花壇に水をやっている。ラグナはいつものようにミストに近づいて声をかけた。

「ミストさん、こんにちは」

ミストはラグナを見ると、びっくりと体を震わせた。

「こ、こんにちは、ラグナさん。今日もダンジョンですか？」

「はい。あの、よかったらお昼と一緒に食べませんか？」

ラグナの誘いにミストはバツが悪そうに目を伏せた。

「あ……ごめんなさい。お昼は他に約束しているので」

まただ。ミストは視線をキョロキョロとさまよわせている。以前だったら、両手を合わせて体をくねくねさせて喜んでいたというのに、最近は人が変わったようにおとなしい。

「そうですか。……もしかして、あのときのこと」

「い、いえ、あの」

あのときのことを思い出したのか、ミストはしどろもどろになってしまった。

「気にしないでください」

気にしないでとはどういう意味なのか。

ミストはあたふたと水やりを済ませると、家に入ってしまった。

名残惜しげに見ていたが、ミストは出てくる気配もない。諦めたラ

グナは若草の遺跡に入り、畑の手入れをすることにした。遺跡は穏やかな春の気候で、春の作物が栽培できる。特にイチゴは収入になるので常時栽培している。ラグナは真っ赤に熟れたルビーのようなイチゴを一つ一つ丁寧に摘んでいく。

収穫を終えて片隅で一休みしていると、草を採取していたチロリが戻ってきて、ラグナの前にちょこんと座った。しっぽをパタパタと嬉しそうに振って、ラグナを見上げている。

「ごくろうさま。ほら、イチゴ食べるかい？」

チロリの前にイチゴを置いてやると、それを前足で取ってモグモグと食べた。その様子を見ながら、ラグナもイチゴを口にした。甘酸っぱい味が口の中に広がる。

「ミストさんにカブを持っていくのかな」

畑の一角に実ったカブを見てつぶやいた。イチゴの他にカブも常に栽培している。もちろんミストのためである。

ラグナはカブを三つほど掘り出して、遺跡を後にした。そして、ミストの家の玄関前にカブを置いた。きつと、声をかけても出てこないだろうと思ったからだ。

ラグナが牧場へ戻ってくると、北のほうからセルフィが歩いて来るのに出くわした。セルフィはラグナを見つけると、手を振ってこちらへやってくる。

「こんにちは、ラグナ」

「こんにちは、セルフィさん。お出かけですか？」

「ええ。気分転換に散歩してるの。ねえ、ラグナ、おなか空かない？」

飢えた子犬のように濡れた瞳で見つめられる。空かないじゃなくて空いているんでしょうと聞きたくなる。ラグナはセルフィを食事に誘うことにした。

「これから食べるところです。一緒に食べますか？」

「やった！ 昨日から何にも食べてないんだよ。神さま、仏様、ラ

グナ様だね！」

ラグナはやれやれと肩をすくめると、水汲み場で手を洗い、セルフイを家に招き入れた。

ラグナはキッチンで手早くサンドイッチを作った。セルフィの好物である。それを彼女の前に供すると、セルフィは目を輝かせた。

「わあっ、サンドイッチ！ ラグナ、愛してるよ！」

そう言くと、サンドイッチを手づかみして食べ出した。なんて簡単に「愛してる」と言えるのだろうか。今のラグナはそんなことを冗談でも言える気がしない。ラグナはため息をつく、セルフィの向かい側に座り、サンドイッチを手にした。

「ちゃんと毎食食べなきゃだめじゃないですか」

セルフィはサンドイッチを食べるのをやめると、目をうつろにさせてこぼした。

「もういいよ。ラピスにも顔をあわせるたびに注意されてるから」
だったら、ちゃんと食べるよとラグナは心の中で突っ込んでみる。

しかし、あまり言うとな煙たがられるので口には出さないし、出会いが会いだけに突き放すことも出来ない。

「ラピスっていえば、ルーンアーカИБスに来るたびに『お片づけしなさい！』って怒るんだよ」

「そりゃそうですよ。どう見たって危ないですから」

ラグナはそう答えながら、図書室を思い出した。大量の本が本棚の前で山積みになされていて、足の踏み場もないほどである。

「ちえっ、ラグナもそう言うんだ」

セルフィはサンドイッチにパクつきながら、ラグナを上目遣いでじろりと睨んだ。

「あそこさ、以前住んでいたところよりは狭いけど、欲しいものに手が届く絶妙な広さなんだよね」

「あそこはけっこう広いと思いますけどね」

「そうかな？」

ルーンアーカイブスは村民が使うように一般の家より広い間取りになっている。それを狭いというなんて、いったいセルフィはどれだけ広いところに住んでいたのだろうか。

「セルフィさんの実家ってどんなところなんですか？」

何気ないことを聞いたつもりだったのに、セルフィは突然怒り出した。

「そ、そんなこと聞くんなんて、男らしくないぞ！」

「男らしくないって、どうして実家の話を聞くことが男らしくないんですか！？」

突然責められて、ラグナもむきになって言い返した。すると、セルフィも言い返す。

「じゃあ、ラグナの実家は？」

「僕は記憶喪失なんで、お答え出来ません」

「じゃあ、あたしもお答え出来ません」

ああ言えばこう言う……。呆れたラグナは食事に専念することにした。

しかし、セルフィはおしゃべりをやめる様子もなく、グラスに注がれたジュースを一口飲むと、身を乗り出した。

「それよりさ、ミストを助けるときのラグナ、かつこよかったよ」

あれは村の女性たちが助けてくれたおかげであって、自分一人のせいではないと考えるラグナは返事に困ってしまう。それに、かつこいいだなんて恥ずかしい。

そんなラグナを見ながら、セルフィは話を続けた。

「まるでさらわれたお姫様を助ける勇者様みたいでさ。そう考えてみると、お姫様ってのも悪くないよね」

「セルフィさん、お姫様に憧れるんですか？」

「あたし？ あたしはどつちかと言うと、魔王に憧れるな」

「魔王……ですか？」

魔王に憧れる女性っていったい何なのだろう。セルフィは生粋の悪女なのだろうか、とラグナが引いていると、セルフィは得意げに話

した。

「お姫様には飽きたし、騎士は本性知ってるしね」

「えっ？」

ラグナが聞き返した。お姫様に飽きるってどういう意味なのか。騎士の本性を知っているってどういう意味なのか。

ラグナが怪訝そうな表情を浮かべていると、セルフイはそれに気がついてハッと我に帰った。「い、いや、今のは忘れて！ あたし、何言ってるんだろ。本の読み過ぎかな」と苦笑いをしながら、サンドイツをつかんで口いっぱいに放り込んだ。

セルフイは不思議な女性である。まったく生活感がないのだ。炊事、洗濯、掃除など家事もしたことがないと言い、そのうえ着替えはあるか、風呂に入ることまで一人でしたことがないと話してくれたことがある。ビアンカのように大金持ちの娘なのか。だったら、なぜこんな田舎に一人で行き倒れていたのか。

なおも怪訝そうに見つめるラグナの視線に耐えかねたのか、セルフイは立ち上がった。

「ごちそうさま。じゃあね」と礼を述べると、逃げるように帰っていった。

午後、タバサからモンスター部屋が出来たと連絡を受けたラグナは、マンモーの子供を連れてビアンカ邸を訪れた。庭には噴水があり、立派な門構えの二階建ての豪邸である。

「こんにちは」

「いらつしやいませ、ラグナさま」

タバサがにこにこ微笑みながら奥から出てきた。その後、ビアンカも出てきた。

「連れてきてくれたのね」

ビアンカはマンモーの子供に近づいた。マンモーの子供は警戒していたが、そっと鼻先をビアンカのほうに伸ばしてきた。

「ビアンカさん、僕が押さえていますから、撫でてあげてください」

「わかったわ」

ビアンカは恐る恐る手を伸ばして長い鼻先に触れた。マンモーの子供はその鼻先でビアンカの匂いを確かめているようだ。

「大丈夫みたいですね。世話の仕方はタバサさんに聞いてください。僕よりタバサさんのほうが詳しいですから。ところで名前は決めたんですか？」

「フランソワーズよ」

「フランソワーズ……可愛い名前ですね」

モンスター相手に、なんて可愛らしい名前をつけるのだろうか。少々引きながらもラグナは言葉を選んで話した。ビアンカは得意げに答えた。

「私のペットですもの。高貴な名前じゃなくちゃ。お礼にお茶を飲ませてあげるわ。タバサの入れたお茶は最高なのよ」

「はい、ありがとうございます」

なんとという高飛車な……そうは思いながらもラグナはきちんと礼を述べる。そしてビアンカとともに別荘の一番奥まった場所に作られたモンスター部屋にフランソワーズを入れた。ビアンカはそのままフランソワーズの世話をすると部屋に残った。食堂の前では、タバサが手を前で組んで待っていてくれた。

食堂に入ると、見知らぬ少女がいた。耳のとがった褐色の肌の少女だ。その少女はタバサを見つけると、駆け寄った。

「お姉ちゃん」

「ミネルバ、今お客様がいらしてるの。ラグナさま、この子はミネルバ、私の妹です」

すると、ミネルバが大きな声を出した。

「お姉ちゃん！ どうしてこんなやつに『さま』付けなんてするのよ？」

「お客様にそういう口の聞きかたをしてはいけません」

「ミネルバだって、お客様じゃない」

「屁理屈言わないの！ ミネルバ、ご挨拶なさい」

「はい」

タバサに対して従順だったミネルバは、面白くなさそうにラグナをじろじろと見た。

「あたし、ミネルバっていうの。しばらくこの村にいるから」

「ミネルバ！」

ミネルバはタバサにたしなめられて、顔をしかめながら再度挨拶をした。

「よろしくお願いいたします」

「僕はラグナといえます。よろしく申し上げます」

ラグナは苦笑交じりに挨拶を返した。こんなタバサは見たことがない。身内には厳しいようである。ミネルバが挨拶を終えると、タバサはトレーにポットとカップを乗せてテーブルに運んできた。

「ラグナさま、今お茶を入れますね」

タバサがコポコポとカップにお茶を注ぐと、ハーブのいい香りが広がった。

「あつ、ミネルバの好きなお茶だ！」

「さあ、どうぞ」

タバサがいれてくれたお茶はとてもおいしかった。

「ミネルバさんは、トランルピアには旅行に来たんですか？」

「そうよ。お姉ちゃんのとこに遊びに来たの。ところでさ、あんたってお姉ちゃんの何なの？」

「何なのって言われても」

ラグナはそう答えると、タバサと顔を見合わせた。タバサはポットを上気させると、ミネルバをたしなめた。

「ミネルバ、そんなことを聞いてはお客様が困るでしょう」

「でも……」

「ラグナさまは、カルディアを救った勇者様なんですよ」

「へえ、ジョウロで帝国軍の戦車を追い払ったっていう？」

「タバサさん、言いすぎですよ。僕はそんなたいそうな人間じゃな

いですから」

ラグナはタバサを見て弁明した。ミネルバは何かピンときたようでカップをソーサーに戻した。

「ところでタバサさん、イチゴが豊作なんですけど、なにか良い保存法ってないでしょうか？」

「あら、今の時期イチゴですか？」

「ええ。遺跡の畑で作ってるんです」

「そうですねえ、やっぱりイチゴジャムでしょうか」

「イチゴジャムですか」

ラグナは、それは良いなと思った。

「作り方教えてもらえますか？」

「いいですよ。では、明日の午後お伺いしますね」

「よろしくお願いします」

こうして翌日はタバサとイチゴジャムを作る約束をしたのだった。

翌昼、タバサがやってきた。なぜかミネルバもいる。

「ごきげんよう、ラグナさま」

「こんにちは、タバサさん、ミネルバさん。今日はよろしく願います」

「はい」

タバサはにつこりと微笑んだ。

「では早速はじめましょう。イチゴはどこですか？」

「あそこです」

ラグナが指差した先にイチゴはあった。コンテナに四杯はあるだろうか。

「まあ！　すごい量ですね」

「別に全部作るつもりはありません。とりあえず作り方を教えてもらえれば」

「まあ、手間は一緒ですから作れるだけ作ってしましましょう」

タバサは鍋の用意を始めた。ラグナとミネルバはタバサに指示さ

れたように、イチゴを洗い、ヘタを取っている。

「ねえ、どうしてあたしがこんなことしなくちゃいけないの？」

「さあ？ 別にやらなくてもかまわないですよ。僕がやりますから」
ミネルバはラグナをじっと見ていたが、再びイチゴを洗い出す。

「ねえ、ラグナってお姉ちゃんやユーニみたいにお料理のできる子
が良いと思う？」

「そりゃまあ、出来ないより出来たほうがいいですけどね」

「やっぱりそうなんだ。参ったなあ」

「何が参るんですか？」

「だって、ミネルバの部屋にキッチンはないし、刃物は持てないし」
「僕のために作ってくれるんですか？」

「れ、練習台よ。未来のどんな様のためにラグナに協力してもら
うの！」

ミネルバは顔を赤くしながら大きな声で言った。ラグナは苦笑をし
ながらイチゴを洗う。からかって悪かっただろうか。イチゴを洗い
終わると、ミネルバはどこかに出かけていった。ユーニと約束して
いるらしい。

「終わりましたよ、タバサさん」

「ご苦労様です。じゃあ、鍋に入れてもらえますか？」

かまどに置かれた大鍋にザルのイチゴをあけた。タバサはその上に
砂糖をこれでもかというほど入れた。まるで大雪が降ったみたいで
ある。

「すごい量の砂糖ですね」

ラグナがびっくりした様子で口にとると、タバサが詳しく説明して
くれた。

「長く保存するためにたくさんの砂糖を使うんですよ」

「なるほど」

ラグナが納得すると、タバサはかまどに火を入れた。焦げ付かない
ようにコトコトと煮つめるそうだ。タバサはまだ忙しく動いている。
ジャムをつめる瓶を大鍋で煮ている。煮沸消毒だ。手際の良いその

働きぶりにラグナは感心するばかりだった。

「タバサさんは、何の勉強をしに留学されているんですたっけ？」

「人間とエルフとモンスターと……すべての種族の架け橋になれるよう、勉強するためです」

「すべての種族の架け橋ですか」

「はい。お嬢さまのメイドをしながら人間の世界について学んでいるんですよ」

「でも、いずれはエルフの国に帰られるんですよね？」

「ええ、そうなると思います……」

少し元気がなくなったタバサを見て、ラグナは心配になった。

「タバサさん、どうかしましたか？」

「いいえ、何でもありません。灰汁を取らないと」

そう言くと、タバサはお玉を持ってイチゴの鍋の前に立った。ラグナもタバサの横に立って、その作業を観察した。

出来上がったジャムを瓶に詰め終わると、もう夕方になっていた。

空は茜色に染まり、カラスが鳴いている。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。では私はこれで失礼いたします」

「あつ、タバサさん。これ持って行って下さい」

ラグナはジャムの瓶の入ったバスケットをタバサに差し出した。「ありがとうございます」と言ってバスケットを受け取るタバサの手がラグナの手に触れた。タバサは頬をポツと赤くして、手を引っ込めた。そしてもう一度ラグナの手に触れないようにバスケットを受け取った。

22・交錯する（後書き）

しばらくラブラブ話が続きます

23・セルフィのバイト

今日もぽかぽかと気持ちの良い日だ。ラグナは午前の作業を終えて昼食を作り、一人食べているところだ。ふとセルフィのことを思い出した。今日はちゃんと食べているだろうか。いや、きっと食べていないだろう。

昼食を終えると、おにぎりを作ってルーンアーカイブスへと出かけた。

セルフィは机で読書中だ。ラグナが入ってきたのにも気づかない。ラグナは肩をすくめると、机の上におにぎりの入った包みをトンと置いた。

「セルフィさん、こんにちは」

「ラグナ、こんにちは。あれ、もしかしてこれは差し入れかな？」

セルフィは机に置かれた包みを指差した。ラグナがこっくりとうなずくと、セルフィが顔をほころばす。

「やった！ 昨日の夜から何も食べてないんだよ」

答えながらセルフィはあくびをかみ殺した。

「またですか！？ まさか、寝てないんじゃない」

「いいんだよ。眠くなったら勝手にスイッチが切れるから」

目の前の女性はからからと笑っている。昨日、説教したというのに、暖簾に腕押しである。セルフィは猫が甘えるようにおねだりを始めた。

「ねえ、それより、本買ってくれない？」

「セルフィさん、もうお金使っちゃったんですか？」

当然ラグナは呆れるしかない。だいたい働いてもいないのにどうして本が買えるのか不思議なくらいだった。ラグナの杞憂にはお構いなしにセルフィはさらに懇願する。

「欲しい本があるんだよ。お願いだよ、助けると思ってたさ」

「でも、ここにある本って村のものでしょうか。勝手に売ったらまずいんじゃない」

「村の人に売るんだから問題ないでしょ。ほら、知識の泉がラグナを呼んでるよ」

セルフィが左手に本を持って、右手でラグナに向かって手招きした。結局セルフィに押し切られて、ラグナは料理と鍛冶とクラフトの本を買った。このことが後に大問題になるとは露ほども思わなかった。

それから幾日か後、ステラに頼まれた薬草を届けに教会に来たラグナは、扉に手をかけた途端耳を疑った。

「セルフィ！ あんたって子はなんてことをしてくれたんだい！」

「あ、でも、村の人だから問題ないかなって」

「あれは村民のものなんだよ。あんたの懐を潤すために置いてあったんじゃないんだよ」

「すみません」

「ステラさま、落ち着いてください。セルフィも謝って！」

どうやら中にいるのは、ステラとセルフィとラピスのようだ。セルフィが本を売ったことで怒られているらしい。ラグナは「やつぱり……」と肩をがっくりと落とした。こうなることはわかっていたのに、安易に本を買ってしまった自分にも責任がある。そう思ったラグナは、覚悟を決めて中へ入った。

「ステラさん」

「おや、ラグナかい。今、立て込んでいてね。用なら後で聞くよ」ステラは先ほどの怒鳴り声からは想像も出来ないほど、穏やかにラグナに返答した。でも、目の色から少々興奮しているのが見て取れる。

「あの、本なんですけど、僕も買いましたのでお返しします。だからセルフィさんを許してやってください」

「ほら、ラグナもああ言ってることだし」

「セルフイ！」

軽口を叩くセルフイを低い声で一喝して、ステラは呆れたような表情を浮かべた。

「セルフイ、返すお金はあるのかい？」

「……ありません」

「じゃあ、無理だね。そうだね、ラピス、どうしたらいいと思う？」

「そうですね。セルフイさんには働いて返してもらいましょう」

「えー！？ 私、働くの！？」

「当たり前です！ 『働かざるもの食うべからず』です」

ラピスがセルフイの不満をぴしゃりとはねつけた。そして今度はラグナを睨みつける。

「ラグナさんも甘やかさないください！」

とんだとばっちりである。ラグナは腑に落ちないものの、勝てる気もせず素直に「すみません」と謝った。

結局、セルフイは教会でステラやラピスの手伝いをする事になった。

その日からセルフイが教会で働く姿があった。礼拝堂を掃除したり、医務室でラピスの手伝いをしたり、墓地の掃除をしたりしている。セルフイに言わせると、初めての経験でとても楽しいそうである。休日の早朝のミサに参加したラグナは驚いた。あの宵っ張りのセルフイが頭にベールをかぶり、首にロザリオをかけて、ラピスの横に並んでしおらしく立っている。ラグナはそろりそろりと一番最前列に陣取った。ラグナと目が合ったセルフイがすました顔でささやいた。

「お祈りしてってくださいね」

ラグナがきよんとすると、セルフイは手で口元を隠しながら続けた。

「いや、ガラじゃないのはわかってるんだけどね。いいじゃん、やってみたってさ」

すると、ラピスがセルフィを見て咳払いをした。セルフィは舌をペロツと出すと、ラグナにウィンクをして何食わぬ顔をした。

ミサは滞りなく終わった。今日の仕事は終わったようで、セルフィがラグナに声をかける。

「ラグナ、行こう！」

セルフィはラグナの腕をとって礼拝堂を出た。どこへ連れて行かれるかと思っていると、着いた先は海岸だった。

セルフィは砂浜に來ると、靴を脱いで海に足をつけた。夏でも海水は冷たい。セルフィは足を引つ込めて笑った。

「着替えてくるね」

そう言い置いて、セルフィは着替え小屋に駆けて行った。それを目で追っていたラグナは、アレックスの湯でのセルフィの独り言を思いうす。

「あ、また大きくなってるよ。これ以上大きくなっても困るんだけどな」

あの時のことを思い出し、思わず赤面してしまう。「うわっ、バカバカ！」と声に出して自分の頭をポカポカ叩く。

そんなラグナの気持ちも知らずに、着替え終わったセルフィがやってきた。想像していたとおり、セルフィの胸は豊かでラグナは目のやり場に困った。

「どうしたの？　小屋、空いたから着替えてきたら？」

「はい」

ラグナは小屋へすっ飛んでいった。

「お待ちせしまし　ぷっ！」

もう海に入っていたセルフィが思いっきりラグナに水をかけた。それはモロにラグナの顔にかかる。頭からずぶぬれになったラグナは、

まるでわかめをかぶっているようだ。

「やりましたね……」

そう言うと、ラグナは反撃を開始した。セルフィに背中を向けて思い切り手で水をかく。水はセルフィめがけて津波のように襲い掛かる。男と女の力の差とは、こうも違うのか。

「わっ！　ちょ、ちょっと！」

セルフィの制止の声に、ラグナは手を止めて振り返る。そこには全身ずぶぬれのセルフィが呆然と立っている。それを見たラグナはほくそ笑んだ。

「おおいこですね」

セルフィは口をタコのようにとがらせるとラグナを睨みつけて、突然飛び掛ってきた。

「うわあっ！」

ラグナの悲鳴とともに、二人は海に倒れこんだ。息を吐く音がゴボゴボとする以外何も聞こえない海水の中で、ラグナはセルフィを抱え込んでいる。目の前にいる女性は金色の髪をゆらゆらとなびかせていて、話に聞いた人魚のように美しかった。

しばらくして、二人は火山が噴火したように海面へ飛び出した。そして顔をぬぐい、顔を見合わせると大笑いした。

遊びつかれた二人は、砂浜に並んで座った。海鳥の泣き声やさざなみの音がする。日は傾き始めて、空はオレンジがかっている。セルフィが海を眺めながらラグナに質問した。

「ラグナは海の方こうに行ったことある？」

「ないですね」

「あたしもだよ。本で読んだことはあるんだ。氷で出来た島とか、水の都とかすごく綺麗なんだって」

「行ってみたいですね」

「そう？　あたしは別に行きたいとは思わないな。本を読んでもか行つた気になるんだよね。なんてお得なんだろ」

さも嬉しそうなセルフィを横目で見ながら、ラグナは気づかれないようにため息をついた。そこで『行ってみたい』にならないのがセルフィのようだ。

ふと横を見ると先ほどとは打って変わって、セルフィはうつろに海を眺めている。

「大きな海を見ていると、ちっぽけなことで悩んでいる自分がバカらしくなるね」

ラグナはセルフィをまじまじと見てしまった。セルフィはなんだか能天気に行き来しているように見えていたからだ。

「セルフィさん、何か悩みでもあるんですか？」

「い、いや！ 悩みなんでないよ！ 何もない！」

セルフィは両手をバタバタと振って否定した。そこまで真剣に否定すると、あると言っているようなものである。でも、聞いて欲しくないのだから否定するのだろう。詮索するのをやめた。

「そういうラグナはどうなの？」

「僕ですか……そりゃあ、悩み事の一つや二つ」

「あるの？」

「まあ……」

ミストとうまくいっていないなんて相談できるわけもない。考えるとかなくてどうしようもなく辛かった。それもみんな軽率な行動のせいだろう。ラグナががっくりと頭をたらすと、セルフィが彼の肩をポンと叩いた。

「人間さ、どうしようもないことってあるよね。そんなときは死ぬつもりでぶつかってみるといいんじゃないかな」

「死ぬつもりですか？」

セルフィからなにやら物騒なセリフが飛び出した。ラグナがセルフィの目をまじまじと見ると、セルフィは偉そうにふんぞり返った。

「あたしなんてさ、死ぬ気で家出したわけだし」

「そうなんですか」

「そうよ。やっちゃったらかな何とかなるものね」

「へえ、無謀なんですね」

「何よ、無謀って!」

ラグナの反応に、セルフィは激怒した。ラグナは慌てた。つい思っていることをポロリとこぼしてしまう。最近それで失敗したばかりなのに……。この怒りの矛先をよそに向けるのはどうしたらいいか必死で考える。そしてひらめいた。この話題ならセルフィはぐうの音も出ないはずである。

「どうして家出したんですか？」

「うっ……」

案の定、セルフィは黙り込んでしまった。ラグナの作戦勝ちである。

「そろそろ帰りましょうか」

「そうだね。先に脱衣所を借りるね」

そう言ってセルフィは脱衣所に走っていく。

それを見送っていると、浜への入り口に人影を見つけた。その人影はさっと踵を返すと走っていつてしまった。色素の抜けた長い髪に赤いリボンが揺れていた。

「あっ、ミストさん……」

セルフィと二人でいるところを見られたらしい。あの様子では誤解されたのだろうか。本当にこちらに帰ってからついていない。ラグナは本日二回目の喪失感を味わった。

セルフィと分かれたラグナはそのまま宿屋へ夕食を食べに行った。

いつものようにリタに注文をし、空いたテーブル席に座った。グラスを持ってエリスがやってきた。

「いらっしやい」

「こんばんは、エリス」

「こんばんは。どうしたの？ 元気がないみたいだけど」

「ちよっと」

エリスは肩をすくめると、グラスを置いてカウンターへ戻っていった。

ぼんやりしながらグラスの水を飲んでいると、上からミネルバが降りて来るのが見えた。

ミネルバはラグナを見つけると、目をキラキラと輝かせて近づいてくる。

「あ、ラグナじゃない。こんばんは」

「こんばんは、ミネルバさん」

「一人？」

「はい」

「じゃあ、ミネルバ、座っちゃおうと！」

ミネルバはラグナの向かいの席に座った。

「ここってなんにもないのね」

「そうですね。手を加えられていない自然が売りです」

「うまいこと言うわね」

ミネルバはしらけたようにつぶやいた。そして運ばれてきた青汁を、ストローでクルクルとかき回している。それを見たラグナはひどく感心した。青汁なんて草臭いものを若い女の子が好むとは思わなかったからだ。ラグナも青汁は飲むが好んで買ったり作ったりしないアレックスの湯の知り合いのローランド老人がくれたときだけだ。

「ミネルバさんって青汁が平気なんですね」

「ん？ エルフは草食なの。ねえ、明日どこかへ連れて行ってくれない？」

「いいですよ。行きたいところはありますか？」

「デートコースは男の子が考えるもんでしょ！」

「デートですか！？」

「そうよ。ちゃんとエスコートしてね」

ラグナはミネルバに分らないようにため息をついた。デートに誘いたい相手は他にいるというのに、全然関係ない、それも幼女が相手なのだ。

「ラグナ、聞いている？」

「聞いてますよ。ミネルバさんはどこに行きたいですか？」

ラグナは再び行きたいところを聞いた。わがまま娘はそのときになつて「あつちに行きたかつた」などと言いかねないからである。ミネルバは「そうねえ」と、腕を組んで考え出した。

「この村を案内してもらおうかな」

「わかりました。じゃあ、九時に迎えに行きますから」

「うん、お願い。じゃあね、おやすみなさい！」

ミネルバは機嫌良く二階に戻っていった。それを見計らつたようにエリスが来た。

「ミネルバとデート？」

「はい。どういうわけか……」

「いいの？」

エリスは意味ありげに訊ねる。ラグナとしてはミストを誘いたところである。でも、最近踏んだり蹴ったりである。

「いいんですよ。ミストさんには避けられているし」

「何をしたの？」

「……何でもないです」

調子に乗っていきなりキスをしようとしたとは、とてもじゃないがエリスにだけは話せない。

24・褐色の小悪魔

ラグナは急いで仕事を片付けようとしたが、トマトが豊作で中々終わらなかった。ミネルバは怒っているかもしれないと思いつつも、トマトは待つてくれない。ようやくお手伝いモンスターが出てくる時間になったので、後を託して宿屋へ走った。

ミネルバは宿屋の前でむうつとして腕組みをしていた。

「遅い！」

「すみません、仕事が終わらなくて。じゃあ、行きましょう」「どこ？」

「まず、みんなの広場へ行きましょうか。今日は日曜日だから絵描きさんが来ているんですよ」

「ほんと？ ミネルバ、描いてもらおうかな」

どういうわけか機嫌が良くなった。けっこう乗り気である。

みんなの広場には、絵描きのルートがいた。長い髪に優しい顔立ちのせいで、最初エリックに女性と間違えられたらしい。

「おはようございます、ルートさん」

「おはよーさん。おや、そっちの子は」

「あつ、いつもお屋敷の前に立ってるお兄さん！ 絵描きさんだったんだ」

「ええと、ミネルバちゃんだったね」

「覚えてくれたんだ。ねえ、ミネルバの絵、描いてくれない？」

「いいよ。お代はラグナはんが払ってくれるんやな？」

「僕ですか？」

ミネルバは当然という顔をしている。ラグナは諦めて、「まけて下さいね」とルートに頼んだ。ルートは「スケッチだからたいした金

額にはならへんで」と笑った。そしてスケッチブックを取り出して描き始めた。時々ミネルバを観てはサラサラと鉛筆を動かしている。「さすがですね」

「おおきに」

ルートは人懐こい笑みを浮かべた。

「ほれ、出来たで」と言うと、ルートはスケッチブックから切り離して、ミネルバに渡した。

「じゃあ、ラグナはん。これだけお願いします」

ルートは片手を広げた。財布から五百Gを出すと、「ゼロが一個足りまへんで」と言われた。ラグナは、五千Gをルートに渡した。「毎度おおきに」とルートは言った。

「ありがとう、ルートさん」

ルートにお礼を言うミネルバに、礼を言う相手が違うだろうと心の中で突っ込むラグナだった。

「ねえ、ルートさん、トランルピア村で行っておいたほうがいいところってどこ？」

「そやなあ。ルピア湖なんてどうです？ とても綺麗で創作意欲を掻き立てられますよ」

「そうか。ラグナ、次はルピア湖ね。じゃあね、ルートさん」

「はいはい。お姉さんによろしく」

ルートはにっこり笑って二人を見送った。

ラグナとミネルバはルピア湖山道を歩いている。ラグナが前でミネルバが後ろだ。二人の距離はどんどんひらいていく。急に立ち止まったミネルバが大きな声で叫んだ。

「ラグナ、早い！」

ラグナが振り返ると、ミネルバはかなり下のほうでしゃがみこんでいた。

「ルピア湖はもうすぐですよ。頑張ってください」

「ミネルバ、もう歩けない！」

幼子のように駄々をこねて立とうとはしない。ラグナは呆れながらもミネルバのところまで戻ってきた。そして膝について様子を伺った。

「若いんだから、これぐらいでへばっていちゃだめですよ」

「お姉ちゃんと二つしか変わらないもん。それに足が痛いんだもん」

「じゃあ今度にして、もう帰りましようか？」

「いやだ！ ルピア湖に行きたいの！」

ラグナは閉口した。これがあの憤み深いタバサの妹かと疑うほどだ。でも、旅行で来ているのだし、時間もあまりないのだろう。ラグナは仕方なく、ミネルバに背を向けた。

「乗ってください」

「ありがとう！」

ミネルバが背中におぶされると、ラグナは立ち上がりルピア湖を目指した。

ミネルバは歩けないといった割には、かなり元気である。歌を歌ったり、おしゃべりしたり忙しそうだ。

「ねえ、ラグナはさ、お姉ちゃんのことどう思ってるの？」

「またそれですか？」

ラグナは少しうんざりした。どうも、ミネルバはラグナとタバサの関係が気になるらしい。

「良いお友達ですよ。タバサさんは優しくて憤み深くて尊敬できる人です」

「ふうん。ねえ、お姉ちゃんって仲良くしている男の人がいるのかな？」

「さあ？ そういう話はしませんし、噂でも聞きませんね」

「そっか」

「そんなに気になるんですか？」

「うん」

そんな話をしながら山道を登りきり、橋を渡ると、目の前にルピア湖が見えてきた。ルピア湖は日の光を浴びて湖面がキラキラと光っ

ている。ラグナはミネルバを下ろしてやった。ミネルバは元気な様子で湖に近づいた。

「綺麗！ エルフの森の湖にも負けなくらいだね」

湖を眺めていたミネルバは棧橋にボートがつながれているのを見つけた。

「ねえ、ミネルバ、ボートに乗りたい！ ラグナ、乗せてよ」

「はいはい」

二人目のわがままお嬢さまが降臨したようだ。ラグナはミネルバを乗せてボートを漕ぎ出した。キラキラと光る湖面をボートはすいすいと滑っていく。ボートを果物の生る岸につけると、ラグナは先を下りた。そしてミネルバの脇に手を入れて抱き上げて下ろしてやった。ミネルバは大きく息を吸い込んだ。

「いい香りがする」

「今の季節はオレンジが実るんですよ。少しいただきましょうか」

「うん。ミネルバが採ってあげる！」

ミネルバは木の下まで行くと一生懸命手を伸ばした。しかし、実は高いところにあって、ぴよんぴよんと跳ぶものの手が届かない。「採れないよ」とべそをかいているミネルバの足元で、ラグナは馬になってやった。その上に乗って実を数個採ったミネルバは上機嫌である。

「ありがとう。こんなに採れたよ」

「じゃあ、カットしましょうか」

ラグナは一個もらうと起用に切り分けた。一切れミネルバに渡すと、ミネルバは実にかぶりついた。甘くてすっぱい味が口の中に広がってさっぱりする。

「おいしい！」

それを見てラグナは微笑んだ。

「残りはタバサさんにお土産にしたらどうですか？」

「うん、そうする。お姉ちゃん、喜んでくれるかな」

「ミネルバさんはタバサさんが大好きなんですね」

「うん、ミネルバ、お姉ちゃん大好き。綺麗で優しくて頭が良くて料理も上手で、理想の女性なの」

「タバサさんの料理は本当においしいです」

「ラグナ、食べたことあるの？」

「ええ。タバサさんは毎日うちのモンスターたちを見に来るんです。そのときにいろいろおすそ分けをいただきます」

「ふうん」

ミネルバは意外だと言わんばかりの表情を浮かべた。

二人はビアンカの別荘へ向けて歩いていくところだ。

「お姉ちゃんが帰ったら、ミネルバが代わりにここに留学しようかな」

「何を勉強するんです？」

「そうねえ。アクセサリーの製作とか？　ラグナ、暇なときは遊んでくれる？」

「いいですけど」

「やった！」

話をしていると、ビアンカ邸の前に差し掛かった。門のところではタバサが立っている。二人を見ると、にっこり笑った。

「ラグナさま、ごきげんよう」

「こんにちは、タバサさん」

「お姉ちゃん、ミネルバ、ラグナに村を案内してもらってたの」

「まあ、ラグナさま、お忙しいのに申しわけありません」

「いいえ、こんなに可愛い子の相手をさせてもらって光栄ですよ」

「まあ、ラグナったら正直なんだから」

ミネルバは至極ご機嫌である。タバサは何か思い出したようで、「ちよつと待ってくださいね」と言うと、別荘に入ってしまった。そして包みを持って出てきた。

「先ほど作ったんです。良かったらどうぞ」

「いつもありがとうございます」

二人の様子を見ていたミネルバはタバサに擦り寄った。

「お姉ちゃん、ラグナばかりずるい！ ミネルバのは？」

「貴方は後であげますからね。さあ、中に入ってお茶を入れてあげましょう」

「わあい！ ミネルバ、お姉ちゃんのいれるお茶大好き！」

タバサはミネルバの操縦法を会得しているようである。

日はもう暮れてあたりは暗くなってきた。ラグナはミネルバとタバサに見送られて歩き出す。食事をしに宿屋へ行くと、アレックスの湯から出てくるミストを見かけた。急いで走って行って声をかけた。振り向いたミストは突然現れたラグナにびっくりしたようだった。明らかに気まずそうなミストの素振りに、ラグナの気分は坂道を転がり落ちるようにながった。でも、このチャンスを逃す手はない。

「ミストさん、話があるんです」

「あの、私急いでいて……」

「お時間は取らせません」

ミストはバッグを持ったままうつむいている。どうしようか迷っているのか。すると、何かを思い出したようで顔を上げた。

「そういえば、玄関にカブを置いていつてくれたの、ラグナさんですか？」

「はい」

「ありがとうございます。急ぎますので、失礼します」

ミストは頭を下げて行こうとする。ラグナは慌ててミストの手をつかんだ。

「待ってください。この間のことは謝ります」

「手、離してください」

ラグナはハツとしてミストの手を離れた。取り付く島もない。とにかく避けられているのだ。ラグナの胸がしめつけられるように痛む。からかわれたこと、小麦粉事件、病気になったとき、負傷して看病してもらったとき、いろんな思い出が頭をよぎる。あれは全部幻だ

ったのだろうか。あのころ、ミストはラグナを慕ってくれていたはずだ。それが今は話もしたくないほど嫌われて……。せつかく気づいた気持ちなのに、もう諦めるしかないのだろうか。

これ以上嫌われないために、そんな思いがラグナにこんなことを言わせた。

「ミストさん、僕はもう声をかけないほうがいいでしょうか？」

ミストはびっくりした様子でラグナを見つめた。バッグをぎゅっと胸に抱えこんでいる。

「あの、あたし、どんな顔をしてラグナさんに会えばいいのかわからなくて」

「やっぱり、あの時のことですね？」

「はい」

うつむきかげんに答えるミストに、ラグナは謝るしかなかった。

「すみません。そんなにミストさんに嫌われていると思ってなくて」

「あの……」

ミストは否定してくれなかった。心臓に剣を突きたてられたら、こんな感じなのだろうか。モンスターにやられても味わったことはない絶望感。慟哭してこの場から去りたい気分だった。しかし、振り絞るように謝罪の言葉をつづる。

「これからはお隣さんとして節度ある行動をしますから……許してください」

ミストの顔を見据えると、頭を深々と下げた。体を起こすと、踵を返してその場を去ろうと歩き出す。そのとき、背後からミストの声がした。

「違います！」

ラグナは振り返りミストを穴の開くほど見つめた。何が違うのかわからない。

「嫌じゃないです。でも、あまりに突然で、びっくりして」

ミストはラグナの顔をチラチラと見ながら告げた。

「それに、ラグナさんは女の子に人気があるから」

「そ、そんなことはありません」

「うそ。この間もセルフイさんとデートしていたじゃないですか」
ラグナが弁明しようとする、ミストはそそくさと帰っていった。
残されたラグナは真っ赤な顔をしてミストの後姿を見つめている。
「嫌じゃないです」という言葉だけが頭の中でぐるぐる回っていた。

番外編 追う者と追われる者

それはトランルピアが夏を迎えた頃だった。

牧場の畑の草取りを始めた。まるで恋わずらいにかかっている乙女が花占いするように、ぶちぶちと草を抜く。ちょうど、ラグナはエリスが気になって仕方のない頃である。

どれくらいたっただろうか。ラグナは声をかけられた。振りかえりと立っていたのは白い短髪を逆立てたがっしりとした体格の若い男だった。その男はラグナに向かって言い放った。

「その髪、その瞳、こんな所にいたのか。こんなところで、のんきに暮らしやがって！」

ずいぶんとなれなれしい男だ。人違いでもしているのだろうか。そう考えたラグナは素直に訊ねた。

「どちらさまですか？」

「おい、ウェーバー」

ウェーバー？ ラグナはきょとんとした。その様子を見て、男は怪訝そうな顔をした。

「いや、今は別の名を名乗っているのか。おい、貴様！ 名前はなんという？」

「ラグナです。はじめまして」

「ここではそう名乗っているのか。ふっふっふ。まあいい、すぐにこのウェーグナー様が、貴様を村から追い出してやる。いいか、絶対にここにいられなくしてやる。はーっはっはっはー！」

ウェーグナーと名乗った男は高笑いをすると、去っていった。

一方、ラグナは困惑していた。自分を知っているらしい男が現れたのだ。記憶喪失のラグナには、彼とどんな因縁があったのか思い出せなかった。

その夜、ラグナはベッドの中で昼間のことを考え込んでいた。カルディアでのゼークスとの戦いのとき、敵の指揮官だったリネットは言った。

ゼークス帝国はノーラッド王国のカルディアという町の外れにあるグリード洞窟でグリモアを発見した。グリモアとは神竜ネイティブドラゴン族の一頭、地幻竜プロテグリードの幼名だ。帝国はグリモアを戦争の道具にしようとしたくらいでいた。そしてグリード洞窟でグリモアを目覚めさせるためにあらゆる実験をしていた。しかし、どうやってもグリモアは目覚めなかった。研究の結果、グリモアを目覚めさせることが出来るのは選ばれたアースマイトだけだということがわかった。それがラグナだ。帝国は以前から、アースマイトとして特別な資質のあるラグナに目をつけていた。帝国の目的を告げれば、ラグナが拒否するのは目に見えている。それなので、ラグナを拉致し、薬を使って記憶を奪い、カルディアに放置した。行く当てもないラグナは計画通りカルディアに住み着いた。そして思惑通りにダンジョンを開拓し、モンスターと戦った。そのルーンエナジীর一部がグリモアへと流れ込んだ。そしてとうとうグリモアは覚醒した。ラグナはグリモアをはじめりの森に帰すために戦う。そのときリネットは、もう記憶を取り戻すことは出来ないと言い放ったのだ。

何もかもが終わったとき、ラグナは考えた。もう以前の記憶が取り戻せないのなら、カルディアの農夫ラグナとして生きようと決めた。そしてこれまで来たのだ。それが、以前の自分を知っている人間が現れた。それはどちらかというと、あまり好ましくない感じた。ラグナをどこかに無理矢理にでも連れ戻そうとしている。

うつらうつらし始めた頃、玄関の戸が激しく叩かれる音がした。誰だろうか。寝ぼけ眼をこすりながら上着を羽織ると、玄関まで行き、戸を開ける。

「どちらさまですか？」

誰もいない。寝ぼけているのだろうか。疑うこともせず、ラグナはあくびをしながらベッドに戻った。

翌朝も畑の世話をしていると、いつの間にか牧場の西側の道にワーグナーが腕組みをして立っていた。どうもラグナを監視しているようだった。ラグナは何も考えず、ワーグナーに声をかけた。

「こんにちは、ワーグナーさん」

すると、ワーグナーは鼻で笑った。

「けっ、涼しい顔しやがって。さっさとこの村から出て行ったらどうだ」

またである。何でこの人は自分をトランルピアから追い出したがるのだろうか。ワーグナーは不思議で仕方がなかった。

「そういえば、おまえ、昔仕事中に、この仕事が終わったら、田舎にこもって牧場をしたいって言ってたらしいな」

「僕が？」

記憶喪失前の自分は牧場をしたいと言っていたようである。ミストに押し付けられたから農業をしているのだが、根本的に自分が望んでいたことなのか。

「記憶喪失のふりか？ そんなで同情を引こうとしたって無駄だからな」

捨て台詞を残して、ワーグナーはどこかに消えた。

一体自分とワーグナーの間に何があったのか。まったく思い出せない。すると、クロスがこちらに歩いてくるのが見えた。

「クロスさん、こんにちは」

「やあ。人の気も知らず、恨めしいくらいの日差しだね」

「そうですね」

「ラグナ君、お隣さんと話してたみたいけど」

「ワーグナーさんですか？ なんか僕のことを知っているみたいなんですけど」

ラグナはクロスにワーグナーとのいざこざについて話して聞かせた。すると、クロスが殺気をまとった。初めて会ったとき以来である。「そう。何かあったら僕に言って。お隣さんのしたことは僕が責任を持つよ」

ワーグナーのことをクロスが責任を持つとはどういうことなのだろうか。納得がいなくて訊ねる。

「どうしてクロスさんが責任を持つんですか」

「いいんだよ」

それだけ言つと、クロスは元来た道を帰って行つた。

どこの誰ともわからぬ真夜中の訪問は一週間続いた。温厚なラグナでも頭にくる。その夜待ち構えることにした。ノック音がしたとき、返事をせずに戸にそつと近づき、ガバツと開けた。すると、走り去るワーグナーの後姿が目に入つたのだ。

「ワーグナーさん？」

彼が訪問者なのだろうか。

きさまをこの村から追い出してやる

それがこの行動の意味なのだろうか。

翌日、雑貨屋に花の種を買いに行くと、ラグナの顔を見た途端、口ゼツタがたいそうな剣幕で怒り出した。

「この前、あんたの畑の出荷箱をのぞいたら、岩ばっかり入ってたわよ。全部出すの、すつごく大変だったんだから！」

「ええ！？ ボク知りませんよ」

「もうこんなことしないでよ！」

口ゼツタにこつぴどく怒られたラグナはしょんぼりしながら帰ってきた。身に覚えのないことで怒られると、釈然としないためかスト

レスになる。

牧場に戻ると、いつもの場所にワীগナーが立っているのが見えた。ラグナが軽く頭を下げると、聞いてもいないのにワীগナーがしゃべりだした。

「ふっふっふ。出荷箱に岩を入れるとはとんでもないワルだな」

「えっ!？」

「おまえみたいなやつはここから出て行けばいいんだよ！早く出て行けよ！　はーはっはっはっ!」

愉快そうにいつもの高笑いをしている。どうやらワীগナーの嫌がらせだったようだ。

その後もワীগナーの嫌がらせはエスカレートしていった。

畑にゴミや瓦礫を撒き散らされたり、玄関の前に大岩を置かれたりした。

それでもラグナはワীগナーと仲良くなろうと努力した。顔を見れば声をかけるし、彼の大好物がアップルパイだとわかると、時々作っては差し入れた。

村人に話を聞くと、ワীগナーは悪い人間ではないようなのだ。子供たちと遊んでやつたり、村人が困っていると手を貸しているらしい。

そんなある日、畑を見てラグナは大声を上げた。

「うわっ!」

畑の真ん中にゴーレムが居た。機械音を響かせて、ラグナに照準を合わせている。

「大変だ！　でも畑の中では武器は振れないし、どうしたら」
ラグナが対処に迷っていると、ゴーレムは不気味な音を立てて、なぜか自滅した。

「え……　今のはいったい」

さすがに人を疑うことのないラグナでもいいかげん頭にきた。むっとしてワীগナーのところへ向かった。

「ワーグナーさん！ 畑にモンスターを放ったのは、ワーグナーさんですか？」

「な、何言ってるんだよ。俺がそんなことするわけ」

ワーグナーに否定されると、ラグナは自分の思い違いかと反省した。元来人を疑うこととかなしいほうである。相手が否定しているのだからそうなのだろう。そう思ったラグナは素直に謝った。

「そうですか。疑ってすみませんでした」

すると、今度はワーグナーが顔をこわばらせた。

「ど、どうしてそんなにすぐ信じるんだよ」

「どうしてって、ワーグナーさんじゃないんですよね？ 信じますよ。だってワーグナーさんも村の仲間ですから」

「仲間！？ くっ、俺は……」

ワーグナーは口ごもると、自分の家に入ってしまった。

それから一ヶ月ほどして、ラグナ宛にワーグナーから手紙が届いた。「ワーグナーさんだ。どれどれ」と手紙を読み出したラグナの表情が厳しいものに変わっていく。手紙は果たし状だったのだ。

明日、若草の遺跡にて待つ。

ラグナは手紙を握り締めた。

若草の遺跡へもぐる。いつものように野生のチロリのお出迎えだ。それを適当にあしらって奥へ進む。丸い円形状のステージにはワーグナーがいた。

「よく来たな」

「どうしたんですか？ それに果たし状って」

ラグナが困惑を隠しきれずに詰め寄ると、ワーグナーは、ラグナに止まるように手を突き出す。

「俺は、お前を倒してこの村からおまえを追い出す」

「なぜ、そんなことを？ 僕を村から追い出して、ワーグナーさんに何の得があるんですか！？」

「問答無用！ いでよ、ゴーレム！」

ステージの床面からゴーレムが沸いてくる。

「モンスター！？ あのキカイは……」

明らかに、色艶、質感がいつもゲートから出てくるモンスターとは違った。あれは、確かカルディアでゼークスが連れていたキカイだ。「ゆけ。ゴーレム、あいつを倒せ！」

ワーグナーはラグナに指を突きつけた。ゴーレムはワーグナーの命令どおり動き出す。しかし、どういうわけかゴーレムの腕が当たり、ワーグナーは隣のステージに吹っ飛ばされた。

「ワーグナーさん！？」

ワーグナーを助けに行きたいが、目の前のゴーレムはそれを許してくれそうにない。どうすればいい。考えながらもラグナは剣を構えた。そのとき、別の気配がした。それはワーグナーの倒れているステージからだ。ラグナが振り返って見てみると、そこにいたのは大工のクロスだった。クロスはワーグナーの様子を見て言った。

「気を失っているだけだ。彼のことはボクに任せて、君はモンスターを！」

「わかりました。ワーグナーさんをお願いします」

ラグナはゴーレムに注意を戻す。ゴーレムは戦車型にその体を変形させ、ラグナに照準を合わせていた。ハッと気づいて横に飛ぶ。その瞬間、主砲がラグナめがけて放たれた。大地が震えるような地響きがする。白い煙の向こうに、剣を構えたラグナがいた。雄叫びを上げると、ゴーレムに突っ込んでいく。迎え撃つゴーレムは腕を回してラグナを待ち構えている。ラグナが突き入れると、ゴーレムは腕を振り回した。ラグナはその手前でジャンプしてゴーレムの頭の上に飛び降りた。そしてざっくりと剣を突き刺した。ゴーレムの体から煙が立つ。ラグナはゴーレムから距離をとった。すると、ゴ

ーレムは両腕をラグナに向かって突き出した。そして肘から先の部分を発射した。目にも留まらぬ速さで飛んだそれは、ラグナに命中した。ラグナが悲鳴をあげた。腕はゴーレムに戻り、再びラグナを狙う。「まずい」ラグナがそう思ったとき、ゴーレムは轟音を立てて崩れ落ちた。

「あれ？」

ラグナは自滅したゴーレムを見て、呆然とするしかなかった。まあ、自分が幸運だったのだろうとおもうことにする。大きく肩で息をすると、剣をさやにしまった。

ゴーレムを倒したラグナは医務室に駆けつけた。医務室にはワীগナーが寝台に寝かされ、クロス、ラピス、ステラが見守っていた。

「ワীগナーさんの様子はどうでしょうか」

ラグナが訊ねると、ラピスが教えてくれた。

「今は眠っています。さいわい怪我はたいしたことありません。しばらく安静にしていればすぐ元の生活に戻るでしょう」

ラグナは安堵してほっと胸をなでおろした。

そんなラグナにステラが怪訝そうな顔で訊ねた。

「ラグナ、いったい何が起こったんだい？」

すると、クロスが代わりに答えた。

「すまない。すべてボクの責任なんだ」

ラグナはどうしても納得がいかない。どうしてワীগナーのことになる、クロスが申しわけなさそうに謝るのか。

「クロスさん、どうしてクロスさんが謝るんですか？ ノックのときも岩のときも自分が責任を持つたなんて」

「そんなことがあったのかい」

ステラは驚いて口にした。クロスはラグナをチラッと見て告げた。

「彼、ワীগナーは、おそらくゼークス帝国の特殊工作員だ」

ゼークスと言う言葉にラグナとラピスは驚いた。ついこの間まで住んでいたカルディアでゼークスの侵攻があったからだ。

ステラは再び怪訝そうな表情を浮かべてつぶやいた。

「ゼークス帝国の作業員とやらが、どうしてこんな田舎に？」

するとクロスがまるで御伽噺のように語り始めた。

「数年前、一人の兵士が軍から脱走した。彼はゼークス帝国の特殊作業員のトップだったが、人をだまし、傷つける仕事に嫌気がさしたんだ。彼は辺境の村に流れ着き、そこで土をいじりながら静かに暮らすつもりだった。しかし、ゼークス帝国は甘くはなかった。彼の持つさまざまな情報が外に流れると非常にまずいと考えたのだろう。追っ手を差し向けた」

ラグナが思いついて口にした。

「その追っ手がワীগナーさん？」

クロスは大きくうなずいた。

「ああ。しかし、彼は決定的な間違いを犯していた。彼はラグナ君をその脱走兵だと思い込んでしまったのだ。本当の脱走犯は別にいるというのに」

そのときだった。

「そんなバカな！」

眠っていたと思っていたワীগナーが叫び声を上げた。ラピスが驚いてワীগナーをたしなめた。

「ワীগナーさん、あまり大きな声を出すと、体に響きます」

しかしワীগナーは聞き入れず、クロスを詰問する。

「本当の脱走犯だと？　なら、こいつは、ラグナはいったい何なんだ！」

クロスが静かに告げた。

「彼は一般人だ」

納得がいかないワীগナーはなおも食い下がる。

「しかし、手配書には確かに黒い髪と青い瞳、剣術に優れるとクロスがうつむいた。」

「そう、同じ条件に当てはまる人間がもう一人、この村にはいるだろっ？」

ワグナーはそう言ったクロスを見てはたと気がついた。

「まさか……」

「そうです。元ゼークス帝国特殊工作員ウェーバー。それがボクのかつての名前なんだよ、ワグナーくん」

クロスはワグナーをしつかり見て告げた。

ワグナーは信じられないように首を横に振り続ける。

「そんな、なら、今までの俺の行動は何だったんだ！」

ワグナーは一人で混乱している。

「そんな、ことが……すまないが、一人にしてくれ」

ラグナたちはワグナーを残して外に出た。

「すみません。ご迷惑をおかけして」

「いや、あんたも訳ありだと思っただけ、兵隊さんだったとはね」

「身の振り方はこれから考えますので」

そう言う、クロスは帰っていった。

この事件は終わったかに見えた。しかし、またラグナの家のポストにワグナーからの手紙が届いていた。果たし状だった。

俺の倒すべき相手はおまえだ。次はモンスターに頼らず、自身力で戦う。若草の遺跡の一階で待つ

ラグナは手紙を握り締めたまま若草の遺跡へ走った。

「ワグナーさん」

「よく来たな、感謝するぞ」

ワグナーは不敵に笑みを浮かべた。ラグナは食い下がる。

「どうして戦わなくちゃいけないんですか？　ボクたちに戦う理由なんて」

「おまえとの勝負をつけないと、俺はもう一步も先に進めないんだよ！」

「ワグナーさん」

そばにはクロスもいた。クロスはラグナに向かって話し始めた。

「ラグナ君、ボクからもお願いだ。彼の願いを聞いてやって欲しい。人間誰しも引けないときというものはあるんだよ。彼にとって今がそのときなんだ。わかって欲しい」

ラグナは納得がいかなかった。ラグナにとって戦いとは意味がなければするものではないのだ。しかし、クロスが言ったように、ワグナーにとってはラグナと戦うことに意味があるらしい。

「わかりました。受けて立ちます」

「ありがたい。全力でいく。だからおまえも」

「はい！」

ワグナーは剣を抜いた。ラグナも剣を抜く。じりじりと相手の出方を見定めている、先に動いたのはワグナーだった。ラグナから離れて距離をとると、剣を頭上に構えて、飛び掛ってきた。まるで人間ドリルである。ラグナはわずかに外して難を逃れる。そして振り向きざまに一撃を入れた。しかしワグナーは爆転をして交わした。

「やりますね」

「おまえもな」

そう言うと、ワグナーはラグナに切りかかってくる。ラグナもそれを剣で受ける。鋭い金属音が鳴り響く。さすがに現役の兵士であるワグナーは動きが機敏だ。しかし、ラグナだって今まで何度も死線をくぐり抜けてきた。

ラグナは後ろに飛びのいて距離をとる。そして名刀達刃を取り出し中段に構えた。そしてぴたりとワグナーの喉下を狙う。ワグナーは動くことが出来なくなる。蛇に睨まれた蛙のようだ。

遺跡のコケホッホーが鳴いた。それをきっかけに動いた。二つの影が交錯する。ばたりと倒れたのはワグナーだ。ラグナは刀を振り

ぬいていた。

「ワグナーくん！」

びっくりしたクロスがワグナーに駆け寄った。ラグナは刀をひゅつと払った。

「峰打ちです」

ワグナーはゴロリと転がると、地べたに仰向けになった。

「負けた、俺の完敗だ」

そうつぶやくと高笑いをした。

「だが、どうだろう。この清々しさは……全力でやったんだ。後悔はしていない」

ラグナがワグナーに近寄った。なかなかいい戦いだったと思う。全力を出し切った相手に手を差し出す。ワグナーはニツと口の端をあげると、ラグナの手を取って立ち上がった。

「今まで迷惑をかけた。上にはこの辺りにはターゲットはいなかったと報告しておこう」

ワグナーの言葉にクロスは驚いた。

「いいのか？ 他の人が来てボクが見つかったら、君の立場が悪くなる」

「今まで隣にいて気がつかなかったんだ。他の誰かが来て気づくとは思えないね」

ワグナーはまたもや高笑いをした。

「じゃあな、ラグナ。落ち着いたら手紙書くぜ」

そう告げると、二人を残して歩き出した。ラグナは寂しいような気持ちに駆られた。村の仲間だと思っていたワグナーが去るのだ。思わず声をかけた。

「ワグナーさん！ お元気で」

「おまえもな」

ワグナーは手を高く上げると左右に振った。

ワグナーの姿が見えなくなると、クロスがラグナに話しかけた。

「ラグナ君には迷惑をかけたね。なんとお詫びをすればよいか」

ラグナはにっこりと笑った。

「迷惑なんてとんでもない！ 誤解が解けたんです。良かったですよ。それに、クロスさんのこと、少しは分かったような気がしますね。さ、村へ帰りましょう」

ラグナはクロスの背中を押した。

ラグナの家の前に差し掛かったとき、クロスがつぶやいた。

「ボクはね、生まれ変わったらモンスターになりたいと思っていたんだ」

「そう言っていましたね」

ラグナが以前のことを思い出して、相槌を打った。

過去のクロスとの会話の中で、彼がいかに不憫だったか伺える。人に裏切られ、信じられなくなり、人に頼らず一人で生きてきたこと。ゼークスの影におびえ、目立たないように生きてきたこと。

クロスは澄み切った青い空を見上げてつぶやいた。

「でも、今は生まれ変わったらまた畑仕事をしたい。君と話そうちにそう思うようになったのさ」

クロスはニヤツと笑みを浮かべると、ゆっくりと帰っていった。

25・デート

若草の遺跡に入り、畑の手入れをする。一面赤く染まっているのはイチゴ畑だからだ。真っ赤に熟れたルビーのようなイチゴを一つ一つ丁寧に摘んでいく。

一通り終えて片隅で一休みしていると、草を採取していたチロリが戻ってきて、ラグナの前にちょこんと座った。しっぽをパタパタと嬉しそうに振って、ラグナを見上げている。

「ごくろうさま。ほら、イチゴ食べるかい？」

チロリの前にイチゴを置いてやると、それを前足で取ってモグモグと食べた。その様子を見ながら、ラグナもイチゴを口にした。甘酸っぱい味が口の中に広がる。

この間のミストの言葉がまだ頭の中をぐるぐるとめぐるっている。きっと、彼女も自分のことを好いてくれているに違いないのだ。ただ、急ぎすぎただけ。そう思っても、どこをどう攻めたらいいのかよくわからない。他のことは器用にこなすのに、恋愛となるとうまくいかないものだ。

そのとき、ひゅっと足元の地面に寸鉄が突き刺さる。飛んできた方向を見ると、ワグナーが立っていた。

「のんびりイチゴなんか食ってる場合か」

「ワグナーさん……」

「ラグナ、おまえに決闘を申し込む」

まただった。あれ以来、ワグナーはことあるごとに再戦を挑んでくる。魔法の効かないワグナー相手に剣を交えることは、修練になるので歓迎なのだが、敵意をもたれるのは心外である。

いつものように一戦交えたと、二人とも地面に寝転がった。

「くそっ、また負けた！」

肩で息をしながらワグナーが怒鳴った。そして顔をラグナのほうに向けてつぶやいた。

「でも、おまえ、今日はおかしいな。隙が多すぎだ」

「そうですか？」

「おお。技の切れも悪いしな。何か悩みでもあるのか？」

ラグナは黙っていたが、思い切って聞いてみることにした。なんと
いってもワグナーのほうが年上で経験も豊富なような気がする。

「ワグナーさんって、恋人いるんですか？」

「恋人！？ い、いるに決まってるだろう。どうしてそんなことを
聞くんだ？」

ラグナは、本当かなと疑いつつも、ミストとのかをつい吐露して
しまった。もうわらにもすがりたい気分だったのだ。

話を聞いていたワグナーは高笑いをすると、こう答えた。

「女好きのラグナさんが女を落とせなくて落ち込んでるってか？」

笑わせるな」

「女好きって、ひどくないですか？」

「事実だろう？ 村中の若い女たちに貢ぎまくって、点数を稼いで
いたのはどこのどなたですかってんだ」

「あれは、友好を深めようと思って。ワグナーさんにもアップル
パイを差し上げたじゃないですか」

「おう、そうだった。お袋の作るものに劣らず、うまかった」

ワグナーはラグナの作ったアップルパイの味を思いだし、舌なめ
ずりをした。

「でもな、もしおまえのことを本当に好きな女なら、そういうのは
面白くないと思うがな」

「そんなもんですか？」

「そんなもんだ」

ワグナーが胸を張って答えた。どうやら心当たりがあるのだろう。
「他の女なんかにかまってないで、好きな女だけに尽くしてみたら
どうだ？ 誠意を見せるしかないだろう。とりあえず『おまえだけ

が特別だ』って思わせないとな」

「そうですね。そうしてみます。ありがとうございます」

ラグナが礼を述べると、ワーグナーは高笑いをしながら去っていった。ラグナは遺跡を出ると、種を買うためにエリック農場へ向かった。

エリックが畑から農場のショップに戻ってくると、ラグナが商品棚の前で立っているのが目に入った。しばらくの間、様子を見ていたがいつこうにエリックに気がつかないし、一点をぼうつと見ているだけで種を選んでいる様子も無い。怪訝に思ったエリックはラグナの肩をポンと叩いた。

「よお、若者！ どうした？」

びくつと肩を震わしたラグナは振り返ってエリックを見た。

「エリックさん、お邪魔してます」

「顔色が優れないな。何か悩みがあるのか？ お兄さんが聞いてやってもいいぞ」

「べ、別に悩みなんて」

エリックはラグナの肩をがしつと抱えた。

「俺は若者の何なんだ？」

「お兄さんです」

「そうだ。実の兄のように思ってくれと言ったはずだ」

「はい」

「さあ、話してみないか」

エリックが親切心を全面に出してラグナの顔色を伺っている。この調子では話すまで帰してくれないだろう。しかし、きっとこの話題は地雷になる。そんな気がしたが、ラグナは諦めて口にした。

「実は、ミストさんをデートに誘おうと思ひまして」

ラグナの言葉を聞いてエリックは石化したかのように固まった。平静を装ってエリックは作り笑いを浮かべた。

「そ、そうか。それで、どこへ行くんだ？」

「夏なので、ルピア湖でボートに乗ろうかなと思っているんですけど」

「ボートか。ルピア湖は涼しいからな。いいんじゃないか」

「そうですね！」

ラグナは水を得た魚のように目を輝かした。

「デートの準備って何が必要でしょうか？」

「そうだな、アイスなんか用意したらどうだ？」

「さすがエリックさん。気がつきませんでした」

「ま、まあ、俺は経験を積んでいるからな」

エリックの笑顔が引きつっている。彼はまだ一度も女性をデートに誘ったことはない。

エリックに太鼓判を押されて、ラグナは意気揚々とミストの元へ向かった。

「ミストさん、一緒に出かけませんか？」

庭で花の水やりをしていたミストは手を止めた。頬をポツと赤く染めると、恥ずかしそうに訊ねた。

「デート、ですか？」

「はい、暑いですし、ルピア湖に避暑に行きませんか」

「いいですね。ぜひ一緒にさせてください」

「では、十三日の正午にルピア湖の船着場で待ち合わせましょう」

「はい。楽しみにしてますね」

ミストから色よい返事が得られる。ラグナは浮き足立って帰っていた。

当日、ラグナは胸を躍らせてルピア山山道を走っていた。急げば五分前にはつくはずである。船着場が見えてきた。途中、ニヤニヤとこちらを見ているステラに軽く会釈をしてミストのもとへ急いだ。ミストは髪の毛を手で押さえて、キラキラ光る湖を眺めていた。声をかけると、振り向いてにっこり笑った。

ラグナは岸につながれたボートに乗り込み、ミストに手を差し伸べた。ミストはその手をためらいがちに取った。触れた手が妙に熱い。ミストを座らせると、ラグナはボートをこぎ始めた。水面をすーっとボートが進んでいく。ミストは風を受けてなびく髪を押さえながら、ラグナを見つめた。ラグナも危ないというのにミストを見ていた。キラキラと金の糸のようなミストの髪がとても綺麗に見えた。真ん中に浮かぶ小島に上陸した二人は地面に咲く花々に見入った。あたり一面ピンク色に染まっている。

「涼しい。ここだけ世界の色が違うみたいです」

「そうですね、来てよかったです」

たたずむミストをラグナは目を細めて見ていた。なんて綺麗なんだろう。あんなにミストを避けようとしていた自分が嘘みたいだった。ラグナがうつとりと見とれていると、ミストが手をポンと叩いてラグナのほうを見た。

「そうだ、今日のためにお弁当を作ってきたんです。食べてください」

「本当ですか？ 嬉しいな」

草の上に腰を下ろすと、ミストがバスケットから弁当箱を取り出した。ふたを開けると、目の飛び込んできたのは黄金色のオムライスだ。差し出されたスプーンでオムライスを食べる。その様子を、固唾を呑んで見守っていたミストは、たまりかねて口を開いた。

「どうですか？ おいしいですか？」

「はい、おいしいですよ」

「本当ですか？ 早起きして作ったかいてありました」

ミストは嬉しそうに両手を合わせた。実は、少々塩が効き過ぎているようではよっぱい。でもミストの言葉に、ラグナの心は震え上がった。自分のために早起きして弁当を作ってくれる。あのミストがそんなことをしてくれるとは思っていなかった。

普段は話さないようなことを話していると、時間はあつという間だった。

ミストを家まで送り、帰ろうとするとミストが礼を述べた。

「ありがとうございます。楽しかったです」

「喜んでもらえて僕も嬉しいです」

ミストは上目遣いでラグナを見ると、こう言った。

「また誘ってくださいね」

「はい。ではおやすみなさい」

大きな声で叫びたくなるほど嬉しかったが、ぐっところえる。走って自分の家まで来ると、ラグナは「やった!」と思いつきり叫んだ。

それからのミストはラグナを過剰に意識することなく、以前のよう
に牧場に遊びに来るようになった。

番外編 食べられた夢

ラグナはセルフイへの差し入れをバスケットに詰めていた。そこへミストが遊びに来た。窓の外を見ると雨が降り出していた。

「こんにちは、ラグナさん。お出かけですか？」

「はい、ルーンアーカИБスに行くんです。ミストさんもいかがですか？」

ミストは首を横に振った。

「遠慮しておきます。」「人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ」って慣用句が東洋にはあるそうです。うづきさんに教えてもらいました」

「どういう意味です、それ？」

「他人の恋愛を邪魔するようなことは、無粋の極みだから、往來を歩いていると、人にも馬にも蹴られるだろうよ、ということだそうです」

「それで、どういう意味です？」

「ラグナさんなんかもう知りません！」

ミストはわなわなと手を震わせると、家を出て行った。残されたラグナは何のことだかさっぱりわからずにいた。あとで、博学のセルフイに教えてもらおうと軽く考えていた。

ラグナは、差し入れを持ってルーンアーカИБスを訪れた。扉を開けると、セルフイが一心不乱に読書しているのが目に入る。声をかけて入ったはずなのに、当の本人は一心不乱に本を読んでいる。ラグナは苦笑をもらしながら近づいた。

そのとき、セルフイの読んでいた本の中から黒いゲートが飛び出した。それを見たラグナはハッとして腰の剣に手をかける。次の瞬間、セルフイがその黒いゲートに吸い込まれた。

「セルフィさん！」

ラグナは机に駆け寄った。そこにはセルフィの姿はなく、本が一冊落ちていただけだった。それは、以前セルフィが初めて手にする本だと言い張っていたものだ。ラグナはその本を手にとってパラパラとめくる。すると、先ほどと同じ黒いゲートが飛び出してきて、ラグナはそれに吸い込まれた。

放り出された場所はゆらゆらと空間がゆがんでいた。ルーンアーカイブスにあった本棚がふわふわと宙に浮いている。そこにもセルフィの姿はなく、目の前にはバッファモーターが群がっている。その中に一匹だけ色の違うものがいた。そいつがラグナを睨みつけている。

「セルフィさんをどこにやった!？」

ラグナがそのモンスターに問いかけた。しかし、モンスターが答えるわけもない。こうなればいつものパターンである。この場にいるモンスターをやっつけるしかない。ラグナは剣を抜いた。

次々と突進してくるモンスター交わしながら、色の違うモンスターを目指す。そいつは他のモンスターをラグナに向かわせるだけで、自分は突進してこない。この場のボスは、色違いのモンスターだ。ラグナは手当たり次第にバッファモーターを蹴散らしていく。

すべてのバッファモーターが消えた後にセルフィが倒れているのが見えた。

「セルフィさん！」

ラグナは駆け寄って、セルフィを抱き起こした。「うん」とうなづいて目をしばたたかせたセルフィはラグナを見ると、目を丸くしたかと思うと顔をほころばせた。

「会いたかった！」

「セ、セルフィさん!？」

セルフィはラグナの首に手を回し胸に顔を寄せた。ラグナは突然抱きつかれてびっくりした。

「ずっとお待ちしていました。やっと迎えに来てくださるなんて」
セルフィの目はとろんとしている。どうやら誰かと間違えているようだ。

「あの、貴女は？」

「まあ、ひどい！ セルフィアス・ジョゼフィーヌですわ」

セルフィの本名のようなのだ。苗字があるということは、良い家柄の人間なのだろう。大方予想はついているが、念のためにセルフィとの間柄を訊ねてみる。

「失礼ですが、僕とあなたの関係は？」

「何をおっしゃるの！？ わたくしたちは将来を誓い合った仲ではないですか」

セルフィはしゃがみこんで顔を手で覆ってしまった。どうやらモンスターに幻覚を見せられているようである。ここは話をあわせておこうと考えた。

「セルフィアス、ここは本の中の世界です」

「本の中！？ まあ、素敵！」

いつもとは違うセルフィに、ラグナは少々辟易しながら話を続ける。

「モンスターを倒さない限り、元に戻れないかもしれません」

「まあ、どうしましょう」

「ここにはいません。とにかく探しに行きましょう」

「はい」

セルフィの手を取り、どんどん奥へ進んでいく。時々振り返ると、セルフィは頬を赤く染めている。そんな恋人が居るのに、どうしてトランルピアになんて来たのだろうか。

どれだけ進んでも、どこにもたどり着かない。同じところをぐるぐる回っているような気がする。とうとうセルフィが根を上げた。

「公爵、セルフィアスはもう歩けません」

「困りましたね」

ラグナはセルフィの前でひざまずいた。すると、セルフィが両手を

差し出した。

「どうかしましたか？」

「抱っこしてください」

「えっ？」

「早く」

公爵と言う人はセルフイをかなり甘やかせているようだ。ラグナは呆れたが、夢の中のセルフイは言うことを聞きそうにもない。仕方なく脇と膝の下に手を差し込んでひょいっと抱き上げた。

すると、セルフイはラグナの首に手を回した。嫌な予感がしたラグナは恐る恐るセルフイに訊ねた。

「今度は何です？」

「いつものして」

「いつもの？」

セルフイは目をつぶると、ラグナに顔を近づけてくる。これはキスを要求されているのか。絶対にまずい。お姫様相手じゃ火遊びにもならない。それに、万が一ミストに知れたら生きていけない。

ラグナが焦っていると、セルフイはパチツと片目をあけて催促した。
「早く」

ラグナは困ってしまった。キスしなくてもいい理由を一生懸命探す。

「あ、セルフイアス。僕は今虫歯なのです。うつるといけないからやめておきましょう」

「そうなの？ お医者様には行った？」

「いいえ。帰ったら行きます」

何とか急場をしのいだラグナはほっと胸をなでおろした。

行き止まりまで来ると、後ろの道がなくなった。ラグナはセルフイを静かに下ろした。

「どうやらモンスターのお出ましのようです。セルフイアス、僕から離れないでください」

「はい」

セルフィはラグナの後ろにぴたりと寄り添う。辺りに白い霧が出てきた。その中から、あの牛のようなモンスターが現れた。ラグナは星降る杖を取り出して構えた。セルフィを抱えながらでは剣は振れない。魔法で一気にかたをつけようと試みた。杖を大きく振りかざし、呪文を唱える。すると、宙から火に覆われた隕石がモンスターに向かって降り注いだ。モンスターは逃げ惑うものの、隕石は降り続く。あっけなくモンスターが倒れると霧は晴れた。

セルフィはラグナの後ろで気絶していた。ラグナはセルフィを寝かせたまま、何度も呼びかけた。セルフィの眉がぴくぴくと動いたかと思うと目を覚ました。

「あれ？　ここはどこ？」

「セルフィさん、大丈夫ですか」

「ラグナじゃん。どうしたの？　ここはどこ？」

いつものセルフィである。どうやら夢から覚めたらしい。

「やっと元に戻りましたね。ここはセルフィさんが読んでいた本の中です」

「本の中？　おお、すごい！　あたし、本の中に入るのって小さいころからの夢だったんだ」

事態の重大さに気づかずはしゃぐセルフィに、ラグナは呆れた。

「ああ、そうなんですか。それでどうですか、本の中に入った感想は？」

セルフィは、ぐると辺りを見回すと苦笑いを浮かべる。

「うーん、何もなくてつまらないね。やっぱり本は読むのがいいよ」

「そうですね」

この人はなんて幸せなんだろう。こっちは大変だったっていうのに……　そう思うと、ラグナはいじめたい衝動に駆られた。

「ところで、公爵って誰なんですか？」

「へっ!？」

セルフィの顔がだんだん赤くなる。どうやら本当の話のようだ。さ

つき困らされた仕返しをしよう。面白くなったラグナはさらにセルフィをあおった。

「ずいぶん情熱的でしたね。セルフィさん」

「あ、あたし、何かした？」

今まで赤かった顔が、今度は青ざめてきた。

「お姫様抱っこをしてくれと言ったり、キスをねだったり」

「わーっ、やめて！」

セルフィは耳をふさいでうずくまってしまった。ラグナは笑いをこらえるのに必死だった。こんなセルフィは見たことが無い。

「抱っこはしましたが、キスはしてませんよ」

ラグナは涙を拭き拭き教えた。そしてリュックからハーブティを取り出すと、セルフィに渡した。セルフィはそれをごくごくと飲んで「ラグナ、聞いてくれる？」と言った。

「あたし、北の国の第一皇女なの」

「第一皇女って、次期女王ってことですか！？」

ラグナが驚いて訊ねると、セルフィは力なく微笑んだ。

「周りは、『おまえは跡取りだ。皇女は慎ましくしなさい』ってがんじがらめで窮屈で息をするのも辛くって。だから城を出た」

「よく許してくれましたね」

「やだなあ。黙って出て来たに決まってるじゃない」

ラグナはミネルバが話してくれたことを思い出した。「北のほうのどこかの国で、世継ぎのお姫様が突然居なくなっちゃったってお話」

それはセルフィのことかもしれない。どおりで、セルフィは着替えや風呂も一人で入ったことがないはずだ。ようやく合点がいった。

「あたしは、将来を誓い合っていた男性がいたの」

「公爵さんですね」

「そう。でも、お父様は認めてくれなかった。それに隣の国から婿をとるって言い出して」

「政略結婚ですか。公爵さんが心配しているんじゃないですか？」

「公爵は忠誠心の厚い人なの。お父様に反対されて、もうあたしのこととは諦めるって。一生そばで家来として仕える……」

最後まで言い切らないうちにセルフィは顔を手で覆ってしまった。ラグナはついこんなことを言ってしまった。

「僕、公爵の気持ちが分かるような気がします」

セルフィは顔を上げてラグナを見た。

「セルフィさんの幸せを願っているから身を引いたんだと思います。本当にセルフィさんを愛しているから、セルフィさんの幸せを陰ながら守ろうと思ったんじゃないでしょうか。」

「ラグナ……」

「セルフィさん、僕に言いましたよね。死ぬつもりでぶつかれば何とかなるって。もう一度、王様と話し合ったらどうですか？ 王様だってセルフィさんに幸せになってもらいたいはずです。公爵さんがそんなに立派な人なら女王になったセルフィさんを支えてくれるはずです」

「ありがとう」

セルフィは目をゴシゴシとこすると、ラグナをじっと見つめた。

「……もう帰ろうか」

「そうですね」

セルフィにラグナの意図が伝わったか分からない。二人は本の世界を後にした。

「ふむ。それはバクというモンスターの仕業じゃな」

ここは時計塔、カンロの研究部屋である。本の世界から舞い戻ってきた二人はカンロに先ほど体験した不思議な出来事を話して聞かせたところである。

「バク？」

カンロはあごひげをさすりながら、大きくうなずいた。

「記憶を食べるモンスターじゃ。人が興味を持つ姿に化け、油断したところで取り込み、記憶だけを食ってもとに戻すのじゃ」

「それで読んだ本のはずなのにきれいさっぱり忘れてたんだね。参ったね」

カンロの話を聞いたセルフィは相変わらず能天気で、カラカラと笑っている。そんな彼女をカンロは眉をひそめて見た。

「それほど危険なモンスターではないが、どんな被害が出るかわからん。これは燃やしてしまおう」

「そうですね。それがいいと思います」

ラグナとカンロが合意していると、セルフィが慌てて割り込んできた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ こんな珍しい本を燃やすなんてんでもない！ 本の神さまに怒られちゃうよ」

「しかし、この本をこのままにしておくわけにもいかんぞ。そうじやな……」

カンロは腕組みをして考え込んだ。

「ラグナ、これでいいかな？ どう、曲がってない？」

ここはルーンアーカイブスのセルフィの自室である。セルフィは額縁を壁にかけているところだ。額縁には、あの本が入れられている。「大丈夫ですよ。魔法で時間を止めてモンスターを眠らせるカンロさんのアイディア、うまく行きましたね」

「うん、本も燃やされずに済んだし。もっとも私としてはこの本も読んでみたかったんだけどね」

セルフィは嬉しそうに額の本を眺めていたが、不意にラグナを振り返った。

「近いうちに城に戻ってみる。それでお父様と話し合ってみる。ひよっとしたらもうトランルピアに帰れないかもしれないけど」

「僕たちはどこにいても、いつまでも友達ですよ」

「うん。招待するからみんなで城に遊びに来て」

セルフィは晴れ晴れとした表情をして答えた。

ラグナはルーンアーカイブスに来る前にミストとやり取りしたこと

を思い出した。

「セルフイさん、教えて欲しいことがあるんですけど」

「何？」

「『人の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られて死んじまえ』ってどういう意味です？」

「ああ、それはね、他人の恋愛の邪魔をするようなことはやめておけてことよ」

セルフイに説明されて、ラグナは顔から血の気が引いた。これはミストに誤解されているということか。

「誰に言われたの？」

ラグナはこれを言われたときの様子をセルフイに説明した。セルフイは気の毒そうな顔をして「もう、差し入れしてくれなくていいよ」と言った。

26 犬さんへの手紙

ミストが教会からルーンアーカИБスへの道端でたたずんでいた。いつものことなのだが、今日は様子がおかしい。ラグナは不思議に思って声をかけた。

「ミストさん」

「あら、ラグナさん」

「何を見ているんですか？」

「時計塔です」

ラグナも時計塔を見上げた。ミストがさらわれ、大変な思いをして帰ってきたのは、もうずいぶん前のことである。

「懐かしいですね」

「犬さん、どうしているんでしょうか」

「魔法生物のことですか？」

「はい。犬さんがあっちでうまくやっているか心配なんです」

ラグナに対しては小悪魔のようなミストだが、モンスターや子供にはとても優しいところがある。とても心配そうに顔をゆがめるさまに、なぜか嫉妬心が芽生えてくる。少しは自分にも優しくしてくれないだろうか。

すると、ミストは何か思いついたようで手をポンと叩いた。

「そうだ！ 手紙でも書いてみましょう」

「手紙ですか？」

また厄介なことを思い付いたミストに、ラグナは小さくため息をついた。

「カンロさんに聞いてみないと」

「じゃあ、ラグナさん、聞いてきてください」

「僕ですか？」

「はい」

ミストはいつものようにしれつと返事をした。こうなると手に負えない。ラグナはきびすを返して時計塔へ走っていった。

カンロは時計塔の一階の作業場で研究をしていた。

「カンロさん」

「おお、ラグナか。何かの？」

「ミストさんが今とは繋がらない時代に手紙を送りたいそうなんですけど」

ラグナの話に、カンロは目を見開いて驚いた。

「何！？ あの扉を開きたいというのか」

「はい」

カンロの驚きように、やはり無理があるよなと思わざるを得なかった。カンロはあごひげを触りながら顔をこわばらせる。

「あまりあそこの入り口を開けたままにしておく、世界の境界があいまいになり、どんな影響が出るかわからん」

「そうですね、やっぱりだめですね」

ほら、やっぱり。あそこへ行くためにどれだけ苦労したことか。それに、あの時代はそっとしておいたほうがいい。

「じゃが、手紙やプレゼントを一回送る分にはかまわんじやろ。一回ぐらいならな」

「仕方ありません、ミストさんにはだめだって……ええ！？ 良いんですか？」

今度はラグナが驚く番だった。

「ミスト嬢は、あの場所には特別な思い入れがあるじゃろっからな。手紙くらい大目に見よう」

カンロのえこひいき炸裂である。自分が言ったらきつと認めてくれないだろう。少々呆れながらラグナは礼を述べた。

「あ、有難うございます ミストさんに伝えてきます」

ラグナは急いでミストの元へ走った。

「ミストさん、手紙くらいならいいとカンロさんが言っていました」
ミストはたいそう喜んでいる。

「まあ、そうですね。じゃあ、私は早速手紙を書きますね　ラグナさんはプレゼントを用意してくださいね」

ラグナはミストの言葉に耳を疑った。

「プレゼント？　それは初耳なんですけど」

「あら、ラグナさんはプレゼントを知らないんですか」

ミストは白々しく説明し始めた。

「プレゼントとは、親しい人やお世話になった人に感謝の気持ちを込めて、何かを差し上げることですよ」

「いや、それは知ってますけど」

「知っているなら話は早いです。ラグナさん、プレゼントを考えてあたしに渡してください」

「はあ」

問答無用である。自分勝手なミストにため息をつくしか出来ない自分に泣いた。

魔法生物は何を喜ぶだろう。モンスターは飼葉を好むが、あいつは何を食べているのだろう。犬だということだから、首輪がいいだろうか。そう思い、首輪を作った。それを持ってミストのところへ向かった。

しかし、ミストのお眼鏡にはかなわず、却下された。

「そうですね。たとえば、見たことも無いような特別な花。何かすてきだと思いますよ」

「また無茶な相談を……」

見たことも無い花なんてどこから探して来ればいいのだろう。相変わらず無茶苦茶なミストに頭を悩ませた。

雑貨屋のロゼッタに訳を話して訊ねてみたが、一笑に付される。

「見たことも無い花なんて売ってないわよ」

「そうですよね」

ため息をついたラグナを気の毒そうに見ながらも、ロゼッタはからかった。

「あんたも大変ね。ミストのどこがいいのよ」

「別にどこって訳じゃないんですけど……」

からかいがないのないうラグナに呆れるロゼッタは少し嫉妬もしていた。なんてったって、自分も勤勉なラグナのことは気になっていたからである。ましてや、相手があのミストだと思うと、どうしても納得がいかないのだ。

そんなロゼッタの気持ちにも気づかず、ラグナは雑貨屋を後にした。

もうやけになって、探すのは諦めて、ダンジョンの畑の世話をしに行く。最下層の畑まで来た。その先の扉は若草の遺跡のボスがいた間だ。懐かしくなつて扉に手を触れる。もう主のいなくなつたそこはがらんとしていた。あれこれ思い出しながら散策した後、その間を後にする。出口のところに種が落ちていた。拾い上げて見てみる。しましま模様の細長い形の種だった。

「こんな種、見たことも無いや」

とりあえず育ててみることにした。見たことのない花が咲けば、万々歳である。

世話のかいがあつて、これまでに見たこともない美しい花が咲いた。ラグナはそれを丁寧に摘み取り花束にしてミストに持っていった。

「ミストさん、お願いしますね」

「まあ、綺麗なお花ですね」

ミストは花束を受け取ると、怪訝な顔をした。

「ひどいです、ラグナさん。いくらあたしが配達のアルバイトをしているからって。贈り物は自分でお渡しになつたらいかがですか？」
また、からかわれている。ラグナはむっとした。

「それはミストさんに頼まれたプレゼントですよ」

ミストはおかしそうに笑った。

「わかってますよ。さっきのは冗談です。ちょうど手紙を書き終わったんです。一緒に時計台に行きましょう」

ミストは手紙と花束を台座の上に置くと、時計台の台座の前に立った。

「では始めますね」

ミストは胸の前で手を組むと、精霊歌を歌い始めた。歌の調べに乗って台座が輝きだした。すると、手紙と花束はすっと沈み、消えた。「これで大丈夫なはずです」

ミストはそんなこともわかるのかとラグナは驚いた。やはりミストという女性は謎めいている。でも、その心優しさのおかげで精霊と心を通わせることが出来るのだろう。見ているラグナも心が温かくなって、表情が自然に優しくなる。

「喜んでくれるといいですね」

「そうですね。帰りましょうか」

ミストはそう言うのと、台座を下りた。

ミストにお礼をしたいといわれて、ラグナはミスト宅に来ている。もう日が暮れて、外は赤く染まっていた。ミストはというと、上機嫌でキッチンに立っている。いくばくかの不安を抱えながら、ラグナはじつと席についていた。時々、ミストの手元を覗き込みながら、小さくため息をつく。明らかにキッチンから焦げ臭い匂いが漂ってくるのだ。

「ミストさん、何かお手伝いしましょうか？」

「大丈夫ですよ。ラグナさんはお客さんだから、座っていてください」

その数十分後、テーブルに並べられたのは、ラグナが想像していたのとは全然違う料理の数々だった。あの匂いからどうしてこの料理が並ぶのか見当もつかない。やはりミストは謎だらけだ。

「ささ、食べてくださいね」

「はい、いただきます」

スプーンを手にしたラグナは恐る恐るスープをすくう。そして口をつける。見た目は綺麗だが、やはり焦げ臭い。ラグナは黙々と食べ続ける。ミストが食べる手を止めてつぶやいた。

「犬さん、どうしてますかね」

ミストは料理の味については何とも思わないらしい。

「家族がいるって言っていましたから、きっと幸せにしているんじゃないでしょうか」

「そうですね。精霊さんに犬さんのことはお願いしておきましたし」

「ミストさん、そう言ってましたね」

「はい。もう一度会いたいです」

「ミ、ミストさん！」

「わかってます。今とは繋がらない時代なんですもんね」

ミストはさびしそうにつぶやいた。出来ることなら連れて行ってやりたいが、それは無理である。こうやって思い出話に付き合うしか出来ない。

「ところで、どうしてミストさんは精霊と話せるんですか？」

ミストはラグナを見つめていたが、顔をくしゃっとゆがめる。

「さあ、どうしてなのでしょう。物心ついたときからです」

「へえ、すごいですね」

「たまに精霊さんが教えてくれるんですよ。ラグナさんが他の女性と仲良くしてるって」

「ええっ!？」

「ふふっ、冗談ですよ」

冗談に聞こえないから恐ろしい。

数日後、時計台の台座をのぞいてみると、青い封筒が落ちていた。差出人を見ると、ミストと自分宛になっている。

「なにになに」

ラグナは封を開けて手紙を読み始めた。

『お花とお手紙有難うございます。僕は家族たちと楽しく暮らしています。』

ジェルバインさんもようやくなじんできたようで、毎日畑仕事を手伝ってくれます。

あれ以来僕の体はルーンを吸収しなくなったみたいです。

ミストさんの言ったことが本当になってしまつて、僕も驚いていますこの間、実つた作物に、ついにルーンが出来ました。

こちらの世界も少しずつ元に戻っているようです

こちらは何とかやっていけそうなので、ラグナさんもミストさんも僕のことは心配しないで、そちらの世界で楽しく過ごしてください』

あのモンスターが皆と仲良くやっているのが目に浮かんだ。いつもはモンスターをはじめりの森に帰すために、ラグナはモンスターに剣を突き立てる。それは命を奪うことではないといえ、気分のいいものではない。今回はそういうことをしなくてもモンスターは幸せにしているのだ。よかった、心からそう思うラグナだった。そして手紙を心待ちにしているだろうミストの元へ走った。

ラグナは家の横で花壇に水やりをしているミストに封筒を差し出した。

「ラグナさん、そんなに慌ててどうしたんですか？」

「手紙に返事が届いてましたよ」

「本当！？」

ミストは封筒を受け取ると、急いで手紙を取り出し、読み始めた。読み終わると、なんともいえない安堵した表情で手紙を抱きしめた。

「よかった。元気でいるみたいですね」

「ええ。ルーンを吸収する体質も治ったみたいですし、よかったですね」

「ええ、本当に！」

ミストにしては、ていねい語を使えないほど興奮している。よほど嬉しかったのだろう。

27・王位継承

宿屋でラグナが夕食をとっていると、ミネルバが二階から降りてきた。

「ラグナーっ！」

「こ、こんばんは、ミネルバさん」

ミネルバはラグナの腕をとった。

「ラグナはミネルバのこと嫌いになっちゃったの？」

「そんなことないですよ」

「だって、なかなか来てくれないんだもん。ミネルバ泣いちゃうところだったよ」

ミネルバは人目もはばからずラグナにベタベタする。そんな二人の様子をエリスは白い目で見ている。当のラグナは小さくなるしかない。

ラグナはちよくちよくミネルバに呼び出されて一緒に出かけていた。ラグナとしても人懐こいミネルバを妹のように思っている。それにタバサにはいつも世話になっていたのでその妹のミネルバを可愛がった。しかし、最近ミストとの関係が良好になって、ミネルバの相手をすることが減っていたのだ。

「ねえ、お願いがあるの。ラグナからもお姉ちゃんに家に帰るよう言つてよ」

「突然どうしたんですか？」

「ミネルバ、お姉ちゃんを連れ帰るためにここに來たの。でも、お姉ちゃん、なんかグダグダ言ってるんだもん」

「何か訳があるかもしれませんし、タバサさんとちゃんと話をしたらどうですか？」

「じゃあ、ラグナ。明日の朝、ビアンカの家に来て！」

ミネルバに押し切られたラグナは、翌日ビアンカ邸を訪問すること

になった。

「お姉ちゃんは、ビアンカやこっちの世界のほうが大事で、ミネルバやエルフの国がどうなってもいいんだ？」

「そんなこと言ってないでしょ。今はまだ帰れないって言うてるだけじゃない」

「じゃあ、いつ帰ってくるの？ エルフの国には今女王がいないのよ。いつまでもおばあたちに任せられないでしょ！」

ラグナがビアンカ邸を訪れたとき、エントランスではタバサとミネルバが激しい言い合いをしていた。姉妹喧嘩よりも迫力がある気がする。

「二人とも落ち着いてください！」

「ラグナさま」

「どういことですか？ エルフの国がどうなってもいいのかとか、女王がいないとか」

「お姉ちゃんはエルフの国の女王なの」

「タバサさんが女王！？」

「そう。お姉ちゃんは、エルフがモンスターとドワーフと人間の架け橋になるための勉強をしにこっちに留学しに来たの」

ミネルバはタバサのほうを向いて詰め寄った。

「でも、もうエルフもモンスターも人間もうまくやってる。それなのにどうして帰ってこないの？」

「ミネルバ、ごめんなさい。まだ帰れない、帰りたくない」

「お姉ちゃん……ビアンカのほうがそんなに大事なの？ あんなただの人間にどうしてそこまで肩入れするの？」

ミネルバは、手をぎゅっと握り締めて立ち尽くしている。なぜ姉はかたくなに帰ることを拒むのか理解できない。

「何を騒いでいるの？」

頭上から声がした。ビアンカだった。高く結った巻髪を手で払うと、階段をしゃなりしゃなりと下りてくる。

「ミネルバ、あなた、私のことをただの人間って言ったわね。私は偉いのよ。偉いから、タバサを雇っているの。どこがただの人間よ！」

「何にも知らないくせに……お姉ちゃんは、本当はあんなんかが気楽に口を聞ける相手じゃないんだから」

「ミネルバ！」

タバサがミネルバを制止した。しかしミネルバの怒りは収まらない。「お姉ちゃんはエルフの国の女王様なんだから！」

ミネルバの声がエントランスに響き渡った。タバサはうつむいてしまい、ビアンカは混乱した頭で必死に考えをまとめようとしている。「タバサがエルフの女王？　嘘でしょ」

「嘘じゃないもん」

「そんなの信じられない。タバサは私のメイドなのよ。女王様のはずないじゃない。ねえ、タバサ、嘘でしょう？」

ビアンカの表情はだんだん凍り付いていく。タバサが反論しないからだ。ビアンカにとって、タバサはメイドである前に大事な存在だからだ。そのタバサがエルフの女王だとしたら、今の関係はなくなるかもしれない。

そんなビアンカの期待を裏切るように、タバサは真実を告げた。

「ミネルバのいうとおり、私はエルフの女王です」

「タバサ……」

ビアンカは呆然とした。タバサはそんなビアンカに向かって微笑みかけた。

「でも、その前にお嬢さまのメイドです」

その場はしんと静まり返った。どれぐらい時間が止まっていたのか。不意にタバサがラグナに向かって話しかけた。

「ラグナさま、お願いがございます」

「何でしょうか？」

「明日、九時にここへ来ていただだけませんか？」

「どうしてですか？」

ラグナは戸惑った。しかし、一切の拒否を受け付けられない雰囲気はタバサに漂っている。ラグナは諦めて承諾した。

ラグナはミネルバを宿屋まで送っていくことにした。道中、ミネルバは泣いていた。

「あんなこと言うつもりじゃなかったのに……」

ラグナはただ黙って聞いているしかなかった。エルフの国の問題に首を突っ込むわけにもいかない。

不意にミネルバが立ち止まり、ラグナの両腕をつかんだ。

「ねえ、ラグナ、お姉ちゃんと結婚してエルフの国に来てよ！」

「ええっ!？」

「お姉ちゃんはラグナのことが好きなんだよ。だから帰ろうとしななんだよ。ねえ、ラグナはお姉ちゃんのこと嫌い？」

ミネルバの真剣なまなざしに、ラグナはどう答えたらよいのかわからない。

「ミネルバさん、僕には他に好きな人がいるんです」

「その人と結婚するの？」

「わかりません」

「だったら、お姉ちゃんと結婚してよ。お姉ちゃん、良いお嫁さんになるよ。お料理だって上手だし、家事だって完璧だし、美人だし。お姉ちゃんならミネルバ、祝福してあげる」

ミネルバは、ラグナの瞳にどんどん憐れみの色がにじみ出ていることに気がついた。

「どうして？」

ミネルバの問いにラグナは静かに答えた。

「ミネルバさんも本当の恋をしたらきつと僕の気持ちをわかってくれると思います」

ミネルバの瞳から涙が溢れ出した。そして「ラグナのバカ！」と叫ぶと、宿屋に向かって走って行ってしまった。

それを見送るラグナの視界の中にミストが現れた。

「ミストさん」

「ラグナさん、ミネルバさんが泣いていたみたいですけど、どうかしめましたか？」

昔だったら、ミストにあらいざらいあったことを話していただろうが、今は言えなかった。話が話だけに、それを聞いたミストが心を痛めると思っからだ。そんなラグナの気持ちを知る由もないミストは話を続けた。

「女の子を泣かしちゃいけませんよ」

ラグナは何も答えられない。そんなラグナにミストは困惑した様子で訊ねた。

「ほんとに泣かしちゃったんですか」

「泣かしたくて泣かせたわけじゃありません」

「そうなんですか。男と女ってうまくいかないものですね」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。僕とミネルバさんはそんな関係じゃ」

「もちろんそんなこと思っていないですよ。ラグナさん、以前のように話してくれないんですね」

「それは……ミストさんに余計な心配をさせるから」

「あたしが心配するような内容なんですね」

「い、いや」

「大丈夫ですよ。あたし、ラグナさんを信じてますから」

「ミストさん」

「じゃあ、頑張ってくださいね」

ミストはそう言うつと、雑貨屋へ歩いていった。

ラグナは、信じてるって言葉は便利だなと思った。でも、ミストに変な嫉妬心を燃やされるよりいいのかもしれない。

翌朝、ラグナはビアンカ邸へやってきた。既にエントランスにはタバサとビアンカとミネルバが揃っていた。

ピアンカがイライラしながらつぶやいた。

「ラグナとミネルバまで呼び出して何をするつもりなの？」

タバサはいつものようにお腹の前で手を組んで静かに話し始めた。

「今日、皆様にお集まりいただいたのは他でもありません。これから行つ王位継承の儀の見届け人になっていただきたいのです」

「お姉ちゃん、どういふこと！？」

ミネルバが目を丸くして叫んだ。タバサはテーブルに置いてあつた包みの中からキラキラと光るティアラを取り出した。

「私の持つこのティアラはエルフの王の証。これをミネルバに渡します」

「ちよつと待つて！ あたしはティアラが欲しいんじゃない、お姉ちゃんと国に帰りたいだけなんだよ！」

「わかつてるわ。ミネルバ、聞いてちょうだい。私は女王であることより、お嬢さまのメイドでありたいの。エルフの女王がいつまでも国を空けてはならない。だからこのティアラを国に持つて帰つて欲しいの。そして長老のお婆様に渡してちょうだい。お婆様ならきつと私よりふさわしい人を女王に選んでくださるわ」

「そんな……そんなことつて」

「ミネルバ、これが私の選んだ道なの。わかつてちょうだい」

ミネルバはタバサをじつと見つめていた。

「わかつた。それがお姉ちゃんの幸せなら、その役目引き受けるわ」
「ありがとう」

タバサはミネルバをそつと抱きしめた。

「これより王位継承の儀を始めます。我、タバサはエルフの女王としての地位、森の守護者としての能力、種族の架け橋となる知識、それらの全てを、汝、ミネルバに譲り渡す」

「我、ミネルバは持てる力の全てを用いて、その職務をまっとうし、次なる女王に受け渡すまで、エルフの知性と品位を守り通すことを誓つ」

キラキラと輝くティアラは、タバサからミネルバに引き渡された。
それを見ていたピアンカがポツリとつぶやいた。

「タバサ、本当にいいのね？」

タバサはにっこりと微笑んで「はい、お嬢さま」と答えた。

番外編 エリックの逆襲

エリックはとても面倒見のよい青年である。突然やってきたラグナに農業を親切に教えたり、相談に乗ってやつたりする。朝の早いアネットに朝飯を振舞ったり、生活の不安定な絵描きのルートに食事を振舞ったりする。

そんなエリックは毎朝教会に通っている。久しぶりに休日のミサに参加したラグナはエリックに声をかけた。

「おはようございます」

「よう、若者！ ちょっと聞きたいことがある」

ラグナはエリックに礼拝堂の隅にズルズルと引つ張られていく。いったい何が起こっているのかラグナにはさっぱりだ。

「ラピスさんが若者のことをえらく褒めていたのだが、何があったんだ？」

ラピスが自分を褒めていた？ いったい何のことなのか。しばらく考え込んでいたラグナはふとひらめいた。きっと二人で迷った夢のことだろう。あの後、町ではったり会ったとき、ラピスが意味深なことをほのめかした。「どうしてラグナさんも呼ばれたのでしょうか。ラグナとしては、自分がアースマイトだからであると思っています。のだが、ラピスはそう思っていないようだった。かといって、無理に否定するのもラピスのプライドを傷つけるかもしれない、その場はお茶を濁したのを覚えている。

ラグナは我に返り、不安そうに自分を見つめるエリックを見て、教えていいものか悩む。ラピスとの間にそんな出来事があったというだけで、エリックは落ち込んでしまうだろう。

そのとき、祈りを終えたラピスが近づいてきた。それに気づいたエリックが一転さわやかな笑顔を貼り付けた。

「ラピスさん、おはよう」

「おはようございます、エリックさん、ラグナさん」

「ミサはもう終わりなのかい？」

「ええ。明日もお待ちしております」

ラピスは丁寧にお辞儀をすると、医務室へと消えていった。それを締めきらない顔で見送っているエリックにラグナはため息をついた。

「エリックさん、顔が緩んでいますよ」

エリックは慌てて、自分の頬をパンパンと叩く。

「メチャクチャ好きなんですネ」

「そ、そうか？　そう見えるか？　いやあ、そんなことはないぞ。

俺は博愛主義者なんだから」

博愛主義者はもつとクールだけどな、と思いながらもエリックを微笑ましく思うのだった。

その日の夜、ラグナはエリックに食事に誘われた。エリックの家の玄関をくぐると、シヨップがある。そこには旬の野菜や種が所狭しと並んでいる。しかし、尋常じゃない量のカブとジャムとチョコレートがうず高く詰まっていた。奥に進むと、小ぢんまりとした部屋がある。東側にはテーブルと丸椅子と長椅子が一つずつ。部屋の北側に小さなキッチンがあり、西側にはベッドがある。一人暮らしならこの広さでちょうどよいだろう。

エリックは手際よく料理を作っている。ラグナも持参した焼き魚を並べた。

「エリックさん、料理がお上手なんですネ」

「おっ、わかるか。何せ独り者だからな」

エリックは野菜炒めを皿に盛り付けると、テーブルについた。

「待たせたな。遠慮なく食べてくれ」

「はい。いただきます」

テーブルの上には野菜炒めをはじめ、たけのこの煮物、フライドポテト、たたきキュウリなどが並んでいる。やはりカブはない。エリックはワインが進むようで、既に顔が赤くなっている。

「若者、調子はどうだ？」

「畑ですか？ モンスターに手伝ってもらってずいぶん楽をしています」

「若者はモンスター使いだったな。怖くないのか？」

「最初は痛い思いをしますけど、あとは愛情を注いだ分だけ尽くしてくれます。可愛いものですよ」

「そうか。俺も飼ってみるか。いや、無理をしないのが長く続けるコツだな。うん」

なにやら一人ぶつぶつ言っている。そのエリックが突然テーブルをドンと叩いた。

「あーっ！ それにしても腹の立つ」

「どうかしましたか？」

ラグナはびっくりした。温厚なエリックがここまで怒りをあらわにするのは珍しい。振動でテーブルにこぼれたワインを布巾で拭きながら訊ねた。エリックは苦いものでも食べたように顔をしかめて愚痴りだした。

「ダニーだよ。あいつ、俺の嫌いなカブを大量に配達してきやがった。返品するにも触りたくもないし」

そういえば、以前ダニーが「エリックにカブを渡すと面白いものが見られるぞ」とラグナに教えてくれたことがある。まさか本当にやることは、ダニーのイタズラ好きにも困ったものである。気の毒に思ったラグナはこう提案した。

「僕が返品しておきましょうか？」

「何！ やってくれるのか？ 恩に着るぞ。しかし、ジャムとチョコレートも送ってきやがったんだ。どうしてくれよう」

まだ怒りが収まらない様子のエリックを見ながら、ふと思いついた。「ジャムはラピスさんの好物ですよ。あと、チョコレートケーキも」「何！ それは本当か！？」

「ええ。特にチョコレートケーキには目がないって聞きました」

エリックはラグナの顔をじっと凝視していたかと思うと、突然体を

乗り出してきたラグナの手をガシっとつかんだ。ラグナはびっくりしてのけぞるが、エリックは赤い顔をどんどん近づけてくる。逃げようがない。

「エリックさん、手、離してください!」

「若者! チョコレートケーキの作り方を伝授してくれ!」

「はい?」

「チョコレートを全部買い取って、ケーキにしてラピスさんに毎日プレゼントする」

「でも、触るのも嫌なんじゃ?」

「恋する男は不可能を可能にするものなのだ。それに、俺がチョコを買い取ったら、ダニーも嫌がらせにチョコは送ってこなくなるだろう?」

「なるほど」

不敵な笑みを浮かべるエリックにラグナは感服した。

翌日は雨だった。ラグナもエリックも雨の日は仕事が少ない。ラグナの家に来たエリックは早速エプロンをつけてキッチンに立った。

「さあ、若者よ。教えてくれ」

「はい。まず、ボールにタマゴを割りいれて泡立てましようか」

エリックは言われたとおりにシャカシャカと泡立てる。途中で砂糖を足してさらに泡立てる。ボールの中が白くもったりしてきたのを見て、ラグナが次の指示を出した。

「チョコレートを削りましようか」

「チョ、チョコレートか」

エリックのこめかみがヒクヒクと痙攣する。触ると思うだけで体が拒否反応を示している。ラグナは心配して訊ねた。

「出来ますか?」

「だ、大丈夫だ。愛に困難はつきものなのだ」

エリックは鼻を洗濯バサミでつまみ、手袋をしてチョコレートに挑む。包丁を持つ手が震えている。いったい何を作っているのかラグ

ナにはわからなくなった。そのとき、玄関の戸が開いた。ミストが遊びに来たのだ。ミストはキッチンまで歩いてくると、エプロンをつけた二人の姿を見て目を丸くした。

「あら、二人で何を作っているんですか？」

「チョコレートケーキを作ってるんです」

ミストは、顔を鬼のようにひきつらせたエリックをじっと見た。

「まあ！ あたしはてつきり毒入りリンゴでも作っているのかと

」

「ミストさん！」

ラグナはミストをたしなめた。ミストは舌をペロツと出すと、居間のほうへ逃げていった。ラグナはハツとしてエリックを見る。エリックは見る影もないくらいで、包丁を握ったまま頭をがっくりと垂れている。発狂して包丁を振り回さないだろうか心配したラグナはエリックを励ました。

「エリックさん、大丈夫ですよ。ほら、ゴールはもうすぐです。頑張りましょう！」

「若者……」

エリックは目に涙をためてラグナを見た。ラグナは無言のままうなずいた。そしてエリックにアイコンタクトを送る。

（ミストさんは放っておきましょう）

（わかった）

トランルピアの白い悪魔　村人は影でミストをこう呼んでいる。

二人は作業を再開した。

削ったチョコレートを湯煎にかけて溶かす。トロリ溶けたものを先ほど泡立てたボールに少しずつ注ぎ、かき混ぜる。小麦粉もふるい入れてさっくり混ぜて型に流し込んだ。それもハート型。これはエリックが持参したものである。

「エリックさん、直球ですね」

「やはりこれぐらいじゃないと伝わらないだろう？」

かえってラピスが引くんじゃないだろうか心配したものの、乗り

気のエリックを諭す勇氣はない。そのままオープンに直行させた。

三人はラグナの入れたお茶を飲んでいた。エリックが「女の子はハート型とか好きだよな。だからハート型にしたのだ」と言うのと、ミストがティーカップを口元から離してポツリとつぶやいた。

「エリックさん、大胆ですね。ハート型なんて！」

「そ、そうかな？」

照れたように頭をかくエリックに、ミストは容赦なく突っ込んだ。

「ええ。あたしがそんなのをいただいたら引いちゃいますけど」

エリックは硬直してみるみる白くなっていく。ラグナはびっくりしてミストにアイコンタクトをとる。

（ミストさん！ やめてください！ 何の恨みがあるんですか！）
「ラグナさん、何か？」

まったくこちらの意を解してくれない。ラグナは恐ろしくて顔を覆った。

オープンがチンと鳴った。「出来たみたいです」とラグナはケーキを取りにキッチンへ向かう。出来上がったケーキをテーブルに持っていた。

「おいしそうに出来ましたよ」

「悪いが、若者とミストさんで試食してもらえないだろうか」

エリックは、顔をひきつらせた。そんなに嫌いなのに、ラピスに持つていけるのだろうか。

ラグナとミストはケーキをフォークで切って口に入れた。チョコの苦味と甘さが口の中に広がる。スポンジ生地のふんわり感も申し分ない。

「エリックさん、すごくおいしいですよ」

「はい。お店で買ったみたいです」

ラグナとミストは絶賛した。その言葉にエリックはこぶしを握りこんで喜びを表した。そのとき、戸を叩く音がした。ラグナが出ると、立っていたのはラピスだった。

「近くを通りかかったものですから。すごくいい匂いがして、思わずノックしてしまいました」

ラピスが鼻をクンクンさせながらつぶやいた。

「エリックさんがチョコレートケーキを焼いてくれたんです。ラピスさんもいかがですか？」

「まあ、チョコレートケーキですか！？ ご馳走になろうかしら」
ラグナがラピスを招き入れる。エリックとミストに挨拶をしたラピスを座らせて、ラグナはお茶を入れにいった。エリックは自らケーキを切り分けてラピスに振舞っている。さつきは見るのも嫌そうだったのに、この違いはなんなのか。ラピスはケーキを一口食べると、ニツコリと微笑んだ。

「おいしいです、エリックさん」

「そ、そうですね」

とても嬉しそうなエリック。ラピスはケーキをあつという間に平らげた。

「また作ったらご馳走してくださいね。私、チョコレートケーキに目がないんです」

「もちろんです！」

エリックは満面の笑みで答えた。その様子を見て、ラグナはほっとするのだった。

数日後、ラグナはエリック農場を訪れた。

「エリックさん、こんにちは」

「よう、若者！」

「なんだかご機嫌ですね。良いことがあったんですか？」

「ラピスさんが、ケーキのお礼にと回復薬をくれたのだ！」

部屋の隅に、回復薬Xがうず高く積まれている。

「けっこうな量ですね」

「『エリックさんは力仕事でしょうから』ってな。ああ、ラピスさんの中で俺の存在が大きくなってきたぞ」

「良かったですね」

「おお、若者の協力の賜物だな。お礼に種を安くしておくぞ」

「ありがとうございます」

ラグナは苦笑いした。昨日、大量に買ったばかりである。何にせよ、二人が仲良くなれてよかったなと思うのだった。

28 水道橋の悲劇

雨の日、ラグナはせつせと身支度をしていた。そこへミストがやってきて不思議そうな顔をしている。いつもより装備が大仰な気がしたからだ。

「ラグナさん、どこへ行くんですか？」

「くじら島です。くじらさんに迷惑をかけているモンスターを倒しに行くんです」

「そうなんですか……」

にわかにミストの表情が曇る。いつもなら、「ラグナさんってほんとに冒険好きですね」とか「あたし信じてますから」と明るく答えるのに。

ラグナは不信に思っただけで訊ねた。

「どうかしましたか？」

ミストはラグナの腕をとるところ言った。

「今日はあたしの家でお茶しませんか？」

「ありがとうございます。じゃあ帰ってきたら寄らせてもらいます」とすると、今度はミストが急にお腹を押さえた。

「あいたたた」

「だ、大丈夫ですか!？」

「大丈夫じゃないです」

「医務室へ行きましょうか」

「い、医務室に行く必要はないです」

ミストはお腹を押さえて痛がる様子を見せながらもチラチラとラグナの顔色を伺っている。

様子がおかしい。ラグナはミストの様子をじっと見ていたが、はつとひらめいた。

「仮病ですか？」

ミストは無言のままラグナをじっと見ていたが、「わかつちやいましてか」と言うと、お腹から手を外してため息をついた。

「いったい何なんですか？」

ミストはまたラグナの腕をとると、ぎゅっと握り締めた。

握られた腕からは、尋常ではないものを感じる。ラグナを見つめるミストの目はどういいうわけか潤んでいる。泣かせるようなことは言わなかったつもりはない。ラグナはどうしていいのかわからない。その場に、しばらく沈黙が流れた。

先に口を開いたのはミストだった。

「ラグナさん、今日は行かないで下さい。なんか胸騒ぎがするんです」

確証のない不安でやめるほどラグナは素人ではない。もともと冒険なんて危険が付きものである。それに、くじら島との約束をこれ以上延ばすわけにはいかない。ミストの取り越し苦労だろうとラグナは思った。

「僕なら大丈夫です。お土産に給水塔に咲いている花を摘んできますから」

ラグナがにっこりと笑ってみせる。ミストは心配そうに見つめていたが、やがて大きいため息をついた。

ラグナは、くじら島のしっぽの木の根元に立っていた。足元にはカマキリのようなモンスターが倒れている。ラグナは傍らに座って待っているシルバーウルフに話しかけた。

「行こうか。頼むよ、シルバー」

シルバーウルフは一声吠えたと、ラグナの前で伏せの体勢をとった。ラグナはシルバーウルフにまたがると、しっぽの木の頂を指差す。しっぽの木は幹に沿ってぐるぐると螺旋状に道がある。その道は長年しっぽの木の巨大な実が転がり落ちることによって幹が削り取られ出来

たものだ。実がコロコロと転がり落ちるせいなのか道はつるつるになっちゃったようだ。以前訪れたときは、それは大変な思いをしたものだった。道の悪さの上にモンスターが襲ってくるのだ。それなので登りきるのに一苦労した。

そこでラグナは仲間のシルバーウルフの力を借りることにした。シルバーウルフの鋭い爪ならば、つるつるの道にしっかりと引っかかると考えた。

まずは木の実が落ちてくる合間を狙ってスタートしなければならぬ。しっぽの木はちよつとでも近づくと、侵入者を阻むかのように巨大な木の実をゴトリと落とす。その実にひかれてはひとたまりもない。

ごろごろと転がり通りすぎたその瞬間、ラグナはシルバーウルフを走らせた。次のインターバルまで一気に走り抜けて、待避所のようなところに滑り込む。

そうやって少しずつ登りつめて、とうとうてっぺんの手前までたどり着いた。そこから道が遺跡に繋がっている。そちらに方向を変えると、ラグナはシルバーウルフから降りた。

「水道橋」と呼ばれるそこは、ところどころでモンスターがくつろいでいた。その向こうにはいくつかの塔が見える。あの中心の給水塔に倒さねばならない相手がいる。ラグナは先を急いだ。しかし、モンスターたちは見慣れぬ侵入者であるラグナたちを確認すると襲い掛かってきた。手のひらに乗るほどの羽の生えた妖精のような可愛らしいモンスターがラグナに向かって粉を振り掛ける。よけたつもりだったが、浴びてしまい体がしびれる。膝をつき、剣を杖代わりにした。そこへシルバーウルフがラグナの前に躍り出た。そして妖精に飛び掛かり、その小さな体を噛み砕いた。その間にラグナは、どうにか痺れ薬を飲み干して、もう一体の妖精モンスターを切り裂いた。ラグナは「シルバー、助かったよ」とシルバーウルフの頭を優しく撫でてやった。

少し先に進むと、今度は恐ろしい顔をした魚が水鉄砲を発射してく

る。ラグナとシルバーウルフはそれをよける。すると、今度はあぶくを噴出した。あぶくはシルバーウルフの鼻先に触れると、パチンとはじけて毒を撒き散らす。ラグナはそれを槍で突いてつぶす。ついでに魚を串刺しにした。シルバーウルフの足がふらつき始める。「小屋にお帰り」と言っても、シルバーウルフはラグナから離れようとはしない。

仕方なく連れて進むと、今度は大亀のモンスターがのしのと歩いている。シルバーウルフは果敢に大亀のようなモンスターに飛び掛り、首根っこに食らいついた。しかし、相手が悪い。大亀モンスターは体を回転させ始める。シルバーウルフは弾き飛ばされた。そこへもう一体の大亀モンスターが水砲を発射した。シルバーウルフはばたきと倒れる。ラグナはその大亀モンスターたちに次々と炎の剣を突き立てる。大亀モンスターたちはばたきと倒れ、動かなくなつた。ラグナはシルバーウルフの元に駆け寄り、その体に手を当てた。

「ありがとう。先にお帰り」

そう声をかけると、シルバーウルフはしつぽを嬉しそうに振った。力を尽くして、自分の役目は終わったと喜んでいようだった。そして光になつて飛んでいく。ラグナはそれを見届けると先を急いだ。

ラグナは水道橋の階段を下りた。すると、壁に設置されている土管から水砲が一定の時間間隔で発射される。その上、水辺を漂う魚のモンスターが放つ泡がラグナを襲うのだ。ラグナは水溜りをバシヤバシヤと水しぶきを上げながら走り抜ける。そして階段を一気に駆け上がると、額に一本角を生やした馬のようなモンスターが見えた。「あれは、ユニコーンか」

獰猛さで知られるユニコーンは、美しいたてがみを風になびかせてラグナを睨み、足を踏み鳴らしている。どうやら彼も黙って通してくれそうにない。しばらくじっと睨みあっていたが、ラグナが少し間合いをつめる。するとユニコーンはいないで前足を高く掲げ、

頭を前に振った。すると、一本角から出た稲妻がラグナめがけて走る。ラグナも走りながらユニコーンの背後に回りこむ。そして剣を振り下ろした。甲高い悲鳴にも似た鳴き声を上げて、ユニコーンは倒れた。そのとき、背後からもう一頭のユニコーンが鋭くとがった角でラグナの背中を突き刺した。今度はラグナが悲鳴をあげる番だった。

「くそっ、こんなところで死ぬわけには……」

ミストを想い、無念を口にする、ラグナの意識は途切れていった。

29・ミストの長い一日

体が重い。背中がズキズキと痛む。

ラグナは肩を担がれて引きずられていた。うつすらと目をあける。視界に入ってきたのは、カラスの翼を思わせるような黒髪だった。ラグナを担ぐことが出来るということは男なのだろう。朦朧とする意識の中、モンスターの威嚇するような叫びが耳に入る。

黒髪の男はラグナを岩の陰に横たえると、腰から剣を抜き、走っていった。ラグナの目にモンスターと格闘する黒髪の男が映る。その動きはまるで東洋の忍者のようである。右に左に飛び回り、確実にモンスターの急所に一撃を加えていくのだ。

ラグナはふと思いついて、背中の中痛む部分に手を当てた。布が巻かれているようで、傷口に触れることはできなかった。しかし手はしつとりと濡れる。手を見てみると、赤い血がべつとりとついていた。時折、その手が霞んで見える。

モンスターを倒し終えたのか、黒髪の男が戻ってきた。

「ラグナ君、気がついたかい？」

「クロスさん、どうして？」

黒髪の男はクロスだった。「事情は後で説明する」と答え、ラグナの肩を担いで歩き出した。

どうしてクロスがくじら島に来ているのかわからない。しかし、ラグナは助かったと思った。ほっとしたのか、ラグナの意識は遠く遠くかすんでいった。

「……ラグナさん」

暗闇の中で自分を呼ぶ声がする。ラグナはうつすらと目を開けた。

目の中に飛び込んできたのは、目を赤くして泣きはらしたミストだった。

「ミストさん？ どうしてここに？」

ユニコーンに背中を突かれて気を失ったこと、クロスに助けられたことは覚えてる。

ミストが涙ながらに話し始めた。

「精霊さんが……教えてくれたんです。だから、あたし、クロスさんをお願いして……」

ミストはつかえつかえ説明をしてくれた。あとはしゃくりあげて言葉にならない。

体が痛くて動けなかった。目だけで部屋を見回すと、壁際で腕を組んで立っているクロスが見える。

彼はラグナを横目で見ながら話し出した。

「危ないところだったね。ミストさんが気づいていなかったら、野たれ死んでいたところだったよ」

ミストが精霊の声を聞き、ラグナの身の上を案じ、クロスに助けを求めたのだ。そしてクロスが水道橋まで来てくれて、ラグナを家まで運んでくれたらしい。ラグナはモンスターと戦うクロスの姿を思い出した。クロスはトランルピアに来る前、ゼークスの特種作業員だった。

「ありがとうございます」

「礼には及ばないよ。ラグナ君には借りがあるからね」

クロスは壁から背を離すと、猫背のまま片手を挙げた。

「じゃあ、ボクは帰るよ。ミストさん、何かできることがあったら連絡をくれ」

そう言うと、クロスは家を出て行った。

それを見届けた後、ラグナはミストに謝った。

「ミストさん、すみません。心配かけて」

それでもミストは泣きじゃくっている。起き上がって元気なところを見せてやりたいが、体は包帯でぐるぐる巻きになっているし、背

中の痛みがひどくて体を起こすことができない。どうしたらいいものか、ラグナは困ってしまった。

「もうだめかと思ったんですよ！」

そう叫ぶと、ミストはラグナの枕元で突っ伏してしまった。ラグナは申し訳なさとお愛おしさで胸がはちきれそうだった。「すみません」と何度も謝りながら、自由の効く手をミストの頭に乗せた。その柔らかな髪感触に生きているんだなと実感した。

「ラグナさん、アーンしてください」

ミストが皿を片手に、スプーンをラグナの口元に持っていく。ラグナは頬を赤く染めながら口をあける。体を動かすことができないラグナはミストに付きっ切りで看病されている。しかし二人にとって甘い時間はそう長くは続かない。

「ラグナさん、ラピスです。往診に来ました」

戸の向こうで優しい声がある。ミストのスプーンを動かす手がぴたりと止まる。ただならぬ殺気を放つミストに、ラグナは心臓がきゅっと縮こまる。体が動かせたら後ずさっていただろう。

「はい、今行きます」

ミストは皿をベッドサイドテーブルに置くと立ち上がった。玄関へ出向き、戸を開ける。

戸の向こうのラピスは目を丸くした。

「あら、ミストさん、いらしていたんですね」

「ええ」

二人の視線が絡み、火花が散りそうである。一触即発とはこのことか。

「往診に来ました。上がらせてもらいますね」

大きな黒いバッグを見せると、ラピスは寝室へ入り、ベッドのラグ

ナの元へいそいそと歩いていく。そしてラピスはベッドの横の椅子に座ると、バッグを床に置いた。ミストは部屋の隅に控えている。「ラグナさん、おはようございます。気分はいかがですか？」

「とてもいいです」

ラピスはいっこりとうなずくと、バッグから薬品やガーゼを取り出した。ラグナを横向きにして上着を脱がせると、痛々しい傷口が現れた。ラピスは顔をゆがめた。昨日はラグナが気を失っている間に処置をした。改めて見ても本当にひどい傷である。気を取り直して、ときばきと処置を施す。

「終わりましたよ」

ラピスは道具を片付けながら、ベッドサイドテーブルの皿の中身を見て眉をひそめた。

「これ、朝ごはんですか？」

「はい」

中に入っているのは、カブのおかゆだった。ミストがカブ好きなのは知っていたが、病人にはもっと栄養をつけさせないと治るものも治らない。出来れば自分が看病したいのだが、そうもいかない。でも、村人の健康を預かるものとしては栄養面のことは黙っているつもりはない。

「ヘルシーなのはいいのですが、ミルクとかタマゴとか魚なども摂取されたほうが傷の治りも早くなりますよ」

「でも僕、まだ動けないので」

それはそうである。ミストが作るわけもない。そうだ、自分で作ればいいのではないか。ラピスは我ながら良いことを思いついたと自分を褒めたいくらいである。

「では、往診のときに何か作ってお持ちしましょう」

「いや、ラピスさん、これ以上迷惑をかけるわけには」

ミストが世話をしてくれているのに、ラピスの好意を受けるわけにはいかないと思ったラグナは差しさわりのない言葉で断ろうとしたが、「いいえ。患者さんには早く治っていただかなくては」と言う。

ラピスは引き下がる気はないようだ。

ラグナはミストをちらりと見た。明らかに顔が引きつっている。ラグナの顔がさーっと青ざめていった。

ミストはキッチンで皿を洗っている。あのあと、機械的に食事を口に入れられたラグナはベッドで臥せっていた。八つ当たりはされるものの、ミストが嫉妬してくれているんだなと思うと、内心ラグナは笑いが止まらない。

また玄関の戸をたく音がした。ミストが玄関へ出向く。そこにいたのはバスケットを持ったタバサだ。

「ミストさま、ごきげんよう」

「こんにちは、タバサさん」

「ラグナ様のお見舞いに参りました。入れていただけます？」

「はい、どうぞ。ラグナさんはベッドです」

ミストに説明されると、タバサは優雅にお辞儀をしてベッドに向かっていく。タバサは軽くお辞儀をすると、ベッド脇に置かれた椅子に座った。

「ラグナさま、具合はいかがですか？」

「はい。おかげさまで」

「これ、よかつたらお二人で食べてくださいね」

「ありがとうございます」

バスケットはタバサからミストの手へと渡る。ミストは受け取ったバスケットの中をちらりと見た。バスケットの中身はシーフードピザだ。シーフードピザはラグナの好物である。ミストが情けない表情をした。反対にタバサは勝ち誇ったような表情を浮かべた。

そんな気持ちとは裏腹に、タバサはミストに気遣いの言葉をかける。「ミストさま、ちゃんとお休みになれていますか？ よければ看病を代わりましょうか」

「いえ、タバサさん、心配には及びません。お気持ちだけありがとうございました。頂戴しますね」

ミストはにつこりと微笑む。タバサもにつこりと微笑む。しかし、傍らで見ているラグナには、この笑いが空恐ろしいものに見えた。しばらくの沈黙の後、タバサは立ち上がり、帰っていった。

午後になると、カンロとドロップとキャンディがやってきた。ラグナに回復魔法をかけに来てくれたのだ。しかし、実際魔法をかけてくれているのはドロップである。

ドロップの反対側に座ったキャンディが心配そうにラグナを伺っている。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「キャンディ、心配かけてごめんね。こうして治療してもらっているから大丈夫だよ」

「そっか。よかった」

キャンディがニツコリと微笑む。すると、カンロがあごひげを触りながら高笑いをした。

「ラグナのおかげでドロップも魔法を使えるようになったし、キャンディもこのとおり懐いておる。どうじゃ、ドロップを嫁にせんか？」

「カ、カンロさん！？ 痛っ！」

びつくりしたラグナは体を起こそうとして悲鳴を上げた。

「ラグナ、老人のたわごと、気にしないで」

ドロップが頬を赤く染めてつぶやいた。

ラグナは慌ててミストを目で追ったが、どこにもいなかった。聞いていなければ良いのだが、姿が見えないということはどこかへ行ってしまったのだろうか。

三人と入れ替わりに今度はメロディがやってきた。傷に効く薬草を調査してくれたらしい。ベッドの脇の椅子に座ると、メロディはため息をついた。

「ラグナの冒険好きも困ったもんよね」

「心配かけてすみません」

「でも珍しいわよね。ラグナがこんな大怪我をするなんて」

ラグナも不意だった。別のユニコーンに気を取られて、背後に目が行かなかったのである。平和ボケかなと反省する。

メロディは、心ここにあらずのラグナを自分のほうに向けたくて話しかけた。

「あのさ、隣町のダンジョンに秘湯があるらしいの。傷が治ったら行こうよ」

「用心棒ですか？」

「まあ、それもあるけどさ。あつちで背中を流してあげるサービス付き。どう？」

「え、遠慮しておきます」

以前も背中を流してあげると迫られたことを思い出すと、返事がどもる。

メロディは口を尖らせるとギロリとにらんだ。

「この期に及んで逃げる気？ 乙女の勇気を何だと思ってるのよ！」

メロディが体を乗り出して迫ってきた。逃げたくても体を動かせないラグナは表情を引きつらせる。

「メロディさん、勘弁してください！」

「嫌よ。いつまで焦らせば気が済むのよ！」

「焦らせてなんかいないでしょう」

「うっん。カルディアに居たときから、思わせぶりの態度をとってたくせに！」

「ええっ!？」

メロディがどんどん顔をラグナに近づけてくる。絶体絶命かとあきらめかけたとき、部屋の戸をノックする音がした。

「お取り込み中のところ申し訳ないんですけど」

戸口に立っていたのはセルフィである。ラグナは助かったと思った。メロディはしぶしぶと椅子に戻った。セルフィはそれを横目で見ながら、ラグナに声をかけた。

「ラグナ、お見舞いに来たよ」

「ありがとうございます」

セルフィはこっくりうなずくと、胸ポケットから懐中時計を取り出して時間を見た。

「メロディ、もうすぐ三時だよ。銭湯の入り口でローランドさんが待ってた」

「あつ！ ごめん、ラグナ、もう帰るわ。ありがとう、セルフィ」

メロディは足早に部屋を出て行った。ローランドは元軍人で退役した後、各地の温泉めぐりをして余生を楽しんでいるという老人である。メロディの銭湯が気に入ったらしく。毎日通ってきているのだ。

メロディが玄関を出た気配を感じ取ると、セルフィがニヤツと笑った。

「危ないところだったね」

「はい、助かりました」

ラグナは心底ホツとしているようである。

セルフィはその様子がおかしくてたまらなかった。ラグナが女性を苦手としていることは知っている。だったら親切にしなければいいのに、この青年は分け隔てなく人に優しい。もちろんセルフィも親切にもらっている。おかげでミストに誤解されたこともあるのだが。

笑いをぐつとこらえて具合を訊ねる。なんといつてもお見舞いに来ただから。

「それで傷はどうなの？」

「皆さんが治療を施してくれるので、思ったより早く回復しています」

「そう、良かったね」

今までとは一転して、セルフィは声を潜めた。

「ミストが看病しているっていうんで、皆戦々恐々としてるわよ」

「ええっ！？ また誤解される………そういえばミストさん、ずっと

姿が見えないな。どこに行っただろう」

ラグナが心配そうにつぶやくと、セルフィは思いだしたように告げた。

「畑でロゼッタと話していたよ。それよりさ、あんまりミストにやきもち焼かせちゃだめだよ。まだ付き合えていないんでしょ？」

「はい」

はたから見ても二人は相思相愛である。この青年は何でも器用にこなすのに、恋愛に関しては不器用なのか。いや、あの天然のミストだからうまくいかないのか。ラグナの話によると、見舞い客が次々と現れてから様子がおかしいようだ。セルフィは、ミストの気持ち进行を思つと、ちよつぱり同情心が芽生えた。

「きつと不安に思っているだろうな」

「どうしてわかるんです？」

セルフィは人差し指で鼻をこすると、えらそうに腕組みをした。

「あたしの書く小説の主人公たちはこういう場面では不安になるからよ」

「セルフィさんの主観なんですね」

「悪い？ ミストもあたしの小説の読者よ？」

「参考になります」

「あたし帰るわ。面白いものも見たし。じゃあね、お大事に」

セルフィは手をひらひらさせて帰っていった。

その後、うづきやユーニやアネットまでやってきた。そのたびに、ミストの表情は曇っていくし、ラグナも肝を冷やしっぱなしだった。辺りが暗闇に包まれると、白と黒のエリスが見舞いにやってきた。出迎えてくれたミストを見て、白と黒のエリスは顔を見合わせた。ミストの様子が変である。白と黒は小声で話し合った。話が終わると、黒のエリスが手伝いを申し出た。ミストが「大丈夫ですから」と断っているのに、強引にミストの背中を押してキッチンに連れて行った。

一方、白のエリスは寝室に入ると、ベッドの横の椅子に座った。

「ミストさん、元気ないのね」

開口一番にミストのことを言われてラグナは苦笑いをした。エリスにはかなわないなと思いつつ、今日の状態を説明した。それを聞いたエリスはクスリと笑った。

「そりゃ、ミストさん、落ち着かないわ」

「どうしたらいいでしょうか」

ラグナは眉根を寄せてつぶやいた。どうやら真剣に悩んでいるようである。エリスはため息をつきたくなる。まったく、これが自分に愛を告白した男なのだろうか。なんだか馬鹿らしくなって、からかってみることにした。

「キスしてあげたら？　それで安心するかも」

「そ、そんなことできませんよ！」

以前、良い雰囲気になったときに拒否されたことがラグナの頭をよぎる。

「ラグナったら、堅いのね」

エリスは肩をすくめた。エリスにはあんなに大胆だったのに、ミストにこんな慎重になるといふことは、やはりミストは特別なのだろう。エリスはちよっぴり寂しく感じた。

黒のエリスとミストが戻ってくると、白のエリスは立ち上がり、暇を告げた。

二人が帰ると、ラグナとミストは夕食をとった。いろいろなお見舞いの品を二人で食べる。ミストは明るく振舞っていたが、終始沈みがちだった。朝みたいに甘い雰囲気はない。事務的にラグナの口に運ぶだけである。やっぱり気にしているんだなと思い、ラグナは気をもんだ。どうしたらミストの不安を取り除けるのだろうか。どうしたら自分の気持ちをわかってもらえるのだろうか。動かせない体でどう伝えればいいのだろうかと考えあぐねた。

あつという間に就寝時間である。

「ラグナさん、もう灯りを消しますね」

ミストがランプに手をかけて、息を吹きかけようとした。ラグナはそれを制止した。

「ミストさん」

「何ですか？」

「あの、お願いがあるんですが」

「何でしょう？」

「寝付くまで、……ここにいてくれませんか」

ラグナなりに精一杯考えた作戦だった。他の誰でもないミストにそばにいてもらいたいという気持ちを伝えたかった。

ミストは怪訝そうな顔をした。

「どうしちゃったんですか？」

「ちょっと……だめでしょうか？」

伺うようなラグナの目を見て、ミストは表情を崩した。

「ラグナさんって、かわいいところがあるんですね」

そいうと、ミストはベッド脇の椅子に座った。

「寝付くまでここにいますから。おやすみなさい、ラグナさん」

「おやすみなさい」

ラグナは安堵して目をつぶる。

数分後、ラグナから寝息が聞こえてきた。幸せそうな笑みを浮かべたミストは外に出ているラグナの手を掛け布団の中にそっと戻した。

番外編 ミストの長い一日（ミスト視点）

ミストはラグナの寝顔を見ながら今日のことを振り返っていた。

朝から村の女性たちが見舞いにやってきて敵意を見せていく。最初は強気になったが、次々現れる女性たちにだんだん意気消沈していった。

カンロたちがやってきてラグナの治療を始めたころ、お茶を持って部屋の戸をノックしようとしたときだった。

「どうじゃ、ドロップを嫁にせんか？」

カンロの言葉が胸を貫く。ミストは回れ右をして、キッチンに戻った。そして家の外へ出て、花壇の前でしゃがみこんだ。

間違いなくラグナはもてる。ラグナを慕う女性はい魅力的だ。それに引き換え自分はどうかろう。これといって自慢できることもない。仕事だって最近配達のアルバイトを始めたところだ。何の情熱があるわけでもない。ただ、暇だから、それだけである。料理だって大して出来ない。自分と訪れる女性を比べると惨めだった。

「ミスト、こんなところで何しているのよ」

ミストが顔を上げると、ロゼッタが腕を組んで見下ろしていた。

「ロゼッタさん」

「ラグナはどう？」

「今、ドロップさんに手当てしてもらっています」

「ふうん。それで、元気がないけどどうしたのよ？」

ミストは立ち上がると、突然ロゼッタに抱きついた。そしてしくしくと泣き始めた。

「ミストに泣きつかれるとは思わなかったわ」

「ごめんなさい」

ロゼッタとミストは牧場の木の幹に寄りかかっている。

「ラグナのこと、真剣なんだ」

「はい」

「ラグナもこんなところまであんたを追いかけてくるし、命がけであの化け物に立ち向かっていくし、心配ないんじゃない？」

「そうでしょうか？」

「なんとも思わない相手に命をかけるわけないでしょう？」

「でも、ラグナさんってただの冒険好きかもしれないし」

あながち外れてはいないわねと思いつつも、ロゼッタはミストを慰めた。

「あんたたち、つながっているのよ。ラグナの危機に気づいたんでしょう？ それだけでも自信を持って良いんじゃない？」

それでもうつむき加減なミストにロゼッタはため息をついた。ジェルバインにさらわれたときのラグナの様子を皆見ている。ラグナがミストを好きであることは周知の事実だ。ただ、なかなか進展しない二人を見て、皆まだチャンスはあるかもしれないと画策しているのだ。ラグナはあんなにミストに尽くしているというのに。一度振ったのはあんたでしょうと言ってやりたかった。まったく、この幸せ者！

「あーあ、あんたみたいな天然で、人をからかうのが好きで、ふらふらしてる子のどこが良いんだか」

「ひどいです、ロゼッタさん」

恨めしそうに見つめるミストに、ロゼッタは持ってきた籠を押し付けた。

「これ、お見舞い、渡しといて。店があるから、もう帰るわ」

「ありがとうございます」

「自信持つのよ」と声をかけてロゼッタは帰っていった。

ミストはロゼッタの姿が見えなくなるまで見送った。

ロゼッタの言葉は少しミストの気持ちを前向きにした。ミストはい

つものように笑顔を作ると、家に戻った。

夜、白と黒のエリスがお見舞いにやってきた。ミストは白のエリスを見て、気分が萎えた。ラグナが一度は愛した人である。今はそんなことはないと言われているのに落ち込む。どうも今日はうつ気味である。

すると、黒エリスが手伝いを申し出てきた。断ったのだけれど、強引にキッチンに連れて行かれる。後ろが気になって見ていると、白のエリスが寝室に入っていくのが目に入った。

「ミストさん、ラグナさんと二人きりなんでしょう？」

黒のエリスが食器を洗いながらミストに訊ねた。ミストも食器を拭きながら答える。

「ええ」

「好きな人と二人つきりって幸せですよね」

ミストは苦笑いするしかない。確かに二人つきりのときは、「あーん」なんて恥ずかしいこともしてしまう。ミストが今朝のことを思い出していると、黒のエリスがズバリと切り込む。

「愛を語り合ったりするんですか？」

「そ、そんなこと」

「そうなんですか？ セルフィさんの小説だと、甘い言葉をささやきあうじゃないですか」

セルフィの小説はそうかもしれないが、実際なんてうまくいかないものである。そんなミストの気持ちなんかわからずに、黒のエリスはなおも質問を続けた。

「いつ結婚するんですか？」

「け、結婚ですか？」

ミストはのけぞった。黒のエリスは何でもないようにうなずいた。

「ええ、白が『ラグナとミストさんは結婚するのよ』って」

白のエリスの口からそんな言葉が出ているなんて、ミストはびっく

りした。本当にラグナとエリスの間には何にもないのかもしれない。
「あたしたち、付き合ってもいませんから」

「ええっ！？　ラグナさん、かわいそう」

黒のエリスは声のトーンを下げた。心底そう思っているようである。
「ミストさんがさらわれたとき、それは大変だったんですよ。ラグナさん、取り乱して、すごく心配していました」

ミストはあのときのことを思い出した。自分も捕らわれながら、ラグナを何度も想ったものだ。

洗い物を終えて黒のエリスとともに寝室に向かうと、ラグナと白のエリスが楽しそうにおしゃべりをしていた。それを見ると、やはりどうしても心が縮こまる。自分はなんて嫌な人間なんだろうと思った。

食事時も気分は晴れない。一生懸命明るく振舞ったつもりだったが、ラグナが自分の顔をうかがっているようだった。

就寝時間になる。ミストが部屋のランプを消そうとすると、ラグナに止められた。そして、そばにいて欲しいと言ってくれた。それだけで心が満たされる気がしたのは間違いない。

番外編 ミストの長い一日（ミスト視点）（後書き）

ミストさんがえらく健気な娘になってしまいました。恋する乙女は皆こうですよね！？

30・幸せな時間

季節はしんと雪の降る冬に移ろいでいた。ラグナは今も牧場の家で療養中だ。ラグナが動けるようになったので、ミストは自分の家から通ってくる。

傷はラピスに消毒してもらわなくても良いほど回復していた。しかし、ラグナはミストに消毒をあえて頼むのだ。それがミストを特別に思っているというアピールである。

ラグナはミストに背中を向けて服を脱いだ。そこには痛々しい傷がある。ユニコーンのドリルのような鋭い角に突かれたのでなかなか完治とまではいかない。

ミストはラグナの傷に薬を塗りながら、何かを思い出したようだった。

「そういえば、泉にお金を入れると願い事がかなうみたいですよ」

「そうなんですか」

「あたしの家の庭にも泉が湧くといいのに」

「湧いたら何をお願いするんですか？」

「決まってるじゃないですか。ラグナさんの怪我が早く治りますようにって。池じゃだめでしょうか？」

薬を塗る手が止まり、ミストはぽかんと口を開けて物思いにふけている。

そんなミストの様子を見て、ラグナは嬉しく思うものの、突っ込みも忘れない。

「池じゃ無理ですね」

「そうですか。残念です」

しゅんと表情を暗くしたミストだったが、また何かを思い出したようだった。

「泉といえば、こんな話もあるんですよ」

ミストは両手を胸の前で合わせると、目を輝かせる。

「泉にものを入れると泉の精が現れて、落としたものを二倍にして返してくれるそうですよ。何を入れようかな」

またどこからか間違った知識を……。そして何か良からぬことを考えているな、とラグナは気づいた。

するとミストは手をポンと叩いた。

「そうだ！ ラグナさんを入れちゃいましょう」

「僕ですか！？」

「はい。そうしてラグナさんを大量生産して……」

そこまで言いかけると、ミストはハツとして口を押さえて黙ってしまった。

自分を大量生産してどうするというのがだろう。そのとき、ワグナと交わした会話のことを思い出した。

事実だろう？ 村中の若い女たちに貢ぎまくって、点数を稼いでいたのはどこのどなたですかってんだ

でもな、もしおまえのことを本当に好きな女なら面白くないと思うがな

そういうことか。ラグナはミストをまっすぐに見て話し始めた。

「今度の聖夜祭、よかったら僕と一緒に過ごしませんか」

聖夜祭は特別な相手と一緒に過ごすものである。これに誘うということは告白と同じようなもののなのだ。

ラグナの誘いの言葉にミストは驚いていたが、ためらいがちに聞き返した。

「私でいいんですか？」

ミストの様子に今度はラグナがひるんだ。当然誘うべきはミストだと決めていたのだが、誘っては迷惑だったのだろうか。ラグナは遠慮がちに聞いた。

「だめ……でしょうか？」

「いえ」

ミストはうつむき加減に否定の言葉を口にした。そして了承してくれたのだ。

「あたしでよければ喜んで一緒にさせていただきます」

「ありがとうございます」

二人は、二十四日の夜九時に教会裏の森の入り口で待ちあわせることにした。

二十四日、ラグナは朝から、窓の外ばかりを見て過ごした。雪が降っていたからだ。夜までにはやむだろうかと心配していた。

しかし、ラグナの想いが通じたのか、雪は昼にはやんで雲は流れ去り、太陽が顔を出した。ラグナは良かったと胸を撫で下ろした。

積雪が音を全て吸収して、ラグナの歩く音だけがさくさくと響く。教会裏の森の入り口ではミストが待っていてくれた。

「ミストさん。お待たせしました」

「こんばんは、ラグナさん。森まで歩きましょうか」

二人は微妙な間隔をあけて並んで歩く。手を伸ばせば届きそうな小さな手。でも、その手を取るにはまだ早い気がする。ラグナはそんな気持ちになっている。そんなラグナの気持ちを知ってか知らずか、ミストはとても嬉しそうに辺りを見回している。

「静かですね、まるであたしたち以外誰もいないみたい」

「そうですね」

「そうそう、お庭に雪だるまを作ったんですよ」

何の脈絡もなく話が飛んだ。ラグナは慌てることなく相槌を打つ。

「そうですね」

「それが傑作なんですよ」

「傑作ですか？」

「はい。マルコやキャンディと作ったんですけど、まるでターナー

さんみたいになっちゃったんです」

「それは体型が一緒なだけですよね？」

そしてすかさず突っ込みを入れる。しかし、ミストは動じることもなく話を続けるのだ。

「そうですね。それで三人で降りたての雪をお皿に入れてシロップをかけて食べたんです。おいしかったですよ。でも、キャンディが怖がっているんです」

「どうしてですか？」

「雪を食べたから、雪だるまが怒って仕返しに来るんじゃないかって。そんなことあるわけじゃないですよ」

ラグナは無言だった。そんなことあるわけじゃないか、と実は思っている。しかし、ラグナの無言を違う意味で捉えたミストの顔色が変わった。

「まさか……実はあたし、夢の中で雪だるまに名前を聞かれたんです」

「雪だるまに!?!」

「はい。ラグナですって答えておきました」

「ええっ!?!」

「ラグナさん、雪道を歩くときは気をつけてくださいね」

楽しそうにクスクスと笑うミストに、ラグナは何も突っ込むことが出来なかった。

いつものようにたわいのない話をするうちに森に着いた。森にはラピスと見た夢の樹が大きく枝葉を広げている。その枝葉には雪が積もっていて頭を垂らしていた。

「とても幻想的で、まるで夢の中にいるようです」

ミストは手を胸の前で手をあわせて、空に舞う粉雪をその瞳に映している。ラグナはそれをじっと見つめた。その熱い視線に気づいたのか、ミストがラグナを振り返る。

「寒いですね」

「はい」

「こうしてもいいですか？」

そう言いながら、ミストはラグナの腕に自分の腕を絡めた。

「ラグナさん」

「なんですか？」

「トランルピアに住むことを決めたのはどうしてですか？」

ミストは見つめた。探るような瞳。不安と期待が入り混じる。

ラグナは呆れた顔をするところ答えた。

「ミストさんが脅したんでしょう？」

「脅すなんて……そうでしたっけ？」

「そうですね。でも、今にしてみると、決めた理由はそうじゃなかったんだと思います」

「そうですねですか？」

「そうですね」

押し問答のようなやりとりが続くが、二人ともはつきりと自分の想いを口に出来ずにいる。

楽しい時間はあっという間に過ぎてゆく。ラグナは帰るというミストを送って来た。

「ありがとうございます。聖夜祭の夜に一緒に過ごせて、あたし嬉しかったです」

「いえ、僕のほうこそ、僕のために時間を作ってくれて、ありがとうございます。一緒にいられて楽しかったです」

「おやすみなさい」と言ったミストが扉の取っ手に手をかけると、振り向いた。物憂げな瞳は何かを訴えているようだった。ラグナはその瞳を見て、思わずミストの空いた手をつかみ、引き寄せた。雲の切れ目から月が顔を出す。ラグナはミストの体をぎゅっと抱きしめた。ミストは無抵抗だった。ミストの体温を感じてラグナの胸は打ち震える。そして腕を緩めると、ミストの瞳を見つめた。

「好きです」

物憂げな瞳が輝きを取り戻す。ミストは瞳を潤ませると、ふんわり微笑んだ。

「あたしも大好きです」

ラグナがミストの頬に手を寄せると、ミストはそっと目をつぶった。はやる心を抑えてラグナはゆっくりとミストに触れた。

30・幸せな時間（後書き）

ついにくっつけましたが。くじら島との約束がまだです。
ラブラブしている時間はなさそうです。

番外編 イベール村のゴブリン 1

季節は春になった。湖のセレッソもピンク色の花をつけた。今度ミストを誘って花見に行こう、そんなことを考えながらラグナが朝食をとっているときだった。扉が勢い良く開く。この開け方はミストではない。いったい誰だろうとラグナは首をかしげて玄関を見た。その人は腰に手を当てて仁王立ちしている。朝日を背にしている、ラグナには影しか見えない。影はつかつかと近寄ってくると、ラグナの前に立った。ラグナは持っていたパンをポトリと落とした。

「ミネルバさん？」

「お久しぶり！ 会いたかったよ、ラグナ！」

ミネルバは座っているラグナに抱きついた。勢いで二人は椅子ごと倒れてしまう。

「いたたた、ミネルバさん、大丈夫ですか？」

ラグナは頭をさすりながらも、自分の首にぶら下がるような形になっているミネルバを氣遣った。

「大丈夫。ラグナ、あたしがいなくて寂しかった？」

「え、ええ、まあ」

なんとも元気のよいお嬢さんである。しかし、この状態はいかななものか。こんなところをミストに見られでもしたら大変なことになるな、などと案じていると、突然悲鳴が上がった。自分でもない、ミネルバでもない、この声は……。

「ミストさん！？」

首だけ起こして見ると、開け放たれた玄関に口を手で覆ったミストが立っていた。ラグナは慌てて起き上がろうとするも、ミネルバに抱きつかれていて起き上がることが出来ない。

「ミストさん、違うんです、事故なんです！」

「ラグナさんなんて知りません！」

ミストはそう叫ぶと、走り去った。

がつくりとして脱力したラグナの顔を覗き込みながらミネルバが訊ねた。

「ラグナはミストが好きなの？」

「はい」

ミネルバはラグナから降りると、その場で正座した。

「なんで！？ ミストのどこがいいの？」

ミネルバに詰問されながら、ラグナも起きて正座をした。

「どこって言われても……とにかく好きなんですよ」

ミネルバはラグナをじっと見つめていた。王位継承のときはラグナの言った意味がわからなかった。でも、今はわかる気がする。ミネルバはおもむろにラグナの手を取った。ラグナはビクツとして仰け反る。

「まあ、いいわ。ミストなんて放っておいて、ミネルバと遊ぼう？」
無邪気な願いに、ラグナは苦笑いをした。

ミネルバにねだられて、ルピア湖のセLESSOを見にやって来た。ミネルバはあたり一面ピンク色に染まったセLESSOを見て感嘆の声を上げる。

「キレイ！ エルフの森にもこんなにキレイに咲くセLESSOはないよ」

楽しんでるようでラグナもほっとする。ミネルバは辺りをキョロキョロと見回した。

「絵描きのお兄さん、今日はいないのかな？」

「ルートさんなら、明日来ると思いますよ」

「そっか。明日、広場に行ってみようっと。ラグナも付き合ってね」

「明日は午後からなら付き合いますよ」

「ラグナは仕事があるんだもんね」

まあ、何とでもなる仕事ある。畑の手入れはモンスターがやってくれるし、モンスターの餌さえ切らさないように気をつけていればい

い。それでも一応自分の中でルールを作って生活をしている。ようは農耕が好きなのである。

「そういえばエルフの国はどうですか？」

「まだ女王は決まっていらないんだ」

女王が決まっていけないということはまさかタバサを連れにきたのだろうか。

ラグナが怪訝そうな顔をしたのを見て、ミネルバは先回りをした。

「お姉ちゃんを連れに来たと思ってるんでしょう？ そんなことしないよ」

ミネルバは、ルピア湖の上に広がる青い空を見ながら答えた。語尾に元気がない。ラグナは様子が変わだと思って、こんな質問をぶつけた。

「ところでタバサさんには会ったんですか？」

「お姉ちゃん？ まだ会ってないよ」

「遊びに来たことを連絡してないんですか？」

「うん。だって、ミネルバ、ラグナに会いに来たんだもん」

「僕にですか？」

「そうだよ。以前約束したでしょ？」

「そうですけど、それだけのためにですか？」

「いけない？」

別にいいのだが、お姉ちゃん子のミネルバがタバサに会っていないなんて変である。何か事情があるのか。ミネルバが自分で言い出すまでは黙っておこうと決めた。

「さあ、今度は海岸へ行こう！」

ラグナはミネルバに手を引っ張られた。

ミネルバから解放されたのは夜の九時だった。ラグナはそのままミスト宅を訪れた。

「こんばんは、ミストさん？」

気配は感じられるものの、ミストは出てこない。もう寝ているのだ

ろうか。いや、怒って居留守をつかっているのかもしれない。ラグナは返事がないけれども、家に上がりこむ。そしてミストの寝室の戸をそっと開ける。ミストはベッドで横になっていた。

「ミストさん、もう寝ちゃいましたか？」

ラグナが呼びかけても、ミストは無言である。背を向けていて表情を伺うことは出来ない。きっと寝たふりをしているのだろうと思うたラグナは、そばにあった椅子に座りこんだ。そして独り言を言い始める。

「今日は散々でした。ミネルバさんが急に來て飛びついてくるし、ミストさんにはそれを見られて誤解されるし」

ミストの背中がピクリと動く。ラグナはしめしめと思い、話を続ける。

「一日中、付き合わされて大変だったな。すごく疲れたな。誰か癒してくれないかな」

ミストは依然として背を向けたままである。

「ミストさん、よく寝てるな。触ってもわからないだろうな」

そう言いながら、ラグナはミストの手を取ると、手のひらをコチョコチョとくすぐり始める。「ここのツボが効くんだよな」、などとつぶやきながら。ミストが無視を決め込んでいるものだから、ラグナの行動はだんだんエスカレートしていく。ミストを仰向けにする、と、「ほんとによく寝てるな」と言いながら、頬に手を当てた。目をつぶったままだが、瞼がピクピクと動いている。ラグナはほくそ笑んだ。

「ああ、眠くなってきた。ミストさん、お邪魔しますね」

ラグナは短剣やリュックを床に置くと、ベッドの端に座る。ベッドが体の重みで沈み、ミストの体がラグナのほうに傾いた。

まだ寝たフリをするか？ とラグナは思いながらも、ミストの額にかかった髪を何度も手で梳いた。

「ミストさん、誤解だつてわかっててくれますよね？」

すると、目前にあるミストの目がパチツと開いた。

「わかってますけど……」

青い瞳がラグナをキツとにらみつけている。

「ミネルバさん、用があつて来たみたいなんですけど、理由を言わないんですよ」

「そうなんですか」

「しばらく付き合わなくちゃいけなくなりそうで」

「構いませんよ。寂しくなんてありませんから」

口をとがらせて視線をそらすミストを目の当たりにして、ラグナはため息をついた。

「……また明日来ますから」

ラグナは名残惜しげにベッドから降りる。そして床に置いた短剣やリュックを装備した。相変わらずミストはそっぽを向いている。ラグナは「おやすみなさい」と声をかけて部屋を出た。そして玄関まで来ると、ドアノブを力チャリと回した。すると、奥のほうからパタパタという音がしたので振り返ると、ミストが走ってくるのが見えた。飛び込んできたミストを受け止めた。

「ラグナさん」

「何ですか？」

「もう少し……お話ししませんか」

ミストが恥ずかしそうに顔を赤らめてねだる。さっきのことを考えれば、わがままだと反省したのだろう。いつもはめられるラグナとしては、この機会を逃すのは惜しい。

「でも、ミストさん、もう眠いんでしょう？」

「意地悪ですね。このまま離れたら眠れなくなります」

いじらしいほどに素直なミストに、ラグナは頭がくらくらした。こんなことがあつていいのだろうか。またはめられているんじゃないだろうか。

「じゃあ、今夜は帰りませんよ？」

質問した後に気づいた。このような手は以前使ったことがある。ちよつとした沈黙が続く。やはりミストは恥ずかしそうに「はい」

と答える。

ラグナの頭は爆発寸前である。その場を逃げようとしたが、ミストに手をしっかり掴まれていた。

「ミ、ミストさん!？」

ミストはラグナをじっと見つめていたが、ぷくつと頬を膨らませると手をパツと離れた。そしてくるつと踵を返して一人で寝室へ戻っていった。

番外編 イベール村のゴ布林 2

今朝も良い天気である。空は晴れ渡り、モコモコのような雲がところどころ気持ちよさそうに浮かんでいる。

ラグナがモンスター小屋で、モンスターの世話をしていると、扉が開いてタバサが現れた。

「ごきげんよう、ラグナ様」

「タバサさん、こんにちは……って、どうかしましたか？」

タバサはいつもニコニコとしているのに、今日は顔色が冴えないからだ。笑顔のタバサも素敵だが物憂げな表情もきれいだよななどと考えていると、タバサが口を開いた。

「ミネルバが帰って来ているんですね？」

「ええ。まだ会ってないんですか？」

「はい。あの子、別荘に寄り付かなくて」

タバサはやっぱり、という表情をした。きっと里から連絡は来ていたのだろう。

「何か言っていないでしたか？」

「エルフの女王選びが難航しているって言っていました」

「そうですね」とタバサはうつむいてしまう。ラグナは慌てて付け足した。

「タバサさんを連れて帰ろうというわけじゃないそうですよ」

「あ、はい。実は、エルフの国ではミネルバを女王にという話が上がっているらしいんです」

「それはおめでとうございます」

「ありがとうございます。それだけならいいんですけど、結婚も同時に話が進んでいるらしくて」

「結婚!？」

「私みたいに出て行かれては困るから、周りを固めておきたいので

しょうね」

「それで逃げてきたってことですか？」

「多分……それで兄のように慕っているラグナ様に何か相談にきているのではないかと」

「何か隠しているような気はしましたが。わかったらお知らせします」

「お願いいたします」

タバサはいつものように丁寧に辞儀をすると小屋を出て行った。位の高い人というのは、いろいろと束縛があり大変なのだなど同情心が沸き起こる。

午後になると、ミネルバが牧場へやって来た。

「ラグナ、遊ぼう！」

ラグナは苦笑いをする、リュックを背負い、ミネルバに尋ねた。

「今日はルートさんに会いに行くんでしたね」

「うん！ ルートさん変わってないかなあ」

かなり浮かれ気分のようにある。

広場では、荷車の脇でルートがイーゼルに向かっていた。ラグナがルートに近づいていくと、ルートは筆を動かす手を止めて人懐こい笑みを浮かべた。

「ラグナはん、こんにちは」

「こんにちは、ルートさん」

「なんや、今日は何を買ってくれるんや？」

「いえ、今日はミネルバさんを連れてきたんですよ」

「ミネルバちゃん？ どこにおるんや？」

「えっ！？ 後ろにいませんか？」

そう答えながらラグナが振り向くと、自分の後ろでミネルバが小さくなって隠れていた。ルートはラグナの後ろを覗き込んだ。

「ミネルバちゃん、久しぶりやね。元気にしとった？」

「うん」

ミネルバは借りてきた猫のようにおとなしい。いったいどうなっているのだろうか。腑に落ちないものの、ラグナはルートに何をしていたか訊ねた。

「ルートさん、何を描いていたんですか？」

「これ？ このあたりの景色をね。セLESSがハラハラと散って美しいやろ？ 描かんてはないわな。ところでラグナはん、お願いがあるんやけど、聞いてもらえるかな？」

「いつもお世話になっっているルートさんの頼みなら、聞かないわけにはいかないですよ」

ルートは、「おおきに」とにつこり笑った。

「私の故郷はイベル村っていうんやけど、ぎょうさんゴブリンが出よってなあ」

「それは大変ですね」

「それでな、ゴブリン退治してもらえまへんやろか？」

「退治ですか？」

「忙しいのか知らんが、王国はなかなか対処してくれんのや。私が各地を放浪しているのは、ゴブリン退治をしてくれはる人を探すためだったんや。それでやっとラグナはんを見つけたっていうわけや」
ルートから詳しいことを聞いてラグナは考え込んだ。これはどうかんがえても何者かがゲートを使って何かを企んでいる可能性がある。

「わかりました。やりましょう」

「おおきに。お礼はラグナはんの肖像画でどうや？」

「光栄ですよ。お願いします」

ラグナが答えると、ルートは表情を崩した。すると、今まで黙っていたミネルバが口をはさんだ。

「ねえ、ミネルバも行きたい」

ラグナとルートは顔を見合わせた。ルートは幼子に言い聞かすように、ミネルバの目の高さまでかがんで話しかけた。

「タバサさんのお許しが出たらな」

「なんでお姉ちゃんの許可が必要なの!？」

「仕方ないやろ。ミネルバちゃんはまだ子供なんだから」

ルートの言葉を聞いて、ミネルバは手をぎゅっと握り締めて言い放った。

「ミネルバ、もう子供じゃないもん!」

ミネルバの立腹のしようにラグナとルートはびっくりしてしまった。ラグナは、ミネルバを優しく諭した。

「ミネルバさん、大人はそんな駄々をこねません。さあ、タバサさんのところへ報告に行きましょう」

「いや! お姉ちゃんには会いたくないの。ラグナ、聞いてきて」

タバサに会いたくない? どうしようかと考えたが、ここは一人で行った方が良さそうだと判断した。

ラグナは南地区にあるビアンカの別荘へ来た。豪華な調度品が並ぶエントランスを抜けて、どんどん奥へと進む。左手の食堂の扉を開けてキッチンを覗くと、タバサは調理台の前で作業しているところだった。

「タバサさん、こんにちは」

「ごきげんよう、ラグナ様」

タバサは作業の手を止めて、手をエプロンで拭きながら振り返った。
「何かわかりましたか?」

「ミネルバさんは、タバサさんに会いたくないみたいです。心当たりはありませんか?」

「さあ……何もした覚えはないんですけれど」

しょんぼりとうつむいてしまったタバサに、言わない方が良かったかなと思ってしまう。少しの間、沈黙が流れた後、ラグナは本来の用事を思い出した。

「ああ、そうだ。ルートさんの故郷のイベル村へ行くんですが、ミネルバさんが行きたいと言っているんです。連れて行っていいで

しょうか？ 一週間ほどかかると思いますが」

「イベール村ですか？」

タバサは眉根を寄せると、しばらく考え込んでいた。しかし顔を上げるときっぱりと言いつつ放った。

「ラグナ様、ぜひミネルバを連れて行ってください」

「いいんですね？」

タバサは毅然とした態度でこっくりとうなずいた。

「これはエルフの女王としての試練かもしれません」

「試練ですか？」

「はい。きつとミネルバはラグナ様のお役に立つはずです」

「タバサさん、ボクたちがイベール村に行く理由がわかっているんですか？」

「はい、噂ですが。ミネルバのこと、よろしく願います」

タバサは丁寧にお辞儀をした。

タバサと別れたラグナはミネルバの下に戻り、このことを伝えると、ミネルバは小躍りして喜んだ。三人は明日トランルピアを発つことにした。

夕方、家に戻るとお客があった。

「よう」

「ワグナーさん、いらしていたんですか」

「ああ、対戦に来た」

二人は若草の遺跡へと場所を変える。そして、いつものように対戦した後、遺跡の中の岩に腰掛け、二人は水筒のお茶をぐびぐびと飲んだ。

タバサのことが引っかけかかっているラグナはワグナーに恋愛相談をする。ミストとのやりとりだ。それを聞いたワグナーは「バカか」と笑った。

「ミストははめてなんかいないと思うぞ。おまえが勝手に自爆しているだけだ」

「自爆ですか？」

「そうだ。年頃の男に、それも恋人に嘘つくわけないだろう？　嘘ついて襲われたらバカみたいじゃないか」

でも、ミストは人をからかうのが好きである。それはこれまでの付き合いで散々思い知らされてきた。いくら恋愛の師、ワグナーの言葉でも信じられない。

「そうでしょうか？」

「そうに決まってる。その気があるから了承するんだろっ」

確かに誘いの文句を言うのはラグナである。了承の意思を見せるミストに、ラグナは慌てて逃げ出している。

ワグナーは言った。

「おまえが悪い。その気がないのに誘うなんて男のすることじゃない。その気になったら誘うもんだ」

ラグナは昨日ミストが見せたふくれっ面を思い出した。嫌な思いをしているのはミストのほうかも知らない。

イベール村に行くことを話すと、「離れているあいだに心変わりするかもな」と脅されて、ラグナは青くなった。そんなことはないと思っているが、惚れた弱みで非常に心配である。

「どうしたらいいですか？」と訊ねると、ワグナーはニヤリと笑った。

「勢いだよ、勢い！」

「勢いですか」

その気になったときに、勢い……。よくわからない。怪訝そうな顔をしているラグナにワグナーは尋ねた。

「キスしたことないのか？」

「あ、あります」

「じゃあ問題ないじゃないか。つまらん」

そういうと、荷物を持って帰っていったのだった。

その夜ラグナはミスト宅へ来た。遅い夕食と一緒に食べ終えて、今はミストがラグナの隣に来て、お茶をいれてくれている。ラグナはそんなミストを眺めながら口を開く。

「ミストさん、僕、ルートさんの故郷のイベール村へ行くことになりました」

お茶をいれるミストの手が止まる。

「イベール村ですか？　どうしてそんなへんぴな所へ？」

へんぴなところと言うことは、ミストはイベール村を知っているのか。知らなかったのは自分だけらしい。

「イベール村は、ゴブリンが出没して困っているらしいです。それで退治して欲しいと頼まれました。一週間ほどで帰れると思います」

「一週間……」

明らかに落胆しているミストに、ラグナはうれしくなる。きっと自分と離れるのを悲しく思ってくれているのだ。

ミストはカップをラグナの前に置くと、再び訊ねた。

「ルートさんと？」

「ええ」

言ったほうがいいのか悪いのか。でも言わずに後ではれるほうが恐ろしい。

「……ミネルバさんも一緒なんですけど」

「ミネルバさんですか？」

ミストの形の良い細い眉がピクリと動いた。まずい。

「はい……」

かろうじて返事をしたものの、淡々とした表情のミストに、ワグナーの言葉が頭の中でこだまする。そして警鐘が鳴り響く。ラグナは立ち上がった。

「ミストさん」

「何でしょう？」

「僕がいない間に心変わりなんかしないですよね？」

ミストは目を丸くしていたが、にんまりと笑みを浮かべる。

「そんなことはわかりません」

「えーっ!？」

ラグナが大きな声を出すと、ミストは頬をぷくつと膨らます。

「女性の影をちらつかせているのはラグナさんのほうじゃないですか」

「そんな！ 僕にはミストさんだけです。信じてください！」

ラグナが必死で訴える。

「じゃあ、証明してください」

証明って……いくら口で言ってもわかってもらえないのにどうしろというのだろう。

情けない顔をしてラグナはミストを見つめた。ミストは意地悪く笑みを浮かべる。そのとき、またワグナーの言葉が頭の中でこだました。

ラグナはミストの手を掴むと、引き寄せて抱きしめた。ミストはラグナの胸に顔を押し付けるような形になっている。

「僕の鼓動が聞こえますか？」

ミストは耳をラグナの胸につけた。心臓の鼓動が自分の鼓動に負けないくらい早い。

「ミストさんといると、こんなにドキドキするんです。こんなこと他の女性ではありません」

ミストはうれしそうに微笑むと、ラグナの背に手を回す。

「あたしたち、一緒なんです」

ラグナは驚いた様子でミストの顔を覗き込んだ。

「ミストさんも？」

「ええ。聞いてみます？」

「え!？」

ラグナの頭の中にあらぬ絵が浮かび上がる。ラグナは慌てふためき、首を横にぶるぶると振った。そしてハッとして、ミストに気取られ

ないように抱く手に力をこめた。

ミストはクスツと笑った。

「気をつけて行ってきてください。ちゃんと待ってますから」
「はい」

やはりミストのほう一枚も二枚も上手のようである。

番外編 イベール村のゴブリン 3

翌朝、ミストに見送られて三人は出発した。トランルピア村からイベール村へは馬車で移動する。馬車は薄暗い森の中を風のように進んでいく。ルートによると、この森を抜けるとイベール村のすぐそばらしい。

「ずいぶん速いですね」

「のんびりしていると、余計なものに絡まれるんやわ」

ルートがいつものように穏やかに笑った。余計なものとは何なのだろうか。

ラグナの横に座っているミネルバは、まるで遠足に行く子供のようにしゃいでいる。何かを見つけたようで、窓の外を指差して叫んだ。

「ねえ、あれ何？」

そこには大きな丸い岩があった。その中がくりぬかれたようになっており、まるで三日月のようだった。

「ああ、あれはイベール村の女の子たちの聖地とでもいうのかな。満月の夜に、あの中で愛を告白すると、成就するって言い伝えがあるんよ。今じゃ、ゴブリンのせいで誰も近寄らんけど」

「へえ、ロマンティック。ねえ、ラグナ、今度の満月っていつだったけ？」

「ええと、確か五日後ですね」

「そっか。それまでにゴブリン退治終わらせてよね」

二人のやりとりを聞いていたルートがミネルバをからかう。

「ミネルバちゃんはラグナはんに告白する気なんかいな」

「ち、違うもん！ ラグナなんかにするわけないもん」

強力に否定すると、ミネルバは膝を抱え込んで窓の方へ向いてしまふ。ルートとラグナは顔を見合わせて苦笑した。

イベル村に着くと、ルートは二人を村長の下に連れて行った。白いあごひげを蓄えた村長はルートを見ると、皺くちやの顔をほころばせて抱き寄せた。

「ルート、元気におったか」

「はい。村長もお元気そうで何よりです」

ルートは村長を抱き返し、体を離すとラグナとミネルバを紹介した。「今日はゴブリン退治をしてくれる青年を連れてきました。こちらがラグナはん、こちらのお嬢さんはミネルバちゃん」

村長はラグナとミネルバに握手を求めた。

「お二人とも遠いところをようおいでなすった。ゴブリンのことは追々話すことにして、長旅で疲れたじやろう。今日は我が家でゆっくりと休むがいい」

ラグナとミネルバは、それぞれ握手に応じると礼を述べた。村長はずいぶん愛想の良い人だった。

ラグナとミネルバは各々の部屋へ案内された。ラグナが部屋で荷物を整理していると、ノック音がした。「どうぞ」と声をかけると、戸の向こうに立っていたのはミネルバだった。ミネルバは「ちょっといい？」と小首をかしげて訊ねた。ラグナはミネルバに入るように促すと椅子を勧めて、自分はベッドの端に腰掛けた。何か用があったらるうに、ミネルバはモジモジとしているだけで何も話そうとしない。

「何でしたか？」

「あのね、私、ルートさんが好きなの！」

突然顔を真っ赤にして叫んだミネルバにラグナは失笑した。

「ミネルバさん、それはルートさんに直接告白した方がいいんじゃないんですか？」

「そ、そうだけど！ ラグナ、協力してよ」

「協力って？」

ラグナが聞き返すと、ミネルバはうつむいてしまう。

「だって、ルートさんってお姉ちゃんのが好きでしょう？」

「そうなんですか？」

「だって、いつもお屋敷の前で絵を描いているの。ルートさんがないときにそつと覗いたら、キャンバスに描かれていたのはお姉ちゃんだったもん」

そういえば、ルートはよくピアノ力の別荘の前にいた。タバサの王位継承の儀が終わった頃、どこからか聞きつけたルートが「タバサさんって故郷に帰るのか？」と首根っこをつかまれて訊ねられたことがある。姉に恋する男に恋してしまった妹……相手があのタバサでは不憫だなあとラグナは思った。

「わかりました。協力します」

「ありがとうございます」

ミネルバは元気のかたまりのようになって部屋を飛び出していった。その後姿を見送りながらラグナは気づいた。ミネルバはルートへの想いが断ち切れず、エルフの国を飛び出してきたのかもしれない。

夕食の後、ラグナとミネルバはルートに散歩に誘われた。イベール村の教会の裏手にある泉だという。泉に着くと、ミネルバは岸边に駆け寄った。

「神秘的な感じのする場所ね」

緑をたたえたその場所は、樹齢百年はありそうな樹が生えており、その周りには寄り添うように若い木々が立っている。泉は月や星をその美しい水面に映して化粧をしているようだった。

ミネルバの感想に気を良くしたのか、ルートが泉の話をし始めた。

「この泉にはな、女神さまが住んでるって言い伝えがあるんや」

「女神さま？」

ミネルバは興味を示したようである。

「そや。それでな、泉にものを投げ入れると、二倍になって返って

くるって噂や」

「やったことあるの？」

「ない」

ルートは大きな声で笑った。

一方ラグナは顔をひきつらせていた。つい最近聞いた話である。本当にそんな泉が存在していたとは……ミストはこのことを知っていたのか。いや、聞いたことがあると言っただけだ。ミストに知られば、泉に投げ込まれかねない。このことは内緒にしておこうと決めた。

ふと、気付くとミネルバが視線を送ってきている。ラグナはハツとして、ルートに告げた。

「ルートさん、僕、用事を思い出したので先に帰ります」

「じゃあ、私も」

「いえ、二人はもう少し散歩でも楽しんでいてください。じゃあ」
ルートを押しとどめてラグナはその場を離れた。しかしタバサから頼まれている以上、ミネルバを置いていくわけには行かない。ラグナは途中で引き返してきて樹の陰で二人の様子を伺うことにした。

二人は泉のほとりで微妙な間隔で並んで立っていた。

ルートは静かに泉を眺めている。

反対にミネルバはドキドキしている。なんといつても、夜に、それもこんなロマンティックな場所に二人きりである。はやる気持ちを抑えながら口を開いた。

「ルートさんってずっと絵を描いているの？」

「そうや。世の中の美しいもの全部キャンバスに描き留めたいって思ってる」

ルートがミネルバを優しくな表情で見ている。ミネルバの心臓はせわしなく暴れだす。しかし、平静を装って話を続ける。

「だから放浪してるの？」

「放浪とは人聞きが悪いね。でも、まあ、そんなもんか」

ルートは「こりゃ一本とられたな」と言うと、カラカラと笑った。そんなルートを見つめながらミネルバは核心に触れようと試みる。

「お姉ちゃんも美しいもの？」

タバサは妹の自分から見ても美しい。ルートがタバサを描きたい気持ちもわかる。ルートは本当にタバサのことを好きなのだろうか。ルートは空を仰いで微笑んだ。

「ああ。タバサさん、綺麗やな。綺麗過ぎてこの世のものとは思えへん。手なんか届かんな」

手が届かない……その言葉にどれだけルートがタバサを大事に思っているかがわかる気がした。自分はどうか。自分の入る余地はあるのだろうか。

「ミネルバは？」

「ミネルバちゃんも可愛いよ」

「可愛い？」

不満そうにミネルバが訊くと、ルートはニコニコと笑った。

「ミネルバちゃんはまだつぼみなんや。これから大輪の花を咲かせるんやろうなあ」

ルートはそう答えると、泉の面を指差した。そこには月が映っている。月は風のせい、ゆらゆらと揺らめいている。

「これなら手が届きそうや」

ルートの言葉に、ミネルバは胸をチクリと刺された気がした。ミネルバは足元にあった石を拾ったかと思うと、泉の面に向かって投げた。泉の面は波紋を描いて、月は姿を消した。

「お月さまが落ちてても手なんか届かない」

ミネルバの行動にびっくりしたルートだったが、その言葉を聞いてますます不可解に思った。

「ミネルバちゃん？」

「お姉ちゃんはずっと人間の世界にいるけど、ルートさんのものに

はならないよ！」

そう叫ぶと、ミネルバは踵を返して元来た道を走っていった。ルートは悲しそうな顔をしてそれを見送った。

ラグナは慌ててミネルバの後を追った。ミネルバは教会の壁に背を預けて、空を仰いでいた。

「ミネルバさん」

「ラグナ」

ミネルバはラグナの顔を見ると、ポロポロと涙を流し始めた。

「ルートさんの心の中には、お姉ちゃんが住んでる。ミネルバ、逆立ちしたってお姉ちゃんになんて勝てっこないよ」

両手で顔を覆って泣きじゃくるミネルバを哀れんだ目で見てしまう。でも、タバサからルートの話を聞いたことがない。ラグナはミネルバを励ました。

「誰が勝てないって決めたんですか？ まだやっと同じ土俵に立つたばかりじゃないですか。まだ告白してもいないんでしょう？ ルートさんに拒絶されたわけじゃないでしょう？」

「うん」

「もつとガンガン攻めていかなくっちゃだめですよ。ルートさん、可愛いつて言ってくれたじゃないですか」

「うん」

ミネルバは泣きながらも笑顔を浮かべる。ラグナはそんなミネルバの頭をポンポンと叩いた。

番外編 イベール村のゴブリン 4

翌朝、村長とルートとミネルバとラグナは朝食をとっていた。ルートがスプーンを動かす手を止めて村長に尋ねる。

「最近はどうですか？」

「相変わらずじゃ。時々、人里にゴブリンが下りてきて暴れるのじや」

ラグナは思わず話に割って入った。

「巢はわかりますか？」

「三日月岩の奥にある洞窟だと思われる」

「じゃあ、食事が終わったら早速行きます」
すると、ルートが案内役を買って出た。

「案内は私がするで。ミネルバちゃんはここで待つとき」

ミネルバは頬を膨らませて反論する。

「いや！ あたしも行くもん！」

「せやかて……なあ、ラグナはん？」

困ったような顔をするルートに意見を求められたが、タバサに言われた事を思い出したラグナはミネルバの同行を認めた。

三日月岩まで来た。ミネルバは恋人たちの聖地という岩に触りご満悦である。その様子に、ラグナとルートは乾いた笑いを浮かべながら奥の洞窟へと進む。暗い穴倉の中を、たいまつをかざして何うも、ゴブリンは一体も現れない。

「ラグナはんの強さに恐れをなして逃げよったか」
ルートのお世辞にラグナは苦笑いをした。

すると、目の前に広場が現れた。その中央には光り輝くゲートがあった。いったい誰が何の目的でゲートを設置したのか。ラグナが考え込んでいると、ミネルバがトコトコとゲートに近づいていった。

気がついたラグナは慌てて制止したが間に合わない。ゲートは輝きをいつそう増したかと思うと、いくつもの光が飛び出した。それはゴブリンへと変貌し、あつという間にミネルバを取り囲んだ。ミネルバの悲鳴が洞窟内に響き渡る。ラグナはたいまつを地面の割れ目に突き刺すと、ミネルバのそばへ躍り出た。ゴブリンたちを切り捨て、ゲートに一撃を加えた。するとゲートはその光を消した。ミネルバはその場でへなへなと座り込む。ルートが駆け寄ってミネルバの様子を伺った。

「大丈夫かい？」

「うん」

ミネルバの腕を支えて立たせると、ルートはたいまつを取った。

「ラグナはん、これはどういう事？」

「これはゲートです。このゲートに近づくと、ゴブリンが出現するんです。この奥には何かありますか？」

「そやな。昔話だけど、竜が眠っているから近づくんじやないっておばあから聞いたことがあるな」

「竜？」

「子供が入るといけないから脅してたと思ってたんやけど」

ルートの話を聞いて、ラグナは考えた。この地に竜伝説が存在していること、ゲートが設置されていること。この奥にはとんでもない秘密がありそうである。タバサはこのことを知っていたというのだろうか。そうなると、ミネルバを連れて行くしかないのだが……。

「予想以上に長くかかりそうです。ミネルバさん、あなたの力が必要になるかもしれません。行ってくれますか？」

「うん」

ミネルバは元気良く答えた。ミネルバがどう貢献してくれるかはわからないがひとまず安心である。ルートはどうするか。絵描きだし、戦闘は経験はないだろう。ミネルバ一人守るのなら何とかなりそうだが、二人となるときついかもしれない。帰ってもらったほうが良いだろう。そう考えたラグナはルートに帰宅を勧める。

「ルートさん、ここまで来ればもう大丈夫ですから、先に村へ帰ってください」

「そうはいかな」

「はい？」

「ミネルバちゃんが行ってくれるのに、私が帰るわけにはいかな。役に立たんかもしれないけど、明りぐらいいは灯せるで」

ルートの申し出に、ミネルバは目を輝かせた。ルートの存在はミネルバに勇気と力を与えてくれるかもしれない。ラグナはルートにも同行してもらうことにした。

三人はさらに奥へと進む。すると、今度はミネルバがラグナを制した。

「待つて。何か聞こえる」

「何ですか？」

ミネルバは目をつぶって耳を澄ませる。そしてハツとしたかと思うとつぶやいた。

「泣いてる」

「泣いてる？ 何が？」

「わからない。でも、助けなくちゃ！」

そう叫ぶと、ミネルバはラグナからたいまつを奪い取ると、真っ暗闇の中を走っていった。

「ラグナはん、追いかけないと」

「はい」

ラグナはリュックから片手剣を取り出すと、ルートに差し出した。

「その前に、ルートさん、護身用に剣を持ってください」

「わかった」

ルートはラグナの言わんとすることを汲み取って差し出された剣を受けとった。二人はミネルバの後を追いかけた。

ラグナとルートの目の中に飛び込んできたのは、たくさんのゴブリ

ンだった。その中心にはまだ小さいドラゴンと、それをかばうように立つミネルバの姿がある。

「ミネルバさん！」

「ラグナ、ゴ布林たちがこの子をいじめているの。助けて！」

よく観察してみると、ドラゴンの体から無数の管が伸びているのが見えた。それは機械装置に繋がっている。その装置に描かれた模様を見てラグナは驚愕した。

「ゼークス帝国！？」

また性懲りもなくドラゴンを操ろうとしているのか。しかし、居るのはゴ布林ばかりで兵士の姿はない。

「どうする？ ラグナはん」

「はじまりの森に帰します。ミネルバさんを頼みます」

「わかった」

ラグナは剣を如意棒に持ち替えて、トンと地面をついた。縦横無尽に如意棒を操り、ぴたつと制止した。そこへゴ布林たちがいつせいに飛び掛る。その様はまるでピラニアが獲物に襲い掛かっているようだ。

「ラグナ！」

ミネルバとルートが同時に叫ぶ。ラグナに被さるように出来た山はピクリとも動かない。二人は固唾を飲んで見守っている。

ラグナの雄叫びが聞こえたかと思うと、まるで火山の噴火のようにゴ布林たちが吹っ飛んだ。ラグナは静かに息を吐く。そして、「もういませんね」とつぶやくと、くるくると如意棒を操り、地面をトンと突いた。

すると、装置の裏から人影が現れて、ミネルバとルートを羽交い絞めにした。ミネルバの悲鳴が響く。その後ろからふんぞり返った軍服を着た男が出てきた。ラグナはその男を見て叫んだ。

「あなたは、ゼークスの！」

「久しぶりだな、ラグナ」

そこに現れたのは、カルディアのミストブルーム洞窟でリネットを

切り捨てた皇帝エゼルバードの傍らにいた軍人だった。

「これはあなたたちの仕業なのですか!？」

「そうだ。またもやきさまが現れるとは……もはやここまでか。しかし、これ以上ノーラッド王国にグリモアを渡すわけにはいかない」
そう言うと、軍人は部下に何かを命じた。部下は機械装置に向けてピストルを数発撃った。機械装置は煙を上げ、やがて炎を上げ始める。すると、管で繋がれたドラゴンが苦しみ始めた。

「ああっ！　なんてことを」

ラグナがそれに気をとられている間に、ゼークス帝国の軍人たちはミネルバたちを突き飛ばして姿を消した。

ラグナはドラゴンの前まで来るとひざまずいた。

「これは……グリモアの幼生か」

「ねえ、早く助けてあげて」

ミネルバが泣きそうな顔で懇願する。ラグナはコックリとうなずくと回復魔法をかけはじめる。しかし幼生は回復する様子を見せない。ラグナの力ではこの幼生を養生させるには力不足という事か。ラグナは舌打ちすると、かざしていた手を引っ込めた。

「僕の力は及ばないようです」

「そんな……どうしたらいいの!？」

ミネルバは幼生に抱きついて涙を流している。ラグナはタバサが言った、「ミネルバが役に立つ」という言葉を思い出した。

「ミネルバさん、エルフの力の中に生き物を回復させる術はありませんか？」

「エルフの力？」

ミネルバはじっと考え込んでいたが、ハッとして何かを思い出したようだった。

「ある。『魂の祈り』」

「やってみてください」

ミネルバは眉をしかめた。

「ミネルバにそんな力はないよ」

「このままじゃ、ドラゴンは死んでしまいます！」

ラグナが大きな声で告げた。しかし、ミネルバは首を横に振るばかりである。そんなミネルバの前にルートがひざまずいた。

「ミネルバちゃん」

ルートは不安げなミネルバを目の当たりにして、とにかく落ち着かせようと、精いっぱい笑顔の浮かべた。今、自分にできることは彼女を奮い立たせることだ。

「なんやわからんが、今できる事で最善を尽くすことが大事なんじゃないのかな。私も一緒に祈ったるさかい、頑張ろうか」

「ルートさん」

ミネルバはルートをじつと見つめた。ルートはいつものように穏やかに微笑んでいる。ミネルバは口をぎゅっと真一文字に結んでいたが、幼生に向かう。そして両手を胸の前で組み、ある旋律を口ずさみ始めた。それはこの世のものとは思えないほど透き通った歌声だった。ミネルバの体が白い光に包まれ、長い髪がふんわりと宙に舞う。温かいオーラが彼女から発せられている。そんなミネルバの肩にルートはそつと手を置いた。ミネルバがルートを見上げるとルートはにつこりと微笑んだ。ミネルバは歌を歌い続け、ルートはその横で祈り続ける。幼生の息はだんだんと落ち着いてきた。効果が現れたのだ。

すると、どこからかモンスターの鳴き声が聞こえてきた。ラグナが身構えると、入り口の方から何かが羽ばたいてきた。

「グリモア!？」

グリモアは幼生の上で旋回するとゆっくりと降下した。そして幼生を羽で抱きかかえた。幼生は顔を上げると嬉しそうに鳴いた。グリモアは幼生の首をくわえるとゆっくりと羽ばたき始める。そして洞窟の外へと飛んでいった。

ミネルバは洞窟の入り口を見ながらつぶやいた。

「助けてあげられたのかな」

「そうだと思うで。よう頑張ったな、ミネルバちゃん」

ルートに褒められてミネルバは破顔した。

番外編 イベール村のゴブリン 5

三人は村に戻り、村長に洞窟内の出来事を報告した。村長らはいそう感謝して、しばらく村にとどまるように勧めた。ミネルバも満月の夜を心待ちにしていたのもあって、ラグナは滞在することに決めた。

満月の前の晩のことだ。ミネルバがラグナの部屋にやってきた。

「今日はルートさんと出かけてきたんですね？」

ミネルバは何も答えずに勧められた椅子に座った。ラグナがお茶をいれて出すと、ミネルバはカップを受け取り、香りを吸い込んだ。リラックスティーの芳醇な香りが気持ちいを穏やかにさせる。

「いい香り。でも、お姉ちゃんのお茶と比べるとまだまだだね」

ラグナは苦笑した。

「タバサさんにはかないませんよ」

「そうなのよね。お姉ちゃんにはかなわない」

ミネルバはカップをテーブルに置くと、ふうつとため息をついた。

「どうしました？」

「ルートさん、お姉ちゃんの話ばかりするの。ミネルバのことに興味はないみたい」

「そんなことないと思いますけど」

「だってミネルバの絵は描いてくれないよ？」

「絵は思いが強まったら描きはじめるって言ってましたね」

「やっぱりそうなんだ……」

ミネルバは膝の上で両手をギュツと握りしめる。

「トランルピアに戻ったら、エルフの国に帰らなきゃ」

「もう帰るんですか？」

「おばあたちが待つてるの。見合いの日も迫ってるし」

「じゃあ、なおさらルートさんに告白したらどうです?。」

「振られたらって思うと勇気が出ない」

「でも、言わなきゃ想いは伝わりませんよ」

「ラグナも勇気出した?。」

「はい。一回振られて再アタックしました」

「へえ、やるわね」

「明日は満月ですし、三日月岩で告白したらどうですか?。」

「じゃあ、ラグナ、ついてきてくれる?。」

「いいですよ」

「よし! 明日は頑張る。おやすみ」

ミネルバは意気揚々と部屋を出て行った。うまくいくといいなと祈るのだった。

翌夕、ラグナたち三人は三日月岩までやってきた。歩いているうちに日は暮れて空には月が輝いている。ラグナは少しずつ二人から距離を取った。そして岩陰に隠れた。

「あれ? ラグナはん、どこ行ったんやろう?。」

ルートがきよるきよるとあたりを見回している。

ミネルバはカチカチに緊張しながら、ルートを振り向いた。

「ルートさん、話があるの!。」

「何やの?。」

ルートはミネルバの真剣な表情を見て驚いた。ミネルバはルートの手を取って三日月岩の中心へ引っ張っていった。

「あのね」

ミネルバは頬を赤く染めてルートを見つめた。

「ルートさん、あたしと一緒にエルフの国に来て欲しいの」

「エルフの国? それってどういう意味なんかな?。」

「それは……あたしのお嬢さんになって欲しいんです」

ルートは目を丸くした。いきなりのプロポーズである。岩陰で様子をうかがっていたラグナでさえ、啞然とした。

ルートはしばらく考え込んでいたが、顔を上げた。

「申し訳ないんやけど、無理やな」

ルートの拒否の言葉に、ミネルバは顔をこわばらせる。やはり、姉には勝てないのだろうか。

「やっぱりお姉ちゃんが好きなの？」

「いや、お姉さんは関係あらへんよ」

「じゃあ、どうして？」

ルートは真剣な顔をして、ミネルバの目を見て告げた。

「私はミネルバちゃんのことを何も知らんのや。だから結婚はまだ無理。わかるか？」

ミネルバはコクリとうなずいた。

「まずは友達から始めようか？」

ルートは右手を差し出した。ミネルバは差し出された手を握ると、「うん！」と言って顔をほころばせた。

トランルピアに戻ると、ミネルバはタバサの待つ別荘へと帰って行った。それを見届けると、ラグナはルートに尋ねた。

「タバサさんのことは諦めたんですか？」

「参ったな。ラグナはんにもバレとったんかいな」

ルートは頭をかいた。

「だいぶ前なんやけど、見事に振られた。好きな人がおるって言うとったな」

「だからミネルバさんですか？」

ラグナは詰問する。振られたから乗り換えるのかと思ったのだ。それではミネルバは幸せになれない。まるで妹の恋を齒がゆく見ているような兄の気分になってくる。

「そんな男に見えるんかいな」とルートはため息をついた。

「違うで。今回、一緒に旅して、好きになってしもうた。祈りを捧

げている時のミネルバちゃんほんとに美しくて輝いていたやろ？

一目惚れやな。創作意欲が湧きまくりや」

「そうだったんですか？ ミネルバさん、二人っきりのときでもルートさんはタバサさんのことばかり話すって、落ち込んでましたよ」

「あれは……意識しすぎて何を話していいかわからなかったんや。」

直視も出来んしな。いい年してみつともないくらい余裕がなかった」

「そんなに好きになったんなら、OKしてあげればよかったのに」
ルートは思い出したように穏やかな笑みを浮かべる。

「でも、まだ子供やろ？ あの子には未来がある。これから本当の運命の人と会つかもしれん。彼女が大人になって、それでも私を欲してくれるなら、そのときは応えようと思う」

ルートの言葉を聞いて、ラグナの胸の中に温かいものが広がっていく。そしてむしようにミストに会いたくなった。ルートに暇を告げたラグナは走って家に帰った。

牧場の家の花壇の前にミストはいつものようにしゃがんで花を見ていた。ラグナが近づくと、振り返ったミストが満面の笑みで迎える。

「お帰りなさい、ラグナさん」

立ち上がったミストの体を抱きしめながら、その耳元で「ただいま」と言った。

「あら、どうしたんですか？」

「別に何でもありませんよ」

ただぎゅっと抱きしめられて、ミストは困っていたがニコツと微笑むと、ラグナの背中に手を回した。

「あたしと離れていて、寂しかったですか？」

「はい」

「ラグナさんって意外と子供っぽいんですね」

「そうですね」

いつもと違って、からかっても反論してこないラグナにミストは首をかしげた。

番外編 遠い日に思いを寄せて

少年はカルディアという町に流れ着いた。どこをどうやってここに来たのか覚えていない。喉が渴いた。お腹もキュルキュルと鳴っている。ふらふらと歩いていたが、力尽きて倒れてしまう。地面が目前に広がる。小石が顔に当たって痛かった。

もうだめだ……。このまま飢え死にしてしまうのか。

そのときだった。ギイツと音がして、足音が聞こえた。

「あら、どうしたんですか？」

間延びした声がする。少年は少し顔を上げた。自分を見下ろす顔が目に入った。

「み、水を」

「ああ、喉が渴いているんですね。ちょっと待って下さい」

その人はなにやらこそそこそと取り出すと、少年に水をかけた。

頭の上から、雨のように水が降ってくる。思わず、声を荒げた。

「何するんですか！ 僕は植物じゃありません！」

「ごめんなさい。今、ジョウロしか持ってなくって」

水をかけられた少年は、少し正気を取り戻した。地べたに胡坐をかいて座ると、頭からしずくがポタポタと垂れる。何ということだとジョウロで水をかけた人をじつと観察する。その人は、青い瞳をした華奢な少女だった。

「あなた、お名前は？」

「名前？」

少年は考えた。自分の名前が思い出せない。

「わかりません」

「どこから来たんですか？」

「わかりません」

「もしかして記憶喪失……」

少年はその後少女にいろいろと質問された。しかし、何一つ答えられない。自分が記憶喪失だと引導を叩きつけられたようで、途方にくれた。

少女は気の毒そうに少年を見ていたが、ニコツと笑みを浮かべた。

「あたしはミストといいます。この家に住んでいるんです」

ミストと名乗った少女は自分の後ろの建物を指差した。

「その様子だとお腹も空いているでしょう？ とりあえず、家に入ってください」

ミストに促されて、少年は家に入る。

ミストは温かいスープとパンを出してくれた。少年はそれを貪り食う。そんな少年の姿を優しげに見守るミストが口を開いた。

「これからどうしますか？ ええと、名前がないと不便ですね」

ミストは右手で口を覆って考える。どうしようか。そのとき、ある名前がひらめいた。

「ラグナ、ってどうですか？ どこかの国の勇者の名前なんですよ」

「そんな名前、恐れ多いですよ」

「まあいいじゃないですか。思い出すまでの仮の名前なんですし。」

ね、ラグナさん」

ミストは少年の反論をまったく受け付けない。少年は閉口した。

ラグナはミストから家と畑を借りることになった。

そして、畑で農作物を作る傍ら、ダンジョンでモンスターも狩って家畜にして副産物を得る。結構手先が器用らしく、町の鍛冶屋で鍛冶の手ほどきを受けると刀も作った。薬学も勉強し、ちょっとした病気なら自分で薬を作って直してしまう。そして料理もこなした。記憶喪失になる前は良いものを食べていたのか、いろいろな料理を好んだ。

とても天気の良い日だった。ラグナは一人ギガント山の頂に座っていた。満月が東の空にぼっかりと浮かんでいる。月の表面の模様が

肉眼でもはつきり見えるほど、大きく見えた。

ラグナは大きくため息をついた。記憶を失う前の自分は何だったのか悩んでいる。町の人々も優しくしてくれる。食べることに寝ることに困っていない。今の生活に不満はないのだ。しかし、何か足りない。

「ラグナさん、どうしたんですか？」

振り返ると、そこに立っていたのはミストだった。

「ミストさん。お月見ですか？」

「ええ。今夜の月はとってもきれいですね」

ミストは返事をする、ラグナの横に座った。

「何か考えていたようですけど？」

ミストの問いに、ラグナは言葉を飲み込む。こんな個人的なことを他人に話すべきなのだろうか。でも、すぐりたい気持ちもある。いくら考えても答えは見つからないのだから。

「僕って何者なんだろうって考えちゃって」

ラグナは微笑むミストから月へと視線を移した。

ミストはじつとラグナの横顔を眺めていたが、月に目を向けこう言った。

「ラグナさんはきつとアースマイトなんですよ」

「それは以前聞きました」

ラグナがムツとして答えると、「そうでしたね」とミストは笑った。「記憶を失う前に戻りたいですか？」

その問いに、ラグナはミストを見た。記憶の失う前の自分に戻れば、たぶんここには居られないだろう。自分でいうのもなんだが、かなり剣を扱える。ひよっとしたら兵士だったかもしれない。兵士だったら、こんなのかな生活は送れないだろう。そう考えると、記憶がよみがえるのが惜しいと思う自分がいる。

ラグナの考えがわかるのか、ミストはこんなことを告げた。

「私はラグナさんの過去がどうあれ、今のラグナさんでいいと思います」

「ミストさん？」

「きつとラグナさんじゃなきゃ出来ない何かがあるんですよ。きつとそのためにカルディアに来た。そう思いませんか？」

ミストはにっこり笑った。

「何もなかったら？」

「あたしが責任取りますよ」

ミストは真剣な顔で答えた。

草を踏みしめる音が近づいてくる。ラグナはふと我に返った。そちらに目を向ける。バスケットを持ったミストだった。

「お待たせしました」

ラグナは自分の横を指し示して、「どうぞ」と声をかける。ミストはうれしそうに笑むと、ラグナの横に座った。

「すばらしい月ですね」

「はい」

ラグナは返事をする、ミストの肩を抱いた。

ミストはラグナの肩に頭を乗せる。

「ミストさん、僕って何者なんでしょう？」

「また悩んでいるんですか？」

「悩んでいるというか……聞いてみたくて」

ラグナはミストの顔を覗き込んだ。

ラグナの瞳が揺れていた。何を不安に感じているのだろうか。そんな風に相手を思い、ミストはラグナの頬に手を添えた。

「ラグナさんはアースマイトで、カルディアを救って、犬さんを救ってくれた人です」

そして額にそつと唇を寄せた。ちゅつという音がすると、ミストの顔が離れていく。

「そしてあたしの大好きな人です。それだけじゃだめですか？」

ラグナは首を横に振った。

ミストは微笑むと、ラグナの背中に手を回して、耳元でささやいた。

「あたしたち、親や兄弟はいないけど、結婚したら家族ができます」

「そうですね」

「子供が生まれたらにぎやかになりますよ」

「そうしたら僕はお父さんなんです」

「はい。そう思うとわくわくしませんか？」

「します」

ミストはラグナの背をポンポンと叩いた。

「あたし、責任を取るって言いましたよね」

「ええ」

「ずっとラグナさんのそばにいます」

ラグナはミストを見返した。

ミストは応えるようににつこりと微笑んで見せた。

31・共に歩む

ラグナとミストは婚約した。

「ラグナさん、お昼ご飯が出来ましたよ」

ミストの間延びした声がする。ラグナは作業する手を止めて振り向いた。

「早く来て下さいね。スープが冷めちゃいますよ」

ミストの困ったような顔を見て、ラグナは片手を挙げてうなずいた。それを見届けると、ミストは家に入って行った。

なんて穏やかで幸せなのだろう。ラグナは幸せをかみしめている。

しかし、この後自分はひどいことをミストに告げなければならない。

家に入ってきたラグナは早速テーブルについた。ミストが席に着くと、二人は示し合わせたように「いただきます」と合掌して食べ始めた。かちやかちやとスプーンが食器に当たる音がする。

「ミストさん」

「なんですか？」

ラグナはスプーンを持つ手を止めて、ミストをじつと見つめた。

「近いうちに、くじら島に行こうと思っています」

ミストの表情が曇る。それを見て、ラグナは胸が痛んだ。また心配をさせることは目に見えているからだ。でも、くじら島との約束を反故にすることは出来ない。

「給水搭のモンスターですか？」

「はい」

ミストは呆れたようだった。

「本当に冒険が好きなんですネ。行ってもいいですけど、条件があ

ります」

「条件？」

ミストはこっくりとうなずいた。

「あたしも連れて行って下さいね」

「いや、危ないから」

ミストはラグナの言葉をさえぎって話を続けた。

「何日もかかるんでしょう？」

「ミストさん、お願いだからここで待っていてください」

「嫌です。遠く離れてラグナさんの安否を心配して待ち続けるなんて」

ミストは首を横に振り、目を潤ませて告げた。珍しく駄々をこねるミストにラグナは困ってしまった。

話は平行線のままだった。

翌日もラグナは畑の世話に出た。早速チロリが色つき草やタケノコを採取している。ラグナを認めると、近づいてきて嬉しそうにしばをパタパタと振った。

「ごくらうさん」

ラグナはしゃがみこんでチロリの顎をコチョコチョと撫ぜた。そして立ち上がり、水やりをはじめた。そのうちゴブリンが出てきて収穫を始めた。

せつせと作業をしていると十時になった。今日は日曜日、クロスが遊びに来る日だ。遊びに来るといってもラグナの畑でたたずんでいるだけだったのだが、くじら島で助けてもらって以来、三人でのお茶の時間になっている。

「クロスさん、こんにちは」

「やあ。春らしい穏やかな日だね」

二人が挨拶を交わしていると、ミストがお茶の用意を持って家から出てきた。ラグナがミストに歩み寄ってトレーを受け取った。二人は仲むつまじくクロスのいる木陰にやってきた。

「こんにちは、クロスさん」

「こんにちは」

ミストが挨拶すると、クロスはぶっきらぼくに挨拶を返す。ミストはさっとシートを敷いた。ラグナからトレーを受け取り、お茶の準備を始める。ラグナはクロスに座るように勧め、自分も座った。クロスはラグナの向かいに座った。席が決まると、ミストがお茶をいれて、二人に手渡した。

「良い香りだね」

クロスが褒めると、ミストは嬉しそうに微笑んだ。クロスは思い出したようにラグナに訊ねた。

「そういえば、寝室の使い心地はどうだい？」

ラグナは結婚に向けて、寝室を改築したのだ。

「はい。とても落ち着いていていい感じです」

「そうか。ありがとう。増築のたびにたくさんのお金を払わせてしまつてすまないと思う」

「そんなことないですよ。十分に見合う対価です」

ラグナが肯定すると、クロスは薄ら笑いを浮かべた。

「ふっ……本当はボク一人が暮らすのに、あんなにたくさんのお金はいらない。あのお金はシスターを通じてあるところに寄付しているのさ」

「クロスさんって優しいんですね」

ミストが感動して誉めそやすと、クロスは首を横に振った。

「ミストさん、違うよ。罪深いだけなんだ」

ラグナはワグナーとのことを思い出した。クロスの闇とはゼークスにいたときのことだろう。一介の兵士に拒否する権限もない。仕方ないことだが、クロスは後悔して、罪を償おうとしている。つくづく戦争とは悲劇しか生まないのだと思ひ知らされる。ラグナは自分の記憶を失う前のことを考えると憂鬱になる。

「おまえの記憶を奪ってカルディアに住み着くように仕向けた」

カルディアでリネットに言われたことだ。自分がどの誰なのか、兵士だったのかそれすら教えられていない。ただ、グリモアを覚めさせるために、アースマイトの資質を持ったラグナは利用された。幸いグリモアをはじめりの森に帰すことが出来たので事なきを得ただけのこと。一歩間違えればラグナも加害者になり得たのだ。難しい顔を始めたラグナの腕にミストはそつと手を添えた。ミストはリネットとの修羅場にラグナと一緒にいた。だから、なんとなくラグナの考えていることがわかり胸を痛めている。

ラグナは「だいじょうぶです」と声をかけて、ミストの手に自分の手を重ねた。そしてお茶を一口飲んだ後、クロスのほうを向いて話し始めた。

「クロスさん、お話ししたいことが」

「なんだい？」

まじめな雰囲気ラグナに、クロスも居ずまいを正した。

「僕、近いうちにくじら島に行こうと思っているんです」

「この間の続きかい？」

「はい」

「ミストさんは承知してないようだね」

クロスはミストを見て言った。ミストは哀しそうに表情をゆがめている。

「あの、ミストさんをお願いできますか？」

クロスとミストはラグナの真意を疑って目を見張った。二人の様子にラグナは慌てて否定した。

「あ、お二人が思っていることじゃないですよ！ ミストさんがくじら島についてくるって言うから、クロスさんに見張っていて欲しいんです」

「見張るっていつでも、それは物理的に無理なんじゃないかな。ボクたちは一緒に暮らしているわけでもないし、そうするわけにもいかないしね」

クロスはふっと笑い、お茶を飲み干すと、カップをトレーに戻した。
「連れて行ったらどうかね」

「どうしてですか!？」

「そのほうが、ラグナ君が無理しないと思ってね。まあ、ボクは部外者だから何とでもいえるけど」

そう言うのと立ち上がり、「ごちそうさま」と言って帰っていった。
残されたラグナは、したり顔のミストを見てため息をついた。

ラグナはミストといくつか約束してほしいことを告げた。

モンスターと交戦中は決して声を出さないこと。

身の危険を感じたときはリターンを使ってその場を離れること。

ラグナに何かあっても構わず逃げること。

最後の約束を耳にしたとき、ミストの目から涙がポロリと落ちた。

「ラグナさん……」

「ミストさん、泣かないでください。万が一の時の話なんですから」

「はい」

「だから一緒に行くと、かえって辛いと思います」

ラグナはミストの顔を覗き込んだ。ラグナが傷ついたときでも声を上げられない。声を上げた途端、モンスターはミストに襲いかかるからだ。そしてラグナが死にかけたとしても見捨てるという指示なのだ。

ラグナの言った意味がわかったのか、ミストはポロポロと涙を流してラグナの腕をぎゅっとつかんだ。そんなミストの姿を見て、ラグナは胸が熱くなる。

「待っていてください」

ミストは涙ぐんだままコクンとうなずいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218n/>

turnip rhapsody（カブ狂詩曲）

2011年11月20日14時01分発行